

日中笹川医学研究者制度の18年

2004年10月

財団法人 日中医学協会
日中笹川医学研究者制度検討委員会

序

1985年9月、日中医学協会がそれより以前5年間の医学学術交流の実績の上に、財団法人として新たなスタートを切った時、中国はいわゆる文化大革命により破壊された医学教育・研究を再建するために苦しんでいる時代であった。当時の中国はそのための人材養成が焦眉の急であり、日中医学協会へ寄せられた中国側の期待もまた大きかった。しかし協会が、医学分野の人材養成事業を行うには資金が必要であった。そこで協会の黒川利雄会長、石館守三理事長は、日本船舶振興会笹川良一会長に対し支援をお願いした。これに対して笹川良一会長およびご子息の笹川陽平氏の素早いご英断、また、中国衛生部の全面的なご協力により、1986年8月、笹川医学奨学金制度が調印されたのであった。

この笹川医学奨学金制度は発足以来、多くの方々に歓迎され、支持された。時あたかも日本への外国人留学生を10万人に増やすという、当時の中曽根康弘総理の構想もあり、日本全国の医科・歯科・薬科大学・研究機関、看護・技術分野等広範な医療関係者の真摯な協力と、関係省庁の理解と支援を得、また、何より研修生自身の努力により、本制度は順調に進展した。時代はこの制度を求めていると言えようし、中国衛生部・笹川記念保健協力財団・日中医学協会の緊密な連携もまた、この制度の成功を支える要であった。

本制度から巣立った研修生は中国医学の第一線にその成果を持ち帰り、今、各職域で活躍しており、更に、帰国した彼らは同学会を組織し、共に学術の向上、ボランティア診療等にも励んでいる。

笹川医学奨学金制度は10年の成功により、更に第二次協定へと継続された。特にかって日本で学んだ笹川医学研修生の帰国後のめざましい活躍と、また、その後輩が、笹川医学研究者として日本で学ぶということ、日中の師弟を軸とした共同研究の進展、これこそ事業の継続のたまものと言えよう。総勢1,800人の研究者と260名の特別研究者を受け入れたことになるこの制度は、世界に冠たる人材養成事業であり、中国医学界の発展、日中医学交流への波及効果は計り知れない。

今ふり返り、改めて笹川医学奨学金制度の設立・運営に関わった先輩諸氏の先見性、また、多大の資金提供を決断された笹川良一会長、笹川陽平理事長の度量の大きさを思い、心から敬意を表したい。世紀を越えたこの人材養成事業に、かくも多大のご支援を下さった日本財団の方々、笹川記念保健協力財団日野原重明会長、紀伊國献三理事長をはじめ財団の全ての方に感謝する。さらに日中医学協会が、笹川記念保健協力財団と共にこの事業を分担できた事を光栄に思う。

笹川医学奨学金制度第二次協定は2008年3月に終了する。今日、急速に変化・発展する歴史の流れの中で、日中両国国民の友情と人的交流がアジアと世界の人々の幸福に寄与するものとなるよう努力することは、私共に課せられた責務といえよう。わけても医学・医療の領域では、この偉大な奨学金制度の成果を今後如何に継承し発展させるかは、日中医学交流にたずさわる者にとっての大きな課題であり、叡智の結集が求められているといえよう。

今般協会はこのような状況の中で、本制度の実施に当たった立場から、今日までの日中笹川医学研究者制度の評価を行い将来を見定めるために、既に帰国した中国研究者（研修生）、その派遣機関、日本側指導責任者に対しアンケートを実施した。その内容はきわめて興味深いもので、これが新たな段階の日中医学協力を考える上で参考になるものと思う。日中医学の交流が新しい時代を迎え、更に飛躍することを願い、各位の一層のご協力を期待したい。

2004年10月

財団法人 日中医学協会
会 長 杉 村 隆

目次

調印式写真	1
笹川医学奨学金に関する協定書	7
笹川医学奨学金特別研究者招聘制度協定書	8
笹川医学奨学金制度（第二次）に関する協定書	9

I. 日中笹川医学研究者制度（笹川医学奨学金制度）の18年

－ 18年の成果を振り返って－

1. 制度のあらまし	10
(1) 制度のあらまし	
1) 設立まで	
2) 制度の設立	
3) 調印三者の協力関係	
①日本国内の協力体制	
②中国衛生部の取組み	
4) 事業の実施状況	
①研修生の選抜と受入	
②制度の運営に関する事項	
5) 5周年記念式典	
6) 笹川医学奨学金進修生同学会の設立	
7) 特別研究者制度の発足	
(2) 制度の発展	
1) 笹川医学奨学金制度第二次協定の調印	
①第二次協定の背景	
②第二次協定の調印	
③第二次協定の特徴	
2) 10周年記念式典	
3) 中国の発展と変化	
2. 制度の意義	13
3. 制度の成果とその評価	14
4. 制度の今後についての提案	16
(1) 制度のあり方に関すること	

- (2) 制度の運営に関すること
 - 1) 交流の対象
 - 2) 交流の形
 - 3) 学位に関すること
 - 4) 交流の分野
 - 5) 研究者の選抜
 - 6) 交流の形態
 - 7) 共同研究
 - 8) 相互交流
 - 9) 広報活動

Ⅱ．日中笹川医学研究者制度の現状

1. 選考方法	20
(1) 研究者 1) 選抜試験 2) 第一次選考（中国側選考） 3) 第二次選考（日本側選考） 4) 語学研修の実施と研究者の確定	
(2) 特別研究者 1) 申 請 2) 審 査	
2. 年間スケジュール	22
(1) 研究者	
(2) 特別研究者	
3. 研究者受入状況	23
(1) 研究者の男女別数・平均年齢	
(2) 研究者の年齢構成	
(3) 研究者の中国省別数	
(4) 研究者の都道府県別数	
(5) 機関別受入研究者数	
(6) 研究者の分野別及び職称別数	
(7) 本制度事業の費用	
(8) 臨床修練について	
(9) 特別研究者研究報告会演題一覧	

Ⅲ．笹川医学奨学金進修生（笹川医学研究生）同学会の活動

1. 同学会学術交流会実施状況一覧表	41
2. 同学会科研基金交付状況	42
3. ボランティア診療実施状況一覧表	43
4. 笹川医学研究者の帰国後の活躍	45

5. 同学会役員名簿	45
参考；中国における海外留学経験者の同学会組織	46
Ⅳ. 挨拶・講演の記録	
中国医療研究員の受入制度－笹川医学奨学金制度創設－	47
石 館 守 三	
協定書調印5周年記念式典における挨拶	48
笹 川 良 一	
協定書調印5周年記念式典における挨拶	48
石 館 守 三	
笹川医学奨学金研修生同学会の設立に寄せて	49
兪 雪 如	
「日中医学交流の架け橋」－毎日新聞主催シンポジウムにおける基調講演－	51
笹 川 陽 平	
日中医学交流事業の背景にある中国に対するさまざまな思い	53
懸 田 克 躬	
21世紀へ続く奨学金制度－第二次協定書調印式前の会見における挨拶－	54
彭 珮 雲	
笹川医学奨学金制度10周年記念式典における挨拶	56
陳 敏 章	
笹川医学奨学金制度10周年記念式典における挨拶	58
曾 野 綾 子	
日中医学交流の新しい出発に当たって	59
岡 本 道 雄	
笹川医学奨学金制度の成功と発展を祝して－10周年記念式典における挨拶－	61
孫 貴 範	
座談会 笹川医学奨学金制度の10年をふりかえって	62
紀伊國献三， 小柴健， 中島章， 安達勇	
Ⅴ. 指導責任者・研究者・中国派遣機関へのアンケート集計	
1. 指導責任者アンケート集計	68
2. 研究者アンケート集計	70
3. 研究者の職位の変化	72
4. 中国派遣機関アンケート集計	73
Ⅵ. 研究者・特別研究者名簿並びに指導責任者名簿	
研究者・指導責任者名簿（第1期生～第26期生）	75
特別研究者・指導責任者名簿（第1期生～第12期生）	104

VII. 関係者名簿

1. 日中医学協会歴代会長、理事長	110
2. 笹川記念保健協力財団歴代会長、理事長	110
3. 中国医学研修生委員会歴代委員長、副委員長、委員	110
4. 特別研究者選考委員会歴代委員長、副委員長、委員	111

VIII. 日中笹川医学研究者制度年表	112
---------------------------	-----

注 ; 1998 年、第二次協定の実施以降、本制度は「日中笹川医学研究者制度」となっているが、本報告では協定書に定められた「笹川医学奨学金制度」並びに「研修生」の名称を併用している。

なお、中国では本制度を「中日笹川医学奨学金項目」と呼び、研究者は「進修生」である。



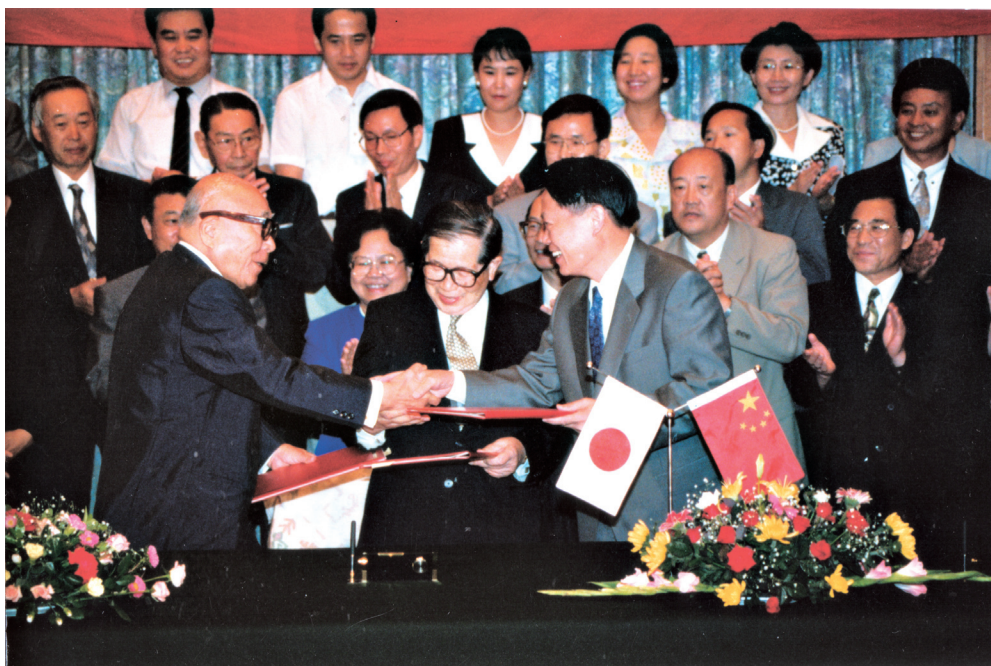
笹川医学奨学金に関する協定書調印式
(1986年8月14日 於：北京)

陳 敏 章	中国衛生部部長	
笹 川 良 一	笹川記念保健協力財団会長	
石 館 守 三	日中医学協会理事長	(右側から)



笹川医学奨学金特別研究者招聘制度協定書調印式
(1992 年 4 月 20 日 於 : 北京)

顧 英 奇	中国衛生部副部長	
笹 川 陽 平	笹川記念保健協力財団理事	
懸 田 克 躬	日中医学協会副会長	(前列右側から)



笹川医学奨学金制度（第二次）に関する協定書調印式
（1996年8月14日 於：北京）

殷 大 奎	中国衛生部副部長	
日野原重明	笹川記念保健協力財団理事長	
岡 本 道 雄	日中医学協会会長	（右側から）

笹川医学奨学金に関する協定書

日中両国人民の医学分野における友好と協力を促進させるため、財団法人笹川記念保健協力財団会長 笹川良一、財団法人日中医学協会理事長 石館守三、中華人民共和国衛生部長 崔月犁は、日本側から中国側に対し、提供される医学奨学金問題について友好的に話し合いを行い、下記事項につき合意した。

1. 財団法人笹川記念保健協力財団会長 笹川良一は、別紙要綱に従って、1987年から1996年までの10年間にわたり、1000名の中国医学研修生の、日本における医学研修プログラム実施に必要な資金を、財団法人日中医学協会に、笹川医学奨学金として提供する。
2. 中国衛生部は、この友好的な申出を感謝し、中国側の医療、教育、研究の必要と、日本側の受入能力によって、中国全国で研修生候補の推せんを行なう。
3. 財団法人日中医学協会は、中国衛生部の推せんした研修候補者の中から、研修生の受け入れを決定し、プログラムの円滑な実施をはかる。
4. 財団法人日中医学協会と中国衛生部外事局は、この協定に基づいて、笹川医学奨学金制度要綱をたてる。
5. この協定書の有効期限は10年間とし、実施期間中問題が発生した場合、あるいは解決すべき事項等については、三者が友好的に協議し解決する。
この協定は、同等の効力を有する日本語と中国語の2種類で作成する。
この協定は、1986年8月14日に北京において調印し、調印の日から効力を発する。事業の実施は、1987年度からとする。

財団法人笹川記念保健協力財団

笹川良一

財団法人日中医学協会

石館守三

中華人民共和国衛生部

崔月犁

笹川医学奨学金特別研究者招聘制度協定書

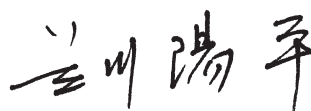
1986年8月14日、北京に於いて調印された笹川医学奨学金に関する協定書に基づいて、1987年より10年間にわたり、中国から1000名の医学各領域の専門家を一年間日本に招聘して研修を行う事業は、着実な成果を上げつつ半ばに達した。帰国した研修生の研究への積極性を高め、中国の医療、教育、科学研究分野における一層の向上をはかるため、財団法人笹川記念保健協力財団、財団法人日中医学協会（以下日中医学協会という）、中華人民共和国衛生部（以下衛生部という）は、友好的な協議を経て笹川医学奨学金研修生の一部再来日研究について下記のとおり合意した。

1. 財団法人笹川記念保健協力財団は、1992年から1996年までの5年間、原則として年間10名の笹川医学奨学金特別研究者招聘制度実施に必要な資金を、日中医学協会に提供する。
2. 中国の研修生派遣研究機関と日本側指導教官は衛生部に対し候補者を推薦する。衛生部は研修生の帰国後の業績に鑑み、日中医学協会へ優秀な候補者を推薦すると共に必要資料を提供する。
3. 日中医学協会は衛生部の推薦した候補者を審査し、特別研究者を決定する。
4. 日中医学協会と衛生部外事司は、この協定に基づき笹川医学奨学金特別研究者招聘制度要綱を作成する。
5. この協定は、調印後有効期間を5年間とし、実施期間中問題が発生した場合あるいは解決すべき事項等については、三者が友好的に協議し決定する。

この協定は、同等の効力を有する日本語と中国語の2種類で作成する。

1992年 4月20日

財団法人笹川記念保健協力財団



財団法人日中医学協会



中華人民共和国衛生部



笹川医学奨学金制度(第二次)に関する協定書

1986年8月14日、石館守三、陳敏章、笹川良一によって調印された笹川医学奨学金制度は、1998年3月円満に終了する。

これらの成果を引き継ぎ、日中両国国民の医学医療分野における友好と協力を更に促進させるため、財団法人日中医学協会、中華人民共和国衛生部、財団法人笹川記念保健協力財団は、下記事項について友好的に話し合い、合意した。

I 笹川医学奨学金研修生制度

1. 財団法人笹川記念保健協力財団は、別紙要綱に従って、1998年4月から2008年3月までの10年間にわたり、800名の笹川医学奨学金研修生制度に必要な資金を、財団法人日中医学協会に提供する。
2. 中華人民共和国衛生部は、中国国内の医学医療に関する教育、研究の必要性和、日本側の受け入れ能力を考慮し、中国全土で候補者の選抜、推薦を行う。
3. 財団法人日中医学協会は、中華人民共和国衛生部の推薦した研修生候補を審査し、研修生を決定し、受け入れ事業の円滑な実施をはかる。

II 笹川医学奨学金特別研究者制度

1. 財団法人笹川記念保健協力財団は、別紙要綱に従って1998年4月から2008年3月までの10年間にわたり、200名の笹川医学奨学金特別研究者制度実施に必要な資金を、財団法人日中医学協会に提供する。
2. 中国の研究者派遣機関と日本側指導責任者は中華人民共和国衛生部に対し候補者を推薦する。中華人民共和国衛生部は研修生の帰国後の業績と中国国内の医学医療に関する教育、研究の必要性和日本側の受け入れ能力を考慮し、財団法人日中医学協会へ候補者の推薦を行う。
3. 財団法人日中医学協会は、中華人民共和国衛生部の推薦した研究者候補を審査し、特別研究者を決定し、受け入れ事業の円滑な実施をはかる。

III その他

1. 財団法人日中医学協会と中華人民共和国衛生部国際合作司は、この協定に基づいて笹川医学奨学金制度要綱を作成する。
2. この協定の有効期限は2008年3月迄とし、実施期間中に問題が発生した場合、あるいは解決すべき事項については、三者が友好的に協議する。
3. この協定書は、同等の効力を有する日本語と中国語の2種類で作成する。
4. この協定は、1996年8月14日に北京において調印し、調印の日から効力を発する。

財団法人日中医学協会

石 井 道 雄

中華人民共和国衛生部

殷 大 奎

財団法人笹川記念保健協力財団

日 野 原 重 明

I. 日中笹川医学研究者制度の18年

－18年の成果を振り返って－

1. 制度のあらまし

(1) 制度のあらまし

1) 設立まで

黒川利雄癌研附属病院名誉院長、石館守三日本薬剤師会会長、懸田克躬順天堂大学学長を中心とし、医学・薬学分野の専門家181人のよびかけにより、1980年4月19日、ホテルニューオータニにおいて日中医学協会設立総会が開かれた。

「2000年の昔からわが国が中国から受けた恩恵は枚挙に遑がない、文化大革命により破壊された中国医学界の教育・研究の再建に、今こそ手をさしのべるべきであろう」というのが、設立の精神であった。

1985年9月、過去5年間の医学・薬学学術交流の実績の上に歯学・看護分野を加え、学界・関係団体・経済界の支援のもと、財団法人日中医学協会（黒川利雄会長）が設立された。

2) 制度の設立

当時中国は改革・開放政策に力を入れており、中国衛生部は医学・医療分野の発展のため、医学研究生の日本への派遣を強く望んでいた。

第1回常任理事会は、かねて懸案であった中国医療分野の人材養成に協力するための助成を、日本船舶振興会（現 日本財団）に申請する事を決めた。

財団設立後1か月に満たない協会の次年度事業に日本船舶振興会が助成を行う事は困難が予想されたため、黒川会長、石館理事長は、笹川良一会長に、新たにスタートした日中医学協会の人材養成事業に対する支援をお願いした。

この要請に対して1986年、日本船舶振興会笹川良一会長、笹川陽平理事は、日中医学協会石館守三理事長に対し、中国側の同意を条件に、中国医学研修生を1年間招請する制度を、年間100名、

10年間実施することについて申し出た。必要経費は、笹川記念保健協力財団が日本船舶振興会の助成事業として、これを提供、受入計画・業務ならびに事業の管理は日中医学協会が行うというものであった（日中医学 Vol.2 No.1）。

日中医学協会理事会はこの予想外の申し出を感謝し、受け入れる事を決定した。

1986年8月14日、北京人民大会堂において、笹川良一、石館守三、陳敏章（中国衛生部副部長）三氏により、日中両国人民の医学分野における友好と協力を促進させるための「笹川医学奨学金に関する協定書」が調印された。同年11月、受入事業実施に関する「笹川医学奨学金制度要綱」が中島章（日中医学協会常任理事）、宋允孚（中国衛生部外事司長）両氏により調印された。

3) 調印三者の協力関係

笹川記念保健協力財団、日中医学協会、中国衛生部は、協定書に定められた役割を分担した。

①日本国内の協力体制

笹川記念保健協力財団は、笹川良一氏を会長とし、既にハンセン病等に対する国際協力の実績があり、中国衛生部とも交流があった。

同財団は、この事業の開始に伴い、事前調査及び初年度の事業実施の経費を負担するほか、次年度以降の事業を確立するため、日本船舶振興会に対して助成金を申請し、また発足後間もない事業を安定軌道に乗せるよう日中医学協会に協力した。協定書調印後は本事業の運営諸経費を日本船舶振興会の助成金及び自己の特定資金を以て支援し、制度の実施に支障をきたさぬよう努力した。

日中医学協会は本事業を実施するに当たり、1987年初めに事務局体制を強化し、全国主要医学研究・教育機関における、外国人研究者の受入状況を調査した。厚生省、外務省、文部省等各省庁の理解と協力により、制度実施に関する諸問題も

解決した。研究者の入国手続きについては、法務省入国管理局の協力を得た。

②中国衛生部の取組み

協定書調印当時副部長であった陳敏章氏は、1987年衛生部長に就任され、引き続き制度の円滑な運営のための協力を惜しまなかった。

中国側窓口を担当した衛生部外事司（現国際合作司）は司長以下率先して問題の解決に当たった。科技司は優秀な人材の選考と派遣の任を負った。当初募集人員を省別・機関別に割り当てていたが、その後全国衛生系統外語水平考試（LPT）をも基準とすることとなり、今日に至っている（Ⅱ1 選考方法）。

衛生部は白求恩医科大学（長春）に笹川医学奨学金日本語研修センターを設置し、第1期研修生より来日前3か月の日本語研修を義務づけた。日本側は衛生部の要請を受け、每期4名の日本語教員を派遣した。その後衛生部は語学力を更に強化するための基礎語学コースを設置、大学で日本語を履修した研修生に対しては、西安医科大学の協力により来日前基礎英語研修を行い、日本語履修歴のない者に対しては中国医科大学での基礎日本語研修を義務づけた。その後語学研修は状況に応じて調整され、今日に至っている（Ⅱ1 語学研修の実施と研究者の確定）。

4) 事業の実施状況

①研修生の選抜と受け入れ

第1期研修生49名は1987年9月に来日した。衛生部の選考を経た57名の候補者名簿・資料に基づいて、第1回中国医学研修生委員会（吉利和委員長）は49名の受け入れを決定した。第1期生が秋に来日して以降、第20期までの第一次10年については、毎年春・秋の2回に分け、各50名を受け入れた。

②制度の運営に関する事項

a. 臨床修練許可制度

1987年11月、外国人医師の臨床修練に関する医師法・歯科医師法の特例等に関する法改正が施行された。1988年5月、帰国直前であった第1期生趙連岐氏は笹川研究者の申請許可第1号となり、

以後26期生迄に346人が許可を受けている（Ⅱ3 臨床修練について）。

b. 箱根合同セミナー開催

石館守三理事長の発案により、88年8月、箱根アカデミーハウスに於いて、第1期第2期合同の箱根セミナーが行われた。研究者の率直な意見をきくこと、研究者相互の親睦と遊覧がその目的である。年1回の来日となった21期生以降も毎年実施しており、笹川陽平氏は毎年出席し講演している（Ⅷ年表）。

c. 三者会議開催

制度運営上の諸問題を協議、解決するため、要綱の定めにより、笹川記念保健協力財団、日中医学協会、衛生部は最低年1回の業務会議を行った。5周年事業を協議した1991年からは三者会議として定着、年1～2回開催している（Ⅷ.年表）。

d. 衛生部視察団の招請

外事司（国際合作司）、科技司等により構成された視察団が、毎年来日し、研究者（研修生）の研究状況の視察及び研究機関、関係分野との懇談を行っている。

5) 5周年記念式典

1991年8月16日、笹川記念保健協力財団笹川良一会長、日中医学協会石館守三会長、他役員、指導責任者等約50名が、北京人民大会堂に於ける笹川医学奨学金制度調印5周年記念式典に参加した。中国側からは約350名の帰国研究者と第9期生及び所属機関の代表者等約1,000名が参加した。式典では、笹川良一会長、石館守三会長から第9期生に認定書が授与された。

笹川良一会長、石館守三会長には陳敏章部長より「中国衛生奨」が贈呈された。過去に前例が無いこの賞の第1号、第2号が贈られたことになる。式典に引き続き、記念学術講演会・研究者論文発表会が行われた（日中医学 Vol.6 No.2）。

6) 笹川医学奨学金進修生同学会の設立

1988年8月、第1回箱根（1期生・2期生）合同セミナーに於いて、研修生から帰国後同窓会を作ろうとの提案があった。こうした機運を背景に、

1991年8月16日、5周年記念式典の折、帰国研究者によって同学会が発足し、孫貴範理事長が、設立を宣言した。同学会理事長の下に、常務理事、理事をおき、「笹川生通訊」の発行、同学会会員住所録の出版、科研費助成、学術交流会、更にボランティア診療などの活動を行っている。

事務所は従来竹園賓館に置かれていたが、笹川記念保健協力財団は木下俊雄理事長からの寄付金により、97年、北京に同学会事務所を購入、寄贈した。常設事務所の設置により同学会の運営基盤は格段に強化され、現在に至っている。

7) 特別研究者制度の発足

1992年4月20日、笹川医学奨学金特別研究者制度が、笹川記念保健協力財団笹川陽平、日中医学協会懸田克躬、衛生部顧英奇の三氏により調印された。本制度は帰国した研究者を再来日、研究させることを目的とし、1992年から1996年までの5年間、年間10名を招請することを決定した。

日中医学協会は、特別研究者制度選考委員会（芳賀敏彦委員長）を設置し、衛生部推薦の候補者の中から優秀な研究者10名の選考に当った。第1期特別研究者は1993年1月入国、第2期は10月に来日した。第3期以降は毎年4月に研修生と共に来日している。

特別研究者は帰国に際し日中医学協会、笹川記念保健協力財団、指導責任者に対して1年間の研究成果の報告を行っている（Ⅱ3 特別研究者研究報告会演題一覧）。

(2) 制度の発展

1) 笹川医学奨学金制度第二次協定の調印

①第二次協定の背景

笹川医学奨学金制度は10年計画の終了を間近にし、その延長が課題となった。本制度により研修を受けた研究者は、帰国後中国の医学・医療の発展を支え、その活躍を背景に、中国衛生部は制度の継続を熱心に求めている。日本国内でも受入機関の研究者に対する評価は高く、1994年7月に行った制度の将来に対するアンケート調査では、指導責任者の殆どが第二次計画の実施を望んだ。

1994年8月、北京に於ける三者会議で日中双方は、制度継続の意義を確認した。

②第二次協定の調印

1996年8月14日、笹川記念保健協力財団の全面的な支持と、日本財団笹川陽平理事長の決断により、第二次10年計画がスタートした。この日、人民大会堂に於いて「笹川医学奨学金制度に関する協定書」が、日中医学協会岡本道雄、衛生部殷大奎、笹川記念保健協力財団日野原重明の三氏により調印された。式典には陳敏章部長、笹川陽平理事長ほか関係者多数が出席した（日中医学 Vol.11 No.3）。

調印に先立って、彭珮雲国務院委員が世紀に跨る事業を祝福し、故人となった笹川良一、石館守三、懸田克躬の三氏の業績を称えた。協定書調印後、中島章、李世緯（中国衛生部国際合作司長）両氏が「笹川医学奨学金制度要綱」に署名した。

③第二次協定の特徴

第二次計画の内容は、

- a. 1998年4月から2008年3月までの10年間に800名の笹川医学奨学金研修生を招請し、
- b. 1998年4月から2008年3月までの10年間に200名の特別研究者を招請することで最終的に合意した。
- c. 従来の年2回の受け入れを改め、98年以降、研修生80名、特別研究者20名を4月に受け入れることとなった。また、日本国内に於ける名称を「日中笹川医学研究者制度」と変更した。

2) 10周年記念式典

1997年12月5日、北京人民大会堂に於いて笹川医学奨学金制度10周年記念式典が行われた。日本側からは日本財団曾野綾子会長、笹川陽平理事長、日中医学協会岡本道雄会長、笹川記念保健協力財団日野原重明理事長をはじめ、指導責任者等200余名、中国側からは彭珮雲国務院委員、陳敏章衛生部長他、第1期～21期帰国研究者、中国派遣機関代表等2,600名が参加した。式典では、中国側機関代表10名、日本側指導責任者代表10名に対し、貢献賞が授与された。

衛生部陳敏章部長より、笹川陽平、岡本道雄、

日野原重明の三氏に中国衛生獎が贈呈された（日中医学 Vol.12 No.4）。

記念行事として、帰国研究者報告会（朱迅等 10 名）、日中各 2 名による記念講演会が行われた。

3) 中国の発展と変化

改革開放政策の進展により、1990 年代以降中国経済は目覚ましく発展し、社会的変化を背景に、中国政府は行政機構の改革に着手した。

中国衛生部は 1998 年部局を縮小、薬務行政・薬品検査部門は国務院直属の国家薬品监督管理局（現国家食品薬品监督管理局）へ移行した。その他一部の関連部門は、国家出入境検疫検疫局、労働・社会保障部へと移行した。

1998 年 6 月、かねて懸案の中華人民共和国業務医師法が制定され、翌 1999 年より全国统一試験が実施されている。医学教育の分野では、高等教育の制度改革に従って、協和医科大学を除く衛生部直属医科大学は総合大学に合併され教育部へ、また一部は省の管轄へと移行した。2002 年 1 月中国予防医学科学院は中国疾病予防コントロールセンター（CDC）へと改編された。

21 世紀を迎え中国の医学医療の管理・教育制度が大きく変化する中で、来日する研究者の殆どが講師級以上であり、社会的地位も第一次 10 年計画の当初に較べ格段に向上する等、日中笹川医学研究者制度をとりまく状況にも変化が見られる。研究者は帰国後の活躍の場も保証され、中国医学・医療発展の担い手として積極的に役割を果たすことが期待されている。

2. 制度の意義

笹川医学奨学金制度は笹川良一、陳敏章、石館守三の三氏による協定に基づいて発足した。日中友好を基盤として中国人民の健康と幸福を願うのがその狙いであった。

制度発足と発展に深く関わった方々の言葉は制

度の意義をよく物語っている。制度発足時に、中国側の政府代表という立場にあった衛生部副部長陳敏章氏は折りある毎に、この制度を「新中国始まって以来、その規模といい、長期にわたる計画といい、あらゆる分野の中でかつて類をみない奨学金制度である」といわれた。また、このとき、受入側の責任者を務められた日中医学協会理事長石館守三氏は「われわれの目指す両国の恒久的友好の掛け橋は、両国の文化と長い歴史的兄弟関係の上に立つ、兄弟愛の理念に立脚した新しい不変の構築でありたい」と願っている。

制度の意義は、日中医学協会、笹川記念保健協力財団、日本財団のそれぞれの設立の趣旨にも深く関わる。日中医学協会は「日中間の保健医療に係る学術的研究の助成・交流」と「学術と技術の提携と協力」を通して、「日中両国の保健医療の普及・向上に寄与する」ことを設立目的とする。研究者制度においては中国からの研究者は日本に受け入れられて教育され、生活しながら、研究推進の一翼をも担うものでもあり、まさに人を通して日中相互の理解を深める機会を作ろうとする。いわば、本制度はその趣旨から、日中医学協会にとっては核心とも言うべき事業なのである。

この制度を語る時、しばしば比較されるアメリカのフルブライト交流計画は「世界の平和を達成するためには人物の交流が最も有効である」という信念にもとづいて、半世紀に亘って実施されてきた。本制度の基金を提供する笹川記念保健協力財団もまた、その目的とするのは「世界一家人類兄弟姉妹主義の発展に当たること」である。さらにまた遡って、その母体組織である日本財団は「世界の平和と人類の明るい未来に向けてさまざまな角度から公益事業をサポート」する助成団体であり、「世界中に良き人脈を開拓すること」を活動指針の一つとしている。すなわち、人類愛を基盤において世界の平和を追求しようとするこれらの助成財団の意図は、実に日中医学交流計画にもとづく人物の交流・育成によってこそ達成されつつあるといえるのである。本制度がフルブライト交流計画に匹敵するといわれる所以である。

3. 制度の成果とその評価

本医学研究者制度は1987年に発足以来、2004年、第27期までの研究者1,500人、第11期までの特別研究者160人、計1,660人を迎え、また帰国させた。現時点で制度の評価を行うとすれば、当事者としての研究者自身の評価、これを受け入れた指導者の評価があり、また、これを裏付けるものとして研究者の帰国後の活動や地位の変化がある。これには国の主要な役職につく場合や、国のレベルでの表彰の対象となる場合などもある。さらにまた、第三者的な立場でのものとして日中双方の交流監督機関による評価もあるであろう。また、本制度には他に類をみない帰国研究者による同学会の組織がある。同学会が今日の中国医学界において持つ役割もまた、この制度の位置づけを考えさせるものと思われる。今回、日中医学協会は本制度の評価を行うに当たって、これらの諸点を明らかにするために、研究者、受入指導責任者、中国派遣機関責任者のそれぞれを対象とする調査を実施した。以下はこの調査結果を中心とする本制度の成果と評価である。

第一は研究者自身が日本での研究によって得たものである。研究者としての経歴がその将来に生かされるということは大きな収穫であろう。アンケート調査結果にみるならば、帰国後に役職の昇進があったものは77.7%であった。日本における研究者としての経歴が現在の活動に役立っているとするものは実に100%に及んでいる。帰国後も日本の研究機関との交流がつづいている研究者は87.9%であった。研究者の本制度に対する評価は高く、これが適切かつ有益であったとするものは99.0%となっている。これらの傾向は特別研究者において一層、顕著である。帰国後昇進したものは65.4%であったが、経歴が役立ったというものは100%であった。帰国後も日中交流をつづけているものは98.8%、制度が適切かつ有益であったと評価するものも100%となっている。

第二は研究者を受け入れた指導者側が得たもの

である。これをアンケート調査にみると、研究者の仕事が受入施設の研究進展に寄与したとするものは61.0%であった。研究者が研究により成長したと考えるものは92.8%であり、制度に対しては、適切かつ有益であったと評価するものが95.5%であった。この傾向は特別研究者については一層顕著となる。すなわち、その存在が受入施設での仕事の進展に寄与したとするもの87.6%、研究者が来日により成長したとみられているもの92.2%であり、本制度を適切かつ有益であると評価するものは99.1%であった。ちなみに日本での研究によって業績を残したものは研究者で78.7%、特別研究者で90.8%であり、発表論文数は1～5論文の場合がもっとも多かった。

以上は本制度が中国研究者をよく育成したばかりでなく、これを受け入れた日本側施設においても研究活動が活性化するなど、双方にとって得るところの大きかったことを物語っている。

第三に、日本で研究生活を送って帰国した後の研究者の職位の変化を具体的に調査してみた成績がある。教授職にある研究者は来日前には0.2%であったが、帰国後には40.7%となっている。助教授職にあるものの割合は来日前の12.3%から帰国後には33.6%と増加していた。当然のことながら、古い時代に来日した研究者ほど、教授職にあるものが多く、1期から5期までの研究者においては実に83.9%が教授職にある。来日前後での研究者の職位の変化は前述のアンケート調査において、留学経歴が役立ったという回答が100%になったことを裏付けている。特別研究者においては、教授職にあるものは来日前の9.4%から、帰国後は52.9%と増加し、この場合も高い昇進率がみられる。記録によると、大学学長、副学長、病院院長、副院長、衛生部幹部といった管理職にあるものが31名あり、研究者の帰国後の教育・医療・行政面での活躍ぶりが窺われる。

第四に、研究者派遣機関が得たものもみておかなければならない。これに対するアンケート調査の回答率はいささか低かった。これは研究者が帰

国後、所属を変えていることが多く、また、当時の研究者自身が派遣機関の現在の責任者となっていることなどのためであった。しかしながら、それでも研究者が日本での研究により成長したと回答するものは71.7%にあり、派遣施設の活動に役立つことがあったとするものは79.9%であった。

第五に、本研究者制度の中から誕生した同学会活動を評価しておきたい。同学会は1991年に設立され、笹川生通訳ニュースや学録の刊行、地区別学術交流会、ボランティア診療、帰国後笹川生に対する研究助成事業などを行ってきた。地区別学術交流会はすでに10回をかぞえ、参加者は延べ959人となっている。また彼らが行うボランティア診療も10箇所、受診者総数は11,766人に及んでいる。同学会による研究者の帰国後の連携、さらに共同しての奉仕活動は他に例をみないものである。これにより、笹川医学研究者に対する周辺の高い評価が生まれ、研究者自身の深い自覚と連帯感の維持に繋がっているといえるのである（Ⅲ笹川医学進修生同学会の活動）。

第六に、関連する監督機関や外交機関の本制度に対する評価がある。

「……人は、日中友好を語る時、子々孫々、世世代々に伝えるという言葉を用います。この美しい言葉は言うは易く行いは難しであります。大切なことは具体的な成果によって友好協力関係を促進し、発展させることであります。このことから申しあげれば、笹川医学奨学金制度のための日中双方の関係者の9年にわたる共同の努力の結果が、この制度の成功をもたらしたと言えます。……」

笹川陽平 日本財団理事長

1996年8月14日 第二次協定書調印式での挨拶から抜粋（於：人民大会堂）

「……中国衛生部、(財)笹川記念保健協力財団、(財)日中医学協会の共同努力により、笹川医学奨学金制度の10年は順調に進展し、人々の満足し得る成績を収めることができました。950名は既に学業を終えて帰国、50名は日本での学習を続けてい

ます。他の研修制度に比較し、笹川医学奨学金制度の特長の一つは、研修先の選抜範囲の広さであります。研修生は中国大陸30の省・市・自治区および人民解放軍関係の医療・教育・研究機関に及んでいます。特長の第2は研修分野の広さ、90の専門分野、学科に達することです。第3は、高い帰国率であります。100%に近い研修生が既に帰国し、人民の健康のため服務しております。笹川医学奨学金制度はもはや、わが国衛生分野における知力向上の重要な道筋の一つであり、同様な制度の中で最も多く期間は最長であります。……」

陳 敏章 衛生部部長

1997年12月5日 笹川医学奨学金10周年記念大会に於ける挨拶から抜粋（於：人民大会堂）

「我が国政府は、この制度に対してずっと大きな関心を寄せ重視して参りました。

この制度は医学界の知恵が築いた重要なルートであります。

日本の友人達がたいへん遠大な見識をもって創られた。

第二次10か年の協定は世紀に跨る協力事業であり、養成するのは世紀に跨る人材と言えます。」

彭 珮雲 國務院委員

1996年8月14日 第二次協定調印式前の会見に於ける挨拶から抜粋

第七として、最後に、研究者およびその受け入れ責任者に対するアンケート調査に際して行われた自由意見の一部を転記する。

(1) 研究生

・中国の医療衛生事業が最も必要とした時に、私自身年齢的に最適な時に留学の機会を与えてもらったことは、生涯で何物にも替えがたい宝となった。

(1期 張 齊昌)

・私の場合、1年（長いとは言えない）の研究の収穫以外に、研修を通して視野が広がり、問題の解決方法、科学的思考、研究に対する姿勢など多くを身につけた。

もしこの機会がなかったら、外の世界を何も知ら

ずに終わったかもしれない。

学術上の成果に限らず、意義深い国際交流である。

(12期 楊 春英)

・長期に亘って多くの中国の医師・看護師を養成した両国交流史上例を見ない一大壮挙であり、必ずや日中友好の歴史に刻まれるであろう。現在の中国医学の発展は笹川医学奨学金制度抜きには語れない。

(18期 戴 朝六)

・中国医学界の多くの精鋭を養成した。私の大学の場合、帰国研究者が各科のリーダー的存在となっている。日本を良く知る帰国研究者は両国民間交流の使者である。

(25期 王 小競)

・研究方法とその指針を得、仕事の進め方、とりわけ学問に対する真剣さをこの目で見た。中国の医学教育に不足している点を発見した。多くの友人を得、今後の交流の基礎を築いた。

(25期 韓 家強)

(2) 指導責任者

・「このような制度がなかったら、日本に行くことは不可能であった」「ここで学んだこと、知り得た人々は一生の宝」と今でも手紙に書いてくる。日本での体験を通じて日本に対する見方が変化し、視野が広がっていく様子がよくわかった。

(東京大学 竹尾恵子)

・中国に帰っても、国際的に通用する指導者を養成したいと思っていた。研究者はそのレベルに達したと思う。貴制度は大変有意義であり、この資金がなかったら目標の達成は困難だったと思う。

・研究者は国際的に評価され、しかも母国の教授となり、多くの後輩の指導が期待される。この制度の輝かしい成果の一つと誇りに思う。

(名古屋大学 早川哲夫)

・笹川奨学金の研究者は人物も優れ、優秀である。私が受け入れたような研究者と研究出来たことは、本人も成長したが、私自身の喜びであった。

(東京医科歯科大学 村松正明)

・中国の優秀な若手研究者を指導し、また、研究を共にした日本の学生諸君にとっても貴重な経験

であり、その意義は深く、極めて有益であった。

(京都大学 梅田眞郷)

・世界的に見ても類例の少ない素晴らしい制度と考える。是非継続して貰いたい。

(東京女子医科大学 福山幸夫)

・選ばれた人達であり、つぶぞろいである。この10年中国側の急激な変化が見られ、それに対応して受入側の変化も必要である。

(国立療養所中部病院 田平武)

4. 制度の今後についての提案

奨学金制度は近く、2期、20年を終えようとしている。そしてさらに3次に進むことの是非が議論されている。今回、本制度の18年の成果を振り返ってと題して、制度のあらましを述べ、制度の意義を論じ、制度の成果と評価を紹介したのは、この制度を次の時期に引き継ぐことの意味を問い、それに答えるためのものであった。今、その帰結として「これまでの笹川医学奨学金制度の枠組を踏襲して第3の時期に進むことができるならば、第一次、二次を通して本制度が育ててきた日中医学交流のための人材育成の規模は一層大きく展開することとなり、それは日中間の医学の領域にとどまらず、日中間の学術・文化の交流を促進し、友好の輪を広げ、さらには世界平和の維持・発展に寄与するところとなる」と結論づけることもできよう。

しかしながら、本制度が施行されてからの20年間に、中国の経済発展には目覚ましいものがあった。そして、他方、本制度のもつ内容は多彩である。内容的には、年間100人の1年間の奨学金を保証するのみならず、来日前には5か月間の語学研修を行い、在日中には箱根セミナー、帰国後においても同学会活動の支援を行っている。本制度と対比されるアメリカのフルブライト奨学生制度はすでに半世紀に亘ってつづいているが、その後半の時期に入ってはこれを運用する日米教育委員会の運営経費を日本政府も折半する形で負担している。

今回、20年の節目を迎えるにあたって、従来のものを修正する新しい提案があってよいものと考えている。

第一に制度自体のあり方がある。本制度のこれまでの流れを踏まえて、今後の展開をどのように描くのかということである。中国が今、必要とし、日本が提供できるものは何かといった視点に立っての制度の将来像を考えることである。

第二には実務的な問題として、制度運営の手直しに関わることがある。

以下はこの見直しと修正のための参考意見の一部である。

(1) 制度のあり方に関すること

- ・まず研究者の出身地に偏りがあることが目に付く。研究者の出身地は北京周辺と東北地区に多く、内陸部に少ない。比較的恵まれることの少ない内陸部に手を差し伸べることが考慮されてよいのではないかという意見がある。
- ・研究者の出身機関にも偏りがある。研究者には大学関係者が多い。直接に医療を担当している一般医療機関からの受け入れをより容易にすることが考えられてよいのではなかろうか。
- ・研究者の属する職域の偏りも問題とする意見がある。医療はチーム医療として成り立つ。受入対象を医師中心の現状から看護師などのコメディカルスタッフに重心を移すことも検討されてよいであろう。チーム医療をプロジェクトとする交流を考えるのもよい。
- ・年間、一定の枠を定めて、日本人研究者の中国研究機関への派遣を行うという提案がある。研究者あるいは指導責任者に対する調査においては、日本人研究者の中国側への受け入れを要望する声が大きかった。日中医学交流をすすめる上では日中間の研究者の相互乗り入れが望ましいことはいうまでもない。
- ・制度における経費負担の問題がある。今日、中国の経済事情が著しく好転しているとはいえ、本研究者制度に中国側の経費分担を要請するのはまだ時機が早いかも知れない。しかしながら、経費負担を上述の日本人研究者の中国受け入れ分に限

るならば、実現の可能性はありうる。

(2) 制度の運営に関すること

- ・まずは期間に関わることがある。第三次計画の期間をこれまでの2分の1に短縮するという考えがある。一次と二次はそれぞれ10年を期間としたが、三次は5年とすると、25年、4半世紀の事業となる。4半世紀を経た後の継続については中国側の関与のあり方も視野に入れて、その時期に改めて検討するという考えである。
- ・留学期間をもう少しフレキシブルにしてはどうかという意見がある。研究者調査においては学位取得を希望するものが多く、1年の研修期間では短いという意見が多かった。そこで例えば、優秀な研究者について2年目への継続を可能とすることを考慮する。他方、中国側では役職の事情によっては、6か月あるいは3か月という短期留学を希望するものもある。これらを含めて留学の期間調整を可能とすることが考慮されてよいであろう。
- ・来日前の語学研修を省略する。本奨学生の選抜試験において、研究を行うに足るだけの語学力（日本語あるいは英語）を有していることが確認されれば、語学研修は省略可能であろう。省略することにより、来日までの期間が短縮されるし、また、経費の節減ともなる。
- ・日本側の受入機関の選定に関しての意見がある。現在は研究者側が提出した希望指導責任者のリストをもとに、日中医学協会事務局が調査して受け入れの可否を打診し、決定している。しかしながら、研究者側が提示する希望指導責任者には出所不詳の伝聞にもとづく場合があり、これが研究者と指導責任者のミスマッチのもととなっていた。そこで、研究者は予め、個別に希望する指導責任者と事前に連絡を取り、打ち合わせを行い、教官の承諾書を添えて、申請することとしては如何かと考える。
- ・本制度に関わる事業である同学会、箱根セミナーについては現状のままの支援を希望する意見が多い。同学会組織は本制度が中国に根付き、さらに発展していくための基盤となる貴重な組織である。また、箱根セミナーは奨学生に本制度の意義

を理解してもらい、笹川記念保健協力財団あるいは日本財団の考えを伝達するうえで、大事な場となっている。両者とも継続することの意味は極めて大きいと思われる。

ちなみに、帰国した笹川医学研究者に対するアンケート調査において、研究者から寄せられた本制度あるいは日中医学交流の将来についての声の主なものを挙げてみる。本制度により来日したすべての方々から制度の現状での維持が強く希望されているが、制度をさらに発展させるための付加的な要望がここにあることを読み取っていただきたい。

1) 交流の対象

- ・中国の郷鎮・貧困地区で、医師・薬品が不足している農民を救済したい。
- ・衛生部のほかに、教育部・科技部などとも協力し、中国の上層部にパイプを作ってはどうか。
- ・中国政府の政策は医療機関の民営化に進むだろう。交流の重点を政府から中国の医療機関との直接交流に移行させてはどうか。

2) 交流の形

- ・日中医学雑誌を創刊し、学術論文を掲載する。日中医学交流の専門誌を刊行する。
- ・専門別の中日学術交流組織・学会を設立し、学術交流を行う。
- ・日本での出版物および関係資料を帰国笹川生に贈る。日中医学協会を通して、日本の学会誌購読を可能とする。
- ・日本の薬学者と企業が訪中して合作・交流を行ってほしい。
- ・研究成果の商品化を支持する。医療機器や薬品の販売促進を行ってほしい。
- ・笹川医学交流協会を設立し、中日医学交流を行う。
- ・日中共同の科学研究基金を設立し、重要な共通研究テーマに重点的に助成する。
- ・日中医学大会を定期開催する。
- ・日中医学協会のホームページを使ったネットワークによる交流。
- ・日本の製薬企業は自国の専門家を中国に派遣す

べきである。

3) 学位に関すること

- ・中国政府は外国と中国の大学が連合して人材養成を図る事に力を入れている。修士学位取得に関するこれらの協力関係に参加してはどうか。
- ・日本の博士学位をとれるようにする。博士課程プロジェクトを設ける。修士・博士養成コースを設置する。

4) 交流の分野

- ・交流を中国伝統医学・薬学に広げ、中医薬臨床治療の研究交流として行うのがよい。
- ・特定の専門分野、例えば移植、介入などの研修を可能とする。
- ・日中医学協会と中華医学会との間で、現代病、例えば、癌・心血管疾患、アトピー性皮膚炎、などに対する中医学との合作交流を行う。中日心血管疾病交流会、中日救急医学交流会なども。
- ・私立病院経営は日本が多くのノウハウをもっている。その方面の交流ができないか。
- ・中国の伝統医学は治療を重んじ、診断を軽んじている。医学交流の重点をここにおきたい。

5) 研究者の選抜

- ・帰国笹川生が自分の優秀な学生を推薦し、留学させる。

6) 交流の形態

- ・帰国笹川生に1～2か月の再来日、訪問団を編成して、日本の学会に参加するなどの機会を与えてほしい。短期相互訪問の機会を多く展開してほしい。
- ・特別研究者の人数を増やし、期間を3か月以内とする。高級訪問学者制度とする。
- ・厳正に研修生を選抜し、人数を少なくする。
- ・1～2週間、家族を呼び寄せさせてほしい。
- ・臨床系の滞在期間を6～8か月とし、基礎系は15～18か月とする。両者を分けて募集する。

7) 共同研究

- ・大型の共同研究を行う。分野別の共同研究プロジェクトを増やしてほしい。
- ・中国人と日本人とは疾病の種類や発病率に似たところが多い。共同研究によって、長所をとり、短所を補いあうことができる。

8) 相互交流

- ・日本の指導責任者が学術顧問として、訪中し、指導する。
- ・専門家の短期交流を行う。高級訪問学者の相互交流。
- ・中国も日本の若い医師の研修を受け入れる。
- ・両国の専門家の短期研修班による交流。

9) 広報活動

- ・笹川生通訊の日本語訳を作成し、日本のメディアに公表してほしい。
- ・同学会の日本分会を作り、連絡を密にする。

Ⅱ．日中笹川医学研究者制度の現状

1．選考方法

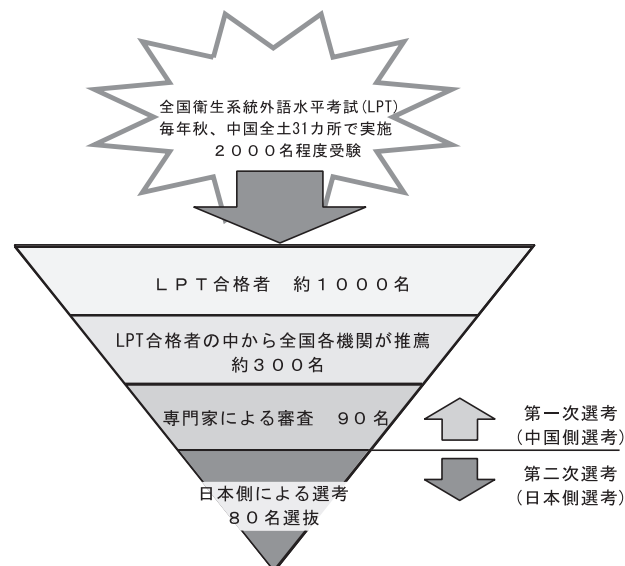
(1) 研究者

1) 選抜試験

本制度に応募するためには、「全国衛生系統外語水平考試」(State Foreign Languages Proficiency Test for Medical Staff 略称：LPT)を受験しなければならない。

LPTは、衛生部国家試験センターが主催する医療関係者のための外国語試験で、年1回中国国内で実施し、毎年2000名程度が受験している。

試験には、英語、日本語があり、それぞれ筆記試験、ヒアリング試験がある。



2) 第一次選考 (中国側選考)

①第1段階： LPTで所定の成績、英語：310点（標準分数）以上、日本語：300点（標準分数）以上を収めた者は、衛生部のLPT試験合格者名簿に登録される。合格者は、毎年1000名程度である。

②第2段階： 衛生部から全国各省（含直轄市、自治区）及び計画単列市（日本の政令指定都市に相当）の衛生庁、衛生局、解放軍、衛生部直属機関に、LPT試験合格者名簿の中から各機関に所属する候補者の1/3を推薦するよう通知する。この段階で候補者数は、300名程度になる。

③第3段階： 衛生部においてまず年齢等が本制度の応募条件を満たしているか審査する。次に、各分野の専門家（総数30～40名）からなる審査会を行い、各候補者の業績、成果、テーマ等について審査する。

更に、審査会での評価とLPTの試験成績を数値化し、各専門分野毎に順位をつけ90名にしぼる。

この90名を、さらに70名のグループと20名のグループに分ける。

70名のグループは、衛生部の人材養成計画に基づき、衛生部が強く推薦する候補者で、日本側の選考においても中国側の考えを十分に尊重することになっている。20名のグループには、特にそのような決まりはない。日本側では、便宜上70名のグループを「Aグループ」、20名のグループを「Bグループ」としている。

AグループとBグループに分けられた90名の名簿は日本側に送られ、研究者委員会において選抜される。

3) 第二次選考（日本側選考）

中国医学研究者委員会は中国側から送られてきた候補者（Aグループ:70名、Bグループ:20名）を審査し、80名（別に補欠を7名）を選抜する。

4) 語学研修の実施と研究者の確定

第二次選考で選抜された研究者（研修生）を対象に衛生部は日本語力を高めるための来日前語学研修を実施している。衛生部の要請により、日中医学協会は毎年4名～6名の日本語講師、また、語学研修修了時に毎期2名の役員を派遣し、個別面接を行い合格者を確定している。

①基礎語学研修の実施

衛生部は来日前語学研修の効果を高めるため、二次選考合格者に対し、西安医科大学に於いては日本語履修者を対象とした英語の基礎語学研修（92年2月～）を実施した。また、中国医科大学に於いては英語履修者を対象とした日本語の基礎語学研修（91年11月～）を実施した。何れも期間は5～6か月とし、2001年まで継続された。なお、26期（2002年）からは白求恩医科大学と中国医科大学の2か所に於いて、基礎語学研修と来日前語学研修を統一的に実施している。

②来日前語学研修実施状況

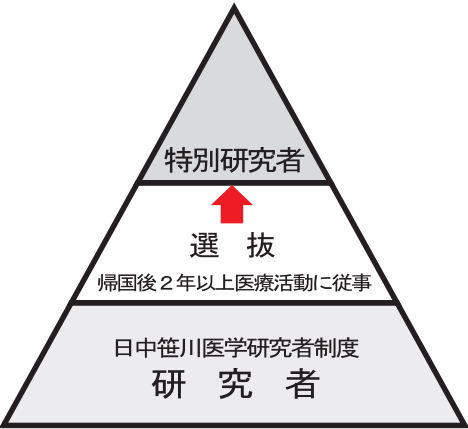
期	開催地	開催期間	受講者	派遣講師
1	白求恩医大笹川医学奨学金日本語教育センター 長春市	1987.06.01～1987.08.31 91日間	50名	4名
2	〃	1987.11.18～1988.02.12 86日間	50名	4名
3	〃	1988.06.01～1988.08.31 91日間	44名	4名
4	〃	1988.10.24～1989.01.17 85日間	54名	4名
5	〃	1989.06.05～1989.08.26 82日間	52名	4名
6	〃	1989.10.28～1990.01.20 84日間	52名	4名
7	〃	1990.06.04～1990.08.25 82日間	49名	4名
8	〃	1990.11.12～1991.02.02 82日間	50名	4名
9	〃	1991.05.20～1991.08.13 85日間	50名	4名
10	〃	1991.10.28～1992.01.18 82日間	50名	4名
11	〃	1992.06.08～1992.08.29 82日間	51名	4名
12	〃	1992.10.19～1993.01.09 82日間	52名	4名
13	〃	1993.06.07～1993.08.08 82日間	45名	4名
14	〃	1993.11.01～1994.01.22 82日間	52名	4名
15	〃	1994.05.09～1994.07.30 82日間	49名	4名
16	〃	1994.10.24～1995.01.14 82日間	50名	4名
17	〃	1995.05.02～1995.07.23 82日間	47名	4名
18	〃	1995.11.06～1996.01.27 82日間	53名	4名
19	〃	1996.05.06～1996.07.26 81日間	48名	4名
20	〃	1996.10.28～1997.01.17 81日間	49名	4名
21	〃	1997.10.20～1998.01.10 82日間	80名	6名
22	〃	1998.10.05～1998.12.25 81日間	72名	6名
23	〃	1999.10.05～1999.12.25 81日間	80名	6名
24	衛生部吉林大学日本語研修センター 長春市	2000.10.02～2000.12.22 81日間	79名	6名
25	〃	2001.10.04～2001.12.26 83日間	77名	6名
26	〃	2002.09.01～2003.01.18 139日間	53名	4名
	衛生部中国医科大学日本語研修センター 瀋陽市	2002.09.01～2003.01.18 139日間	25名	2名

注：白求恩医科大学は2000年6月機構改革により吉林大学と統合され吉林大学白求恩医学部となった

(2) 特別研究者

1) 申請

申請条件を満たしている元研究者は、指導責任者の推薦書を添付の上、衛生部に申請する。指導責任者（推薦者）を通じて申請する場合のみ、協会で受け付ける。



2) 審査

① 第一次選考（中国側選考）

両国で受け付けたすべての申請書について衛生部で審査を行う。衛生部の審査で30名を選抜し、候補者名簿として協会に送付する。

② 第二次選考（日本側選考）

特別研究者選考委員会は、衛生部で選抜した30名の候補者について選考を行う。20名の特別研究者と若干名の補欠を選抜する。

2. 年間スケジュール

－ 第26期研究者・第12期特別研究者を例として －

(1) 研究者

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下
前々年								試験 (1)				第一次 選考
前年			第二次 選考	合否 通知			語学研修 (2) (3)					
実施年	入 国 (4)				(5)		(6)					(7) (8)
(1) 全国医療関係者外国語試験(LPT) (4) 入国・オリエンテーション・歓迎式典 (7) 第2回研究報告書提出 (2) 医学・事前オリエンテーション (5) 第1回研究報告書提出 (8) 研究修了式・東京ディズニーランド遊覧・帰国 (3) 面接試験 (6) 箱根セミナー												

(2) 特別研究者

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下
申請者募集				中国衛生部 選考	日本側選考		合否 通知	正式依頼	入国手続き			入 国
							(1)	(2)	(3)	(4)		
(1) 各研究先への正式な受け入れ依頼 (4) 宿舍の手配(特別研究者) (2) 在留資格認定証明書交付申請・査証申請 (3) 協会および特別研究者から指導責任者に来日についての連絡												

3. 研究者受入状況

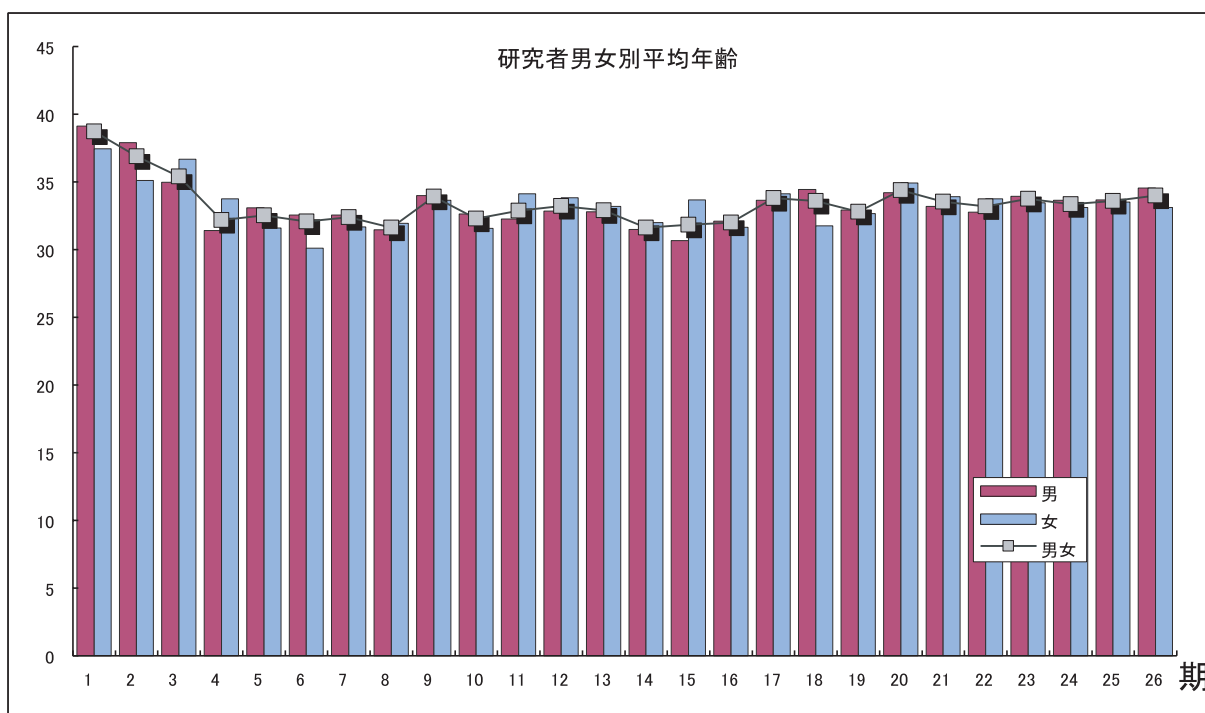
(1) 研究者の男女別数・平均年齢

男女数は、初期の段階では、女性は20%前後であったが、ここ数年は40%を占めるまでになっている。

平均年齢は、第2期生までは36歳以上であったが、それ以後は、31～33歳前後である。平均年齢において男女に大きな差はない。

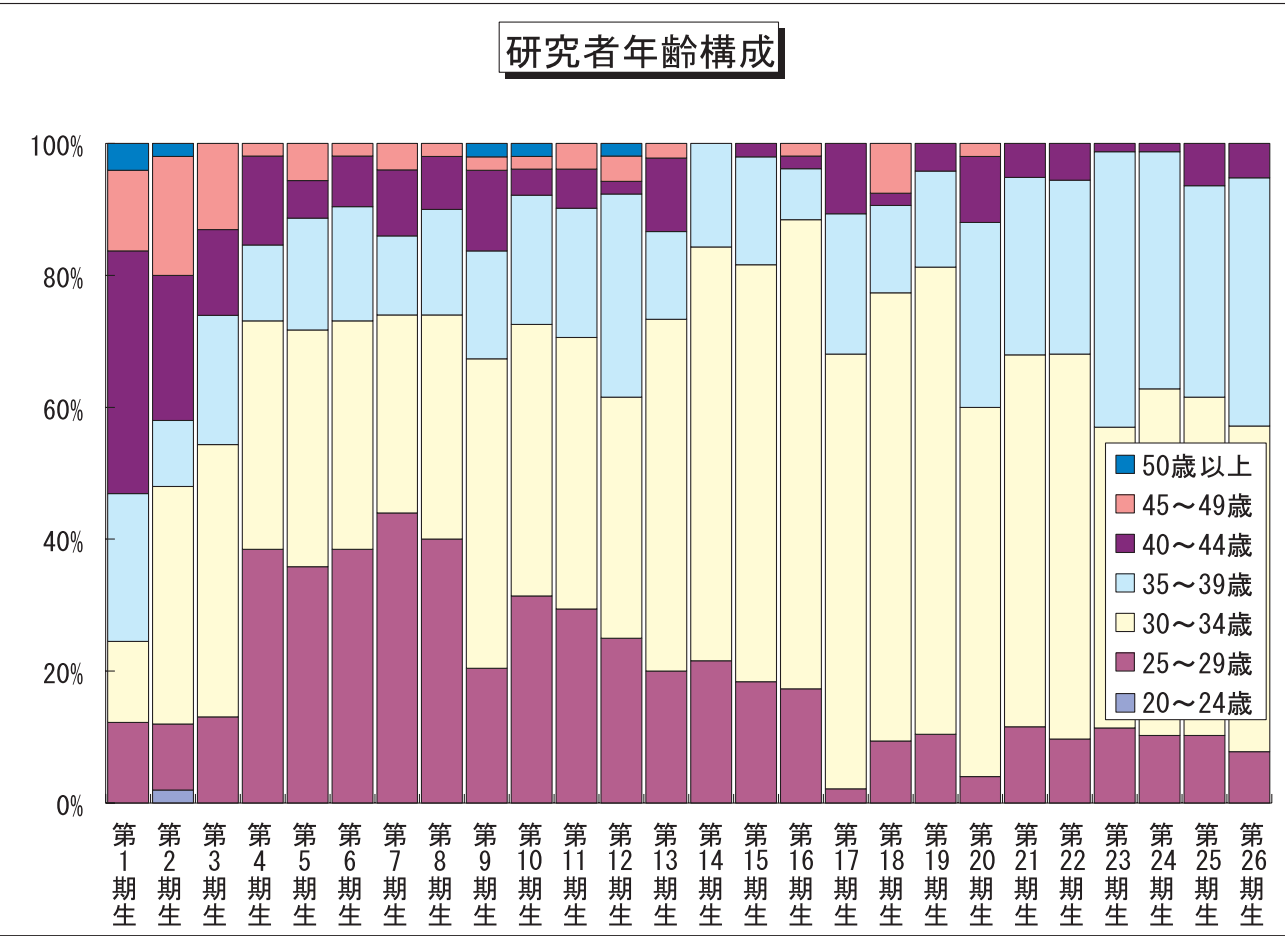
日中笹川医学研究者制度
各期別研究者数・平均年齢

	研究者数			平均年齢		
	男	女	合計	男	女	男女
第1期生	38	11	49	39.11	37.45	38.73
第2期生	32	18	50	37.91	35.11	36.90
第3期生	34	12	46	34.97	36.67	35.41
第4期生	35	17	52	31.40	33.76	32.17
第5期生	33	20	53	33.09	31.60	32.53
第6期生	42	10	52	32.55	30.10	32.08
第7期生	41	9	50	32.56	31.67	32.40
第8期生	34	16	50	31.47	31.94	31.62
第9期生	35	14	49	34.00	33.64	33.90
第10期生	35	16	51	32.63	31.56	32.29
第11期生	34	17	51	32.26	34.12	32.88
第12期生	33	19	52	32.85	33.84	33.21
第13期生	34	11	45	32.79	33.18	32.89
第14期生	37	14	51	31.49	32.00	31.63
第15期生	30	19	49	30.67	33.68	31.84
第16期生	41	11	52	32.10	31.64	32.00
第17期生	31	16	47	33.65	34.13	33.81
第18期生	36	17	53	34.44	31.76	33.58
第19期生	24	24	48	32.92	32.67	32.79
第20期生	37	13	50	34.19	34.92	34.38
第21期生	41	37	78	33.20	33.92	33.54
第22期生	41	31	72	32.76	33.74	33.18
第23期生	48	31	79	33.94	33.45	33.75
第24期生	36	42	78	33.64	33.12	33.36
第25期生	36	42	78	33.67	33.50	33.58
第26期生	47	30	77	34.55	33.10	33.99
総計	945	517	1,462	33.41	33.31	33.40



(2) 研究者の年齢構成

初期の段階で多数を占めていた「25～29歳」の数が減少し、「30～34歳」と「35～39歳」が全体のほぼ80%を占めている。特に、ここ数年「35～39歳」の占める割合が上昇している。



(3) 研究者の中国省別数

研究者は、中国の沿海部に主に分布している。特に北京市、遼寧省、吉林省だけで全体の35%を占めている。中国西部からは、陝西省、四川省を除き来日した研究者は少ない。

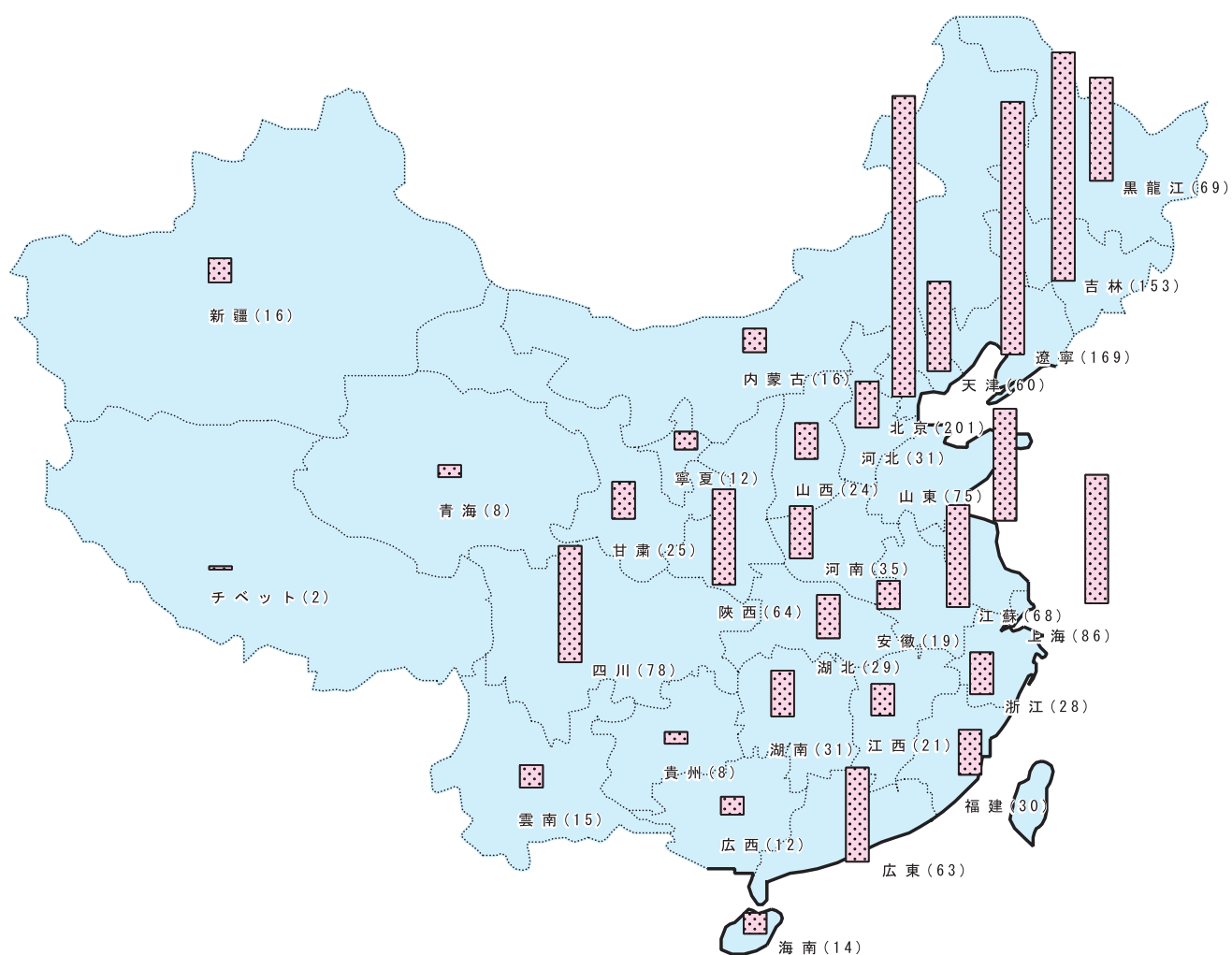
中国の医療従事者との関係で見ても、華北区及び東北区の医療従事者は全体の14.92%、12.54%を占めるにすぎないが、研究者数は華北区が22.71%、東北区が26.74%を占めている。逆に、中南区・西南区は医療従事者が全体の25.36%、12.23%を占めるのに対し、研究者数は、中南区12.59%、西南区7.05%となっている。

研究者所属機関上位10機関
(第1期～第26期) (単位=人)

	機 関 名	派遣者数
1	中国医科大学	84
2	吉林大学	61
3	延边大学	57
4	四川大学	33
5	第四軍医科大学	28
6	山東医科大学	26
7	西安交通大学	25
8	哈爾浜医科大学	22
	上海第二医科大学	22
10	北京大学	21

笹川医学奨学金制度研究者省別数

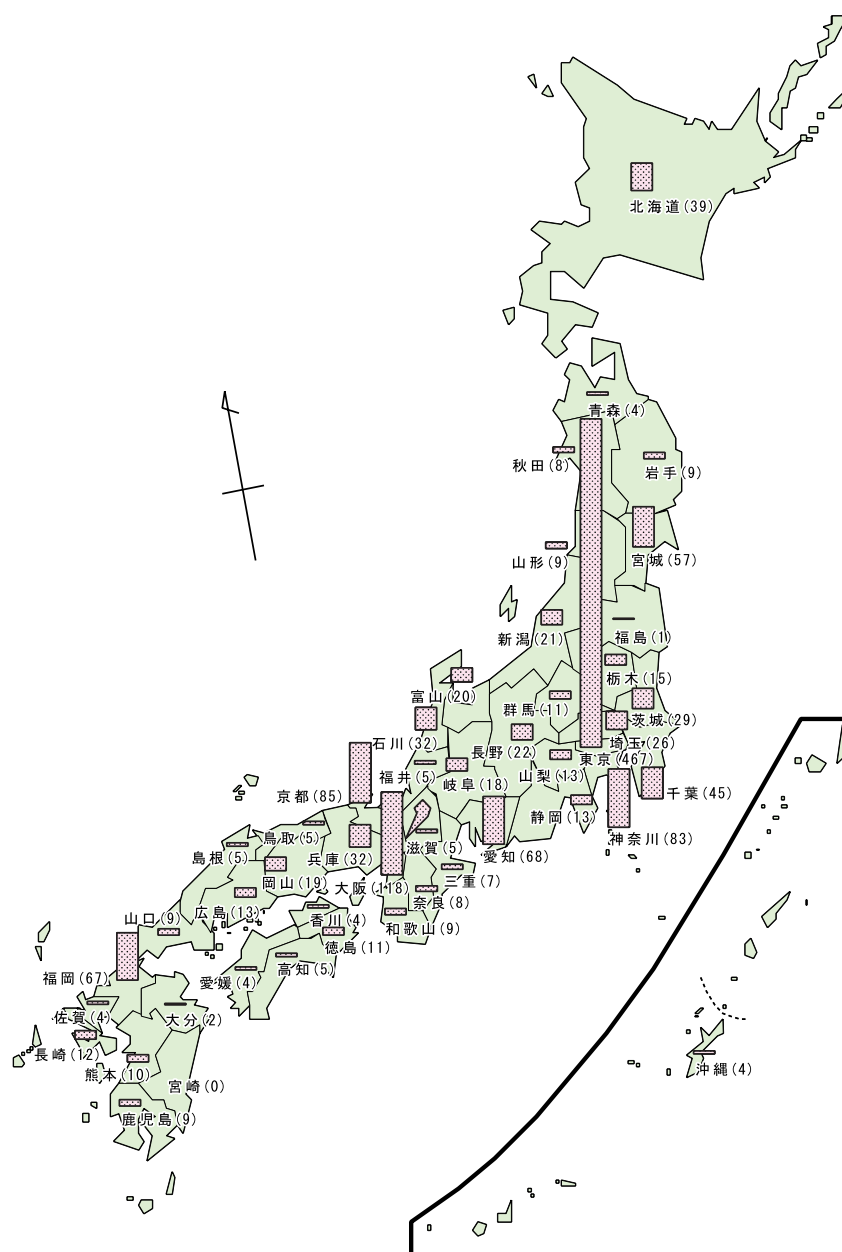
第1期～第26期研究者



(4) 研究者の都道府県別数 (第 1 期～26 期研究者)

研究機関数が多いためもあり、東京都が全体の 30%を占めている。

大阪、京都、神奈川がこれに続いている。

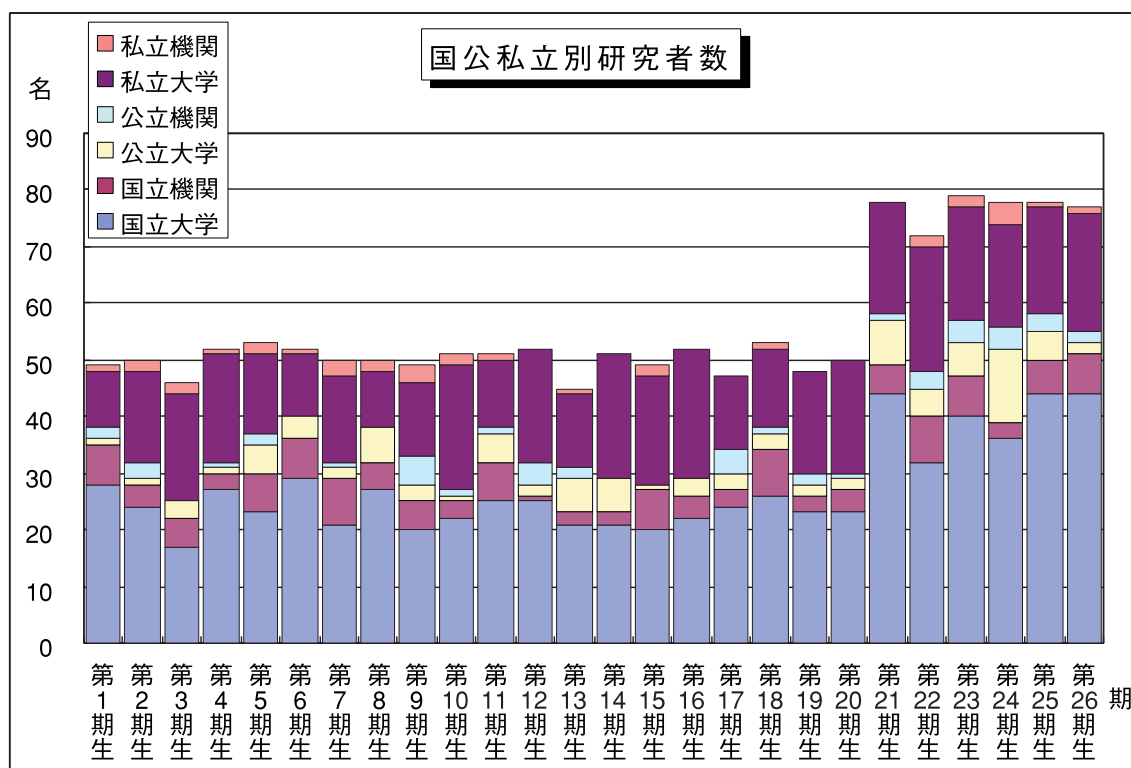


研究者受け入れ数上位 10 機関
(第 1 期～第 26 期) (単位=人)

	機 関 名	受け入れ数
1	東京大学	8 6
2	京都大学	6 3
3	東北大学	5 4
4	大阪大学	5 3
5	東京女子医科大学	3 7
6	九州大学	3 1
7	東京医科歯科大学	3 0
	名古屋大学	3 0
	昭和大学	3 0
10	国立がんセンター	2 7

(5) 機関別受入研究者数

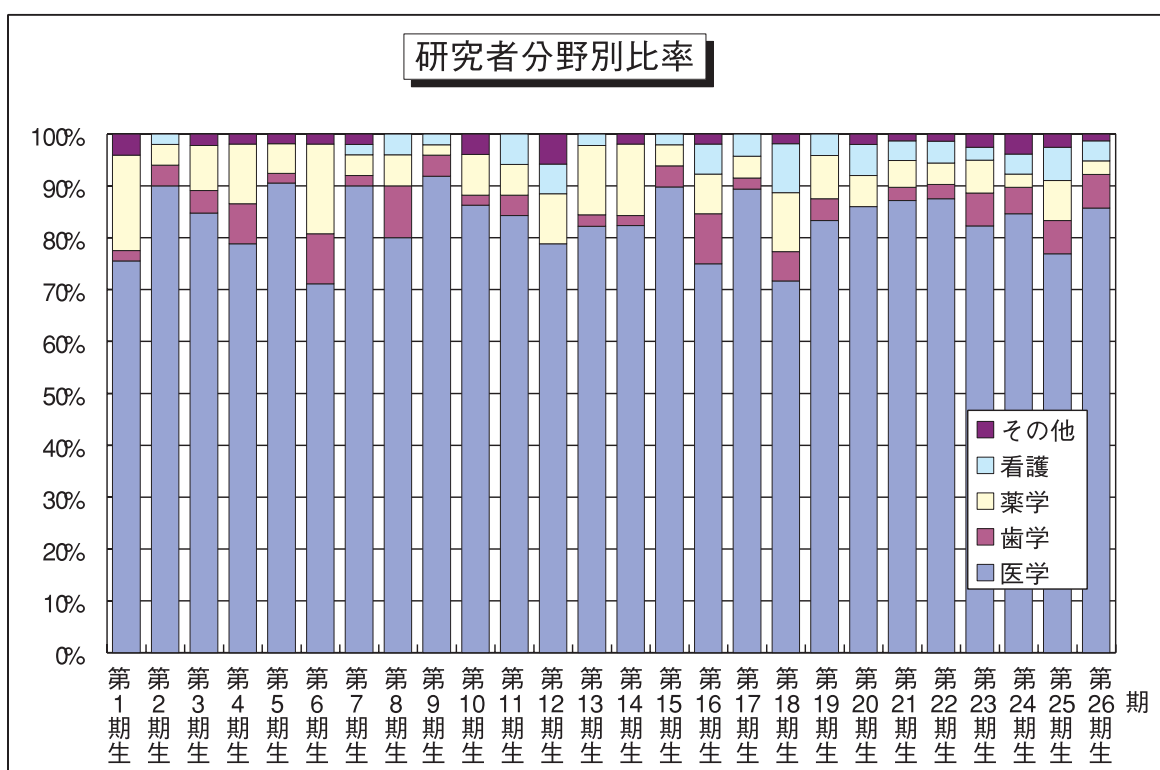
当初より、国立大学は全体の半数の研究者を受け入れている。大学別で見ても、上位 10 機関の内 8 校が国立大学である。



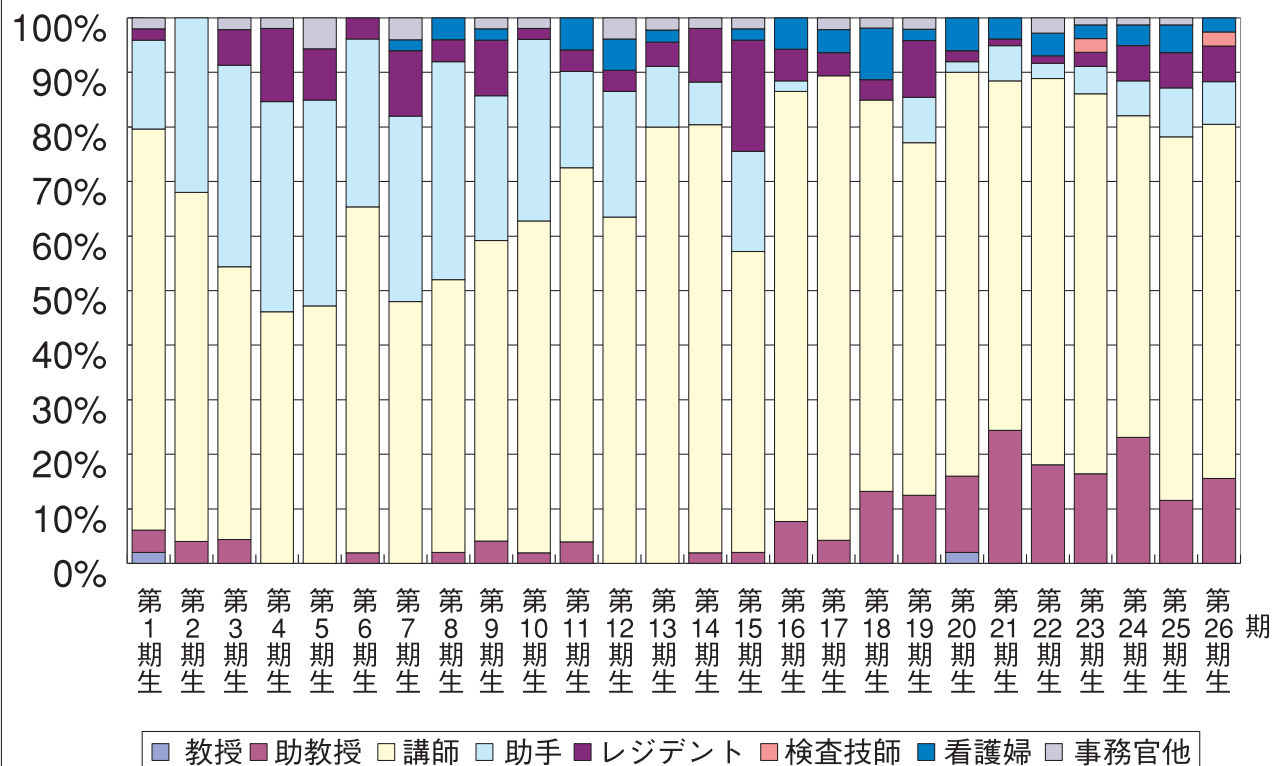
(6) 研究者の分野別及び職別数

当初より、医学分野の研究者が80%前後で推移している。

職別で見ると、「講師」クラスの研究者が圧倒的に多いが、ここ数年「助教授」クラスの研究者が増加している。反面、初期の段階で30%前後を占めていた「助手」クラスは、割合が減少している。

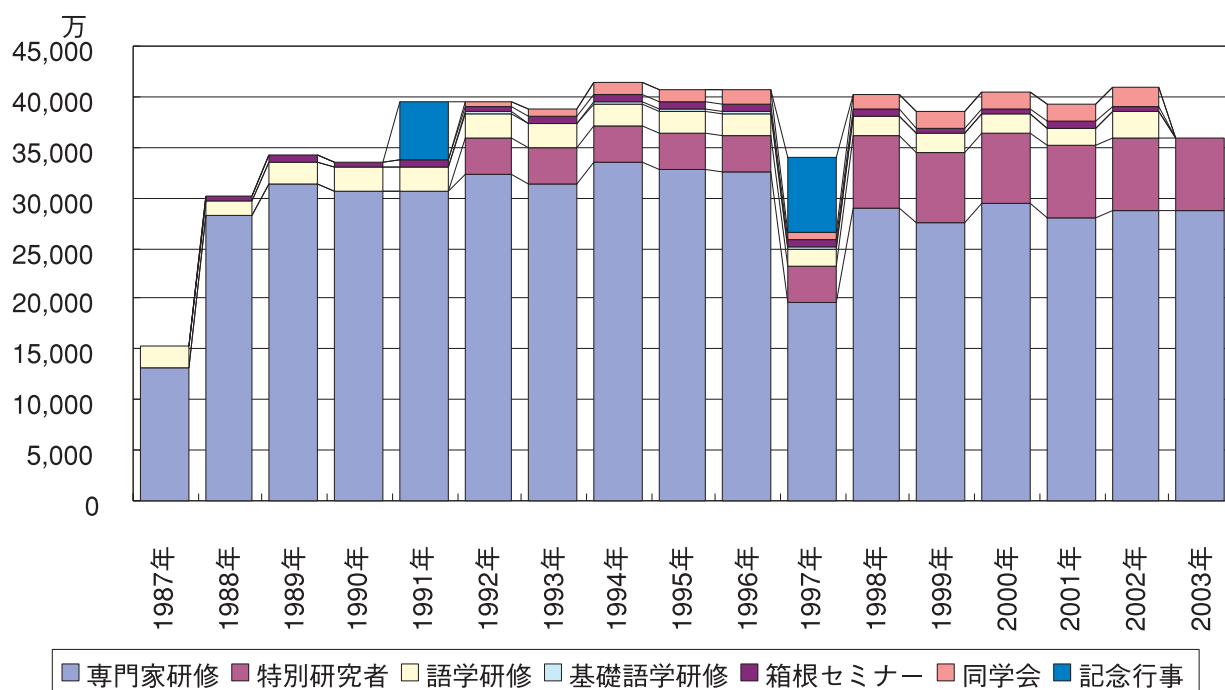


研究者職称別グラフ



(7) 本制度事業の費用

笹川医学研究者制度事業費統計



笹川医学奨学金制度事業費総額（1986～2004）

事業項目	総額（千円）	%
1. 専門家研修制度（1,541 名）	5,024,053	74.83%
2. 特別研究者招聘制度（198 名）	692,842	10.32%
3. 語学研修（日本語 5 か月間 於：長春・瀋陽）	361,991	5.39%
4. 基礎語学研修（2002 年度まで実施）	9,269	0.14%
5. 箱根セミナー（10 月の 3 日間 於：箱根）	107,208	1.60%
6. 笹川進修生同学会（情報誌の発行、学術交流会等）	125,101	1.86%
7. 指導責任者の派遣（同学会学術交流会時）	55,084	0.82%
8. 関連事業費（歓迎式典費、笹川財団職員旅費等）	203,969	3.04%
9. 記念事業費（5 周年・10 周年式典 於：北京）	118,113	1.76%
10. 同学会事務所購入費（北京市西直門北）	16,500	0.25%
合 計	6,714,130	100.00%

研究者 1 人あたりの年間直接経費内訳

支出科目	経費概算額（円）	%
1. 語学研修費（於：長春・瀋陽 5 か月間）	237,000	7.18%
2. 国際航空賃（北京－東京往復）	160,000	4.85%
3. 入出国時国内旅費（東京－研修地）	81,000	2.45%
4. 歓迎式典費（来日時 於ホテル海洋）	54,000	1.64%
5. 配付資料作成・購入費	11,000	0.33%
6. 宿舍賃借料（12 か月含敷金・礼金等）	675,000	20.45%
7. 家具レンタル料（12 か月 机・椅子等）	67,000	2.03%
8. 生活費（食費・光熱費・嗜好料・交通費）	1,320,000	40.00%
9. 通学費（定期代等）	37,000	1.12%
10. 学会出席補助費（1 回 / 年）	56,000	1.70%
11. 箱根セミナー参加費（2 泊 3 日）	60,000	1.82%
12. 受入機関研修費（指導責任者へ）	357,000	10.82%
13. 臨床研修費・同保険料	65,000	1.97%
14. 修了式典費	12,000	0.36%
15. 国民健康保険料・傷害保険料	91,000	2.76%
16. 雑費（出国税・手荷物輸送・送金手数料）	17,000	0.52%
合 計	3,300,000	100.00%

(8) 臨床修練について

臨床修練許可取得者数

期（年度）		医 師	歯科医師	合 計
第 1 期	1987 年度	1	0	1
第 2 期	1988 年度	0	0	0
第 3 期	1988 年度	5	0	5
第 4 期	1989 年度	13	1	14
第 5 期	1989 年度	11	0	11
第 6 期	1990 年度	6	1	7
第 7 期	1990 年度	8	0	8
第 8 期	1991 年度	5	3	8
第 9 期	1991 年度	6	1	7
第 10 期	1992 年度	12	1	13
第 11 期	1992 年度	7	1	8
第 12 期	1993 年度	13	0	13
第 13 期	1993 年度	11	1	12
第 14 期	1994 年度	16	1	17
第 15 期	1994 年度	10	0	10
第 16 期	1995 年度	10	3	13
第 17 期	1995 年度	6	1	7
第 18 期	1996 年度	9	0	9
第 19 期	1996 年度	16	1	17
第 20 期	1997 年度	12	0	12
第 21 期	1998 年度	19	1	20
第 22 期	1999 年度	23	2	25
第 23 期	2000 年度	26	1	27
第 24 期	2001 年度	25	2	27
第 25 期	2002 年度	26	1	27
第 26 期	2003 年度	25	3	28
合 計		321	25	346

(9) 特別研究者研究報告会演題一覧

第1期生

- 孫 貴範 筑波大学医学専門学群疫学
PEG-SODの精製・抗酸化物質と有害金属との相互作用および肺癌患者の遺伝子GST, 検出の研究
- 剛 勇 自治医科大学附属大宮医療センター総合医学 I
1. アポHに関する研究 2. Lp (a) と apo (a) に関する研究
- 姜 奕 順天堂大学医学部病理学第2
NZB/W F1、NZWマウスにおけるCD 40 Lの発現異常とCD 5+B細胞増殖、分化異常との関連
- 孟 高淵 東京大学医学部検査部
尿を試料として、新しい肝機能検査法—尿中胆汁酸の排泄量と肝機能異常との関係を探求する
- 高 眉揚 東京女子医科大学母子総合医療センター
凝固線溶糸からみた妊娠中毒症発症機序の解析
- 朱 威 東京理科大学生物工学科免疫学
新規エイズ治療薬および診断薬の開発のための酵素免疫測定法の開発
- 張 珊文 福井医科大学放射線基礎医学
癌遺伝子を transfect されたヒト細胞株温熱感受性
- 姚 正生 京都大学医学部核医学
モノクローナル抗体を用いた、腫瘍の核医学診断と治療の精度向上
- 巖 律南 京都大学医学部外科学第2
The Application of Redox Theory in Liver Surgery and Living Related Partial Liver Transplantation
- 牛 建昭 長崎大学医学部解剖学第3
Differential staining of DNA strand breaks occurring in apoptotic and necrotic cells by nonradioactive in situ nick translation (INT)

第2期生

- 宋 剛 札幌医科大学生理学第2
哺乳動物における呼吸神経機序
- 冉 玉平 順天堂大学医学部皮膚科学
1. Candida albicansが産生するProteinaseに対するヒト末梢好中球の走化性について
2. 真菌のケラチノサイトの形態と細胞増殖に及ぼす影響について
- 謝 麗亜 東京医科歯科大学難治疾患研究所社会医学研究部門
犯罪被害者学についての中、日、米比較研究—認知、態度、行動を中心に—
- 梅 家模 国立公衆衛生院疫学部
慢性疲労症候群の全国疫学調査
- 周 新華 杏林大学医学部第2解剖学
マウス精巣発生過程におけるアンドロゲンレセプターの局在
- 曹 元華 国立多摩研究所生体防御部
らい発病危険者の予測診断における各種血清反応の有用性の比較
- 康 健 千葉大学医学部附属肺癌研究施設第2臨床研究部
閉塞型睡眠時無呼吸症候群の病態と治療
- 陳 福君 富山医科薬科大学薬学部薬品作用学
マウスの Pilocarpine による唾液分泌作用の定量化

- 李 玉雨 九州大学医学部ウイルス学
中国吉林省延边地区におけるC型肝炎ウイルスの血清疫学研究
- 趙 栄祥 久留米大学医学部耳鼻咽喉科学
喉頭前癌病変と初期癌の増殖細胞核抗原

第3期生

- 丁 梅 山形大学医学部法医学
I T I H 1 型の遺伝多型について
- 隋 星衛 東京大学医科学研究所癌病態学研究部
g p 130 及び c - k i t シグナルによるヒト赤血球産生
- 殷 東風 国立がんセンター中央病院内科
転移性乳癌における抗癌剤の臨床試験に関する研究－多剤化学療法の抗腫瘍効果と副作用の評価
- 宋 友華 星薬科大学薬学部製剤学
皮下埋込時におけるN－サクシニル－キトサン－マイトマイシンC結合体の i n v i v o 評価
- 樂 栄生 国立公衆衛生院疫学部成人病室
ストレス及びストレス症状と健康障害についての行動疫学研究－多段階、多変数の回帰分析
- 孫 莉 国立小児病院麻酔科
ビーグル犬でのセボフルレンとイソフルレン反復低流量麻酔が肝腎機能に及ぼす影響の検討
- 周 彩存 国立療養所東京病院呼吸器病部
1. 万歩計と自転車エルゴメータを用いた呼吸機能障害の運動療法 2. 胸部拘束による拘束性障害の運動負荷 3. 抗酸菌の迅速診断法
- 邵 国光 国立がんセンター東病院外来部呼吸器外科
The Correlation Between p53 gene Mutation and Postoperative Recurrence of Lung Cancer
- 丁 莉莉 金沢大学遺伝子実験施設
1. Over-production of Rep protein with tRNA Arg (AGG/AGA) gene for minor codons.
2. p53 mutation in gastroduodenal carcinoma by direct sequencing.
- 韓 驊 京都大学医学部医化学第1
Molecular mechanism of G1 arrest of WWH1231 B lymphoma cells induced by surface IgM signaling

第4期生

- 王 娜亜 国立国際医療センター病院耳鼻咽喉科
ヒト嗅上皮の加齢における組織学的検討
- 周 正 東京女子医科大学附属消化器病センター消化器外科学
胆嚢癌の肝転移に関する臨床病理的研究
- 孫 中華 東京女子医科大学内分秘疾患総合医療センター内科2
単核球細胞の酸化LDLによる熱ショック蛋白 (HSP70、HSP90) の発現
- 汪 玲 国立公衆衛生院母子保健学部母性保健室
日中両国の幼児におけるアタッチメントと気質の比較研究
- 逢 黎毅 東京慈恵会医科大学産婦人科学
卵巣類皮嚢胞腫に対する腹腔鏡下手術と開腹手術の比較検討
- 林 玲 山梨医科大学内科学第3
ラット脂肪細胞におけるTSH受容体の機能

- 郭 在培 京都大学医学部皮膚病学微生物学
1. Apoptosis in Skin Tumors 2. Nitric Oxide in Atopic Dermatitis
- 郝 衛東 岡山大学薬学部薬品化学
太陽光及びUVBによるM13mp2 phaseの誘発変異について
- 段 樹民 九州大学医学部生理学第1
視索前野ニューロンにおけるグルタミン酸応答とプロスタグランジンE2による修飾作用
- 程 曉曙 九州大学医学部附属心臓血管研究施設内科部門
炎症性サイトカインと機能障害について

第5期生

- 呉 惠霞 札幌医科大学衛生学
ヒト及び動物由来口タウウイルスの生態と進化に関する研究
- 王 曉里 千葉大学医学部歯科口腔外科学
口腔扁平上皮癌の第5番染色体におけるヘテロ接合性欠失
- 李 悦欣 東京大学医学部生理学第1
霊長類大脳視覚領野における神経栄養因子およびその受容体遺伝子の発現
- 張 希龍 東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所循環器外科学
移植心冠脈硬化病変に対する Triptery Wolfordii の抑制効果
- 張 偉華 国立がんセンター中央病院第1病棟部
乳癌患者における tamoxifen 治療による子宮内膜癌の二次性発癌に関する研究
- 馬 峰 信州大学医学部小児科学
巨核芽球性白血病細胞株に対する Retinoic Acid による分化誘導
- 李 平 新潟大学医学部附属腎研究施設免疫病態学部門
実験腎炎に及ぼす漢方薬の影響とその有効成分の同定
- 付 守廷 新潟大学医学部薬理学
虚血再灌流障害に対する Na^+/H^+ 交換系の役割
- 童 茂栄 藤田保健衛生大学医学部内科学
東洋人における睡眠呼吸障害患者と正常人のセファロメトリーによる計測値の比較
- 陳 錦秀 滋賀医科大学医学部看護学科
日中間にみる看護ケアサービスの比較

第6期生

- 唐 明輝 北海道大学歯学部口腔生化学
メカニカルストレスの骨芽細胞に対する影響 ー複合担体とBMPによる組織誘導ー
- 姚 文慶 東北大学医学部公衆衛生学
中国瀋陽地区における胃癌血清疫学研究
- 尹 維民 秋田県立脳血管研究センター神経内科学研究部
実験的局所脳虚血における体温の影響とアポトーシス：実験病理学的研究
- 瑪依努爾 尼亞孜 日本医科大学産婦人科学
妊娠中期発症IUGR well-being の検討ー血流波形と羊水量を用いてー
- 趙 衛国 東京女子医科大学附属脳神経センター脳神経外科学
新しいラットクモ膜下出血モデルの開発：急性期CPP、ICP、rCBFと死亡率の関連性についての研究
- 方 剣喬 昭和大学医学部第1生理学

		末梢電気刺激の発熱抑制作用に関する研究
張 亨	昭和大学医学部第1薬理学	ストレプトゾトシン誘発糖尿病ラットにおける血液凝固線溶系動態
黄 志力	愛媛大学医学部薬理学	ストレス負荷後に生じる血漿ヒスタミンの二相性の上昇とその由来
唐 小海	国立がんセンター中央病院第2外来部婦人科	子宮体癌の後腹膜リンパ節転移及び治療結果の predicting 臨床病理因子
杜 金行	聖マリアンナ医科大学難病治療研究センターDDS部門	IL-1 β 刺激RA滑膜細胞のPGE ₂ 産生及びCOX-2発現に対する雷公藤抽出物(GTW)の抑制効果
第7期生		
周 芳堅	北海道大学医学部泌尿器科学	小児外傷性後部尿道狭窄に対する経会陰式尿道端端吻合術の経験
汲 娟娟	秋田大学医学部生理学第一	パッチクランプを用いたATP感受性カリウムチャンネルの機能解析
関 洪全	千葉大学真菌医学研究センター真菌感染分野	生姜の食品防腐作用に関する基礎的研究
金 政錫	東京大学大学院医学系研究科腫瘍外科学	大腸癌予後におけるPlatelet-derived endothelial growth factor (PD-ECGF)発現の意義に関する検討ー特に転移との関連についてー
劉 賢臣	東京大学大学院医学系研究科精神保健学	中国の児童における行動的・情緒的問題に関する研究：教師による6歳から11歳児の評価より
王 治平	東京女子医科大学小児科学	福山型先天性筋ジストロフィーの分子遺伝学研究
王 広樹	昭和大学薬学部生薬学・植物薬品化学	アマリリス <i>Hippeastrum hortorum</i> 鱗茎の成分研究
曹 彤	昭和大学歯学部第1口腔外科学	家兎の下顎骨では抜歯と卵巣摘出により骨量の減少をきたす
劉 維賢	昭和大学歯学部第1口腔外科学	犬の顎面骨の成長発育に対するインプラント埋入の影響に関する実験的研究
伍 建林	横浜市立大学医学部麻酔科学	ケタミンはグルタミン酸受容体を介さずラット脳海馬のNO _x -を増加させる
馬 剛	北里大学医学部皮膚科学	血管肉腫に対するEtoposide、TNP-470、Prednisoloneの有効性の検討
高 秀華	東海大学医学部生体防御機構系免疫学	T細胞系列決定に関わる新しい転写因子(mGCM)の同定
李 亜明	金沢大学医学部核医学	Identification of Severe and Extensive Coronary Artery Disease by Automatic Measurement of Transient Ischemic Dilation of the Left Ventricle on Stress-Redisitribution Thallium-201 Scintigraphy
陳 衛民	金沢大学医学部麻酔・蘇生学	血清による加工天然サーファクタントの表面吸着阻害とデキストランの効果
韓 春茂	金沢医科大学形成外科学	

		ラット皮膚切開創モデルにおける TGF- β とその特異的レセプター及び細胞内シグナル伝達系蛋白の発現について
潘 曉琳	財団法人長野県成人病予防協会長野県がん検診・救急センター	子宮頸部悪性腺腫における K-ras 遺伝子変異、p 53 overexpression とヒト乳頭腫ウイルス感染に関する研究
林 崇韜	朝日大学歯学部歯周病学	ヒト歯肉縁下歯石におけるグリコサミノグリカリンの免疫組織学的局在
高 長明	愛知県がんセンター研究所疫学部	中国江蘇省の胃・食道がん高率・低率地域における比較分子疫学的研究
于 向民	京都大学大学院医学研究科生体構造医学講座	ゴルジ装置の退縮と新生機構の研究
章 立新	大阪市立大学医学部病理学第2	ヒトPTCA後冠状動脈の新生内膜におけるフィブロネクチン、ラミニン及びIV型コラーゲンの発現
第8期生		
韓 英	弘前大学医学部内科学第1	細径、柔軟性大腸内視鏡は挿入時の疼痛を防止するか
許 順	獨協医科大学外科学（胸部）	肺癌患者における血清中 soluble type Fas antigen（sFas）の臨床的意義の検討
孫 成均	国立公衆衛生院地域環境衛生学部環境健康影響室	分級採集した空気浮遊粒子及びガス状試料中の PAH 濃度分布に関する研究
魏 秀峰	昭和大学歯学部 第3 歯科保存学	歯肉線維芽細胞の産生する IL-1 α は細胞接触により単核破骨細胞の延命および多核破骨細胞への分化を促進する
薛 長勇	国立健康・栄養研究所老人健康・栄養部	Goto-Kakizaki ラットにおける低トリグリセライド血症とそのメカニズム
葉 春峰	北里大学医療衛生学部医療情報学	医学文献情報検索教育に関する日中比較研究
劉 昭純	横浜市立大学医学部附属病院リハビリテーション科	運動失調の機能障害評価票における信頼性および妥当性の検討
謝 院生	新潟大学医学部内科学第2	Gentamicin 誘発ラット急性尿管管壊死及び回復期における osteopontin の発現と役割
張 允嶺	富山医科薬科大学医学部生化学（第1）	ラット胎児脳で観察されるタンパク質リン酸化の抑制現象
呉 平生	金沢大学医学部生化学第二	ヒト微小血管内皮・周皮細胞における血管新生抑制因子遺伝子の発現とその意義
費 華	岐阜大学医学部臨床検査医学	二種類の LDL- コレステロール直接法の評価
郭 永清	三重大学医学部耳鼻咽喉科学	Lipopolysaccharide が培養鼻粘膜腺細胞の Mucin mRNA 発現に及ぼす影響
畢 振強	大阪大学微生物病研究所感染症研究部門（細菌感染分野）	Shiga Toxin-producing Escherichia coli O26:H11 の分泌タンパク質の解析
章 志偉	近畿大学医学部心臓外科学	ラット保存における ischemic preconditioning の効果、組織 ATP レベルの推移の検討

- 張 志文 国立循環器病センター病院脳神経外科
クモ膜下出血後の脳血管攣縮に対するセリン蛋白分解酵素阻害剤, FUT-175 および MD-805 の抑制効果
- 趙 傑剛 兵庫県立看護大学教育・管理看護学
中国河南省洛陽医学高等専門学校附属病院における看護ケア提供方式プログラム
- 余 争平 産業医科大学産業生態科学研究所 環境中毒学
中毒性細胞機能障害の分子機構—トリブチルスズの MAP キナーゼシグナル伝達系への影響—
- 任 愛国 産業医科大学環境疫学
インターネット等を利用した中国疫学情報資料の開発と応用
- 劉 強 福岡大学医学部病理学第1
B細胞リンパ腫におけるMDR-1とP-gpの表現

第9期生

- 侯 凱 東北大学大学院医学研究科神経科学（神経病態制御学）
海綿洞部脳硬膜動静脈短絡の病態と治療
- 辛 紅 東北大学加齢医学研究所呼吸器腫瘍
肺腺癌抗原サイクロフィリンBペプチドを用いた肺腺癌患者における細胞傷害性Tリンパ球の誘導と傷害活性
- 雛 文田 千葉大学医学部寄生虫学
IFN- γ 遺伝子と TNF- α 遺伝子 knockout マウスを用いて自己免疫性甲状腺疾患発生機序の検討
- 馬 興栄 放射線医学総合研究所医療情報室
心筋画像における部分容積効果の補正
- 蔡 靈芝 日本医科大学小児科学
X-連鎖重症複合免疫不全症の遺伝子治療に向けての研究
- 謝 亜雄 順天堂大学医学部衛生学
中国でみられる石炭の燃焼による常在性慢性ヒ素中毒患者の尿中ポルフィリン
- 張 錦 順天堂大学医学部呼吸器内科学
各種肺癌におけるオステオポンチンの発現に関する検討
- 盛 迅倫 国立病院東京医療センター感覚器センター
網膜芽細胞腫の遺伝子解析
- 瀧 立松 国立小児病院研究検査科
神経芽細胞の増殖と分化の制御機構の解析
- 雲登卓瑪 信州大学医学部内科学第1
高地肺水腫と内皮型一酸化窒素合成酵素遺伝子多型との関連
- 関 徳玉 金沢医科大学学生化学第1
C型肝炎ウイルス CORE タンパク質と核酸の相互作用
- 張 平平 静岡県立大学看護学部
看護リスクマネジメント；最近の事故分析
- 劉 栄森 大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部
障害者歯科受診患者におけるメチシリン耐性ブドウ球菌の分布と性状
- 常 玲 大阪市立大学大学院医学研究科生殖発生発達病態学
ヒト卵巣癌細胞株およびヒト子宮頸癌細胞株からのシスプラチン（CDDP）耐性株の樹立とその耐性化機構の解析
- 傅 強 武庫川女子大学薬学部薬品分析学

- ジヒドロピリジン誘導体に対する分子インプリントポリマーの調製と応用に関する研究
- 劉 成起 広島国際大学医療福祉学部医療経営学科
日本における医療保健制度の仕組み及びその行政活動
- 李 勤 山口大学医学部眼科学
角膜実質細胞と好中球によるコラーゲン分解に対する相互作用
- 銭 立武 九州大学大学院医学研究院臨床・腫瘍外科学
放射線照射はヒト膵癌の浸潤能を促進する可能性がある
- 李 連波 大分県立看護科学大学人間科学講座環境科学
患者線量の低減化と画質改善を最適化するための胸部X線撮影条件の検討

第 10 期生

- 章 天喬 岩手医科大学医学部内科学第2
セカンドハーモニック・イメージングによる超音波心筋組織性状診断の研究
- 孫 立波 東北大学大学院医学系研究科外科病態学（消化器外科）
ヒト膵癌細胞株への染色体 12 導入による細胞増殖及び血管新生の抑制
- 劉 曉平 国立がんセンター東病院外来部
郭清効果からみた進行胃癌における腹部大動脈周囲リンパ節郭清の意義について
- 李 綱 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科尿路生殖機能学
Interferon gamma によるヒト膀胱癌細胞の Thymidine Phosphorylase の誘導と 5-fluorouracil, 5'-deoxy-5-fluorouridine に対する細胞障害性の増加効果
- 席 家寧 日本大学医学部病理学
非小細胞肺癌の腫瘍生長と転移に関連する粘連因子 $\alpha 2 \beta 1$, $\alpha 5 \beta 1$ と $\alpha \nu \beta$ の作用
- 陳 欣 東京女子医科大学医学部形成外科学
冠動脈疾患における plasminogen activator inhibitor-1 遺伝子の遺伝子多型とハプロタイプ的相关解析
- 何 華 東京女子医科大学附属脳神経センター神経内科
日本の病院管理モデルの中国病院管理への啓発と提言
- 張 会孝 国立感染症研究所エイズ研究センター第二室
海外渡航者感染症の予防対策
- 胡 秀英 財団法人 東京都老人総合研究所
地域高齢者の生活機能についての日中比較一特に中国における高齢者の生活機能と地域看護ニーズについて
- 周 雲 聖マリアンナ医科大学泌尿器科学
尿路閉塞モデルに見られた腎病態
- 陳 智超 浜松医科大学第3内科
亜ヒ酸の慢性骨髄性白血病細胞における細胞周期停止作用及び細胞周期関連遺伝子の発現誘導
- 劉 沢軍 浜松医科大学臨床検査医学
癌細胞の PR 及び ER α 遺伝子における複数のプロモーターのメチル化の特徴
- 邢 万金 名古屋大学医学部附属病態制御研究施設分子病態研究部門
SHIP の SR3Y1 細胞の MMP2 分泌の影響に関する研究
- 黄 允寧 京都府立医科大学外科学（消化器外科）
硫酸デキストランのヒト胃癌細胞株 MKN1 の接着活性及び接着因子の発現に対する効果の検討
- 韋 宏 大阪大学大学院薬学研究科天然物化学
Haliclona 属海綿由来 lembeyne 類の神経分化誘導活性と化学的研究

- 張 貴燦 国立循環器病センター心臓血管内科
左心室流入血流障害を伴う虚血性心疾患における左心房機能の評価
- 王 旭東 国立循環器病センター研究所バイオサイエンス部
冠動脈疾患における plasminogen activator inhibitor-1 遺伝子の遺伝子多型とハプロタイプの相関解析
- 金 成哲 徳島大学工学部生物工学科
血管新生阻害活性を有する低酸素性細胞放射線増感剤アゾマイシン誘導体の光学異性体－立体異性体の合成とその生物活性－
- 余 福勲 長崎大学熱帯医学研究所分子構造解析分野
日本脳炎ウィルス特異的 RNA 依存性 RNA ポリメラーゼの大腸菌での発現とその機能解析
- 王 鳳山 熊本大学発生医学研究センター器官形成部門臓器形成分野
マウス Ayu8021 遺伝子ゲノム構造を解析

第 11 期生

- 曹 秉振 北海道大学大学院医学研究科神経病態学（分子細胞病理学）
ラットの有機水銀の中毒における末梢神経変性
- 米 衛東 弘前大学医学部麻酔学
ICG を用いた麻酔導入時の血漿容量は過大評価されるか
- 呂 曉川 東北大学大学院薬学研究科生命薬学専攻細胞情報薬学分野
天然物由来活性成分の細胞情報伝達機構に及ぼす影響に関する研究
- 袁 志斌 群馬大学医学部核医学
親電反応でアミノ酸にフッ素 -18 を標識する合成研究
- 張 静 日本医科大学付属千葉北総病院内科学第 1
不安定な冠動脈病変の形成と冠危険因子の関係－血管内視鏡による検討－
- 尹 明実 日本医科大学内科学第 1
自己免疫性肝炎及び原発性胆汁性肝硬変における肝組織中キマーゼ量について
- 李 儒正 順天堂大学医学部外科学
ラット移植心モデルを用いた Triptolide 及び FK506 の免疫抑制効果の検討
- 金 東日 東京薬科大学薬学部薬品分析化学
中薬成分の血中における高感度分析－ honokiol, magnolol, flavonoid 類の電気化学検出セミミクロ HPLC －
- 金 永日 明治薬科大学薬学部天然薬物学
中国産 Actinidia Kolomikta の成分研究
- 馬 洪波 国立感染症研究所ウイルス第一部第一室
ハンタンウイルスの核蛋白質とアクチンの相互作用
- 林 傑 金沢医科大学循環器内科学
低酸素性 preconditioning におけるラット心線維芽細胞の Heme Oxygenase-1 の遺伝子発現誘導
- 曹 学誠 名古屋大学大学院医学系研究科運動・形態外科学
腕神経叢引き抜き損傷における End-to-side 神経縫合術の有用性
- 武 新安 京都大学大学院薬学研究科薬品動態制御学
Nanoparticle 中での薬物封入と溶出についての検討
- 龐 書勤 兵庫県立看護大学看護学部看護学科小児看護学
救急対応を必要とする小児看護の質の向上に向けた統合モデルの作成－不慮の事故に関する一次予防とその継続教育を中心にして－

- 呉 麗華 島根医科大学医学部内科学第3
日本脳卒中急性期患者データベースを用いた中国瀋陽における脳卒中調査
- 朱 旭東 広島大学大学院医歯薬総合研究科創生医科学専攻探索医科学
SELEX 法による TGF- β 受容体 DNA 拮抗分子の体系的検索
- 程 為平 広島大学大学院医歯薬総合研究科創生医科学専攻病態探索医科学
鍼刺激による高齢者の皮膚温の経時的変化の検討
- 劉 紹乾 徳島大学薬学部薬品物理化学
脂質二分子膜の copoly (Lys/Tyr) に対する透過性
- 葛 利軍 福岡大学筑紫病院内科学第1
両心室ペーシング植込み術前後における心機能の比較
- 欧 柏青 大分医科大学循環病態制御 (臨床検査医学)
右室流出路における gap junction の検討

第12期生

- 劉 聡 東北大学大学院医学系研究科内科病態学 (分子代謝病態学)
2型糖尿病発症における Tas1R3, TRPM5 遺伝子の役割
- 丁 漢昇 東北大学大学院医学系研究科社会医学 (医療管理学)
日本における少子化が小児科医の数に与える影響とその政策への応用
- 王 少麗 茨城大学人文学部人文学科日本・中国文化論講座
日本漢方医学の実地調査—中日伝統医学の比較研究—
- 金 玉蓮 東京大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科学・聴覚音声外科
高度難聴児における VEMP の研究
- 徐 紅萌 東京大学大学院医学系研究科生体管理医学講座麻酔学
神経因性疼痛ラットモデルにおけるラクトフェリンの鎮痛効果
- 金 春林 慶應義塾大学医学部医療政策・管理学
上海における医療保険制度の改革と展望
- 寿 延寧 東京医科大学外科学第1
原発性非小細胞肺癌における p53/kip2 と ki-67 の発現と臨床病理学諸因子・予後の関わり
- 焉 伝祝 国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第一部
先天性X-連鎖性自己食空胞ミオパチー分子病理解析
- 李 国棟 国際基督教大学アジア文化研究所
日本漢字語意味対照研究
- 田 素斎 横浜市立大学医学部附属病院看護部
看護師長業務に関する日本と中国の比較—看護師長業務の実践から学ぶ—
- 劉 岩 昭和大学藤が丘病院内科腎臓
 β -aminopropionitrile 投与による糸球体硬化の進展抑制に関する研究
- 元 虎 昭和大学藤が丘病院整形外科
腰椎椎間板ヘルニア手術施行例における再発例の検討
- 藍 志傑 金沢大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科学
OSAS における咽頭3-DCT画像と容積測定の実用
- 陳 建光 山梨大学大学院医学工学総合研究部薬理学
プラバスタチンは麻酔下正常コレステロールラットにおける冠動脈虚血・再灌流誘発不整脈を抑制する

- 孫 継紅 岐阜大学医学部看護学科成人・老年看護学
重症集中ケア認定看護師の役割と看護実践での成果に関する実態調査研究
- 王 文萍 静岡県立静岡がんセンター緩和医療科
癌性疼痛における経口オピオイド剤からフェンタニルパッチへのローテーションに関する研究
- 代 政学 京都大学大学院医学研究科内科系専攻内科学講座
IVUS による冠動脈インターベンションの評価
- 関 素敏 大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座予防歯科学
Prevotella Intermedia のヘモグロビン結合膜蛋白質の同定及び精製
- 阮 宏瑩 九州大学大学院医学研究院耳鼻咽喉科
NF-κB 阻害剤 /DHMEQ の頭頸部癌細胞増殖抑制効果
- 張 輝 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科循環器・呼吸器・代謝内科学
心筋梗塞における憎帽弁逆流の機序の研究

Ⅲ. 笹川医学奨学金進修生同学会の活動

1. 同学会学術交流会実施状況一覧表

	名称	テーマ	開催日	開催地	対象地区	参加者 (中)	参加者 (日)
第1回	東北地区帰国 笹川生聯誼会		1993年09月10日 ～11日	吉林省 長春市	東北地区	97	12
第2回	西北地区帰国 笹川生聯誼会		1994年08月28日	陝西省 西安市	西北地区	73	19
第3回	華東地区帰国 笹川生聯誼会		1995年06月02日	浙江省 杭州市	華東地区	95	14
第4回	中南・西南地区 帰国笹川生聯 誼会		1996年08月15日 ～16日	四川省 成都市	中南地区 西南地区	94	26
第5回	華北地区帰国 笹川生学術交 流会	がんの予防・治療と 研究の進展	1999年01月08日	北京市	華北地区	70	19
第6回	西南地区、湖 南、湖北省帰国 笹川生学術交 流会	環境と健康	1999年11月27日	重慶市	西南地区 湖南 湖北省	70	33
第7回	東北地区聯誼 会議	高齢化と心臓・脳血 管疾病の予防	2000年11月18日	遼寧省 大連市	東北地区	140	33
第8回	帰国進修生華 東地区学術交 流会議	糖尿病及びその他内 分泌疾患の予防と治 療	2001年11月10日	浙江省 紹興市	華東地区	98	29
第9回	帰国笹川医学 奨学金進修生 中南・西北地区 聯誼会議学術 交流会	感染症疾病と保健衛 生、民族医薬・中医薬 と中西医結合	2003年01月11日	広西壮族 自治区 桂林市	中南地区 西南地区	105	23
第10回	帰国笹川生華 北地区学術報 告会		2004年01月10日	河南省 鄭州市	華北地区	117	28
						959	236

2. 同学会科研基金交付状況

1995 年より 2003 年までに 81 名に対し、1 人あたり 3,000 元～10,000 元、総額 44 万 5 千元（1 元は約 13.5 円）の科学研究基金が交付されている。

1995 年

劉 蔚	中国医科大学	金 抗	遼寧省中医研究院
宋 春華	皖南医学院	韋 立新	中国人民解放军总医院
王 曉里	河北医学院	杜 德極	四川省中医藥研究院
潘 繼龍	中山医科大学	楚 立	河北中医学院
張 振祥	寧夏医学院		

1996 年

李 宝興	河南医科大学	陳 長春	深圳孫逸仙心血医院
薛 長勇	中国人民解放军总医院	蔡 映雲	上海医科大学附属中山医院
秦 学玲	華西医科大学附属第一医院	高 眉揚	広州医学院附属第二医院
宋 傑	湖南省中医藥研究院附属医院	伍 建林	中山医科大学附属第一医院

1997 年

王 軍	北京医学高等専門学校	郭 在培	華西医科大学附属第一医院
張 軍	西安医科大学附属第二医院	李 玉山	瀋陽薬科大学中医藥系
羊 惠君	華西医科大学基礎医学院	金 碧華	上海第二医科大学
劉 愛民	中国医学科学院輸血研究所	高 緒蘭	白求恩医科大学

1998 年

臧 偉進	西安医科大学	黄 吉城	広東省食品衛生監督検驗所
肖 慧捷	北京医科大学附属第一医院	王 娜亜	中日友好医院
金 一和	中国医科大学公共衛生学院	楊 海浜	長春中医学院
童 茂栄	南京軍区総医院	雒 文田	西安医科大学附属第一医院
張 希龍	南京軍区総医院		

1999 年

俄 紅君	北京安貞医院	肖 慧捷	北京医科大学第一医院
王 成文	白求恩医科大学第三医院	楊 宗輝	白求恩医科大学第三医院
欧 周羅	上海医科大学	孫 爾維	第一軍医大学第二医院
劉 鉄峰	珠海市拱北医院	毛 昌淳	上海医科大学護理学院
李 平	中日友好医院		

2000 年

宋 敏	中国医科大学	郁 琦	北京協和医院
何 威	中国医科大学	周 正	中日友好医院
陳 一鳴	上海中医藥大学附属岳陽医院	肖 飛	華西医科大学
孫 立波	白求恩医科大学第三医院	阮 岩	広州中医藥大学
呉 英良	瀋陽薬科大学	王 文萍	遼寧中医学院

2001 年

馬 迎華	北京大学児童少年衛生研究所	王 莉	中国医科大学第一附属医院
王 修傑	華西大学華西医院	楊 黄恬	上海生命科学研究中心
李 国鋒	第一軍医大学南方医院	韓 英梅	天津薬物研究院

王 垂傑 遼寧中医学院附属医院
黄 定明 四川大学華西口腔医学院

朴 蓮善 延辺大学医学院附属医院

2002 年

李 勤 吉林大学第三医院
馬 超美 北京大学薬学院
熊 革 北京積水潭医院
楊 春霞 四川大学
葉 春峰 西安交通大学

付 金林 黒竜江省 C D C
朱 燕波 北京中医薬大学
王 旭東 北京同仁医院
呉 龍仁 延辺大学医学院附属医院
李 娜 中国人民解放軍第 208 医院

2003 年

孟 繁波 吉林大学中日聯誼医院
陳 紅 第二軍医大学
馬 麗娜 吉林大学
華 文 北京朝陽医院
韓 昱晨 中国医科大学

楊 莉萍 北京医院
劉 正娟 大連医科大学第二臨床学院
周 劍恵 吉林省 C D C
張 恵英 寧夏医学院

3. ボランティア診療実施状況一覧表

	実施地域	実施期間	リーダー	受診者数
第 1 回	山東省德州地区	1994 年 06 月 19 日～ 24 日	胡 小濛	1,082
第 2 回	遼寧省凌海市	1995 年 04 月 10 日～ 16 日	孫 貴範	1,242
第 3 回	陝西省大荔県	1996 年 10 月 26 日～ 31 日	孫 乃学	1,241
第 4 回	西藏自治区	1997 年 08 月 09 日～ 15 日	季 成業	1,425
第 5 回	四川省阿耐蔵族羌族自治州	1998 年 10 月 07 日～ 15 日	戴 豪良	1,190
第 6 回	吉林省遼源市	1999 年 10 月 11 日～ 16 日	趙 樹華	600
第 7 回	四川省巴中市	2000 年 07 月 18 日～ 26 日	魏 于全	1,892
第 8 回	安徽省金寨県	2001 年 08 月 20 日～ 26 日	潘 繼龍	1,300
第 9 回	吉林省延辺朝鮮族自治州	2002 年 08 月 22 日～ 24 日	呉 龍仁	658
第 10 回	陝西省華県	2003 年 11 月 13 日～ 16 日	孫 乃学	1,136
受診者数合計				11,766

注：第 5 回は衛生部国際合作司貧困対策との共同事業

ボランティア診療参加者（所属役職は当時）

－ 第1回 －

リーダー	胡小濛	衛生部外事司官員（1期生）
団員	張肅西	北京市急救センター内科主治医師（11期生）
	孫大為	北京協和医院産婦人科主治医師（10期生）
	汪南平	北京医科大学第三医院皮膚科主治医師（4期生）
	馬 峰	蘇州医学院附属小兒医院小兒科主治医師（8期生）
	馬正宜	笹川同学会事務局

－ 第2回 －

リーダー	孫貴範	中国医科大学予防医学教授（1期生）
団員	趙 紅	錦州医学院第二医院内科教授（2期生）
	金 抗	中国医科大学第一医院救急科主治医師（9期生）
	呂延偉	遼寧中医学院外科助教授（5期生）
	朴英愛	中国医科大学第二医院小兒科教授（1期生）
	郭科軍	中国医科大学第一医院産婦人科副主任（5期生）
	馬正宜	笹川同学会事務局

－ 第3回 －

リーダー	孫乃学	西安医科大学第二医院副院長・眼科教授（2期生）
団員	賈国良	第四軍医学大学西京医院心血管内科主任教授（5期生）
	呉軍正	第四軍医学大学口腔医院口腔生物研究室主任教授（1期生）
	張 軍	西安医科大学第二医院消化器内科副教授（11期生）
	馬正宜	笹川同学会事務局

－ 第4回 －

リーダー	季成葉	北京医科大学母子保健センター教授（1期生）
団員	丁静娟	貴陽医学院感染症科副主任（2期生）
	高眉揚	広州医学院第二医院産婦人科助教授（3期生）
	秦学玲	華西医科大学第一医院耳鼻咽喉科副主任醫師（1期生）
	燕純伯	成都市第三人民医院副院長・内科副主任醫師（2期生）
	韓 英	北京軍区総医院消化器内科副主任醫師（15期生）
	雲登卓瑪	チベット自治区医科所副所長（15期生）
	才旺扎西	チベット自治区人民医院第一外科副主任（15期生）

－ 第5回 －

リーダー	戴豪良	上海医科大学中山医院内科教授（3期生）
団員	羊裔明	華西医科大学第一医院内科教授（11期生）
	陳一鳴	上海市第四医院外科主任醫師（8期生）
	孫大為	北京協和医院産婦人科助教授（10期生）

俄紅君	北京安貞医院小兒科主治医師（15期生）
王娜亜	中日友好医院耳鼻咽喉科副主任醫師（2期生）

－ 第6回 －

リーダー	趙樹華	白求恩医科大学第三医院中医内科教授（4期生）
団員	于慶巍	白求恩医科大学第三医院整形外科教授（20期生）
	王成文	白求恩医科大学第三医院内視鏡科助教授（11期生）
	楊海浜	長春中医学院中医内科助教授（13期生）
	董玉傑	吉林省医院口腔科助教授（19期生）

－ 第7回 －

リーダー	魏于全	華西医科大学第一医院腫瘍生物治療センター主任（8期生）
団員	李廷謙	華西医科大学第一医院中医科主任・教授（1期生）
	秦学玲	華西医科大学第一医院耳鼻咽喉科教授（1期生）
	羊裔明	華西医科大学第一医院内科教授（11期生）
	陳思姪	華西医科大学口腔医院助教授（8期生）

－ 第8回 －

リーダー	瀋継龍	安徽医科大学科研処処長・教授（1期生）
団員	王治平	上海市児童医学センター小兒科主任・教授（12期生）
	高眉揚	広州医学院第二医院産婦人科教授（3期生）
	趙榮祥	浙江中医学院五官科主任・教授（5期生）
	朱化剛	安徽医科大学第一医院外科助教授（21期生）

－ 第9回 －

リーダー	呉龍仁	延辺医学院附属医院副院長・消化器内科教授（20期生）
団員	裴海成	延辺医学院内科教授（6期生）
	鄭龍洙	延辺医学院内科教授（2期生）
	元 虎	延辺医学院整形外科助教授（15期生）
	趙和栄	延辺医学院神経内科助教授（18期生）
	金文昊	延辺医学院腫瘍科助教授（8期生）
	金錦華	延辺医学院附属医院神経内科看護師長（18期生）
	崔英姫	延辺医学院附属医院熱傷形成外科看護師長（22期生）
	金玉蓮	延辺医学院附属医院耳鼻咽喉科講師（22期生）

－ 第10回 －

リーダー	孫乃学	西安交通大学第二医院眼科教授（2期生）
団員	張 軍	西安交通大学第二医院消化器内科教授（11期生）
	呉軍正	第四軍医学大学口腔医院教授（1期生）
	車向明	西安交通大学第一医院外科助教授（18期生）

4. 笹川医学研究者の帰国後の活躍

2004年5月 同学会事務局調査
「目覚ましい貢献をした帰国笹川生の状況」による

1. 中国科学アカデミー会員（2004年1月選出）

魏于全（8期生）四川大学華西医院教授

2. 第10期全国人民代表大会代表（2003年選出）

藥立波（3期生）第四軍医大学教授

張喆人（9期生）上海楊浦区副区長・主任医師

3. 2002年度目覚ましく貢献した専門家

（衛生部、国家中医薬管理局）

韓景猷（1期生）天津中医学院附属第一医院院長助理・主任医師

程曉曙（6期生）江西医学院附属第二医院主任医師

林 玲（7期生）福建医科大学附属第二医院副院長・主任医
師

魏于全（8期生）四川大学華西医院教授

張 学（11期生）中国医学科学院院長助理・教授

郭 強（20期生）雲南省第一人民医院主任医師

4. 2003年度全国衛生分野先進工作者

金政錫（5期生）黑龍江省医院主任医師

陳亜岡（5期生）浙江大学附属医院主任医師

李南方（7期生）新疆維吾爾自治区人民医院主任医師

聶秀紅（21期生）首都医科大学宣武医院呼吸器内科主任

5. 留学帰国先進人員

（党中央組織部・同宣伝部・同統一戦線工作部、国务院人事部・
同教育部・同科学技術部）

魏于全（8期生）四川大学華西医院教授

李 平（11期生）中日友好医院臨床研究所研究員

李玉華（22期生）衛生部成都生物制品研究所副研究員

6. 全国衛生分野におけるSARS制圧先進人員

殷凱生（1期生）江蘇省人民医院教授

康 健（3期生）中国医科大学附属第一医院教授

徐永健（7期生）華中科技大学同濟医学院附属同濟医院副院長

趙 群（10期生）中国医科大学附属第二医院院長

7. SARS制圧先進婦人（中国女医会）

呉 忠（22期生）海南省人民医院主任医師

8. 中国科学協会先進工作者

中華中医薬学会SARS制圧特別貢献奨

張允嶺（11期生）北京中医薬大学附属東方医院主任医師

9. SARS制圧先進人員（天津市教育委員会・同衛生局）

張軍平（22期生）天津中医学院教授

10. SARS制圧期間の活躍に対し広東省衛生庁の表彰

王 鳴（13期生）広州市疾病予防コントロールセンター主任医師

11. 2003年度浙江省中医薬新科学技術創出一等奨

方劍喬（7期生）浙江中医学院教授

12. 小湯山SARS防治指定病院医療チームに選抜

熊利澤（21期生）第四軍医大学附属西京医院麻醉科主任

（役職は受賞時）

5. 同学会役員名簿（04年5月現在）

理 事 長 孫貴範 中国医科大学公共衛生学院院长（第1期生）

副理事長 胡小濛 衛生部国際合作司援外処副処長（第1期生）

常務理事 季成葉 北京大学児童青少年衛生研究所所長（第1期生）

常務理事 戴豪良 上海復旦大学中山医院教授（第3期生）

理 事 金松傑 深圳市北大深圳医院功能検査科主任（第1期生）

揚 権 汕頭医学院精神病学教研室主任（第2期生）

魏于全 四川大学華西医院腫瘍医院

腫瘍生物治療研究中心主任（第8期生）

邢高岩 衛生部国際交流中心査証培訓部部長（第5期生）

趙樹華 吉林大学中日聯誼医院中医科主任（第4期生）

劉長喜 衛生部食品衛生監督檢驗所副主任医師（第8期生）

孫大為 北京協和医院婦産科副主任医師（第10期生）

孫乃学 西安交通大学第二医院眼科主任（第2期生）

韋立新 中国人民解放军総医院病理科主任医師（第11期生）

王甲東 中国優生優育協会家系雜誌社副総編集長（第1期生）

裴海成 延迎大学医学院附属医院内分泌科主任（第6期生）

参考；中国における海外留学経験者の同学会組織

中国における海外留学経験者の同窓会組織は、欧米同学会（Western Returned Scholars Association）のような全国組織と、機関別或いは省別の組織がある。機関別としては笹川同学会、省別としては福建省留学生同学会があり、いずれも中央政府、政府機関、地方政府公認の組織である。

欧米同学会は、1913年に設立された同窓会組織である。名称からヨーロッパ・アメリカだけを対

象にした同窓会と思われるが、同会には、以下のように13の分会があり全世界を網羅している。

アメリカ分会、ロシア分会、イギリス分会、フランス分会、ドイツ・オーストリア分会、カナダ分会、イタリア分会、スイス分会、東欧分会、北欧分会、日本分会、ラテンアメリカ分会、オーストラリア・ニュージーランド分会。

笹川同学会を除き奨学金制度毎の同学会は見られない。

Ⅳ．挨拶・講演の記録

中国医療研究員の受入制度

－笹川医学奨学金制度創設－

石館守三 財団法人日中医学協会理事長

創設までの経過

中国の医療研究員を年間 100 名ずつ、10 年にわたって受け入れる協定が日本と中国との間で取り交わされた。

日中医学協会は昭和 60 年 9 月に、医療関連諸団体（医学、歯学、薬学、看護学など）の総意を結集して、新しく財団法人として出発することになった。その目的と事業は、民間ベースにおいて両国間の医療に関する学術と技術の交流と共同研究の進展に寄与することにある。

政府もまたこれに呼応して、ただちに特定試験研究機関に指定してこれを強く支援していただくことになった。

現在、中国では保健医療の近代化を推進しているが、革命後日も浅く、近代化にあたってさまざまな課題をかかえており、若い世代の人材の育成に関して、早急に対応したいとの強い要望が寄せられていた。当財団としては、この要望に応えるため、研究の交流、協力に加えてさらに中国の青年専門学生の日本での研究を目的とする制度の設定を企画する必要がある。

研究留学のための民間の協力は、従来から少数の有志の団体または機関によって小規模に行われていたが、中国側の要望に十分に答えられるものではなかった。

（財）日中医学協会がこれを計画的に実行するためには相当の資金を必要とし、またこのような人材育成の事業は将来にわたって大きな影響をもたらすことを考慮し、慎重にその内容と時期を検討していた。

昭和 61 年 6 月財団法人笹川記念保健協力財団（会長笹川良一、理事長石館守三）より次の申し出を受けた。

- （1）（財）日中医学協会が同意するならば、1 年短期研究員を 1 年 100 人、10 年間に 1,000 人の必要経費を笹川保健協力財団側において提供する用意があること、
- （2）研究員の受け入れ業務と管理は日中医学協会がその任にあたり、
- （3）両財団は協力してこの事業の運営にあたること、
- （4）中国当局の同意を得て必要な手順を経て速やかに実行に移すことなど、であった。

当財団では理事会に諮り、基本的にはこれを受諾することを決め、その処理と取扱いについては常任理事会に一任することになった。

昭和 61 年 8 月 14 日、中国・北京人民大会堂において、中国側政府代表（衛生部副部長・陳敏章）と、日本側（（財）笹川記念保健協力財団会長・笹川良一、（財）日中医学協会理事長・石館守三）との三者の間で覚書に調印を交した。

続いて両者はこの覚書に基づいて、実施要綱を作成し、これを笹川医学奨学金制度として昭和 62 年 10 月より実施することに合意した。

研究員の受け入れについて

10 年間に 1,000 名の若い専門学生を招待し、友邦中国の医療の近代化に協力し、両国の保健医療の発展に寄与しようとするこの企図は一大壮挙といえるが、同時にその成功の如何は将来の両国の友好関係に大きな影響をもたらすことを考えると、筆者は責任を痛感している。

昨今、中日友好の掛け声は一種のブームとなっているかに見えるが、その根底にある理念は必ずしも健全で恒久性のあるものではないという不安がある。

この事業は日本の経済力と近代化技術の優位に

よる協力奉仕のみであるならば、当面の協力関係に終わる運命であろう。またそれが両国の当面の利害得失の打算からであるならば、世界の急速な変遷のなかで、その土台は容易に揺らぐものであることは予想に難くない。そして今日の日本と中国の友好の絆が世界の政治的情勢によって容易に左右されるとするならば、この事業に対して多くを期待し得ないことになる。

われわれの目指す両国の恒久的友好の掛け橋は、過去における不幸な関係を清算し、両国の文化と長い歴史的兄弟関係の上に立つ、兄弟愛の理念に立脚した新しい不変の構築でありたいと願っている。

また、今回の若い学徒の招聘は単に両国の掛け橋の構築だけでなく、その実績は広くアジアの隣邦同胞の幸福と平和に寄与するものである。

この企画が民間のボランティア精神による諸団体の祝福下に発足できたことは最も悦びとするところである。

会員各位の変らざる一層のご支援をお願いしたい。

『日中医学』第2巻第1号（1987年5月）

光栄とするところであります。

この奨学制度が予想以上に順調に進んでおりますのは、陳敏章閣下をはじめ衛生部関係者のご盡力、財団法人日中医学協会並びに日本全国にわたる指導責任者の並々なぬご理解、ご協力の賜と深く感謝致しております。

私は本年五月で満九十二才になりましたが、「人生二百年」を唱え、政治、思想、宗教、人種、国境を越えて世界は一家であり、人類は兄弟であるという考えのもとに、世界の平和と人類の健康、長寿、幸福のため一日も休まず努力しております。

この制度が、学术交流はもとより、日本と中国を結ぶ親善大使の役割を果たし、日中友好の促進に貢献することを期待します。

最後に、本日お集まりの皆さま方の限りなきご繁栄とご健康、ご長寿、ご多幸を心からお祈りして私の挨拶と致します。

於：人民大会堂 1991年8月16日

協定書調印5周年記念式典における挨拶

笹川良一 財団法人笹川記念保健協力財団会長

ご来賓並びに紳士淑女の皆さま。

まず、この度の大水害に対し心からお見舞い申し上げます。

1986年8月、この人民大会堂において日中友好の促進と医学医療の向上をめざして笹川医学奨学金制度の調印が行われて本年は丁度5周年にあたります。この栄えある記念式典に招待され、既に帰国され、お国の医療の発展のため盡力されております三百余名のみなさまと再びお会いでき、共にこの制度の発展を喜びあえることは、私の最も

協定書調印5周年記念式典における挨拶

石館守三 財団法人日中医学協会会長

陳敏章先生をはじめ衛生部の皆様

研修生の派遣機関並びに関係部門の代表の皆様

研修生の皆様

はじめに、この度の長江の水害により被害を受けられた多くの方々に、心からお見舞いを申し上げます。

笹川医学奨学金制度協定書調印5周年の栄えある式典に、本制度を巢立っていかれた300人の方々、並びにご来日を目前にした第9期生の方々を前に日中医学協会を代表してご挨拶できますことは、私の深く喜びとするところであります。

5年前の夏、笹川良一先生のお申し出により本協定が調印された当時は、日中医学協会は、財団

法人として新たな出発をして日も浅く、この協定の実施に責任をもつ団体として、皆様のご期待に添えるかどうか不安もありました。幸い、中国衛生部の全面的な、熱心なご協力と、笹川良一会長のこの上なきご支援により、今日、このように恵まれた5周年式典で皆様に再会することができました。本制度がかくも順調に発展してまいりましたのも、ひとえに、多くの犠牲を払って研修生を送り出して下さった中国の各医療機関と、指導責任者をはじめとする日本全国の受入機関の方々のご協力、そして何よりも後に続く方々のために立派な実績を残された研修生の方々の並々ならぬご努力の賜であります。改めて皆様のご理解とご好意に心からの感謝を捧げます。

申し上げるまでもなく、日本と中国は一衣帯水の隣国として古来親密な往来を行って参り、私どもの先達は、貴国の文化に学び、私どももまた深くその恩恵に浴して参ったのであります。

今世紀に入って、二度の大戦を経験した私どもは、平和の尊さを痛感しております。かつての軍国主義がお国に及ぼした惨禍を思い起こし、今なお国家・地域に争いのたえない不幸を思うとき、日中両国は再び争ってはならず、共に手を携えてアジアと世界の平和のために貢献しなければならないと深く心に期するのであります。

日中友好を願って創設された本制度が、皆様の友情と協力により立派な実を結び、お国の医療の発展のための力となることを私どもは確信しております。

昨日はめでたく日中笹川医学奨学金同学会が発足したとのことであります。皆様が、医療を通じて日中両国の友情の架け橋となられるよう願ってやみません。

最後に、皆様が災害を立派に克服されることを願うと共に、中国の末長いご発展とご在席の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

於：人民大会堂 1991年8月16日

笹川医学奨学金研修生同学会の設立に寄せて

俞雪如（第2期生） 上海中医医薬研究院

人生二百歳、人類は皆兄弟

「四海之内、皆兄弟」とは中国に古くからあることばですが、笹川良一先生は「人生二百歳、人類は皆兄弟」と考え、この崇高な信念に基づいて、1年365日毎日仕事をし、親善大使として、世界各地で活躍しておられます。

この信念を実現するために、笹川記念保健協力財団と（財）日中医学協会は、中国衛生部とのあいだに笹川医学奨学金プロジェクトについての取り決めを行いました。

笹川医学奨学金研修生になるまで

このプロジェクトはわが国の医療衛生における知識導入の重要なパイプです。今では笹川医学奨学生に選ばれることは国内の医療関係者のあこがれの的となりました。

奨学生になるために、まず一定の資格や条件を備えていることが必要とされます。次に国家レベルの試験を経て、合格者の中からさらに選抜されます。

中国衛生部は毎年日中医学協会に推薦する100人の名簿と資料を提出するのですが、その後、日本語の訓練を受け、その試験に合格して、やっと笹川医学奨学生の資格認定書を手にすることができます。したがって笹川医学奨学金の研修生は、わが国の医学方面の優れた人材を集めている、と誇りをもっていうことができます。

奨学生の帰国後

私たちは帰国後、全国29の省や市に分散して、医療、科学研究、教育の3分野で活躍しています。帰国者の人数は、現在すでに300人近くになっています。帰国後、國務院の表彰を受けたり、海外の学会の賞や、国や部・省・市レベルの科学技術賞を得た人や、院長、所長、学部長などの要職に就いた人もいます。また、帰国後教授や助教授に

昇進した人もあります。

このように笹川医学奨学金研修生たちは衛生事業の指導的な担い手であり、日中医学交流と日中友好のかけ橋となっています。帰国した研修生たちは次々に増え、現在では大きな力をもった集団となっており、しかも日本語に精通し、かつ専門的技能をもった知的指導層の位置を占めつつあります。

笹川医学奨学金研修生同学会発足

1988年8月に箱根で初めての懇談会が聞かれたとき、すでに同学会（同窓会）をつくろうという声が私たちのあいだであがっていました。笹川記念保健協力財団と日中医学協会もこの提案はたいへん意義のあることだと支持してくださいました。帰国後自主的にクラブを作り、すでに交流活動をしている所もあります。

そこで、1991年8月15日午前、私たちは笹川医学奨学金制度発足5周年の記念すべきときに、奨学生たちが久しく待ち望んでいた同学会（同窓会）を正式に設立させました。

設立の趣旨は次のとおりです。

「本会は日本の笹川記念保健協力財団、(財)日中医学協会および中国衛生部医療衛生国際交流センター理事会の支持と援助のもとに、笹川医学奨学金研修生の医療、教育、研究における能力と働きを向上、発揮させ、日中両国の医薬従事者の学術交流と協力を推進し、相互理解と友情を深め、中日両国人民の健康の質的向上のために貢献する。」

同学会（同窓会）はすでに以下のように理事会を組織しました。

理事長

孫貴凡 中国医科大学（1期生）

常務理事

季成叶 北京医科大学（1期生）

俞雪如 上海中医医薬研究院（2期生）

胡曉濛 衛生部外事司職員（1期生）

剛 勇 中日友好医院（3期生）

理事

金松傑 白求恩医科大学（1期生）

楊 權 華西医科大学（1期生）

汪南平 西安医科大学（4期生）

邢高岩 衛生部医療衛生国際交流センター（5期生）

于安定 広東省心血管研究所（5期生）

白 冰 天津腫瘍医院（6期生）

活動経費は、笹川記念保健協力財団、日中医学協会、中国衛生部医療衛生国際交流センターの3者の支持と援助を受け、その他の団体および個人の支援も受け入れる予定です。

理事会は光栄にも笹川良一先生、石館守三先生、銭信忠博士を同学会の名誉顧問にお迎えすることができました。

会報の出版

常務理事全員は北京飯店において笹川記念保健協力財団の鶴崎事務局長、日中医学協会の柳川事務局長、阿部業務部長とともに同学会の今後の活動について話し合いました。

まず第一になすべき仕事は、すでに手を付けはじめた笹川同学会の会報を編集することです。笹川医学研修生の名簿、住所、活動状況、業績、受賞等の状況について、情報を集め、年度別に編集してまとめた一冊の会報にしなければなりません。

これはお互いの情報交換と、各種の科学研究協力に便宜を与えることになります。また財団、協会、衛生部医療衛生国際交流センターの支持と支援のもとに、将来北京に事務所を設け、各種の日常的事務を行う予定です。

これからの活動

今後、われわれ同学会は以下の三方面にわたって仕事をしていくつもりです。

1. 笹川同学会会報を出版して、会員の活動状況を紹介したり、寄稿文を掲載したりして、情報交換を行い、心を通わせて団結を強め、活動を促進する。

2. 日中医学交流をさらに盛んにするための人材育成に協力し、笹川医学奨学金研修経験者が訪日研修や視察、あるいは科学研究協力をしたり、海外学術会議に参加したりする際、その派遣や援助を行う。笹川医学奨学金プロジェクトに関係する日本側代表団を接待する。

3. 財団、協会およびセンターと協力して、いろいろな形式と規模の集会を準備、組織する。例えば、発表や論文交流を主とした各種の小規模な学術会議、地域ごとの同窓会、笹川医学奨学金プロジェクト完了時の10周年記念式典等である。

私たちは、笹川医学奨学金研修生同学会の理事の職務にはある程度の困難が伴うと考えています。会員は広大な地域にまたがっており、その専門領域也多岐にわたり、年齢層の幅も広いという特色をもっている、中国国内において初めての同窓会だからです。

しかし、私たちは笹川良一先生、石館守三先生、銭信忠博士のご指導を仰ぐことができますし、財団、協会、衛生部の支持と援助があります。そして数百名の会員の信頼と支持を得ています。

理事会の全メンバーは、心をひとつにして協力し、知恵を出し合って同学会の仕事をしっかりとやろうと決心しました。そして、日中両国民の友情をさらに深め、日中両国の医学交流を強めるために、ひいては21世紀の美しい未来のために、最後まで力を尽くす所存です。

最後に、8月の猛暑と、中国の記録的な大洪水をものともせず、北京へ来てくださった笹川良一先生と石館守三先生に深く感謝申し上げます。また、両先生が中国衛生部最高の荣誉である『中国衛生獎』を受けられたことを心からお祝いいたします。

『日中医学』第6巻第2号（1992年3月）

「日中医学交流の架け橋」

—毎日新聞主催シンポジウムにおける基調講演—

笹川陽平 財団法人日本船舶振興会理事長

1986年8月14日に中国の人民大会堂におきまして、中華人民共和国の厚生省にあたる衛生部副部长（現部長）の陳敏章さんと、日中医学協会の当時の会長、石館守三先生、それに笹川良一（船

舶振興会会長）、先日亡くなった父ですが、この3人による調印式が行われました。毎年100人、10年間で1,000人を日本に迎え入れて医学教育をしようというプログラムがスタートしたわけでございます。87年に第1期生を迎えてから本年は、8年を経過しましたので800人の方が研修を終わられました。

それではなぜ、この日中医学交流を私たち船舶振興会が志したのでしょうか。

ご承知のように、日本の西洋医学の発展の中で、フォン・シーボルトというドイツの方が大きな活動をされた。氏の故郷であるドイツのヴュルツブルク市に、「フォン・シーボルト記念館」がありますが、船舶振興会は、その財政的な援助もさせていただいたという経緯もございます。

江戸の末期の長崎で鳴滝塾という塾を開設し、日本の優秀な学生を集め、西洋医学を教えたわけです。その吸収力が、大変優れていた。一体それが何に起因するのだろうか、と考えてみました。学識の基礎として中国の明王朝の時代に始まりました本草学という学問があった、と気付きました。ひらたく言えば漢方です。シーボルトの門下生、あるいは「解体新書」を書いた杉田玄白、こういう人々はすべて中国の本草学を学んでいた。この本草学なくして、その後の西洋の医学を日本人が修めるといことはなかったのではないかと。

確かに、短いスパンで考えてみますれば、いま日本が支援して、中国の医学生を受け入れることになるかも知れませんが、悠久の歴史の中では、このささやかなプログラムが、中国で、東洋医学と西洋医学の合体融和する、ということも大いに考えられる。大きな文化・学問の大波となつて、いつの日か日本に押し寄せてくることも、夢ではないのではなかろうかという気がいたしました。

このことは、日中医学協会創立当初の初代会長さんで、癌研究会の亡くなられた黒川利雄先生、また二代目の石館守三会長から強く私のご指導を受けた点でございます。お二方がある日、お見えになりまして、「隣人である中国のために医学界はお礼をしたいんだ」と言われた。何とか十人程度の医学生を受け入れるための協力ができないか、

という話でした。笹川良一は、世界の平和を確立するためには、それぞれの国の人々が、健康で幸せな生活を送らなければいけない、と常々申しておりました。

実際に今年でもう 23 年になりますけれども、世界保健機関（WHO）と組みまして、差別の歴史と言われる非常に悲惨なハンセン病を今世紀中に撲滅しようということで、世界の約三分の一をわれわれの財団が負担をして、努力をしてきました。また旧ソ連の原子力発電所、チェルノブイリの事故がありました。私たちは、広島・長崎の経験から、被爆当時 10 歳未満の子供たちに、ある年数を経ると白血病や甲状腺がん異常が多く出てくる可能性があるという判断し、子供を対象に、既に 14 万人にのぼる徹底した調査活動をしております。ウィーンの国際原子力機関（IAEA）あるいは WHO、ソ連の医学界からも、われわれの報告は期待されています。

また、昨年、今年と 27 カ国にわたり、それぞれの国のエッセンシャル・ドラッグ（必須医薬品）の協力をいたしています。

そこに、黒川先生、石舘先生の優しいお気持ちです。子々孫々までの日中友好を考えたとき、「10 年間、毎年 100 人の計 1,000 人」を考え出したわけです。

二つの条件を申し上げました。中国は広いので、全土から人をお迎えしたいということが第一点。もうひとつは、単に医師だけではなく、看護、歯学、行政的な問題に従事する人たちも含めたいという点です。15 期生で初めてチベットから 2 人のお医者様が来られ、いま長野で研修中ですので、中国全土からという希望がかなったところです。

先日来日されました衛生部の陳敏章さんからは、「中国の医学関係の研修事業で最も成功しているのはこの留学制度であり、その例として 99% の研修生が中国に帰って、中国人民の健康増進活動に従事している」と大変うれしいコメントをいただきました。

成功した条件は、中国衛生部が大変厳しい実力主義の試験をする。試験に受かりますと、約 9 ヶ月間、家族をお持ちの研修生が大部分なのに、合

宿生活で日本語の研修をする。十分な準備をしている点です。

日中医学協会が北海道大学から沖縄の琉球大学まで、大学、国立病院で、引き受け先を見いだし、おられる。忙しい主任教官の先生方が、わざわざ東京までこの研修生をお迎えに来て、温かく指導していただいているということでございます。今日は日中医学協会会長の懸田克躬先生、また、常に 100 人の相談ごとに応じている日中医学協会事務局の阿部淑子さんも来ておられます。あらためて感謝申し上げます。

東京大学で長く外科医をなさっておられました森岡恭彦先生。昭和天皇の外科手術をなさった先生が研修生の第一号をお引き受けいただいたということも中国政府、多くの指導者に感銘を与えるスタートになりました。

現在帰られた 800 人の医学生のうち、すでに大学教授が 50 人生まれております。

特にうれしいことは、帰られた皆さんが、自発的に無医村に行かれまして、ボランティアを開始されたという事実でございます。改革・開放経済の中で、ともすれば拝金思想と申しまししょうか、お金に対する興味が集中している中で、そういう活動を始められたということは、意義深いことです。

あと 2 年でこの研修制度は、10 年間で終わるわけでございます。私どもとしましては、さらに 10 年、新しい角度からこの研修制度を続行したいものだということで、現在、鋭意研究をいたしております。「医は仁術」と言いますが、仁という字は人間愛ということです。人間愛に満ちた、文化の大波が打ち寄せてくることを、われわれは願ってやまない次第でございます。ご清聴ありがとうございます。

於：毎日新聞社 1995 年 8 月 11 日

1995 年 8 月 26 日付 毎日新聞

日中医学交流事業の背景にある 中国に対するさまざまな思い

懸田克躬 財団法人日中医学協会会長

日中医学協会設立の経緯

日中友好協会というのがありました。日本と中国との国交が正常化される前からの団体で、中国への思いが断ち切れない連中の集まりですが、中国を知ること、日中の友好関係に非常に役に立ちました。日中国交回復後、一時その窓口を通じて交流をしましたが、全国の医療関係者の間で独立した組織を持とうという話になった。東北大学の総長をしていた黒川利雄先生と、がんの薬物療法やハンセン病の研究で有名な石館守三先生が中心となり、1980年に任意団体としての日中医学協会ができました。その後、学术交流や様々な人の交流を積み重ね、1985年に法人になったわけです。

中国に対する恩義、そして戦争という問題

最初は中国に恩義がある、償うべき負い目があるということから始まりました。黒川先生は非常に歴史が好きな方で、2000年も前からその文化を取り入れてきたわれわれ日本人は、中国に恩義があるよと言っていた。それに戦争という問題もあった。石館先生はもともとクリスチャンで、ことあるごとにほくに言っておられた。われわれは中国に対して責任があるんだぞと。負い目があるからどうしても返さなくてはいかんだよというのが石館先生の口癖でした。また、私どもの仕事に必要なのは奉仕の精神だと、絶えず言っておられた。われわれはそういう気持ちでやってきたわけです。その辺がほかの団体とはちょっと違う。

そのような考えで、向こうの医療関係者の方々を招いたりいろいろとやっていたわけですが、若い技術者や将来伸びそうな人間を育ててくれないかという中国からの強い要望があり、われわれの仲間も中国の医療には人材の養成が差し迫って必要であると考え始めた。それで船舶振興会に助成の申請をしたのです。日中医学協会としては初め

は10人、せいぜい20人呼べればいいほうかなと考えていたわけです。ところがそれを聞いた笹川陽平さんが、先生そんなけちなことをやりなさんなど。年間100人、10年続けましようと言われた。石館先生はびっくりしたわけです。嬉しいは嬉しいんだけど、日中医学協会は小さな団体だから、本当にその規模の仕事ができるのかという心配もあった。それで協会として議論したわけです。笹川というと敬遠する人もいた。でもこの仕事はいい仕事ではないかと。ただ100人呼ぶとなると、協会の数少ない職員で世話ができるのか。ずいぶん議論しました。けれどもみんなは、どんなに苦労してもやりましようと言ってくれた。それで笹川記念保健協力財団の全面的支援のもとに、笹川医学奨学金制度と名づけられた日中医学交流制度が始まったわけです。それが1986年のことです。80年に日中医学協会ができ、85年に財団法人になって2年目の87年から開始されました。

研修生の受け入れを断った機関は、

日本全国で1つもなかった

毎年100名ずつ研修生が来る。日本側としてはその引き受け手を探さなくてはいけない。それで全国の大学、研究所、病院、そういうところで本人の希望テーマを適えてくれる指導者のおられる施設に、お願いすることになった。

各大学や病院に、1つ1つお願いしていったわけですが、不思議なことにみんな引き受けてくれた。やっぱり日本人の心の奥底に、中国に対してなにかやらなければいけないという暗黙のものがあつたのだらうと思います。日本中の大学、病院で断ってきたところは1つもなかった。それがわれわれの自慢でもあります。

この笹川医学奨学金制度は1987年から10年間ですから、97年には終了する。あと2年しかない。この仕事のウエイトが、日中医学協会の中であまりにも大きくなったものだから、終了したあとをどうするかいろいろ検討していました。それに1年間という研修期間。1年で帰国して、本当にそれでいいのかという問題も起こってきた。中には

当然優秀な人もいるわけです。研修期間終了後も受け入れ研究室の諸君が金を出し合って、引き続き研修させているケースもありました。年間 100 人の研修生は、10 数億の人民のための医療関係者をひとりでも多く欲しい中国にとって、大変な援軍になるわけです。中国との話し合いの中で、まず一度帰り、元の職場で働くかあるいは研究する。それを 2 年間やって、大きな実績を上げた人は年間 10 人だけもう一度勉強させましょうということにもなった。その特別研究者がすでに 40 人生まれています。

中国が本当に望むことはなにか。

そして多彩なプログラムによる新たな成果への期待

継続の声も中国から強く出てくるようになってきた。中国では大変に評価の高い研修制度ですが、でも大変な金ですから、そんなに簡単にやってくれとは言えない。100 人ではたいへんだから、せめて縮小した形でもとか、いろいろ考えていました。ところが原資としてはそのままにして、この事業は継続しようという話になったのです。笹川陽平さんが、日中医学協会がやるというならやりましようと言ってくれた。それでさらに 10 年やることになったわけです。ただ、今までと同じ形というのはどうだろうか。中国のために何か特色を作らなければいけないというわけです。

この前杭州に行って、中国衛生部の代表と話をしてきました。今後もこの話を煮詰めていくわけですが、やっぱり期間が一番問題点です。1 年で帰国しなくてはいけないのを考慮し直そうと。そして逆に、短期間で優秀な人物が新しい技術をマスターするという方法で人員を増やすという問題もある。数カ月間集中的に勉強すれば、あとは自分で学べる人を選ぶのです。そのような多彩なプログラムを組みたいと思って、今いろいろと練っています。

ただ中国としては、末端の衛生機構の職員が足りなくて困っている。そういう人間をも日本で養成してくれないかという気持ち強い。でも日本で一番いい先生方に指導を頼んでいるわけですから、あまり初歩的なことで時間をとることはでき

かねるし、中国にしてもいいチャンスを逃すのはもったいないだろうと思います。中国にも昔の日本の帝国大学に匹敵する大学もあります。ですから、中間層以下の教育は国内でやってはどうかとも思います。こちらとしては、とにかく中国に役立つことをしたいと思っていますから、本当に何が必要なのかを煮詰めたいと思っています。

過去を正しく責任ある目で見ない者に未来はない

最初の話しに戻りますが、歴史というものをどう見るか。中国と日本の関係はどうあったらいいか。日本人としては考えておかなくてはならないと思います。過去というものをまじめに見ないところに、未来はないと言えます。哲学や歴史学をやった連中の意見でも、過去を正しく、責任ある目でみることのできない者には本当の未来はないと。その時、罪責の意識を持って過去を見られないような人間は駄目だと言っていますね。これは非常に深い言葉だと思います。戦後 50 年すぎたんだから、いつまでも中国に対する責任を感じることはないというのではなく、歴史の意味するギルティネスというものは常に考えていかなくては行けない。私はそう思っています。そういう意味で、もう少し日中医学協会の仕事に形をつけて、石館先生みたいに、僕のやる分はもう終わったと言って次の人に仕事を委ねたいですね。

『日中医学』第 11 巻第 2 号（1996 年 7 月）
日本船舶振興会ニューズレター「Monthly File」
October 1995 No.21 より転載

21 世紀へ続く奨学金制度

—第二次協定書調印式前の会見における挨拶—

彭 珮 雲 中国国務院委員

調印によせて

本日は笹川医学奨学金制度協定書を調印して 10 年目の日に当たり、また第二次 10 ヶ年笹川医学奨

学金制度協定書の調印の日でもあります。私はこのような記念する日に、笹川陽平先生とご在席の日本の友人の皆様とお目にかかれることを大変嬉しく思います。

笹川医学奨学金制度は実施されて既に9年経ち、900名の医学研修生を日本に派遣し、中国の医療関係者の養成に大きな役割を果たしました。ここに日本財団、笹川記念保健協力財団、日中医学協会と日本の指導責任者の皆様が中国の医学の人材の養成に貢献して下さったことに心より感謝申し上げます。

同時に私たちは、第一次協定書に調印され故人となられた笹川良一先生、石館守三先生、本制度の創始者で故人となられた懸田克躬先生たちに心から思いを馳せます。3人の先生方は笹川医学奨学金制度の設立に重要な役割を果たされました。

笹川医学奨学金制度の特徴

笹川医学奨学金制度は、わが国の医学界で比較的大きなプロジェクトで、比較的良い成果を上げています。他の研修制度と比べてはっきりした特徴があります。まず、研修生の帰国率が高いことで、ほぼ100%の研修生が研修終了後期日通りに帰国し、修得した先進的技術を用いて、中国人民の健康のために奉仕し、本奨学金設立の趣旨を実現し、所期の目的を達成しました。

第2の特徴は、研修生が帰国後大きな活動組織を創り、人民に奉仕するという精神を体现していることです。彼らはたびたびボランティアで、わが国の貧困地区や災害地区に出かけて、人民の病気の治療を行い、大変に歓迎されています。同時に定期的に学術交流大会を召集し、不断に医療水準を向上させています。

その他にも中日双方の緊密な協力は重要な部分で、研修生を組織する事、日本到着後の学習、生活の手配もたいへん良く、研修生にたいへん良い学習環境を用意し、問題がある時もすばやく解決する事ができています。これらの良いやり方と経験は継続して堅持していかなければなりません。

今後の問題点

このように大きなプロジェクトを実施する過程で若干の問題が発生したり、若干の不足が存在する事は当然免れ得ないことです。日本到着後、研修生をいかにできるだけ早く環境に慣れさせて、適応させるかに力を注がなければなりません。また、訪日前の教育も更に強化しなければなりません。私はこれまでに発生した問題は、第二次10年協定の期間中に双方が協力して努力し、措置を講じれば、必ず避けることができるものと考えます。

世紀にまたがる協力事業

もうすぐ第二次10年間の協定書に調印されますが、私はこの調印式に出席する事をたいへん嬉しく思います。笹川陽平先生と日本の友人の皆様がわざわざお出でいただき、調印式に出席して下さいますことを心より感謝申し上げます。

わが国政府は、この制度に対してずっと大きな関心を寄せ、重視して参りました。この制度は医学界の知恵が導いた重要なルートであります。日本の友人達がたいへん遠大な見識を持って創られました。私たちは第二次10年間の協定は世紀にまたがる協力事業であり、養成するのは世紀にまたがる人材で、彼らはWHOが提唱している“2000年までにすべての人々に健康を”という健康戦略目標を実現するために重要な役割を発揮すると言えます。

私が聞いて更に嬉しいことに、第二次協定では特別研究員の人数がこれまでより増え、高水準の医学の人材の養成に更に多くの機会が提供されました。

12億の人民に良い医療サービスを

日本財団は、これまで中国の医療衛生事業の発展に大きな関心を寄せて下さっています。わが国のらいの予防治療事業にも多くの支持をいただいています。わが国の人口は12億人で、大部分の人が農村で生活しており、人民に良い医療サービスを提供することは並大抵ではない困難な任務で、私たちは現在、積極的に努力しているところです。日本財団が今後とも、中国の医療衛生領域において、更に多くの協力事業を推し進めていただきま

すようお願いいたします。

於：人民大会堂 1996 年 8 月 14 日
『日中医学』第 11 卷第 3 号（1996 年 10 月）

笹川医学奨学金制度

10 周年記念式典における挨拶

陳敏章 中国衛生部部長

紳士、淑女の皆様

はじめに私は、中華人民共和国衛生部を代表し、笹川医学奨学金 10 周年記念大会にご参列下さった指導者の皆様、各機関の代表の方々、日本の友人と笹川医学奨学金研修生に心からの歓迎と感謝の意を表します。

6 年前の 1991 年、私たちはここで笹川医学奨学金協定書調印 5 周年の祝賀活動を行いました。今日、私たちは、満腔の喜びをもってふたたび人民大会堂に集い、(財) 日本財団、(財) 笹川記念保健協力財団、(財) 日中医学協会の友人、日本の指導責任者代表、中国側派遣機関代表、全ての帰国笹川研修生と共に笹川医学奨学金協定書実施 10 周年を祝賀します。

この喜びを祝うに当たり、私たちは笹川医学奨学金制度の創設と実施に卓越の貢献をされた笹川良一、黒川利雄、石館守三、懸田克躬先生を思い起こすのであります。私たちはこれらの方々傑出した功績を永遠に忘れることはありません。

ご承知の通り、1986 年 8 月 14 日、中国衛生部、(財) 笹川記念保健協力財団、(財) 日中医学協会の三者は、人民大会堂に於いて笹川医学奨学金協定書に調印いたしました。10 年を経て、1996 年 8 月 14 日、私たちは、再び人民大会堂に於いて第二次 10 年の笹川医学奨学金協定書に調印いたしました。協定書は 1998 年から 2007 年まで、中国側は更に 1000 名の医学関係者を 1 年間の研修のため日本へ派遣します。これは、中日両国の医学交流史上の慶事であり、中日両国人民の末長い友好の具

現でもあります。

笹川医学奨学金制度実施の 10 年を振り返り、私共が痛感いたしますのは、中日両国政府のこの制度に対する重視であります。故人となられた中国の指導者王震副主席、日本の中曽根康弘前総理と竹下登先生は、かつて、それぞれ北京と東京で第 1 期、第 2 期の笹川医学奨学金研修生と会見され、彼らが学業を修得した帰国後は、中国人民の健康に奉仕するよう激励されました。中国衛生部各部門の指導者の方々も又、この制度の実施のため多くのご支援とご指導を下さいました。政府の支援と重視が本制度を成功させた重要な要素であります。

中国衛生部、(財) 笹川記念保健協力財団、(財) 日中医学協会の共同努力により、笹川医学奨学金制度の 10 年は順調に伸展し、人々の満足し得る成績を収めることができました。

1987 年から 1997 年まで、私たちは 1000 名の研修生を日本へ派遣しました。そのうち、950 名は既に学業を終えて帰国、50 名は日本で学習を続けています。他の研修制度に比較し、笹川医学奨学金制度の特長の一つは、研修生の選抜の範囲の広さであります。研修生は中国大陸 30 の省、市、自治区および人民解放軍関係の医療、教育、研究機関に及んでおります。特長の第 2 は研修分野の広さ、90 の専門分野、学科に達することです。第 3 は高い帰国率であります。100%に近い研修生が既に帰国し、今正に人民の健康のため服務しております。笹川医学奨学金制度は、最早、わが国衛生分野における知力向上の重要な道筋の一つであり、同様な制度の中で数も多く期間は最長であります。

笹川医学奨学金制度の効果と利益を全面的かつ客観的に評価するため、衛生部は 1995 年 12 月以前に帰国した笹川医学奨学金研修生の帰国後の状況を調査しました。彼等の出国時の平均年齢は 35 歳であります。

366 名の帰国した笹川医学奨学金研修生のうち、既に教授等、高級技術職に昇進した者は 53.0% (中級職から副高級職に昇進する迄の平均時間は 2.27 年、副高級職から正規の高級職に昇進する迄は 3.23 年、国内の通常は平均 5 年を必要とする。)、

破格に昇進した高級職は75人20.7%、94名に国家、部、省クラス以上の、優れた貢献の専門家として称号が与えられています。政府の特別手当にあずかった者、或いは国内外の学術団体の役職にある者は25.5%であります。127名は研究室の副主任以上の指導的立場にあり、35%を占めています。1人平均の市（庁局）級以上の科学研究成果奨（表彰）は1.4項目、省、部クラス以上の科学研究成果奨は1人平均0.9項目、1人当たりの科研費は4.0万元、第1発表者としての学術論文は平均5篇、出版された著書0.9部、比較的良好の社会的経済的效果と利益を得ることができました。多くの研修生は帰国後、持ち帰った新しい診断、治療の方法と、先進的な科学技術を疾病の予防と治療並びに研究の仕事に用い、中国人民の医療保健水準の向上のため積極的役割を果たしています。笹川医学奨学金制度で留学し帰国した人々の少なからずは、専門領域の中心であり学術的先達であり管理者であります。

研修生は帰国後、国外研修機関と密接な学術交流、共同研究を行っております。帰国留学生のうち351人は再度学術交流あるいは研修のため出国しました。数年来、帰国した笹川研修生は、山東省、遼寧省、吉林省、チベット自治区において、4度にわたって、ボランティア診療活動を行いました。合計20名の帰国した笹川研修生が参加し、診断、治療を行った患者は3000余名、貧困地域の農民の心からの歓迎を受けました。

ここで言わねばならないことは、中国衛生部と衛生部各部門、（財）日本財団、（財）笹川記念保健協力財団、（財）日中医学協会が、いずれも、帰国した笹川医学奨学金研修生の活動を支持し支援していることであります。例えば、定期的に実施される地区別交流会議、情報の提供、ボランティア診療への支援等、順調な実施を支援していることであります。

1996年12月、中共中央と国務院は、全国衛生工作会議を開催しました。新たな時期の衛生事業方針を提案し、今後5年から15年までの衛生事業の目標と任務を明らかにしました。その中で、“対外開放を拡大し、国際交流と協力を強化し、積

極的に外国の先進的技術と管理の経験を用い参考とする”ことを衛生事業の改革と発展のための基本的原則の一つとしたのであります。中日両国の係わった笹川医学奨学金第二次10年協定の調印は、疑いもなく貫徹され、中国が21世紀を目指す衛生事業の任務を遂行し、全民族の健康の質を高めるため、積極的な働きをするでありましょう。

私たちは、笹川良一先生、石館守三先生の後を継いで曾野綾子、笹川陽平、日野原重明、岡本道雄各先生が笹川医学奨学金制度のため、中日友好と中日医学交流と医療協力の促進のため積極的に貢献されたこと、先生方は不断の努力により第二次10年の協定書調印を実現させたことをすべて承知しています。

中国衛生部と中国医療従事者は、笹川陽平先生、岡本道雄先生、日野原重明先生が中国の医学分野の人材養成に尽くされた貢献に対し、私はここに喜びをこめ、このたびの記念大会に於いて我が部は彼らに中国衛生部門最高の“中国衛生奨”を授与することを宣言いたします。

最後に、僭越ではありますが、私は中国衛生部を代表し、（財）日本財団、（財）笹川記念保健協力財団、（財）日中医学協会、日本の指導責任者並びに友人の皆様に対し、長年にわたる笹川医学奨学金制度の設立とその実施、中国研修生に関する手配、ご接待のためのご努力に、心からの感謝を表します。

紳士、淑女、友人の皆様、笹川医学奨学金制度の第一次10年の事業は円満に終結し、第二次10年の協力協定がまさに始まろうとしています。第二次10年の共同事業が更に大きな成果を上げるよう心から希望します。私たちは共に努力し、協力し合い、世紀を超えた共同の事業を滞りなく実施し、中日両国人民の世代々の友好に更に大きく貢献し、両国人民に幸福をもたらしましょう。ありがとうございました。

於：人民大会堂 1997年12月5日

笹川医学奨学金制度

10 周年記念式典における挨拶

曾野綾子 日本財団会長

本日は、笹川医学奨学金制度が創められて十周年を迎えられましたことを、心からお喜び申し上げます。

十年という歳月は、人の心と知識を育てるのに、必ずしも十分な時間ではないかも知れません。しかしこの制度が、これほどうまく行ったのは、中国と日本の双方でこの企画を立て実行に移された多くの方々、日本で中国からやって来た息子や娘たちを温かく受け入れて下さいましたドクター方、その息子や娘たちを食べさせ、話相手になって下さった奥さま方、そして何よりも愛する家族をおいて馴れない日本にやって来て勉強を続けて下さった研修生の皆さんの強い忍耐と意志の結果でした。人生で一つの仕事は決して一人ではできません。必ず多くの人々の善意に満ちた心があってこそ完成するのです。その意味で、今日のこの十年目の喜び、千人もの優秀なドクターが育ったということは、今までのさまざまな中日の関係の中で、実は最高にかぐわしいものではなかったかと、私は考えています。中華人民共和国衛生部、笹川記念保健協力財団、日中医学協会の皆様に、改めて心からのお祝いと感謝を申し上げます。

中国と日本は、歴史的にも、政治、制度上でも全く違った発展の歴史を辿って来ました。しかし私は一人の作家として、人生で、「同じであること」より、むしろ「違うこと」を愛して来たような気がします。似たような性格、職業の人とより、性格も才能も全く違う人と会った時、私は深く感動し幸福を感じて来ました。しかし違うばかりで、そこに異なった要素をつなぐものがなかったら、両者はばらばらに孤立してしまいます。

しかし医学は偉大です。いかなる思想、政治、経済、宗教の違いはあっても、人々の病気を治すということは、古来、人類共通の痛切な願いでありました。

その意味で、医学は異民族の対立などという小さな立場の違いを超越するものであり、日本財団がそのためにお手助けをできたということは、大きな幸せでありました。

私はつい数日前、アフリカのルワンダとマダガスカルから帰ったばかりです。

マダガスカルには豊かな自然の中に生薬がたくさんあり、毒殺というものの存在が、未だに民間で囁かれている国です。そして又ドクターへの信頼と同時に、呪術師（ヒーラー）に病気を治してもらおうとする人々もたくさんいる土地です。

ルワンダは1994年以来、以前から存在していたフツ族とツチ族との対立、それに加えた政治的操作、ナチスに似た集団発狂（パラノイア）的情熱、政治的操作、部族の族長支配型の思考に馴れた人々の封建的な異常な従順さ、などの理由によって、大量虐殺が行われた所です。

惨劇の現場はまだそのまま保存されていました。逃げこんだ教会の中で、ツチ族の人々は女性も子供も殺されました。食器、水の容器、蒲団などの間に、殺された彼らの遺体は未だにばらばらに残っており、トタン屋根の天井には、彼らの魂がこの悲しみ多い現世を抜け出してようやく天上の國に帰っていったその道を示すような、無数の銃弾のあとが星座のように残っていました。

地下の納骨堂に集められた頭蓋骨や手足の骨は、私たちが強烈な臭気で迎えました。その匂いだけが、今や彼らが生きている私たちに語りかけ、訴えかけることのできる唯一の言葉だったでしょう。彼らの頭蓋骨や手足の骨には、歯が全部残っているものもありましたし、骨端にはまだ成長期にあることを示す亀裂もありました。アフリカの母たちは十七、八才から子供を生み始め、栄養が悪いので、一人の子供を産むたびに、二本の歯を失うと言われているほどです。従って歯が全部残っているということは、彼女がこの世で味うはずだった青春の楽しみも、恋の輝きも、家族の団欒の温もりも何も知らずに、若く死んだ、ということを示していました。

私は怠け者のカトリック教徒ですが、そこで私が毎日唱えている「主の祈り」という祈りを日本

語で捧げました。同行していた新聞記者の一人が、やはりキリスト教徒で、その祈りを私と一緒に唱えてくれました。祈りの中には「我らの罪を許し給え」という部分があって、私は毎日、かなり機械的にその言葉を唱えていたのですが、生まれて初めて、私はその部分で絶句しました。これほど痛切な思いでその祈りを口にする機会はそれまでなかったからです。ルワンダの人がやったことなら、私たちもやるだろう。世界中の人々が、同じような残忍なことをやる可能性を有しているだろう、と感じたからです。

この旅行は私が企画し、日本財団が日本の中央官庁の若手官僚、全国紙二紙を含む日本の新聞、テレビなどのメディアの人たち十二人を招待しました。供応ではありません。悪路を走り、寝袋持参で水と電気のない村に宿泊し、マラリア、エイズ、栄養失調、結核などの実態を見てもらいました。

戦後、私たち日本人は、魂、出版、学問や旅行、信仰とその表現、などの完全な自由を得、西欧人からは兎小屋などと言われた小さな家ですが、基本的にはささやかな豊かさ、治安の良さなどを得ました。その結果、日本人はすっかりひ弱な人間になりました。社会保障制度に頼って慈悲の心を失い、個人の権利を強力に求める教育によって、聖書に記されている最も香り高い、「受けるよりは与える方が幸いである」という崇高な美学を失いました。何より貧困そのものを知らない世代が出現したのです。この旅は、私たち日本人が失ったものを回復するために行われたのです。

人間を死と破滅に追いやることなく、人間に生命を与える立場におられる皆様は、それだけで幸運な方々です。それをお助けできる日本財団も日本側のすべての関係者も幸福です。

かつて私は、私の信じる神はどこにおられるのだろう、と考えたことがありました。頭上の天にか、私の心臓の中にか、それともイスラムの人々が、礼拝の時に肩にとまっている天使に挨拶されるように両肩のあたりにか、と思った瞬間もありました。

しかし、聖書をよく読めば、神は今、我々が相対しているすべての人々、ドクターたちが患者と

して眼前に見ている人の中におられる、という神学的思想がはっきりしています。或る場合には教養もない、時には不潔な貧しい服装をした病人の中にこそ、神はおられ、ドクター方に会いに来られたのです。

ドクター方は、セラピーという言葉をよくご存じですが、セラピーのものは、ギリシャ語のセラペウオーという言葉から出ました。セラペウオーは、治療する、癒す、という意味もありますが、同時に「仕える」つまり患者に、医師の方が「お仕える」という思いを内蔵しているのです。

中国と日本との間の、この最も人道的な協力は、今後更に十年続くことになりました。日本語にはこういう場合、大変自然で深い思いをこめられる表現があります。「どうぞよろしく願いいたします」という言葉で、これには全ての善意がこめられています。わたしはこの、最も日本的な表現によって両國のドクターと関係者の皆さまに、その重大な任務をおたくし致します。

十年後にもう一度喜びをこめてお会いいたしましょう。「再会」というもののほど嬉しいことはありません。それまでお元気でいらして下さい。

今日この日を迎えられましたことは、陳敏章先生を初めとする中国側のすべての方々の優しさのおかげです。そして又、今日ここにはいらっしやれませんでした。最もこのことを喜んで下さっているに違いない、故笹川良一会長の御霊（みたま）にもこの成果をご報告申し上げ、改めて深い感謝をそえて私のご挨拶といたします。

於：人民大会堂 1997年12月5日

日中医学交流の新しい出発に当たって

岡本道雄 財団法人日中医学協会会長

それは1986年8月14日のことでありました。笹川記念保健協力財団会長笹川良一氏と日中医学協会理事長石館守三氏のご理解とご英断により、

日中医学交流の上で歴史的とも言える大事業、笹川医学奨学金制度が発足致しました。笹川医学奨学金制度は毎年 100 名の中国の医師を 10 ヶ年合計 1,000 名を日本へ招請して、主として近代西洋医学を研究させるという大計画でありました。指導に当たっていただく、日本全国にわたる医系大学・研究機関の先生方の誠意あふれる指導の結果、研究を終えて帰国した医師はそれぞれ母国で重要な職責に付くことができました。また、研究者として再び来日する者も出るなど大成功を納める事ができました。

その 10 ヶ年もまもなく終えんとする 1996 年には改めて再度 10 ヶ年、1,000 人の医師の招請が決定、調印され、本年 1998 年より、この第二次笹川医学奨学金制度が始まろうとしています。このときに当たって、第一次笹川医学奨学金制度の総括の意味をもって、去る 1997 年 12 月 5 日、北京の人民大会堂において、中国側からは彭佩雲國務委員、陳敏章衛生部長等約 1,000 名、また日本からは私を始め曾野綾子日本財団会長、笹川陽平同財団理事長ならびに日野原重明笹川記念保健協力財団理事長ほか研究の指導に当たられた各教官総勢およそ 200 名が参加し、大会堂に溢れる盛会裡に感謝と祝福の大記念式典が催されました。式典ではまず中国側の彭佩雲國務委員、陳敏章衛生部長に続き、私日中医学協会会長、曾野綾子日本財団会長の感謝と激励の挨拶が行われました。また前日には笹川医学奨学金制度 10 周年記念報告会が催され、研修を終えた中国の医師からの優れた業績の発表会が行われました。それに続き中国側の李世綽衛生部国際合作司長、祁国明衛生部科学技術教育司長の講演、日本側からは井村裕夫京都大学総長、眞崎知生国立循環器病センター研究所長のそれぞれ高度な特別講演がありました。帰国した研究者の母国における活発な研究活動の実際を伺うことができたほか、両国の高度な医学交流が実施できたことは極めて有意義な記念行事でありました。

このように、笹川医学奨学金制度の大事業が着実な成功の歩みを進めて参りましたのは、日本財団の日中両国友好交流の熱い精神を軸として、中国衛生部、日中医学協会の会員の皆さま、研究を

指導してくださる諸先生、そして研究者・研修生の熱意が一丸となってこそ実現しうるものであります。日中友好の実のみでなく、中国の医学医療の復興の歴史にも大きい実績を残すものでありましょう。

私がこのような時いつも思い出すのは、戦後の日本の学問の立ち後れに対して米国のフルブライト上院議員の発案によるフルブライト奨学制度であります。今日、日本も漸く欧米の学問と並んで歩めるようになりましたが、今もなおフルブライト氏の名前があらゆる学問領域の中で不滅の光を放っているのです。これと同様にこの笹川医学奨学金制度と笹川氏の名前も中国の医学医療の中で永遠に消えぬ灯となることでありましょう。いつも言うことではありますが、学問とくに医学で結ばれた友情はいついかなる事があっても消えることはありません。このような光栄ある事業を実施できた事に対して、日中医学協会としても誠に幸せであると、感謝に堪えない次第であります。

この 10 年間、中国は計画経済から市場経済へと移行し、めざましい発展を遂げ、研究を取り巻く社会的状況も変化しております。日本はバブルの崩壊を経験し、あらゆる面で日本および日本人の真価が問われる時代となりました。大きな力を秘めた中国から迎える医学者を私どもはどのように受け入れるべきか、科学技術文明の意義もふくめて科学技術協力のあり方を考えつつ、21 世紀へと引き継がれる大事業を心して推進して参りたいと思います。

今日世界の歴史的転換期に当たり、お互いに東洋を代表する文明国として、今後の更なる友情と協力を決意しますとともに、なにとぞ中国側のみなさま、日本財団ならびに指導に当たられる先生方、会員各位の変わらぬご援助をお願い申し上げます。

『日中医学』第 12 巻第 4 号（1998 年 2 月）

笹川医学奨学金制度の

成功と発展を祝して

ー 10 周年記念式典における挨拶ー

孫 貴 範 笹川医学奨学金進修生同学会理事長

今年は笹川医学奨学金制度が始まって 10 周年になる。また同時に次の 10 年の始まりの年でもある。帰国した 1,000 名近い笹川医学奨学金研究者と、次の新しい 10 年のプロジェクトの第 1 期研究者、そして笹川記念保健協力財団、日中医学協会および中国衛生部の指導者と、200 余名の日本の指導責任者の先生方は、昨年 12 月 5 日に北京の人民大会堂に集まり、笹川医学奨学金制度 10 周年を心から祝った。笹川医学奨学金制度が設立されたこと、そして成功裡に実施されているということは、その制度本来の内容を遥かに超えた意義をもっていると言える。笹川医学奨学金制度は中日医学交流の偉大な壮挙であり、中日友好のかけ橋でもある。同窓生が集まって留学の思い出を語り合う度に、この制度の中日両国の医学の発展と両国人民の友好に対する貢献に思いを致し、また本制度を創設するために心血を注いで準備にあたった先輩方の度量の広さと見識の高さに、深く心を動かされるのである。

同窓会の活動

笹川医学奨学金制度の実施 5 周年目に、笹川記念保健協力財団、日中医学協会および中国衛生部のご高配の下に、「笹川医学奨学金進修生同学会（同窓会）」が設立された。その主旨は研究終了後帰国した研究者・研修生を結びつけることによって、お互いの交流や情報交換を容易にし、また学んで得た技術や知識を利用して、笹川医学奨学金進修生同学会の名で国民のための奉仕活動を繰り広げることができるようにするというにある。5 年来の活動が示しているように、同窓会の設立は、この制度が順調に実施されるよう協力と普及活動を行うための重要な決定であり、笹川医学奨学金制度の意義を宣伝するのに大きな役割を果た

している。また帰国した同窓生どうしの絆を強め、同時に日本の医学界の関係者との連携の重要なパイプの役割を果たしている。同窓会設立の日以来、毎年 1 回理事会を開いてその年度の活動を総括し、次年度の活動内容を検討し決定している。

この 5 年来、私達は 30 数回にわたって『笹川生通訊』を出版し、帰国後の研究や仕事で得た成果を発表したり、留学の感想や学術情報を載せたりし、また『笹川生通訊』を 5 期出版した。またその外にも、地域別に 5 回の笹川医学奨学金研修生学術交流会や交歓会を開いたり、ボランティア診療グループを組織し前後 4 回にわたって辺境の貧困地域で無料の診療活動を行った。洪水の災害地域やチベットでもボランティア診療を行い、当地の政府と人民の熱烈な歓迎を受けた。1995 年からは帰国した優秀な笹川医学奨学金研究者が、研究で更に大きな飛躍をすることができるようにとの配慮から、同窓会は科学研究助成基金を設立し、この 2 年間で既に 10 数人が援助を受けた。これは帰国した笹川医学奨学金研究者達に大変大きな反響を呼び、更に深く科学研究を推し進めて行く力となった。

私達同窓会の理事は、全国各地から同窓生の選挙によって選ばれたもので、彼らは皆同窓生の信任を得て同窓会のために働くことを光栄に思っている。皆それぞれに忙しい仕事をもっており、指導者の立場にいる者もいるが、しかし皆が理事会の様々な仕事を積極的に無報酬で引き受け、稔りのある成果をあげていることに対して、私は理事長として深い感銘を受けている。

笹川医学奨学金制度 10 周年を祝うということは、またこの制度の次の 10 年が始まるということでもある。これからの 10 年は世紀に跨がる 10 年であり、中国経済が飛躍的な発展を遂げんとしている 10 年でもある。この制度が中国の医学の発展に更に大きな貢献を成すであろうことは疑うべくもない。この 20 年の歴史のなかで、笹川医学奨学金制度は 2,000 名近くにのぼる医薬衛生関係の人材を養成すると予想される。これは中日友好の歴史の中に偉大な功績を残すことであろう。私達笹川医学奨学金進修生同学会は、これまでの活動を踏

まえて今後も引き続き努力し、この歴史的な偉業のために力を尽くす決意である。

『日中医学』第12巻第4号（1998年2月）

座談会

笹川医学奨学金制度の

10年をふりかえって

出席者：紀伊國猷三氏 笹川記念保健協力財団常任理事

小柴 健氏 北里大学教授

中島 章氏 日中医学協会理事長

安達 勇氏 日中医学協会常任理事

日中医学交流の柱となる奨学金制度；

安達 笹川医学奨学金制度は1986年に中国衛生部、笹川記念保健協力財団、日中医学協会の3者で調印され、翌年から実施して今年で10年、1,000名の中国の研究者を受け入れてきました。さらに10年間この奨学金制度を継続する協定書が96年に調印され、今年の4月から実施される予定となっております。ちょうどマラソンの折り返し地点に当たりますので、これからのこの奨学金制度を充実するために、先生方からいろいろご意見、ご提言を伺いたいと思います。

10年を振り返ってみて、いかがですか。

紀伊國 この制度が10年間、本当に予想以上の成果をあげることができたのではないかと思います。それはひとえに日中医学協会と研究者を快く引き受けてくださった日本の先生方のご協力によるものだと考えています。

もともとこのプロジェクトは日中医学協会の初代会長の黒川利雄先生と初代理事長の石館守三先生、第3代会長の懸田克躬先生、この御三人の非常なご努力の賜だと思います。三人の先生方に共通しているのは、中国には戦前からいろんな恩義を感じておられて、日中間の友好関係が非常に大事であり、それは日本が果たすべき責任ではないかと強く思われたことです。石館先生は笹川記念保

健協力財団の初代理事長でもおありでしたので、当初中国の医学研究者を10名受け入れたいということで、笹川記念保健協力財団会長の笹川良一氏のところに行かれたところ「いや、10名ではインパクトがないですよ」ということで、一挙に毎年100名、10年間で1,000名ということになりました。私もちょっとたまげまして、毎年100人、計1,000名ということが本当にできるのだろうかと考えましたが、この制度の成功はひとえに日中医学協会の非常な努力のおかげだと思います。そして、その基礎になった3人の先生方の中国に対する特別な思いが、成功の原因ではなかったかと私は思っています。

中島 この10年の間に少しずつこの奨学金制度の内容が良くなってきました。言葉がまず一番大きな問題で、日本語教師を派遣して数年日本語研修をやってみて、やはり問題があるということで、中国衛生部が中国での語学研修の期間を倍増してくださって以来、言葉の問題は改良されました。92年からは1度来た方が学問をさらに深めるため、毎年10名を再招請する特別研究者制度が発足しました。96年に第二次の奨学金制度の調印では、初めていらっしゃる方を80人にする代わりに、特別研究者を20人に倍増するという改良がなされたわけです。

日本の指導責任者は皆さん異口同音に、笹川医学奨学金研究者は非常に優秀でハードワーカーで、来ていただいて喜んでいるということで、日本での評判が高いのは非常に喜ばしいことです。また帰国された研究者の約4割が中国の医療、医学教育の枢要な地位へ昇進されておられることで、名実ともにこの制度が日中の医学交流の柱として非常に有意義であったと思います。

世界的に見ても、医学だけで毎年100人という奨学金制度は例を見ないと思います。米国のフルブライト奨学金は日本の学問、技術の向上に非常に役に立ったのですが、医学分野だけでは年に10名ぐらいだと思います。毎年100名というのはそれと比較しても、いかに医学領域で太い柱ができたかということだと思います。

安達 小柴先生はこれまでに研究者を5人も

お引き受けいただいて、ご苦労が多かったと思いますが。

小 柴 私も中国には特別の思い入れがありますから、中国から来る人は是非引き受けたいとは思っていました。その上、笹川医学奨学金で来られる方たちは非常に厳選されていて、優秀な人が多く、語学を勉強してくるので早く仕事に入っていけて、やる気のある人が多いから、この奨学金制度で来る人は絶対引き受けたいと思ってこれまでやってきました。

安 達 先生方のご感想を伺いまして、制度全体としてこの10年間は成功したと評価し得るということですね。

選考方法の課題；

安 達 制度の内容に関して、とくに選考の方法については、もっと日本側にプライオリティがあっているのではないかという意見があります。この選考は中国各省、大学、研究所関係から推薦された人たちが語学試験を受けて、合格者の中から中国衛生部が100人を選んで来るので、能力の試験はないわけです。この点に関して先生方はどうお考えですか。

紀伊國 1つの問題は、日本に来られて、小柴先生のように非常にうまくいっている場合もありますが、中国の研究者が本当にやりたい研究テーマにとって、日本のどの機関が一番いいのかということに関して、中国側に十分な情報がないということです。日中医学協会が毎年医学研究者名簿を送ったり、あなたの希望するテーマはこういうところもありますよというきめ細かいフォローアップはしておられますけれども、やはり改善の余地があるということ。

もう1つ、笹川医学奨学金制度と呼んでいますが、狭い意味での医学ばかりではなくて、歯学、薬学、看護学、その他の分野も含むということを最初から言っていたわけですが、どうしてもある分野に偏ってしまうということ。今後のバランスをどうしたらいいのか、これは言うまでもなく中国の国民の健康水準を高めるためにどうしたら役に立つかということが、基本のテーマとしてある

わけです。

それから中国全土から選抜してくださいということも最初から言いまして、ついにチベットの方まで来られ、中国の全地域から研究者を引き受けられたことはたいへん幸せなことと思っています。しかし、日本語が得意ということになると、東北地区には日本語で教育する大学もあるので、どうしても東北地区に集中するということがある。当初の目的である、中国全国にとってプラスになるようにするには、どういう選抜方法がいいのかについては、日本側ももう少し発言したほうがいいと思います。

中 島 できるだけ広い範囲の専門で、できるだけ国の広い地域からということをお願ひして中国全省、自治区から来られました。たとえばチベットの方は言葉の問題が大きいのです。日本語の前にまず中国語を習わなければならないという二重のハンディがある。チベットから2人来られ、2人とも非常にいい成績でお帰りになったのですが、準備に2年かかっています。1人の方は、日本へ来る直前の日本語試験で不合格になって、それで一晩たって大演説をされて、もう1人の方がかなり日本語ができるので一緒に信州大学に行くからということで来日されたのですが、帰られる頃は日本語も非常に上達し、たいへんびっくりしました。

安達先生も指導責任者として5人引き受けておられますが、指導者としてのご意見を。

安 達 この10年間は中国が市場経済の面で発展とともに、中国の大学教育自体、医師のレベルもそれにとまって良くなって来ています。当初は、日本語は知っているけれど、英語はA B Cもわからないという人がおり、英語の論文の抄読会についていけないという方がいましたが、最近は日本語ができる人も英語の論文は読めるようになっていきます。また最初の2、3年間に来ていた研修生はカルチャーショックで、違う世界に来たというような感じでしたけれど、最近の服装や雰囲気からは違和感は感じられなくなって、中国の先生方の生活も向上してきていると実感しています。

しかし、中国の教育は記憶が中心で、教官がお膳立てしてやる教育なので、来日した研究者は研究面において主体性に欠けるところがあるのではないか

と感じています。朝9時から夕方5時までを全部のスケジュールを組んであげないと、何をやっていいのかわからないという戸惑いが見られることがあります。各研究先では日本の指導責任者は非常に忙しいので、小柴先生みたいに面倒見のいい教官にあたればいいのですけれど、なかにはトラブルもあって、研究先を変更するケースもありますので、第二次からは研究先の選定もきめ細かくやる方針で行きたいと思います。

中 島 その点では、特別研究者制度は非常に有意義ですね。仕事の内容や教室の様子が分かって再来日するのですから、実質的な1年となるわけです。

日中友好交流にも貢献；

紀伊國 それにしても、今まで10年間で40億円使ったわけです。大変な数字ですよ、私も驚いています。それを快く出してくれている日本財団にはたいへん感謝しています。それから、毎回来日した研究者に行っているアンケートで、日本に来る前に考えていたことが日本に来てからどのように変わったかという項目はたいへん面白くて、大部分の方は日本に対するイメージが良いほうに変わったということです。この制度は日本の良さを知ってもらおうという意味で、中国の方に日本について良い感情をお与えすることができたということは望外な幸せだと思っています。

安 達 確かに医学研究、医学交流の面だけではなく、文化交流の面でも日本に対する理解が深まったという点からかなり相対的インパクトは大きいですね。中国衛生部のまとめでは、中国側からの研究者を含めて97%以上の方が、本奨学金は良い制度だと評価しています。

中 島 人の交流というのは、すぐに影響が出てくるというものではないと思うのです。長い間続けている間に両国の間の友情、あるいは理解ができてくるのであって、とにかくその国へ行ってみるということが一番その国との理解を深めるいい方法だと思います。できたら21世紀の半ば頃には、ヨーロッパの国との協力のよう、日中両国の医学交流も自由に往来して学問的にもすぐ協

力できるようになりたいものです。

研究期間は1年間；

中 島 しかし、10年間いろいろ様子を伺っていると、「1年間では短かすぎる」と言う方は多かったですね。

安 達 研究期間について、指導責任者として、小柴先生いかがですか。

小 柴 馴染んでいい仕事をしてくれた人は、受入側の大学の教室にとっても貴重な人材になってきます。そして、何とか残してもっと仕事を続けてもらいたいという人たちも、なかにかなりいるんじゃないかと思います。

それから、私はいつも受入側の心構えとして「お客さんにしては駄目だ」と、入ってきたら仲間完全にに入れて、リサーチワークのチームでも何でも入れて、そこで仕事を与えて忙しく働いてもらう、そして成果が出たら、学会でも発表させています。1年いるといくつかペーパーにも名前が載るようになります。一番困るのは何をやっていいのかわからない、ぶらぶらしてただ見学しているだけでは、早晚、身の置き場がなくなってしまうことだと思います。多少プッシュしてもいいから忙しい思いをさせて、それが一番馴染んでくれる方法だと思っています。

紀伊國 研究期間の1年の問題は、衛生部がとにかく必ず帰国するようにしてくれと非常に強く言われます。

安 達 これは中国の保健医療行政の一環としての若い人材養成という要素があります。中国は今非常に経済的に発展していて、医学面でも人材が欲しいので、学んだことを帰国して活かしてほしいわけです。中国衛生部として各種の奨学金制度で外国に派遣していますが、この制度の帰国率は99.5%で一番いいそうです。やはり中国のために勉強してほしいという衛生部の非常に強い思いがあります。

中 島 1年で必ず帰るという原則を貫いたことは、やはり中国側にとっては非常に評価されていることで、これは正しい判断であったと私は考えています。

安 達 中国衛生部でも、帰国後に日本での仕事が生かせる環境を整えていただくと、日本で学んだ1年というのがもっと有効になると思います。

同学会の意義；

安 達 帰国した笹川医学奨学金研究者の人たちの間で同学会（同窓会）が作られて、ボランティアで中国の貧困地区の医療活動を行っています。これはかなり評価していいと思います。私は中学まで中国で育ったのでよくわかるのですが、中国の社会主義制度ではボランティアという概念はありません。そういう制度で育った研究者たちが、自分たちが学んだ技術をボランティア医療で活かしていこうという意識が芽生えたことは、やはりこの制度の良かった点ではないでしょうか。

紀伊國 おっしゃるとおりだと思いますが、同時に同学会についてはたいへん重要であるから、これをサポートしようという日本財団のお考えがありまして、同学会の活動費、事務所の賃料まで日本側がサポートしているということは、実際には大変なことだと思います。私は「日本だと同窓会というのは自分たちでお金を出し合ってやるものですよ」と言っているのですが、そういう習慣がなかったところから、だんだんと同窓会意識が出てきたことは、私は良かったことだと思います。

中 島 同学会の意義というのは非常に大きいと思います。帰られて仕事をしているうちに、また日本と縁がなくなってしまうので、やはり日本とのつながりを保っていくのに同学会は必要だと思います。中国はどんどん発展しますから、そのうちみんなが金を出してやるようになる、そう思っていたきたいですね。

紀伊國 地区別に同学会の人が年に1回集まって、日本の指導責任者を招いて学術交流会を開催しているのは意義があることだと思います。みんななかなか活躍してますね。

学位の取得について；

安 達 ちょっと気にかかる点は、日本で博士号を取得すると帰国後の評価が格段に高いので、

大学院に行って博士号を取りたい人が多い。各研究者の中国の所属機関が形式的なドクターを取ってくることでその人を評価するよりは、日本でどのような仕事をしてどういう論文を書いてきたかという中身をもっと評価してくれたら、研究者も指導責任者もやりやすいのではないかと思います。

紀伊國 学位を取りたいというご希望がたいへん強いことは言われたとおりですが、日本の学位を取る仕組みがそれぞれの施設によって違いますから、一概には言えないと思います。私は確かに非常に形式主義な国であるということも、我々指導責任者側も知っておく必要はあると思います。

中 島 理想を言えば、日本の教室と中国側の教室が似たような仕事をコラボレートしていて、そのスタッフが日本へ来てから中国へいったん戻って仕事を続けて、学位が取れる時期になったらまた来日して学位をもらって帰るというように、研究者と特別研究者とをうまく使い分けるようになると思います。

安 達 教室どうし、教授どうしが中国側、日本側でいつも共同研究的な意識を持って若い人を日本に來させて研究させ、また帰国後に研究を継続することが実質的にできれば、研究面においてもこの制度を活かせるわけです。

小 柴 この制度の成果は、研究者が帰国して教職で指導的立場になった時に、一番影響が大きく表れてくると思います。日本でなんとなく馴染めなくて反感を持って帰っていくと、かえって逆効果になることもあろうかと思いますが、満足して喜んで帰った人がそういう気持ちで教育すれば、その生徒たちもまた日本に親近感を持ってくるといった効果が表れてくると思います。

これからの10年への提言；

安 達 これからの10年はどういうふうにあるのがいいのかということについてご意見、ご提言ください。

紀伊國 今度の10年間では、中国にとって21世紀の人々の健康に対してどういう研究がほんとうに必要なのかということを長期的な視点を持って、もっともっと衛生部と話し合う必要があると

思います。どういう分野の人が本当に要るのか、その分野の人を日本のどこで研究していただいたら一番効果的かという、分野の選び方については改善が最も必要だろうと思っています。

中 島 中国はあれだけ広い国土を持って、あれだけの人口を持っている国で、中国自身がこの制度に一つの交流の枠を作っているわけですから、中国の医療、医学についてどういう人を送りたいかというのはむしろ中国がお決めになることではないでしょうか。

紀伊國 やはりこの民間の笹川医学奨学金制度は、他のプログラムではなかなかやれないことを、チャレンジをもってやるのがこれからの10年だろうと思います。たとえば日本語研修は今のやり方以外にもどのような方法ができるのか、英語でやった方のほうが研究成果がどうも上がるんじゃないかというものの、それでは日本に来る必要があるんだろうかという悩みもあります。

中 島 それは日本でどういう仕事をしているかということによるのです。英語であろうと日本語であろうと、日本でなければできないような仕事は必ずあるわけです。そのために中国から来る、あるいはアメリカから来る場合もあるでしょう。21世紀にはそうなってほしいものです。

紀伊國 本当に日本では中国のために何かできるのかということについての情報を、もうちょっと我々も集めてマッチングする努力が、今度の10年には要ると思います。

中 島 日本の大学の設備、研究費を大幅に増やすことが決まっているわけですから、研究者が本当に実力を発揮すれば、21世紀に日本はアトラクティブな留学先ということになることを期待していますし、そういう時にこの制度があることは非常にプラスになると思います。

小 柴 これまでの10年間でも初めと終わりでずいぶん変わってきたと思います。最初は何を見てもカルチャーショックというような、比較的年輩の方が多かったのですが、最後の頃になったら若い人で、しかも語学研修時代にいろいろラブレターを送ってきます。自分はこういう方向に、教鞭を持ってこういう仕事をやっていると、自分の

やりたい仕事に合ったところを探してくるようになってきました。そのあたりのところがずいぶん変わってきた。今までやった業績を見てみると、かなりの機械を使っていい仕事をやっているし、レベルは相当に上がってきた感じです。最初の頃は誰が来ても一応カルチャーショックで、何を見ても吸収するものが多かったのですが、今は自分が今までやってきた仕事を考えて、行くとしたらどこの大学がいいか、どこの研究所がいいかということはかなり考えてきています。その傾向は今後ますます増えてくると言えます。

安 達 実際、第二次の21期生の申請書は従来と違って、選考委員の先生がびっくりするぐらい詳細に自分の研究希望内容を書いてきています。研究者に研究機関と指導責任者の専門分野を知らせると、中にはこれはできないから、別のところを探してほしいという場合もあるので、研究機関の選考が大変になってきているのですが、私たちとしてもできるだけ要望に添って最適ところで研究できるように今後改良していきたいと思います。

1年間の評価について；

安 達 第二次からは、初期研究が終わった時点で、1年間やった研究の成果を論文形式で報告してもらい、特別研究者や他にコラボレイトする時にそれをかなり重視するという方針を考えていきたいと思います。たとえば特別研究者を選考する時に、初期研究の1年間どういう仕事をやったかという研究研修報告書を選考委員会でも重視していく方針です。

紀伊國 実際にはたとえば看護教育制度を学びたいという方もおられるので、狭い意味での研究に限定しないで、1年間で何をしたかということについてはやはり明確にして、それが特別研究者につながるという安達先生のご提案には賛成ですね。

安 達 日本側の選考委員会では選考に関して主力を注いでおりますが、現在は1年間の成果の評価に関して何も行われていないので、これからは評価についても委員会で行っていく考えです。

さらに、1年間ごとに研究研修報告集を製本印刷したいと思っています。

紀伊國 それと言にくいことですが、もちろん大部分の指導者の先生はたいへん優れた方たちで、中国の研究者が非常に満足していることは事実だと思うわけですが、数は少ないですけれども、ミスマッチングがあったことも事実です。それを将来防ぐためにも今言われたように、1年間でということがあったのかという評価は大事なことで、どうもあの先生に頼むとあまりプラスにならなかったという場合もあり得ると思います。

安 達 協会もコンピューターシステムを導入したので、指導責任者や各専門分野の専門家に関しての情報を整備して、次の選考の際の参考にできるようにしたいと思います。

今後の展望；

安 達 それでは、最後に一言お願いします。

紀伊國 これから新しい10年間を迎えるわけですが、中国には最初に井戸を掘った人のことを忘れるなという諺があります。私はやはりこの制度の設立に尽力された黒川先生、石館先生、懸田先生が考えられたこと、中国に対する思いを指導責任者、事務局の方も持ち続けてほしいと思っています。そして、その基本となるのはやはり我々の友好ということをどのようにして考えるのか、何故この奨学金がスタートしたかということについても、繰り返し中国側にも思いを伝えていきたいというのが私の願いです。

安 達 小柴先生いかがでしょうか。

小 柴 私は続いてまた10年やると聞いて、非常にホッとしました。たいへんに素晴らしい企画なので、もしこれが打ち切られることになったら、中国はショックを受けるのではないかと思います。私たちもなんとなく義理が悪いような気持ちになりますね。やはりこの制度の評価はその人たちが国へ帰って教育者になった時に、一番その効果が表れてくると思います。

安 達 これからの10年は、最初の10年のインパクトから見て、効率からすると私は2倍以上のインパクトファクターが出るという気がします。

中国は教育レベルも経済レベルも生活もかなり向上してきていますから、これからの10年は、今までの10年以上の効果が出る。ですから、協会としてもこれからの10年は、よりいっそう真剣にきめ細かくやっていかないとはいけません。

中 島 そうですね。もう一言、岡崎嘉平太先生は、将来は日中間の交流は双方向になるべきではないと言われてます。中国の非常にいい仕事をしているところへ日本人が行って一緒にコラボレイトする。おそらく次の10年が終わったら、そろそろそういうことを考えるような時代になるでしょう。

安 達 95年の日中医学協会創立10周年記念シンポジウムで朝日新聞編集委員の田辺功さんも特別発言で、これからの10年、21世紀に向かってはやはり両国の医学交流においても双方向性のレベルにまでいかないと、真の友好関係には至らないのではないかということを言われました。2000年以降の10年になると、そういうことも視野に入れながらこの制度を考えていかなければならないでしょう。

いろいろな点を改善しながら形骸化しないようにやっていこうと思いますので、また先生方のご協力をよろしくお願いします。

本日はいろいろご提言いただきありがとうございます。

『日中医学』第12巻第4号（1998年2月）

V. 指導責任者・研究者・中国派遣機関 へのアンケート集計

・アンケート調査概要

総発送数	3,247 通
回収数	1,588 通
回収率	48.9%

研究者（1期～25期）

	総数	発送数	回収数	回収率
指導責任者	1,180	1,042	648	62.2%
研究者	1,385	1,343	533	39.7%
中国派遣機関	413	413	171	41.4%

特別研究者（1期～11期）

	総数	発送数	回収数	回収率
指導責任者	158	154	108	70.1%
研究者	160	160	86	53.8%
中国派遣機関	135	135	42	31.1%

1. 指導責任者アンケート集計

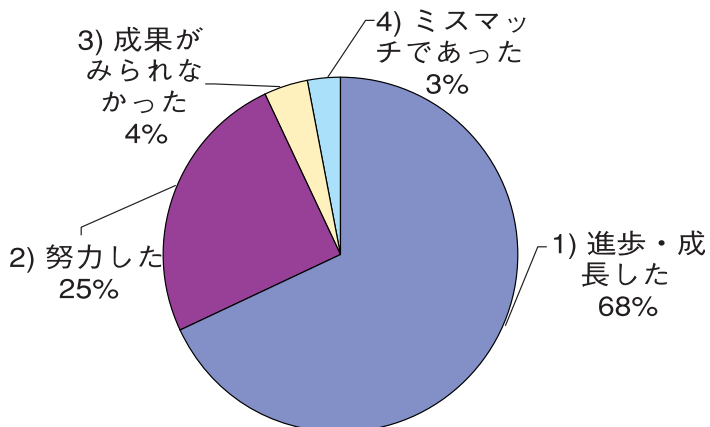
研究者（1期～25期）

回答数（対象研究者数） 781

回答内訳（複数回答）

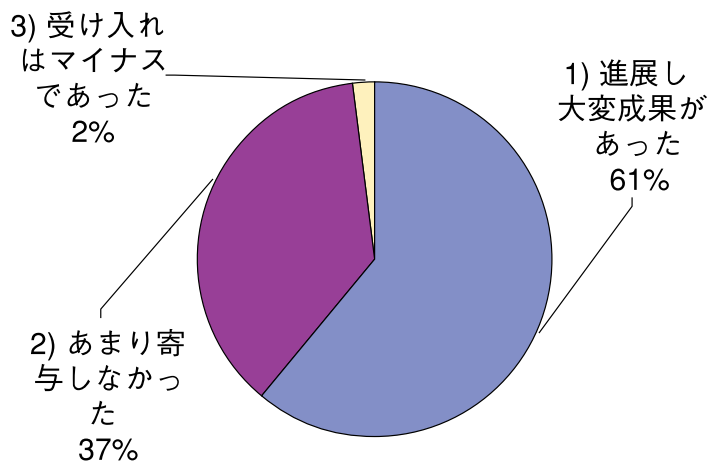
(1) 研究者は、貴施設での研究により成長したとお考えですか（回答数：853）

1) 進歩・成長した	581	68.1%
2) 努力した	211	24.7%
3) 成果がみられなかった	36	4.2%
4) ミスマッチであった	25	2.9%
1) 2) 合計		92.8%



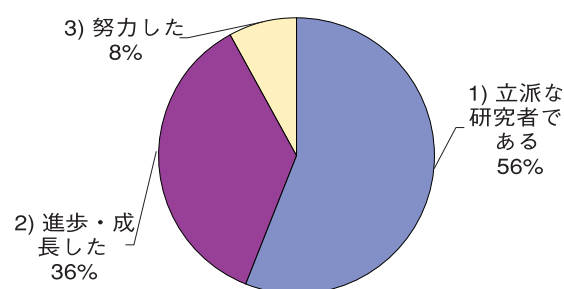
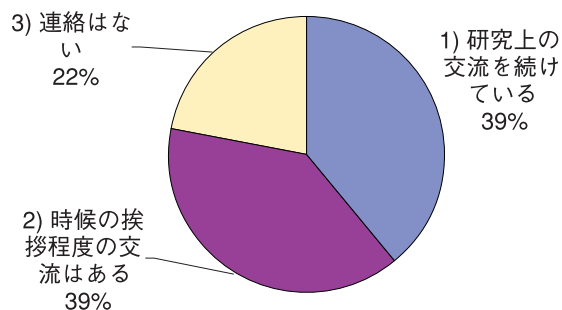
(2) 研究者は、貴施設に寄与し、貴施設での仕事は進展しましたか（回答数：752）

1) 進展し、大変成果があった	459	61.0%
2) あまり寄与しなかった	279	37.1%
3) 受け入れはマイナスであった	14	1.9%



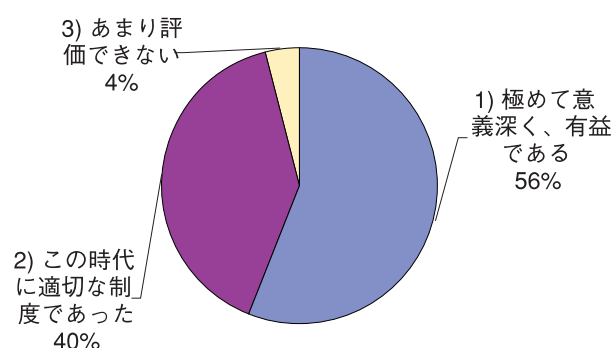
(3) 研究者との帰国後の連携について（回答数：695）

1) 研究上の交流を続けている	268	38.6%
2) 時候の挨拶程度の交流はある	274	39.4%
3) 連絡はない	153	22.0%



(4) 日中笹川医学奨学金制度をどのように評価されますか (回答数：778)

1) 極めて意義深く、有益である	431	55.4%
2) この時代に適切な制度であった	312	40.1%
3) あまり評価できない	35	4.5%
1) 2) 合計		95.5%

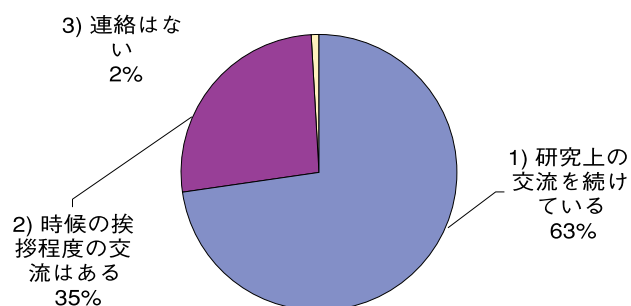


(2) 特別研究者は、貴施設に寄与し、貴施設での仕事は進展しましたか (回答数：105)

1) 進展し、大変成果があった	92	87.6%
2) あまり寄与しなかった	13	12.4%
3) 受け入れはマイナスであった	0	0.0%

(3) 特別研究者との帰国後の連携について (回答数：103)

1) 研究上の交流を続けている	65	63.1%
2) 時候の挨拶程度の交流はある	36	35.0%
3) 連絡はない	2	1.9%



特別研究者 (1期～11期)

回答数 (対象研究者数) 105

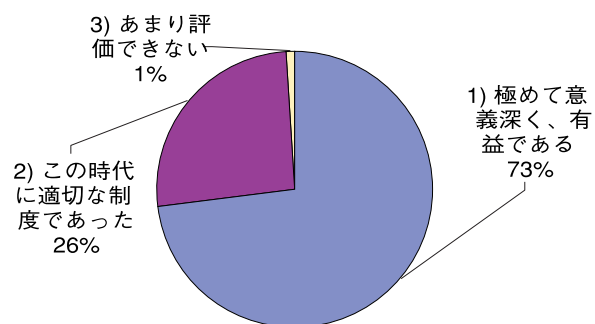
回答内訳 (複数回答)

(1) 特別研究者は、再来日により成長したとお考えですか (回答数：116)

1) 立派な研究者である	65	56.0%
2) 進歩・成長した	42	36.2%
3) 努力した	9	7.8%
4) 成果がみられなかった	0	0.0%
1) 2) 合計		92.2%

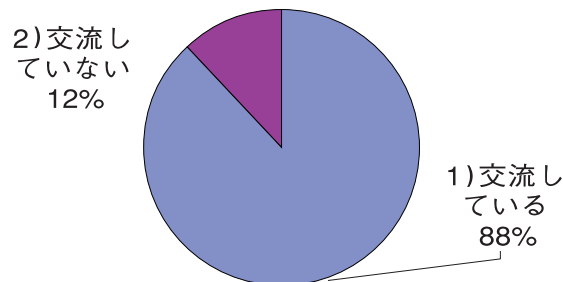
(4) 特別研究者制度をどのように評価されますか。 (回答数：107)

1) 極めて意義深く、有益である	78	72.9%
2) この時代に適切な制度であった	28	26.2%
3) あまり評価できない	1	0.9%
1) 2) 合計		99.1%



同僚との交流はありますか (回答数：528)

- | | | |
|------------|-----|-------|
| 1) 交流している | 464 | 87.9% |
| 2) 交流していない | 64 | 12.1% |



笹川医学奨学金制度研究者の業績数

ー指導責任者アンケートによるー

注：受入教室が承知している在籍中の研究に基づく業績、又は受入教室との共同研究。

研究者 (1期～25期)

回答合計：565	業績合計：1,165 件
1) 0	121 人 21.4%
2) 1～5	414 人 73.3%
3) 6～10	18 人 3.2%
4) 11～20	10 人 1.8%
5) 21 以上	2 人 0.4%

特別研究者 (1期～11期)

回答合計：86	業績合計：267 件
1) 0	8 人 9.3%
2) 1～5	68 人 79.1%
3) 6～10	6 人 7.0%
4) 11～20	3 人 3.5%
5) 21 以上	1 人 1.2%

(2) 笹川研究者当時在籍した所属機関以外に、現在交流を行っている日本の研究機関、団体はありますか (回答数：531)

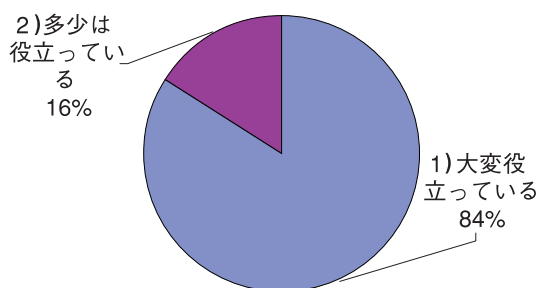
- | | | |
|------------|-----|-------|
| 1) 交流している | 172 | 32.4% |
| 2) 交流していない | 359 | 67.6% |

(3) 研究者としての来日前後に、中国での所属・役職の変更はありましたか

- | | | | |
|-------------|-----|-------|-----------|
| 1) 所属先が変わった | 80 | 15.0% | (回答数:533) |
| 2) 昇進した | 401 | 77.7% | (回答数:516) |

(4) 笹川医学奨学金制度研究者としての経歴は現在の活動に役立っていますか (回答数：532)

- | | | |
|---------------|-----|-------|
| 1) 大変役立っている | 448 | 84.2% |
| 2) 多少は役立っている | 84 | 15.8% |
| 3) むしろマイナスである | 0 | 0.0% |



2. 研究者アンケート集計

研究者 (1期～25期)

回答者数 533

回答内訳

(1) 帰国後、日本での所属研究機関、指導責任者、

(5) 帰国後、研究・学会参加・留学 (滞在3か月以上) その他学術交流の目的で日本に来たことがありますか (回答数：533)

- | | | |
|------------|-----|-------|
| 1) 来日した | 253 | 47.5% |
| 2) 来日していない | 280 | 52.5% |

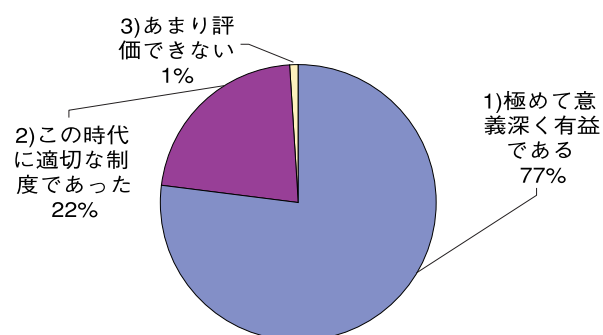
(6) 帰国後、研究・学会参加・留学（滞在3か月以上）
 その他学術交流の目的で日本以外の国に行き
 ましたか（回答数：531）

1) 行った	163	30.7%
2) 行っていない	368	69.3%

・笹川医学奨学金制度について（複数回答）

笹川医学奨学金制度をどのように評価されます
 か（回答数：618）

1) 極めて意義深く有益である	476	77.0%
2) この時代に適切な制度であった	136	22.0%
3) あまり評価できない	6	1.0%



特別研究者（1期～11期）

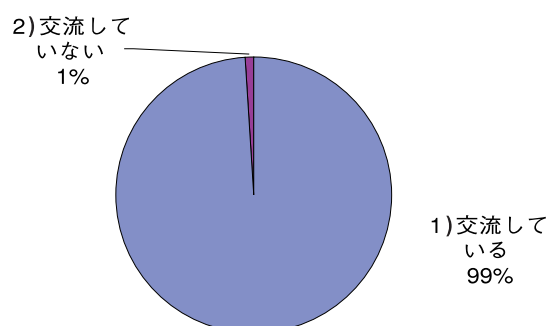
回答者数 84

回答内訳

1. 帰国後の状況について

(1) 帰国後、日本での所属研究機関、指導責任者、
 同僚との交流はありますか（回答数：83）

1) 交流している	82	98.8%
2) 交流していない	1	1.2%



(2) 笹川研究者当時在籍した所属機関以外に、現
 在交流を行っている日本の研究機関、団体は
 ありますか（回答数：83）

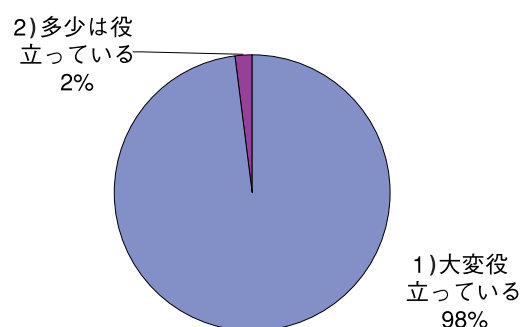
1) 交流している	29	34.9%
2) 交流していない	54	65.1%

(3) 特別研究者としての来日前後に、中国での所属・
 役職の変更はありましたか

1) 所属先が変わった	7	8.4%	（回答数：83）
2) 昇進した	53	65.4%	（回答数：81）

(4) 特別研究者制度研究者としての経歴は現在の
 活動に役立っていますか（回答数：85）

1) 大変役立っている	83	97.6%
2) 多少は役立っている	2	2.4%
3) むしろマイナスである	0	0.0%



(5) 帰国後、研究・学会参加・留学（滞在3か月以上）
 その他学術交流の目的で日本に来たことがあり
 ますか（回答数：83）

1) 来日した	31	37.3%
2) 来日していない	52	62.7%

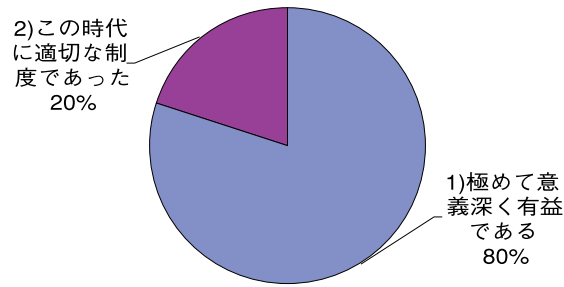
(6) 帰国後、研究・学会参加・留学（滞在3か月以上）
 その他学術交流の目的で日本以外の国に行きま
 したか（回答数：82）

1) 行った	24	29.3%
2) 行っていない	58	70.7%

2. 特別研究者制度について（複数回答）

・特別研究者制度をどのように評価されますか
 （回答数：97）

1) 極めて意義深く有益である	78	80.4%
2) この時代に適切な制度であった	19	19.6%
3) あまり評価できない	0	0.0%



3. 研究者の職位の変化

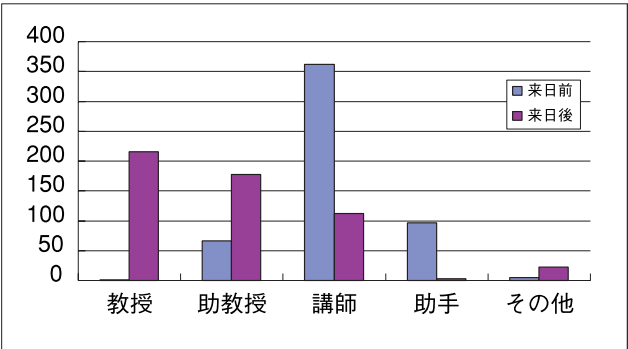
－研究者アンケートによる－

注①：職位名は大学、研究機関、病院により異なるため、教授格、助教授格等に統一し表記した。

注②：民間企業に就職している者、在日中の者、職位不明な者は「その他」とした。

研究者（1期～25期）

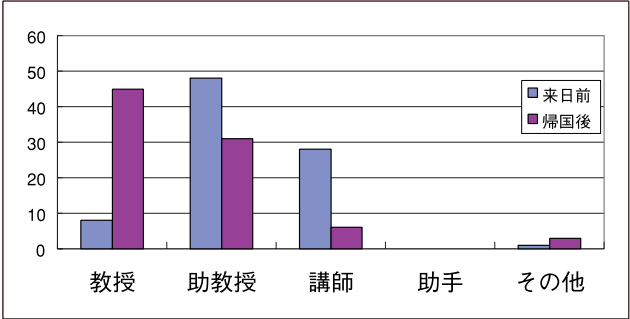
	来日前	帰国後
教 授	1	217
助 教 授	66	179
講 師	364	112
助 手	97	3
そ の 他	5	22
合 計	533	533



	教 授	助教授	講 師	助 手	その他	計
第1期	18	2	0	0	0	20
第2期	17	1	0	0	0	18
第3期	9	4	0	0	0	13
第4期	9	2	1	0	1	13
第5期	15	1	0	0	1	17
第6期	9	4	0	0	0	13
第7期	10	3	1	0	1	15
第8期	8	7	0	0	1	16
第9期	11	3	0	0	4	18
第10期	12	5	1	0	2	20
第11期	8	6	2	0	3	19
第12期	8	5	2	0	2	17
第13期	8	8	0	0	1	17
第14期	4	7	1	0	1	13
第15期	7	6	4	0	0	17
第16期	5	4	1	0	0	10
第17期	5	2	2	0	0	9
第18期	13	8	2	0	0	23
第19期	2	2	3	0	1	8
第20期	9	9	2	0	0	20
第21期	11	13	4	0	0	28
第22期	8	16	8	0	2	34
第23期	6	22	16	0	1	45
第24期	3	20	22	0	0	45
第25期	2	19	40	3	1	65
合 計	217	179	112	3	22	533

特別研究者（1期～11期）

	来日前	帰国後
教 授	8	45
助 教 授	48	31
講 師	28	6
助 手	0	0
そ の 他	1	3
合 計	85	85



	教 授	助教授	講 師	助 手	その他	計
第1期	2	0	0	0	0	2
第2期	6	0	0	0	0	6
第3期	4	0	0	0	0	4
第4期	6	1	0	0	0	7
第5期	0	3	1	0	0	4
第6期	5	1	0	0	1	7
第7期	8	1	0	0	0	9
第8期	6	3	0	0	1	10
第9期	3	4	2	0	1	10
第10期	3	10	1	0	0	14
第11期	2	8	2	0	0	12
合 計	45	31	6	0	3	85

4. 中国派遣機関アンケート集計

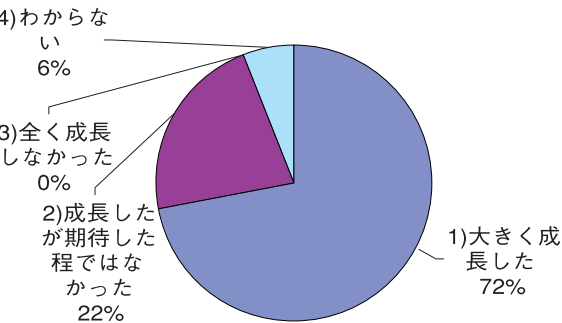
研究者（1期～25期）

回答数（該当研究者数） 586

回答内訳

(1) 笹川研究者は日本での研究により成長しましたか（回答数：392）

1) 大きく成長した	281	71.7%
2) 成長したが期待した程ではなかった	86	21.9%
3) 全く成長しなかった	0	0.0%
4) わからない	25	6.4%

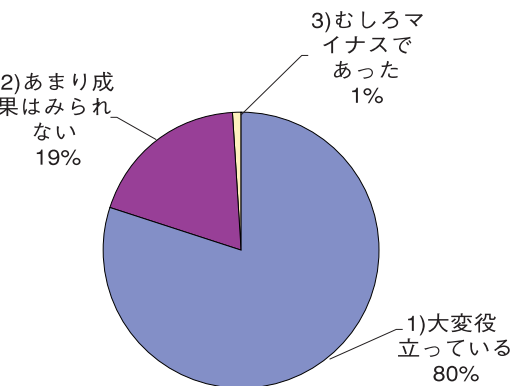


(2) 笹川研究者の日本での研究・経験は、現在の貴施設の活動に役立っていますか。

(回答数:358)

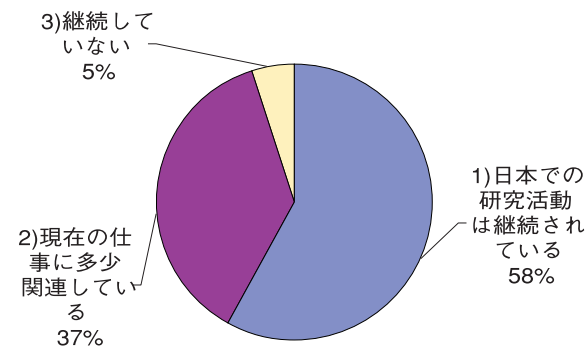
1) 大変役立っている	286	79.9%
2) あまり成果はみられない	69	19.3%
3) むしろマイナスであった	3	0.8%

注：マイナスの評価3名は、2名が未帰国、1名が体調不良。



(3) 日本における研究内容は中国でも継続して行われていますか（複数回答 回答数：355）

1) 日本での研究活動は継続されている	203	57.2%
2) 現在の仕事に多少関連している	133	37.5%
3) 継続していない	19	5.4%



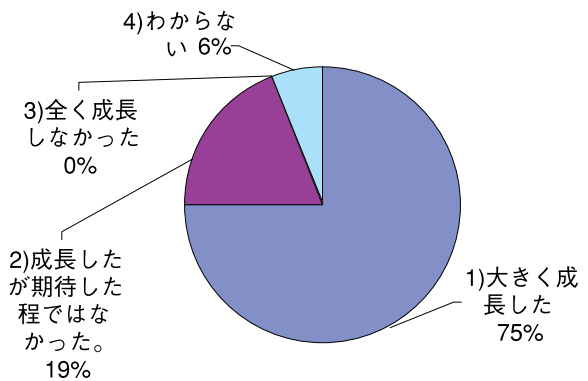
特別研究者（1期～11期）

回答数（該当研究者数） 66

回答内訳

(1) 特別研究者は日本での研究により成長しましたか（回答数：48）

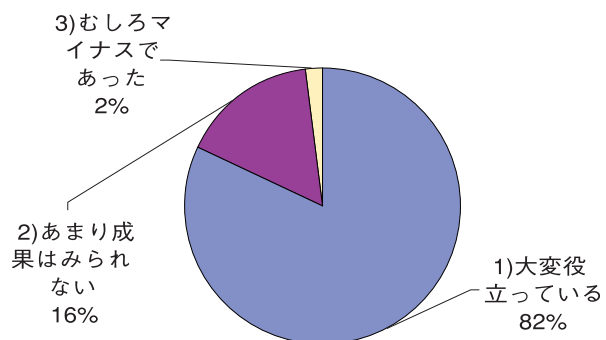
1) 大きく成長した	36	75.0%
2) 成長したが期待した程ではなかった	9	18.8%
3) 全く成長しなかった	0	0.0%
4) わからない	3	6.3%



(2) 特別研究者の日本での研究・経験は、現在の貴施設の活動に役立っていますか (回答数：44)

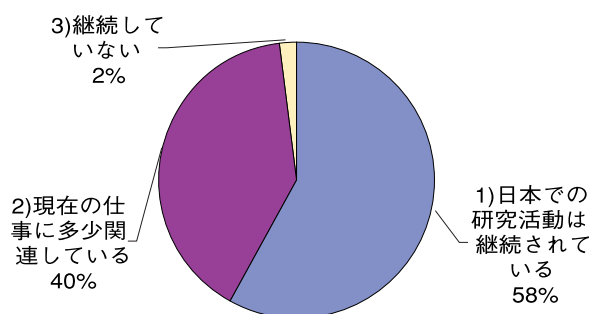
1) 大変役立っている	36	81.8%
2) あまり成果はみられない	7	15.9%
3) むしろマイナスであった	1	2.3%

注：マイナスの評価1名は、未帰国。



(3) 日本における研究内容は中国でも継続して行われていますか (複数回答 回答数：42)

1) 日本での研究活動は継続されている	24	57.1%
2) 現在の仕事に多少関連している	17	40.5%
3) 継続していない	1	2.4%



VI. 研究者・特別研究者名簿並びに 指導責任者名簿

第1期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
金 松傑	白求恩医科大学第3医院	東京大学医学部第1外科学	
張 齊昌	齊齊哈爾市第一医院	東京慈恵会医科大学第2内科学	
高 世嘉	中国医学科学院血液学研究所	国立循環器病センター研究所脈管生理部血液流動研究室	
林 爾昕	蚌埠医学院附属医院	慶應義塾大学医学部内科学本間教授室内	
韓 景献	天津中医学院第1附属医院	北里大学医学部内科学	
秦 達意	江西医学院生理教研室	九州大学医学部第2生理学	
朱 威	衛生部上海生物製品研究所	国立予防衛生研究所血液製剤部	
孔 棣	南開医院第2外科	神戸大学医学部第1外科学	
蘇 海	江西医学院第2附属病院	九州大学医学部附属心臓血管研究施設内科部門	
石 学耕	上海第2医科大学	岩手医科大学産婦人科	
卯 新民	蘭州医学院血液病研究所	東京大学医学部第3内科	
戚 心広	中国医科大学附属第三医院	金沢大学医学部第1内科	
金 奎龍	延辺医学院解剖教研室	大阪大学医学部高次神経研究施設神経解剖学	
魏 振装	解放軍301医院中医科	富山医科薬科大学和漢薬研究所	
嚴 律南	華西医科大学第1附属院外科	京都大学医学部第2外科学	
胡 曉濛	中国衛生部外事局	病院管理研究所	
王 甲東	広州市医薬衛生研究所	千葉大学薬学部医療薬剤学	
方 成林	中国薬科大学有機化学教研室	九州大学薬学部薬化学	
潘 繼龍	中山医科大学寄生虫学教研室	帝京大学医学部寄生虫学	
孫 貴凡	中国医科大学衛生系	筑波大学医学専門学群社会医学系	
王 建平	中国中医学院	千葉大学薬学部薬品製造学	
侯 虹魯	上海市医学科学技术情報研究所	財団法人国際医学情報センター業務部	
温 岳	広州市第2人民医院	東京女子医科大学附属心臓血管研究所循環器小児科	
王 屹松	哈爾濱医科大学附属一院内三	北海道大学理学部附属動物染色体研究施設	
李 繼堯	青島医学院生理学教室	日本大学医学部第3内科学	
盛 長堯	上海医科大学華山医院	京都府立医科大学医動物学	
趙 連岐	錦州医学院附属医院口腔科	名古屋大学医学部口腔外科	
王 浩	山東省中医学院生化学教研室	東海大学医学部第1内科学	
劉 慶	華西医科大学基礎医学院寄生虫学	信州大学医学部寄生虫学	
王 家泰	天津第1中心医院急救医学研究室	神戸市立中央市民病院麻酔科	
蔡 映雲	上海医科大学附属中山医院	鳥取大学医学部第3内科学	
殷 凱生	南京医学院第1附属医院内科	名古屋大学医学部第2内科学	
呉 軍正	秦都口腔医院	国立がんセンター病院頭頸科	
李 永国	湖南医科大学第2附属医院外科	九州大学医学部第1外科学	
孫 慧斌	白求恩医科大学予防医学院	大阪大学細胞工学分学免疫細胞研究部門	
梅 琦	第4軍医大学生理教研室	新潟大学医学部第3解剖学	
金 碧華	上海第2医科大学附属新華医院	昭和大学医学部産婦人科	
鐘 翠平	上海医科大学	久留米大学医学部第2内科学	
劉 楠	第2軍医大学放射線医学研究室	愛知県がんセンター生物学部	
秦 学玲	華西医科大学附属第1病院耳鼻科	九州大学医学部耳鼻咽喉科学	
李 廷謙	華西医科大学第1附属医院	国立療養所東京病院	
朴 英愛	中国医科大学二・三病院小児科	国立循環器病センター臨床栄養部	
季 成葉	北京医科大学児童青少年衛生研	筑波大学体育科学系松浦研究室	
張 如松	浙江医科大学薬学系生薬学教研室	大阪大学薬学部生薬学	
全 丹毅	中国薬科大学中薬学院	星薬科大学薬学部薬剤科	
吉 力	中国中医研究院中薬研究所化学室	富山医科薬科大学和漢薬研究所化学応用部	
張 伯崇	甘肅省薬品検驗所	国立衛生試験所生薬部	
魏 珊	中国医科大学生化学	筑波大学基礎医学系薬理学	
張 国清	中国薬科大学分析化学教研室	九州大学薬学部薬品分析化学	

第 2 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
紀 麗穎	中国医科大学	北海道大学医学部法医学	
陳 淑英	上海医科大学看護婦専門学校	弘前大学医療技術短期大学部	
謝 康民	徐州医学院附属医院	東北大学医学部脳神経外科	
邵 剛	瀋陽薬学院薬物分析教研室	東北大学薬学部薬品分析学	
呉 志駿	浙江医学研究院	東京大学薬学部薬化学	
袁 世華	長春中医学院	東邦大学医学部附属大森病院心療内科学	
張 建中	上海第 2 医科大学附属第 9 人民医院	東京医科歯科大学歯学部第 2 補綴学	
謝 麗亜	浙江省精神病防治研究所	東京医科歯科大学難治疾患研究所社会医学研究部門（犯罪精神医学）	
周 正	中日友好病院	東京女子医科大学附属消化器病センター消化器外科学	
劉 龍斌	湖南医学院第 1 附属医院	帝京大学医学部第 1 内科	
馬 軍	中国医科大学第 1 附属医院婦産科	東京慈恵会医科大学産婦人科教室	
倪 一玄	上海第二医科大学瑞金医院	日本医科大学集中治療室	
王 力寧	中国医科大学第 1 附属医院	順天堂大学医学部内科学	
趙 紅	中国医科大学第 3 医院内科	東京医科大学内科学	
丁 静娟	貴陽医学院附属医院	慶應義塾大学医学部消化器内科学	
陳 颺	遼寧省衛生庁	杏林大学医学部病院管理学	
王 娜亜	中日友好医院	国立病院医療センター耳鼻咽喉科	
樊 栄生	華西医科大学	国立公衆衛生院疫学部	
張 娟娟	中国医学科学院北京協和医院	東京都立駒込病院	
楊 権	華西医科大学	（財）東京都精神医学総合研究所精神薬理研究室	
張 振祥	寧夏医学院	（財）労働科学研究所労働生理・心理学研究部	
白 蘭	天津口腔医院	鶴見大学歯学部歯科補綴学第 1	
俞 雪如	上海中医学院	千葉大学工学部電子工学科	
馬 曉路	中国医科大学第三附属病院	千葉大学医学部耳鼻咽喉科	
于 布為	上海市長海医院麻醉科	埼玉医科大学麻醉学	
羊 恵君	華西医科大学基礎医学院	群馬大学内分泌研究所形態学	
陳 偉師	広東省衛生防疫站	新潟大学医学部衛生学	
王 晋源	西安医科大学第一附属医院	名古屋大学医学部第 1 内科第 2 研究室	
燕 純伯	成都市第 3 人民医院	藤田保健衛生大学医学部内科学	
謝 莉娜	南京医学院第一附属病院	藤田保健衛生大学医学部眼科学	
呉 勇傑	蘭州医学院薬理学教研室	岐阜大学医学部薬理学	
廖 衛平	湖南医学院附属第一医院神経内科	国立療養所静岡東病院	
徐 翎	湖南医学院病生教研室	大阪大学医学部附属病院病理病態学第 1 内科	
薛 嘉牲	上海医科大学	大阪大学医学部環境医学	
孫 乃学	西安医科大学第二附属医院	大阪大学医学部附属病院眼科学	
盧 建	上海市長海医院病生室	大阪大学医学部病理病態学	
張 家駒	陝西省衛生防疫站予防医学研究所	大阪医科大学微生物学	
蘇 振倫	中国人民解放軍総医院	関西医科大学耳鼻咽喉科学	
董 黎明	中国医学科学院基礎医学研究所	国立循環器病センター研究所病因部	
路 波	陝西省腫瘍研究所	大阪府立成人病センター病院耳鼻咽喉科	
王 為	山東医科大学	和歌山県立医科大学第 2 解剖学	
侯 桂華	山東医科大学微生物学教研室	金沢大学がん研究所分子免疫部	
張 珊文	北京市腫瘍防治研究所	福井医科大学放射線基礎医学教室	
鄭 龍洙	延辺医学院附属病院第 2 内科	岡山大学医学部第 3 内科学	
朱 曉玲	遼寧省人民医院	山口大学医学部第 1 内科学	
鄭 承勲	延辺医学院	高知医科大学免疫学教室	
趙 蓮茹	佳木斯医学院	高知医科大学産科婦人科学	
王 良仕	江西医学院	福岡大学医学部第 1 外科	
張 代富	四川省人民医院	社会保険小倉記念病院循環器科	
孫 瑞忠	北京積水潭医院	長崎大学医学部附属病院第 2 内科	

第 3 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
王 徳山	遼寧中医学院基礎部生理教室	札幌医科大学放射線医学	
于 立志	中国医科大学附属第 2・3 医院	旭川医科大学産婦人科学	
胡 応安	首都医学院生理系	自治医科大学生理学第 1	
剛 勇	中日友好医院内分泌科	自治医科大学臨床病理学	
朱 莉蓮	上海医科大学医学教育研究室	筑波大学医学専門学群社会医学系医学社会学	
戴 豪良	上海医科大学中山医院	国立公害研究所環境保健部環境保健研究室	
張 玲	山東省医学科学院	千葉大学医学部附属高次機能制御研究センター免疫機能部	
康 健	中国医科大学附属第一医院内科	千葉大学医学部附属高次機能制御研究センター	
李 衛東	秦都口腔医院牙体科	東京歯科大学歯学部歯科保存学第 1 講座	
高 眉揚	広州医学院第二附属医院	東京女子医科大学母子総合医療センター母性部門	
于 世龍	同濟医科大学協和医院心血管病研	東京女子医科大学日本心臓血圧研究所循環器内科	
趙 維華	白求恩医科大学生理教研室	昭和大学医学部第 1 生理学	
胡 麗敏	福建医学院附属第 2 医院	昭和大学医学部産婦人科学	
李 傑	山東医科大学	東京慈恵医科大学公衆衛生学	
姜 奕	中国医科大学腫瘍研究所脾臓癌研	順天堂大学医学部病理学第 2	
牛 建昭	北京中医学院組織学教研室	慶應義塾大学医学部解剖学	
劉 光賢	昆明医学院第一附属医院	日本大学医学部病理学第 2	
杜 徳極	四川省中医薬研究院中薬研究所	帝京大学薬学部薬品化学	
張 万東	南京鉄道医学院	国立がんセンター研究所病理部実験病理研究室	
李 成明	中国薬品生物製剤検定所	国立予防衛生研究所村山分室腸内ウイルス部肝炎ウイルス室	
鄒 長征	中国衛生部医療衛生国際交流中心	国立公衆衛生院衛生行政学部衛生行政室	
秦 秀生	河南医科大学病理生理学教研室	財団法人癌研究会癌研究所実験病理部	
李 志宏	新疆維吾爾医学電腦研究中心	関東通信病院付属医用心情報研究所第 4 研究部	
魏 憲義	衛生部成都生物製品研究所	北里大学医学部分子生物学	
劉 曉非	遼寧中医学院薬理学教室	東海大学医学部薬理学	
梁 緒国	山東医科大学薬理教研室	新潟大学医学部薬理学	
陳 福君	瀋陽薬学院	富山医科薬科大学薬学部	
王 国英	第一軍医大学解剖学教室	金沢医科大学解剖学 1	
曲 非	中国医科大学	金沢医科大学生理学 1	
楊 震	蘇州医学院附属小児病院外科	金沢医科大学小児外科学	
薛 恭良	上海第二医科大学附属宝钢医院	信州大学医学部内科学第 2	
張 鵬	上海医科大学	岐阜薬科大学薬学部薬理学	
王 軍志	蘭州医学院薬理教研室	三重大学医学部薬理学	
葉 立波	第 4 軍医大学西京医院生化系	京都大学医学部医化学第 1	
田 大力	中国医科大学附属第一医院胸外科	京都大学結核胸部疾患研究所胸部外科学	
李 永淳	延辺医学院病態生理学教室	京都府立医科大学麻酔学	
呉 在平	上海華東病院	大阪大学歯学部歯科補綴学第 1	
楚 立	河北中医学院薬理教研室	岡山大学薬学部薬剤学	
宋 建国	皖南医学院	愛媛大学医学部薬理学	
段 樹民	南通医学院海医生理研究室	九州大学医学部生理学第 1	
紅 英	内蒙古自治区中蒙医院	福岡大学医学部内科学第 2	
周 桂桐	天津中医学院	久留米大学医学部麻酔学	
鄧 漢湘	湖南医学院医学遺伝学研究室	長崎大学原爆後障害医療研究施設先天異常部門	
林 意群	第一軍医大学医学物理教研室	熊本大学医学部放射線医学	
褚 以	青海省人民医院	国立熊本病院	
和倫高娃	青海省高原医学科学研究所	鹿児島大学医学部第 2 病理	

第 4 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
邵 常順	山東医科大学生物学教室医学遺伝学研究室	北海道大学理学部附属遺伝子実験施設	
金 一和	中国医科大学衛生系	秋田大学医学部公衆衛生学	
靖 大錚	天津市中医医院針灸科	秋田県立脳血管研究センター神経内科	
丁 梅	中国医科大学法医学系法医血清教室	山形大学医学部法医学	
趙 樹華	白求恩医科大学第 1 臨床学院	東北大学医学部附属リハビリテーション医学研究施設	
孫 栄金	浙江省中医薬研究所	東北大学薬学部衛生化学	
廖 世新	遼寧中医学院	埼玉医科大学神経内科学	
孫 桂珍	哈爾浜医科大学附属第 3 医院	埼玉医科大学皮膚科学	
曲 建香	佳木斯医学院附属口腔医院	明海大学歯学部歯周病学	
鄭 保忠	華西医科大学薬学院有機化学科	千葉大学薬学部医薬品素材学	
劉 興旺	中国医科大学衛生系栄養と食品衛生学教研室	東京大学医学部保健学科人類生態学	
林 原	大連医学院	群馬大学医学部薬理学	
張 令達	安徽医科大学附院口腔科	東京医科歯科大学歯学部口腔外科学第 2	
艾 紅軍	中国医科大学附属口腔医院	東京医科歯科大学医用器材研究所精密機械	
蔡 京華	山西医学院第 2 附属医院眼科教研室	帝京大学医学部眼科学	
冉 玉平	華西医科大学附 1 院皮膚科	順天堂大学医学部皮膚科学	
陳 宗孚	蘇州医学院附属第 1 医院	慶應義塾大学医学部外科学	
朱 継文	中国薬科大学	慶應義塾大学医学部附属薬化学研究所	
陸 永建	新疆医学院第 1 附属医院神経外科	東京慈恵会医科大学脳神経外科学	
尹 華清	南京鉄道医学院	東京慈恵会医科大学附属青戸病院内科学	
朱 永智	天津医薬科学研究所	明治薬科大学薬学部生薬学	
崔 応渉	延辺医学院薬学部	星薬科大学医薬品化学研究所有機合成化学	
趙 秋利	黒龍江省衛生管理幹部学院看護学部	聖路加看護大学	
王 北嬰	中華人民共和国衛生部薬政局	厚生省薬務局企画課	
王 風民	黒龍江省衛生庁	総合病院国保旭中央病院	
馮 威健	河北医学院附属第 4 院化学療法科	国立がんセンター化学療法部	
李 純徳	同済医科大学附属協和医院	国立がんセンター病院内科	
于 永尧	哈爾浜医科大学附属第 2 医院神経内科	北里大学医学部内科学	
汪 南平	西安医科大学第 2 附属医院皮膚科	北里大学医学部皮膚科学	
高 緒蘭	白求恩医科大学	山梨医科大学第 1 病理学	
李 紅彬	河南省中医研究院	富山医科薬科大学和漢薬研究所	
孫 保福	蘇州医学院附属 1 院核医学科	金沢大学医学部核医学	
袁 世文	瀋陽軍区総医院心血管中心内科	金沢大学医学部外科学第 1	
崔 福德	瀋陽薬学院	岐阜薬科大学薬学部製剤学	
於 長華	首都児科研究所	名古屋大学医学部小児科学	
臧 偉進	西安医科大学基礎部電生理研究室	京都大学医学部生理学第 2	
謝 人明	陝西省中医薬研究院	京都大学医学部薬理学第 2	
謝 桂嵐	中国医科大学附属第 1 病院	京都大学医学部内科学第 1	
孟 高淵	華西医科大学衛生学院医検教研室臨床生化組	京都大学医学部外科学第 2	
姚 正生	西安医科大学	京都大学医学部核医学	
許 琳	福建省中医薬研究所	京都薬科大学薬学部生薬学	
孫 善全	重慶医科大学人体解剖学	大阪大学医学部解剖学第 1	
陳 長春	西安医科大学第 2 附属医院心臓外科	大阪大学医学部外科学第 1	
王 鳳君	白求恩医科大学第 3 臨床学院麻醉科	大阪医科大学麻醉学	
安 行方	長春中医学院附属病院婦人科	大阪医科大学産婦人科学	
錢 明春	華西医科大学口腔医学院予防科	大阪歯科大学歯学部小児歯科学	
李 建波	中国医学科学院血液学研究所	広島大学原爆放射能医学研究所血液学研究部門	
李 丹宇	上海長征医院心内科	香川医科大学内科学	
劉 静	遼寧省中医研究院	香川医科大学内科学	
龍 文清	江西医学院第 1 附属医院内科	産業医科大学第 2 内科学	
王 鑄人	西安医科大学神経生理研究室	九州大学医学部生理学第 2	
李 玉雨	延辺医学院微生物学教研室	九州大学医学部微生物学	

第5期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
李 韵倩	安徽蚌埠医学院	北海道大学医学部附属病院眼科学	
毛 新	華西医科大学精神科遺伝室	北海道大学理学部動物染色体研究施設	
宋 剛	山東医科大学生理教研室	札幌医科大学生理学	
齊 為民	新郷医学院	札幌医科大学病理学第 1	
趙 金平	同済医科大学附属同済医院胸外科	札幌医科大学附属病院外科学第 2	
李 振華	中国中医研究院西苑医院	山形大学医学部内科学第 2	
汲 娟娟	吉林医学院檢驗学部	東北大学医学部応用生理学	
鄭 健	第 3 軍医大学第 2 附属医院	東北大学医学部附属脳疾患研究施設神経内科部門	
郭 躍	北京医科大学第 1 臨床医院	群馬大学医学部附属病院内科学第 3	
程 偉	黒龍江中医学院医学史教研室	自治医科大学精神医学	
呂 延偉	遼寧中医学院	埼玉医科大学泌尿器科学	
徐 秋萍	浙江医科大学附属 1 院内科	千葉大学医学部内科学第 2	
孫 利民	上海第 2 医科大学附属仁済医院肺科	千葉大学医学部附属肺癌研究施設第 1 臨床研究部	
金 政錫	黒龍江省医院	東京大学医学部外科学第 1	
羅 思勤	同済医科大学医学研究中心分子生物系	東京大学医科学研究所生物物理化学研究部	
李 春元	寧夏医学院附属医院	東京医科歯科大学歯学部口腔外科学第 1	
薛 玲	中国医学科学院薬物学研究所	慶應義塾大学医学部薬理学	
邵 国光	白求恩医科大学第 2 臨床学院胸外科	東京医科大学病院外科学 1	
張 希龍	第 3 軍医大学第 2 附属医院	東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所循環器外科学	
劉 蔚	中国医科大学	東京理科大学薬学部生化学	
周 新華	湖北医学院人体解剖教研室	杏林大学医学部第 2 解剖学	
李 年魁	貴陽中医学院	杏林大学医学部第 1 内科学	
石 力夫	上海長海医院薬剤科	東京薬科大学薬学部薬用植物学	
汪 玲	上海医科大学公共衛生学院	国立公衆衛生院母性小児衛生学部	
梅 家模	江西省衛生防疫站	国立公衆衛生院疫学部	
佟 寧	南寧市広西區衛生防疫站	国立予防衛生研究所村山分室ウイルス中央検査部	
孫 莉	中国医学科学院腫瘍医院	国立小児病院麻酔科	
曹 元華	中国医学科学院皮膚病研究所	国立多摩研究所第 1 研究部病理研究室	
邢 高岩	中華人民共和国衛生部医療衛生国際交流センター	財団法人日中医学協会	
丘 勇超	広州中医学院附属医院外科	横浜市立大学医学部病院外科学第 2	
王 鋼	南京中医学院附属医院	北里大学医学部泌尿器科学	
高 秀華	吉林医学院	東海大学医学部免疫学	
湯 家銘	上海医科大学実験動物部	財団法人実験動物中央研究所動物医学研究室	
丁 莉莉	山東濱州医学院	金沢大学医療技術短期大学部衛生技術学科	
于 愛鳴	中国医科大学	岐阜大学医学部生化学	
陳 志偉	蘇州医学院附属第 1 医院	藤田保健衛生大学医学部内科学	
張 安	上海市第 4 人民医院内科	京都大学医学部附属病院内科学第 3	
郭 科軍	中国医科大学第 1 附属医院	京都大学医学部附属病院婦人科学産科学	
劉 立	第 4 軍医大学	京都大学医学部附属病院神経内科学	
于 安定	広東省心血管病研究所心動能室	大阪大学医学部附属病院内科学第 1	
秦 普	上海市第 1 人民医院放射科	大阪大学医学部附属病院放射線医学	
陳 亜岡	浙江医科大学附属 1 院 1 病房	大阪市立大学医学部附属病院内科学第 3	
劉 芸萍	上海長海医院児科	国立循環器病センター病院小児科	
李 祥安	泰山医学院生化学教研室	国立循環器病センター研究所病因部	
賈 国良	第 4 軍医大学第 1 附属医院循環器病内科教室	兵庫県立尼崎病院内科	
牛 乃謙	天津医学院免疫学教研室	兵庫県立東洋医学研究所	
陸 雲飛	中国中医研究院研究生部	岡山大学医学部生理学第 2	
劉 建康	華北煤炭医学院	岡山大学医学部附属脳代謝研究施設機能生化学部門	
楊 秀珍	遼寧省基礎医学研究所	広島大学医学部細菌学	
李 千	遼寧省人民病院	山口大学医学部内科学第 1	
羅 毅	北京基礎医学研究所	香川大学農学部	
張 広涵	上海医科大学腫瘍医院腫瘍外科	久留米大学医学部外科学第 1	
趙 栄祥	浙江中医学院附属医院耳鼻咽喉科	久留米大学医学部耳鼻咽喉科	

第6期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
付 国輝	哈爾濱医科大学	札幌医科大学学生化学第 1	
林 雪峰	佳木斯医学院口腔系矯形科	岩手医科大学歯学部歯科補綴学第 2	
趙 継和	大連医学院衛生学教研室	東北大学抗酸菌研究所薬理学	
馮 永山	中国医科大学第 1 附属医院臨床免疫研究室	東北大学医学部細菌学	
姚 文慶	遼寧省腫瘤研究所流行病学研究所	東北大学医学部公衆衛生学	
成 煥吉	白求恩医科大学第 1 臨床学院兒科	国立仙台病院臨床研究部	
高 鵬	四川省医学科学院寄生虫防治研究所	山形大学医学部寄生虫学	
白 冰	天津市腫瘤医院病理科	筑波大学医学専門学群病理学	
何 仲濤	湖北省中医薬研究院小児内科	筑波大学医学専門学群外科学（泌尿器）	
任 傑紅	雲南省薬品検驗所儀器分析室	千葉大学薬学部薬効・安全性学	
徐 金耀	上海第 2 医科大学衛生管理系	東京大学医学部保健学科保健管理学	
丁 虎	同済医科大学基礎医学部	東京慈恵会医科大学附属青戸病院内科学	
曹 彤	浙江省人民医院口腔科	昭和大学歯科病院第 1 口腔外科学	
顧 方曙	南京中医学院基礎部營養康復專業	東京医科大学附属病院老年病学	
顧 虹	北京市心肺血管医療研究中心安貞医院小児心臓科	東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所循環器小児科	
滕 嘉敏	同済医科大学生殖医学中心臨床生殖内分泌研究室	日本大学医学部産婦人科学	
石 継明	北京中医学院気功所生理室	日本医科大学生理学第 1	
回 愛民	河北医学院附属第 4 医院胸外科	国立がんセンター病院特別保護病棟	
殷 東風	遼寧中医学院附属医院内科	国立がんセンター病院内科	
周 彩存	蚌埠医学院附属医院内科	国立療養所東京病院	
燕 鳴	中華医学会中華医学雑誌編輯部	金原出版株式会社	
程 能能	皖南医学院薬理教研室	帝京大学薬学部衛生化学	
陸 小左	天津中医学院中医系基礎理論教研室	東海大学医学部精神科学	
付 守廷	瀋陽薬学院薬理研究中心	新潟大学医学部薬理学	
鄭 年新	遼寧省人民医院薬剤科	富山医科薬科大学医学部薬剤部	
倪 健偉	北京中医学院中薬系	富山医科薬科大学和漢薬研究所生物試験	
玄 東沢	延辺医学院附属医院医療系骨科	福井医科大学整形外科	
孫 昕	新疆医学院第 1 附属医院普外科	福井医科大学外科学（1）	
祝 向紅	泰山医学院生化教研室	信州大学医学部附属心脈管病研究施設脂質生化学	
王 宇明	第 3 軍医大学西南医院伝染科	岐阜大学医学部内科学第 1	
劉 建華	浙江医科大学附属第 1 医院口腔科	岐阜大学医学部口腔外科学	
林 崇韜	白求恩医科大学口腔医学院口腔内科	朝日大学歯学部歯周病学	
楊 和平	湖北省腫瘤医院看護部	国立がんセンター病院看護部	
韓 驊	第 4 軍医大学生物化学教研室	京都大学医学部医科学第 1	
蘇 輝	白求恩医科大学組織胚胎教研室	京都大学医学部解剖学第 2	
張 紅星	中国医学科学院腫瘤医院放射治療科	京都大学医学部附属病院放射線医学	
何 静宜	広東医薬学院薬物分析教研室	京都大学薬学部薬品分析学	
戚 曉東	中国医科大学腫瘤研究所胃癌研究室（腫瘤科）	京都府立医科大学公衆衛生学	
朱 和	西安医科大学薬学系薬理教研室	京都府立医科大学薬理学	
馬 世平	中国薬科大学中薬薬理教研室	近畿大学薬学部薬用植物学・漢方薬学	
鐘 貴輝	華西医科大学生物医学工程研究室	国立循環器病センター研究所脈管生理部血液流動研究室	
曲 志強	青島医学院病理生理教研室	国立循環器病センター研究所病因部	
杜 建新	北京宣武医院神経外科脳移植研究室	和歌山県立医科大学附属病院外科学	
丁 国華	黒龍江省第 2 医院薬剤科	島根医科大学薬剤部	
程 曉曙	江西医学院第 2 附属医院内科	岡山大学医学部内科学第 1	
邢 福祺	哈爾濱医科大学附属第 1 医院産科婦人科	徳島大学医学部産科婦人科学	
王 路明	白求恩医科大学細胞生物学研究室	九州大学医学部機能高分子設計学	
張 建宝	中国中医研究院中薬研究所	九州大学薬学部薬剤学	
李 俊林	中国医科大学附属口腔病院口腔外科教室	九州大学歯学部口腔外科学第 1	
張 強	四川抗菌素工業研究所提煉室	福岡大学薬学部薬剤学	
裴 海成	延辺医学院内科教研室第 1 内科	長崎大学医学部附属病院内科学第 1	
劉 俊	中国予防医学科学院流行病微生物学研究所	鹿児島大学医学部ウイルス学	

第 7 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
劉 応現	新郷医学院微生物学免疫学教研室	札幌医科大学内科学第 4	
尹 維民	中国人民解放军北京部隊総医院神経内科	秋田県立脳血管研究センター神経内科学	
徐 永健	同済医科大学附属同済医院内科	東北大学抗酸菌研究所附属病院内科学	
羅 偉生	広西中医学院内科学教研室	国立栃木病院内科学	
孫 小燕	青海省人民医院神経内科	群馬大学医学部神経内科	
陳 傑	中国医学科学院医学情報研究所	筑波大学医学専門学群社会医学系看護学	
蔡 青	上海第 2 医科大学生物医学工程系	国立工業技術院機械技術研究所	
初 傑	遼寧中医学院基礎部中薬教研室	埼玉医科大学薬理学	
華 永良	江蘇省人民医院	北里大学医学部医療情報学	
耿 勇志	蘇州医学院放射医学系医学放射生物教研室	放射線医学総合研究所生物研究部第 1 研究室	
張 菊生	安徽中医学院中薬系物理化学教研室	慶應義塾大学医学部薬剤部	
徐 正正	南昌市中西医结合医院中医科	東京女子医科大学糖尿病センター内科 3	
米 振国	山西医学院第 1 附属医院泌尿器科	東京医科大学泌尿器科学	
紀 京平	北京結核病医院病理科	国立がんセンター研究所病理部	
潘 永平	上海医科大学衛生化学教研室	国立公衆衛生院衛生工学部	
曾 淑蘭	湖南人民医院	国家公務員等共済組合連合会虎の門病院	
逢 黎毅	山東医科大学附属医院婦産科	東京慈恵会医科大学産婦人科学	
宋 友華	北京医院	星薬科大学薬学部薬剤学	
方 劍喬	浙江中医学院針灸推拿系経絡教研系	昭和大学医学部第 1 生理学	
陳 之英	中国協和医科大学国際交流処	昭和大学医学部公衆衛生学	
于 殿文	中日友好医院外事処	財団法人日中医学協会	
劉 昭純	山東中医学院中医系	横浜市立大学医学部リハビリテーション科	
常 青	中国医科大学病態生理学	東海大学医学部内科学 6	
朱 順和	上海第 2 医科大学仁済医院心臓内科	山梨医科大学内科学第 2	
林 玲	福建医学院附属二院内科	山梨医科大学内科学第 3	
何 威	中国医科大学組織胚胎学教研室	浜松医科大学解剖学第 2	
袁 国祥	南通医学院病理生理教研室	浜松医科大学内科学第 3	
朱 宝利	中国医科大学法医学部法医病理教室	金沢大学医学部法医学	
金 徳均	哈爾濱医科大学附属第二病院耳鼻咽喉科	金沢医科大学耳鼻咽喉科学	
李 慶和	天津中医学院中医系中薬教研室	福井医科大学環境保健学	
劉 迎春	白求恩医科大学口腔医院口腔外科	名古屋大学医学部口腔外科	
張 曉鵬	中国医科大学第一臨床学院放射線科	藤田保健衛生大学坂文種報徳会病院内科学	
童 茂栄	南京軍区南京総医院呼吸科	藤田保健衛生大学医学部内科学	
楊 常青	黒龍江中医学院中医基礎理論教室	愛知医科大学精神科学	
李 南方	新疆維吾爾自治区人民医院救急中心	三重大学医学部救急部	
郭 在培	華西医科大学皮膚科	京都大学医学部皮膚病学微生物学	
呉 文焰	福州市第 2 医院内科	京都大学医学部内科学第 2	
李 堯華	吉林医学院医学部生化学教室	大阪大学医学部内科学第 3	
劉 鉄峰	吉林医学院附属医院放射線科	大阪大学医学部中央放射線部	
孟 維	甘肅省人民医院心内科	国立循環器病センター研究所共通実験室	
郝 衛東	北京医科大学公共衛生学院毒理教研室	岡山大学薬学部薬品化学	
李 曉光	山東省千佛山医院外科	徳島大学医学部整形外科	
周 南南	江西医学院微生物教研室	徳島大学医学部寄生虫学	
黎 箴輝	湖北医学院生理学教研室	産業医科大学第 1 生理学	
張 啓偉	山東医科大学教学医院濟南市中心医院胸心血管外科	九州大学医学部附属心臓血管研究施設外科部門	
林 少逸	福建医学院附属第 2 医院外科	国立病院九州がんセンター病院外科	
隋 星衛	山東医科大学附属医院児科	国立福岡中央病院第 4 内科	
王 好問	海南省人民医院心血管内科	社会保険小倉記念病院循環器科	
彭 崇基	広西医学院衛生系児少衛生学教研室	長崎大学医学部衛生学	
楊 栄寧	広西腫瘍研究所頭頸科	熊本大学医学部耳鼻咽喉科学	

第 8 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
姚 国慶	上海市衛生防疫站病毒科	北海道大学免疫科学研究所血清学部門	
唐 明輝	白求恩医科大学口腔医学院口腔内科	北海道大学歯学部口腔生化学	
金 文昊	延边医学院附属医院腫瘍科	東北大学医学部外科学第 1	
宋 敏	中国医科大学病理学教研室	秋田大学医学部病理学第 1	
陶 国忠	遼寧省腫瘤研究所生物化学研究室	秋田大学医学部生化学第 2	
李 康傑	延边医学院附属医院骨科	千葉大学医学部整形外科	
関 洪全	遼寧中医学院微生物学教室	千葉大学真核微生物研究センター感染機構分野	
王 松靈	北京口腔医院口腔放射	東京医科歯科大学歯学部歯科放射線学	
孫 中華	白求恩医科大学第 1 臨床医学院内 1 科	東京女子医科大学内分泌疾患総合医療センター内科 2	
王 広樹	白求恩医科大学基礎医学院有機化学研究室	昭和大学薬学部生薬学・植物薬品化学	
王 玉英	中華全国中医学会中国医薬学報編輯部	東邦大学医学部心療内科学	
胡 啓之	江蘇省衛生防疫站毒理研究室	北里大学薬学部衛生化学	
縄 金房	陝西省薬品検驗所抗生素室	国立予防衛生研究所化学部化学療法剤室	
張 素華	遼寧省腫瘤医院腫瘍内科	国立がんセンター薬物療法部	
高 思華	中国中医研究院研究生部	国立がんセンター内科	
朴 信玉	延边医学院附属医院外科	国立病院医療センター看護部	
劉 長喜	黒龍江省衛生防疫站食品衛生監督検驗所	国立健康栄養研究所応用食品部	
呉 強	蘭州医学院神経病学研究所神経外科	和歌山県立医科大学附属病院外科学	
徐 威	黒龍江中医学院呼吸病研究室	横浜市立大学医学部薬理学	
陳 思姪	華西医科大学口腔医学院	日本歯科大学新潟歯学部歯科補綴学第 2	
李 亜明	中国医科大学附属第 1 医院核医学科	金沢大学医学部核医学	
陳 衛民	中国医科大学附属 2・3 病院麻酔科	金沢大学医学部麻酔学	
呉 禎久	延边医学院基礎医学部薬理教研室	山梨医科大学薬理学	
孫 英傑	中国医科大学人体解剖学教室	信州大学医学部解剖学第 2	
馬 峰	蘇州医学院附属児童医院内科	信州大学医学部小児科学	
陳 明華	上海医科大学薬学院生薬学教研室	岐阜薬科大学薬学部生薬学	
李 顕筑	黒龍江省中西医结合研究所老年病研究室	名古屋大学医学部内科学第 3	
王 穎	遼寧中医学院附属医院内科急診室	名古屋大学医学部内科学第 3	
陳 一鳴	上海市第四人民医院外科	愛知医科大学整形外科	
何 健安	上海市医学科学技术情報研究所編輯室	愛知医科大学情報処理センター	
趙 傑剛	洛陽医学専科学校附属医院護理部	東京医科歯科大学看護部	
劉 愛民	中国医学科学院輸血研究所血漿蛋白室	京都府赤十字血液センター	
金 念祖	南京医学院予防医学系衛生化学教研室	京都大学医学部衛生学	
孫 立辛	西安医科大学脳和神経研究室	京都大学医学部分子遺伝学・医化学第 2	
朱 迅	白求恩医科大学基礎医学院免疫学教研室	京都大学医学部附属免疫研究施設生物学部門	
魏 于全	華西医科大学病理	京都大学放射線生物研究センター晩発効果研究部門	
范 新芳	哈爾浜市第 1 医院口腔科	大阪大学歯学部口腔治療学	
郭 成秀	天津第 2 医学院附属第 1 中心医院婦産科	大阪市立大学医学部産科婦人科学	
李 松	昆明医学院口腔系口腔解剖生理	大阪歯科大学歯学部生理学・口腔生理学	
董 良	遼寧省労働衛生研究所職業病科	奈良県立医科大学第 2 内科学	
李 曉陽	哈爾浜市第 1 医院消化外科	奈良県立医科大学第 1 外科学	
郁 立群	流花橋医院伝染病科	島根医科大学外科学第 2	
関 衛平	江西医学院寄生虫学教研室	岡山大学医学部寄生虫学	
劉 幽萃	浙江中医学院婦人科	岡山大学医学部産科婦人科学	
張 玉祥	河北省中医薬研究所臨床部	広島大学医学部内科学第 3	
蔣 昆	大連医学院附属第一病院神経外科	香川医科大学脳神経外科学	
肖 勇	佳木斯医学院生物学教研室	高知医科大学第 1 解剖学	
張 波	四川省労働衛生職業病防治研究所核技術応用室	福岡大学医学部内科学第 2	
王 潔	中華人民共和国衛生部地方病防治司	産業医科大学生態科学研究所臨床疫学	
李 玲	中国医科大学第一附属医院内分泌科	琉球大学医学部内科学第 2	

第 9 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
王 先安	海南省人民医院整形外科	北海道大学医学部整形外科	
呉 敏	瀘州医学院微生物教研室	東北大学医学部病理学第 1	
袁 群	中国中医研究院广安門病院第 2 内科	東北大学医学部内科学第 3	
劉 成起	国家中医药管理局医政司	東北大学医学部病院管理学	
薛 音歆	雲南省薬品検驗所生物測定室	群馬大学医学部薬理学	
曾 春林	湖南腫瘍医院放射治療科	栃木県立がんセンター放射線治療部	
高 秀来	首都医学院解剖教研室	筑波大学医学専門学群基礎医学系解剖学	
劉 賢臣	山東医科大学衛生系社会医学与衛生管理教研室	筑波大学医学専門学群社会医学系精神衛生学	
張 建新	華西医科大学公共衛生学院塵肺研究室	埼玉医科大学公衆衛生学	
譚 明旗	中国医科大学 2・3 医院内科	千葉大学医学部附属肺癌研究施設第 2 臨床研究部	
宋 柏林	長春中医学院	東京医科歯科大学医学部内科学第 3	
張 抒	黒龍江省医院口腔科	東京医科歯科大学歯学部小児歯科学	
金 抗	遼寧省中医研究院附属病院救急科	日本医科大学医学部救急医学	
金 生国	中華人民共和国衛生部医政司	東京大学医学部保健学科保健管理学	
韓 晶岩	遼寧省中医研究院病態生理教室	慶應義塾大学医学部内科学	
張 力捷	遼寧省衛生職工医学院図書館	財団法人国際医学情報センター	
包 海燕	内蒙古精神病防治院	東京医科大学精神医学	
劉 林祥	泰山医学院附属医院放射線科	国立がんセンター病院放射線診断部	
周 旭東	中国人民解放军北京軍区総医院	国立がんセンター研究所病理部	
肖 衍初	甘肅中医学院基礎部	北里研究所附属東洋医学総合研究所	
孫 成均	華西医科大学公共衛生学院	国立公衆衛生院地域衛生環境学部	
魏 梅雄	上海市寄生虫病防治研究所免疫診断研究室	東京大学医科学研究所寄生虫研究部	
王 春潔	中華人民共和国衛生検疫総所中華予防医学会国境検疫学会	国立予防衛生研究所「エイズ」研究センター「エイズ」検査室	
于 修成	中華人民共和国衛生部全国愛国衛生運動委員会	昭和大学医学部公衆衛生学	
雷 建新	新疆維吾爾自治区人民医院救護中心内科	東邦大学医学部第 2 内科学	
劉 維賢	中国医科大学附属 2・3 医院口腔科	昭和大学歯学部第 1 口腔外科学	
李 勤	白求恩医科大学第 3 臨床学院眼科	北里大学医学部眼科学	
魏 慶興	中国中医研究院針灸研究所臨床第 3 研究室	東海大学医学部内科学 6	
楊 德	華西医科大学微生物免疫学教研室	帝京大学薬学部薬品化学	
彭 小丁	中国人民解放军 3 0 9 医院内分泌学	山梨医科大学内科学第 3	
楊 秀英	中日友好医院病理科	信州大学医学部病理学第 1	
姚 建	金陵医院腎病中心腎臓科	新潟大学医学部附属腎研究施設免疫病態学部門	
羅 大力	哈爾濱医科大学基礎医学部薬理教研室	新潟大学医学部薬理学	
李 柔	中国医科大学第 1 附属病院小児科	名古屋市立大学医学部小児科学	
高 長明	江蘇省腫瘍防治研究所	愛知県がんセンター研究所疫学部	
陶 謙民	浙江医科大学附属第一医院心内科	藤田保健衛生大学総合医科学研究所心血管学研究部門	
劉 修恒	湖北医学院附属第一医院泌尿外科	滋賀医科大学泌尿器科学	
李 楽紅	中国中医研究院基礎理論研究所	京都府立医科大学第 1 病理学	
張 喆人	上海市楊浦区中心医院	大阪府立成人病センター病院第 1 外科	
鄭 艷珍	湖南医科大学附属一院中心実験室	国立循環器病センター研究所病因部	
馬 寧生	天津市胸科医院天津市心血管病研究所	和歌山県立医科大学外科学（胸部）	
肖 照岑	天津医学院中医系温病教研室	兵庫県立東洋医学研究所	
金 英実	延辺医学院附属医院三内科	神戸市立中央市民病院 4 階集中治療部	
杜 麗娜	南通医学院附属医院消化内科	岡山大学医学部内科学第 1	
申 捍淑	哈爾濱市第 1 専科医院 8 病棟	福岡大学医学部精神医学	
胡 彬	山西省人民医院内科	久留米大学医学部内科学第 2	
尹 曉明	福建省立医院骨外科	労働福祉事業団総合せき損センター	
胡 達吉	海南医学院微生物学教研室	長崎大学熱帯医学研究所ウイルス学部門	
周 瑞海	山東医科大学附属医院中心実験室	大分医科大学臨床薬理学	

第 10 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
劉 沢林	河北医学院第 4 医院内二科	北海道大学医学部内科学第 3	
周 芳堅	湖南医科大学附属第 1 医院泌尿外科	北海道大学医学部泌尿器科学	
趙 群	中国医科大学附属第 2・3 医院小児外科	旭川医科大学整形外科科学	
王 喜軍	黒龍江中医学院中薬系	北海道薬科大学薬学部生薬学	
李 敬華	中国医科大学附属第 1 病院臨床疫学教室	東北大学医学部公衆衛生学	
孫 大為	北京協和医院婦産科	東北大学医学部産科学婦人科学	
陳 超	中華医学会对外連絡部	仙台市衛生研究所	
杜 金行	中日友好医院中医心腎内科	埼玉医科大学内科学第 2	
劉 莉	黒龍江中医学院附属医院循環内科	獨協医科大学越谷病院循環器内科	
李 悦欣	中国医科大学基礎医学部生理学教研室	東京大学医学部生理学第 1	
金 殷植	白求恩医科大学第 3 臨床学院外科	東京大学医学部外科学第 1	
張 社団	西安医科大学電生理研究室	東京医科歯科大学難治疾患研究所循環器病部門	
瑪依努爾・尼雅孜	新疆維吾爾自治区人民医院婦産科	日本医科大学産婦人科学	
金 在順	牡丹江医学院免疫研究室	順天堂大学医学部免疫学	
奚 剛	黒龍江省中西医结合研究所内科	順天堂大学医学部内科学	
張 林川	新疆維吾爾自治区人民医院放射科 C T 室	東京女子医科大学附属脳神経センター神経放射線科	
許 慶友	河北省中医薬研究所	東京慈恵会医科大学第 2 内科学	
張 世枢	遼寧省中医研究院心脳血管病研究室	東京慈恵会医科大学第 4 内科学	
張 亨	包頭市中蒙医研究所	昭和大学医学部第 1 薬理学	
周 麗莉	遼寧省人民医院眼科	東邦大学医学部附属大橋病院眼科学第 2 講座	
申 光	中華人民共和国衛生部外事司聯絡処	順天堂大学医学教育研究室	
秦 旭栄	河北医学院薬学系天然薬物化学教研室	東京薬科大学薬学部第 1 生薬学	
丁 小凡	甘肅省腫瘍研究所	国立衛生試験所変異遺伝部	
張 偉華	甘肅省腫瘍医院内科	国立がんセンター病院内科	
李 平	中国医学科学院医学情報研究所	財団法人国際医学情報センター	
馬 剛	白求恩医科大学第 1 臨床医学院皮膚科	北里大学医学部皮膚科学	
劉 星星	衡陽医学院第 1 附属医院泌尿外科	北里大学医学部泌尿器科学	
印 文利	遼寧省衛生職工医学院病理解剖教研室	東海大学医学部病理学 2	
洪 煒	北京医科大学医学心理学教研室	東海大学医学部精神科学	
王 垂傑	遼寧中医学院附属医院内科	昭和大学藤が丘病院内科学	
呉 春珍	江西省薬品検驗所	富山医科薬科大学薬学部和漢薬研究所資源開発	
韓 春茂	浙江医科大学附属第 2 医院焼傷科	金沢医科大学形成外科学	
秦 春林	哈爾浜医科大学附属第 1 医院口腔外科	朝日大学歯学部口腔外科学第 1	
黄 樹明	黒龍江中医学院生理研究室	名古屋大学医学部生理学第 1	
陳 鳳鳴	大連医学院附属第 1 医院眼科	中部労災病院眼科	
于 向民	青島医学院組織胚胎学教研室	京都大学医学部解剖学第 2	
金 日基	鷄西砒務局職工総医院小児科	京都大学医学部小児科学	
楊 麗敏	蘭州医学院薬剂教研室	京都薬科大学薬学部製剤学	
呂 亜浜	黒龍江省中医研究院生化研究室	大阪大学医学部生化学	
姚 玉峰	浙江医科大学附属第 2 医院眼科	大阪大学医学部眼科学	
陳 祖林	衡陽医学院人体解剖教研室	大阪大学ハニイテイカ教育研究センター高次神経医学	
唐 光慶	衛生部成都生物製品研究所医学生物工程	大阪大学微生物病研究所細菌血清学部門	
陳 在中	同済医科大学附属同済病院放射線科	奈良県立医科大学放射線医学	
趙 丹丹	江西医学院病理生理教研室	岡山大学医学部生理学第 2	
向 大昌	海南医学院生理教研室	広島大学医学部生理学第 1	
葛 秀清	南通医学院附属医院内科	広島大学原爆放射能医学研究所血液学研究部門	
任 愛国	華北煤炭医学院予防医学系（衛生系）	産業医科大学産業生態科学研究所環境疫学	
王 曉宇	北京市第六医院内科	国立病院九州がんセンター内科	
雛 文田	西安医科大学第 1 附属医院	長崎大学医学部内科学第 1	
張 庭立	遼寧中医学院基礎部方剂教研室	長崎大学医学部内科学第 2	
王 沙燕	湖南中医学院第 1 附属医院内科心肺病区	鹿児島大学医学部内科学第 3	

第 11 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
薛 毅	西安医科大学微生物教研室	北海道大学免疫科学研究所血清学部門	
呉 恵霞	同済医科大学環境微生物学教研室	札幌医科大学衛生学	
郝 金瑞	北京医科大学泌尿外科研究所	札幌医科大学泌尿器科学	
楊 黄恬	南通医学院基礎部薬理教研室	山形大学医学部薬理学	
黄 毅林	湖南医科大学附属第 1 医院神経科	東北大学医学部附属脳疾患研究施設神経内科部門	
甄 雅賢	遼寧省人民医院皮膚科	東北大学医学部皮膚科学	
朱 邦豪	甘肅中医学院	群馬大学内分泌研究所比較内分泌学	
王 多	瀋陽医学院基礎部組織胚胎学教研室	筑波大学医学専門学群基礎医学系解剖学	
王 曉里	河北医学院第 2 附属医院口腔顎面外科	千葉大学医学部歯科口腔外科学	
劉 曉平	遼寧省腫瘍医院外科	千葉県がんセンター画像診断部	
陳 錦秀	福建中医学院附属人民医院	東京大学医学部保健学科看護学	
梅 和珊	河北省計画生育科学研究所	東京大学農学部獣医生理学	
王 紅綱	青島市第 2 人民医院内科	順天堂大学医学部内科学	
趙 飛躍	中国中医研究院針灸研究所生理室	東京医科歯科大学医学部薬理学	
張 玲妹	中国医学科学院皮膚病研究所	東京医科歯科大学附属病院看護部	
蔡 靈芝	白求恩医科大学附属第 3 病院小児科	日本医科大学附属第 1 病院小児科学	
潘 美善	延辺医学院衛生学教室	慶応義塾大学医学部衛生学・公衆衛生学	
張 肅西	北京急救中心内科	東京女子医科大学日本心臓血圧研究所循環器内科学	
唐 小海	四川省腫瘍医院婦瘤科	国立がんセンター病院第 2 外来部婦人科	
張 学	中国医科大学	国立がんセンター研究所腫瘍遺伝子研究部	
袁 曉麗	中華人民共和国衛生部医政司	聖路加国際病院看護部	
欧 周羅	延安医学院	北里大学薬学部衛生化学	
黄 志力	皖南医学院薬理学教研室	北里大学薬学部臨床薬理学	
宋 春華	皖南医学院微生物・免疫学教研室	東京大学医科学研究所免疫学研究部	
孫 步祥	広東省衛生防疫站食品毒物学室	国立公衆衛生院衛生薬学部薬品作用解析室	
賴 心河	中国予防医学科学院流行病学微生物学研究所	国立小児病院感染症研究部	
張 会孝	中国西安衛生検疫所	国立予防衛生研究所「エイズ」研究センター「エイズ」検査室	
劉 鉄榜	湖北医学院第 1 附属病院精神科	国立精神・神経センター武蔵病院	
陳 紅根	江西省寄生虫病研究所診断研究室	埼玉医科大学医動物学	
譚 包生	北京口腔医院口腔外科	鶴見大学歯学部口腔外科学第 1	
張 軍	西安医科大学附属第 2 医院内科	東海大学医学部外科学第 2	
王 丹巧	瀋陽市中医研究所	信州大学医学部内科学第 1	
王 兵兵	湖北省腫瘍医院総合科	信州大学医学部外科学第 1	
胡 斌	濱州医学院附属医院児科	信州大学医学部小児科学	
皮 修軍	湖南医科大学生理教研室	新潟大学医学部薬理学	
李 平	中国中医研究院研究生部	新潟大学医学部附属腎研究施設免疫病態学	
張 雲嶺	北京中医学院第 2 附属医院	富山医科薬科大学医学部生化学（第 1）	
曹 樹更	湖北省薬検専門学校	岐阜薬科大学薬学部生薬学	
羊 裔明	華西医科大学附属第 1 医院内科	名古屋大学医学部内科学第 1	
呉 斌	中国医科大学附属第 2・3 病院泌尿外科	京都府立医科大学泌尿器科学	
朴 志賢	長春中医学院附属医院内 4 科	国立京都病院臨床研究部	
韋 立新	中国人民解放军総医院病理科	大阪市立大学医学部病理学第 1	
王 成文	白求恩医科大学第 3 臨床学院	大阪医科大学産婦人科学	
李 天成	黒龍江省衛生防疫站ウイルス病防治研究所	大阪大学医学部内科学第 1	
高 玉敬	河北医学院薬理教研室	近畿大学医学部薬理学	
孫 麗英	国家中医薬管理局	湧永製薬株式会社品質管理部	
倪 潤洲	南通医学院附属医院消化内科	徳島大学酵素科学研究センター酵素病理学	
劉 陽	遼寧省衛生職工医学院組織胚胎教研室	九州大学医学部解剖学第 3	
宋 文玲	天津民族医院消化疾病研究室	九州大学医学部内科学第 3	
羅 小雲	貴陽医学院内分泌科	九州大学医学部内科学第 3	
錢 立武	山東医科大学附属第 2 医院外科	九州大学医学部外科学第 1	

第 12 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
王 景信	鄭州市兒童醫院兒内科	北海道大学医学部内科学第 3	
史 珞	長春市中心医院麻醉科	北海道大学医学部麻醉学	
章 天喬	杭州市五雲山療養院内科	岩手医科大学医学部内科学第 2	
呉 徳男	延辺医学院附属医院呼吸内科	東北大学医学部内科学第 1	
崔 極哲	吉林省人民医院眼科	東北大学医学部眼科学	
由 嶸	天津中医学院耳鼻咽喉科教研室	東北大学医学部耳鼻咽喉科学	
呉 書儀	武漢総医院呼吸科	自治医科大学呼吸器内科学	
金 永明	河南医科大学第 1 附属病院内科	自治医科大学血液医学研究部門止血血栓	
雷 魁	蘇州医学院放射医学系	群馬大学医学部核医学	
胡 樹新	山西医学院第 2 附属医院内科	埼玉医科大学内科学第 2	
年 莉	天津中医学院方薬学	城西大学薬学部生薬材料学	
郭 斌	山東医科大学附属医院神経内科	千葉大学医学部神経内科学	
王 市農	贛南医学院病理学教研室	千葉県がんセンター病理研究部	
郝 忠林	天津医薬科学研究所免疫室	東京大学医学部生化学第 1	
王 存	蘇州医学院医学情報研究室	東京大学医学部中央医療情報部	
姚 載善	上海第 2 医科大学衛生管理系	東京大学医学部保健学科保健管理学	
雷 軍	河南省医学科学研究所	東京大学応用微生物研究所生物活性	
林 焯唐	河南省腫瘤研究所細胞生物室	東京大学医科学研究所病態薬理学研究部	
蘭 風華	東方医院検驗科	東京大学薬学部衛生化学・裁判化学	
丁 淑蘭	蘇州医学院附属兒童医院	日本大学医学部小児科学	
何 絢	天津中医学院第 1 附属医院兒科	帝京大学医学部小児科学	
孟 祥英	天津市第 3 医院中医科	日本医科大学附属第一病院内科学第 2	
盧 岳華	湖南中医学院	順天堂大学医学部医学教育研究室	
顧 永年	上海中医学院附属曙光医院免疫室	東京女子医科大学微生物学	
王 治平	上海第 2 医科大学附属新華医院兒内科	東京女子医科大学小児科学	
趙 衛国	上海第 2 医科大学附属瑞金医院神経外科	東京女子医科大学附属脳神経センター脳神経外科学	
王 曉軍	山東省立医院内科	東京女子医科大学看護部	
張 海齊	中国薬品生物製品検定所	東京慈恵会医科大学医学情報センター	
張 沢安	鄭州市第 4 人民医院矯形外科	東邦大学医学部整形外科科学	
劉 化俠	泰山医学院附属医院	東邦大学医学部付属大森病院看護部	
顔 妮	国家医薬管理局天津薬物研究院植物化学研究室	国立衛生試験所生薬部	
王 連国	天津市衛生職工医院	東京都臨床医学総合研究所免疫研究部門	
李 忠金	中華人民共和国衛生部外事司	早稲田大学日本語研究教育センター	
金 喜子	延辺医学院附属医院産婦人科	横浜市立大学看護部	
莊 玲麗	海南省人民医院兒科	神奈川県立こども医療センター小児科	
陳 家存	徐州医学院附属第 1 医院泌尿外科	北里大学医学部泌尿器科学	
范 新田	吉林医学院薬理教研室	東海大学医学部薬理学	
郭 華	長春中医学院	東海大学医学部リハビリテーション学	
楊 觀虎	温州医学院中医教研室	富山医科薬科大学医学部内科学（第 1）	
楊 春英	吉林医学院	山梨医科大学解剖学第 2	
楊 俊齊	江蘇省寄生虫病防治研究所	山梨医科大学寄生虫学・免疫学	
潘 曉琳	石河子医学院病理教研室	信州大学医学部外科学第 2	
楊 月枝	河北省医院	長野県長野保健所	
李 宗	福建省薬品検驗所中薬室	名古屋市立大学薬学部生薬学	
韋 宏	広西中医薬研究所化学室	大阪大学薬学部生薬学	
高 柳堤	哈爾濱市中医医院内科	近畿大学医学部内科学第 3	
何 深一	山東医科大学寄生虫学教研室	神戸大学医学部医動物学	
嚴 毓勤	上海市第 9 人民医院内科	神戸大学医学部内科学第 1	
張 敏鳴	浙江医科大学附属第 2 医院放射科	神戸大学医学部放射線医学	
金 成哲	延辺医学院薬学部薬品製造化学教室	徳島大学工学部生物工学科	
潘 焰	天津医薬科学研究所薬理室	九州大学医学部附属心臓血管研究施設内科部門	
杜 崇禧	山西省人民医院放射科	熊本大学医学部放射線医学	

第 13 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
金 木蘭	遼寧省人民医院臨床檢驗センター生化室	北海道大学医学部薬理学第 1	
李 玉山	瀋陽薬学院中薬系	北海道大学薬学部生薬学	
黎 勇	山西医学院衛生系	北海道大学薬学部代謝分析学	
趙 雲鶴	吉林省立病院整形外科	東北大学医学部整形外科	
劉 曉旭	吉林医学院微生物教室	群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設	
陳 素芳	山西省人民医院内分泌科	埼玉医科大学内科学第 4	
李 亜範	吉林省衛生庁外事科	総合病院国保旭中央病院	
鄧 小虹	北京市婦産医院腫瘍科	日本大学医学部産婦人科学	
王 国辰	健康報社編輯	日本医科大学医療管理学	
李 連波	山東省衛生防疫站放射衛生防護科	東京大学医学部放射線健康管理学	
李 宝興	河南医科大学第二附属医院泌尿外科	東京大学医学部泌尿器科学	
陳 志清	南京中医学院温病学	東京医科大学内科学 1	
郭 喜平	白求恩医科大学第二臨床学院胸外科	東京医科大学外科学第 1	
安 秀麗	河南医科大学第二附属医院内科	東京女子医科大学学生化学	
柯 明耀	厦門市第二医院肺科	東京都立駒込病院内科アレルギー・膠原病科	
韓 少良	遼寧省腫瘍病院第 3 外科	東京大学医科学研究所人工臓器移植科	
王 鳴	広州市衛生防疫站寄生虫病科	東京慈恵会医科大学寄生虫学	
黄 才勝	海南省健康教育研究所	東京慈恵会医科大学附属第 3 病院精神医学	
馬 洪波	拱北衛生檢疫所	国立予防衛生研究所村山分室ウイルス第 1 部	
張 新東	遼寧省中医研究院内科	日本医科大学附属第二病院リハビリテーションセンター	
楊 海浜	長春中医学院中医研究所臨床研究室	横浜市立大学医学部内科学第 2	
薛 長勇	中国人民解放军総医院栄養科	横浜市立大学医学部内科学第 3	
孫 光	中国薬品生物製品検定所ワクチン 3 室	東海大学医学部分子生命科学	
謝 院生	広西壮族自治区南溪山病院内科	新潟大学医学部内科学第 2	
葛 蔚穎	山東医科大学薬学系	富山医科薬科大学薬学部薬用資源学（第 2）	
呉 平生	第一軍医大学珠江医院心血管内科	金沢大学医学部内科学第 2	
王 小東	北京針灸骨傷学院附属医院西医内科	名古屋大学医学部病態制御研究施設分子病態研究部門	
南 元吉	延辺医学院附属医院整形外科	名古屋市立大学医学部整形外科学	
武 巍	安徽中医学院薬学系	名古屋市立大学薬学部薬化学	
洪 年	江西中医学院薬学系	名古屋市立大学薬学部製剤学	
李 京宏	首都医学院宣武医院胸心血管外科	三重大学医学部胸部外科	
瑪麗娅吐爾遜	新疆維吾爾自治区人民医院急救中心 I C U 病房	滋賀医科大学医学部看護学科設置準備室	
徐 又農	湖北省医学科学院病毒性疾病防治研究所	京都大学ウイルス研究所附属免疫不全ウイルス研究施設 I A 免疫不全研究領域	
張 錦	寧夏医学院附属医院内科呼吸組	京都大学胸部疾患研究所臨床生理学	
羅 林傑	深圳市人民医院内科	大阪市立大学医学部内科学第 1	
李 辛	河南省腫瘍医院放射科	大阪大学医学部放射線医学	
譚 济国	江西医学院微生物教研室	大阪大学微生物病研究所麻疹部門	
王 彦	佳木斯医学院附属口腔医院齒科矯正教室	大阪大学歯学部齒科矯正学	
王 旭東	北京市和平里医院内科	国立循環器病センター研究所ハートサイエンス部	
金 英愛	瀋陽医学院附属第二医院薬剤科	近畿大学薬学部薬剤学(Ⅱ)/薬物代謝学/臨床薬剤学	
周 建慶	寧波市第二医院内科	神戸市立中央市民病院循環器内科	
何 広新	雲南省薬品檢驗所中薬室	岡山大学薬学部生薬学	
劉 強	蘇州医学院病理教研室	福岡大学医学部病理学第 1	
陳 賢明	山西医学院病理生理学	久留米大学医学部内科学第 2	
王 振海	大連衛生檢疫所衛生処	熊本大学医学部感染防御学	

第 14 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
潘 小青	陕西省腫瘤防治研究所 C T 室	筑波大学医学専門学群臨床医学系放射線医学	
周 紅	鎮江医学院臨床檢驗教研室	自治医科大学血液医学研究部門止血血栓	
谷 文昇	中国医科大学附属第二臨床学院胸外科	千葉大学医学部附属肺癌研究施設第 1 臨床研究部	
呂 愛平	遼寧中医学院基礎部中医基礎教研室	東京理科大学薬学部薬用植物・漢方	
汪 寧	海南省衛生防疫站流行病研究所	国立精神・神経センター精神保健研究所成人精神保健部	
陳 其潔	中日友好医院西医皮膚科	東京医科歯科大学医学部皮膚科学	
黄 健	中山医科大学孫逸仙紀念医院外科五区	日本大学医学部泌尿器科学	
王 哲文	白求恩医科大学第一臨床学院眼科	帝京大学医学部眼科学	
張 天祥	濱州医学院生理教研室	日本医科大学生理学第 2	
馮 孝礼	遼寧省人民医院泌尿外科	日本医科大学泌尿器科学	
周 海燕	中日友好医院肛肠科	東京医科大学内科学 4	
陳 建平	福建医学院附属協和医院心臟外科	東京女子医科大学日本心臓血圧研究所循環器外科学	
曹 錦丹	白求恩医科大学医学図書情報系図書館学教研室	東京慈恵会医科大学医学情報センター	
魏 秀峰	白求恩医科大学口腔医学院牙周・粘膜病科	昭和大学歯学部第 3 歯科保存学	
温 登瑰	河北医学院附属第四医院腫瘤研究所流行病学研究室	国立がんセンター研究所疫学部	
王 輝	中華人民共和国衛生部外事司総合処	創価大学別科（日本語研修課程）	
伍 建林	中山医科大学附属第一医院麻醉科	横浜市立大学医学部麻醉科学	
鹿 巍	衛生部長春生物制品研究所病毒研究室	横浜市立大学木原生物学研究所分室細胞生物学	
蔣 世旭	瀘州医学院病理教研室	北里大学医学部病理学	
楊 軍	安徽省医学科学研究所薬理研究室	東海大学医学部生体構造機能系薬理学	
劉 兆鵬	山東医科大学無機化学教研室	帝京大学薬学部薬化学	
錢 蘇	厦門市第二医院内科及血液浄化中心	新潟大学医学部附属腎研究施設免疫病態学部門	
馬 超美	内蒙古医学院薬学系天然薬化教研室	富山医科薬科大学和漢薬研究所細胞資源工学	
李 英哲	吉林省中医中薬研究院中薬研究所植化二室	富山医科薬科大学和漢薬研究所細胞資源工学	
陳 建光	吉林医学院薬理教研室	山梨医科大学薬理学	
張 振喜	河北省衛生防疫站情報資料室	信州大学医学部公衆衛生学	
楊 建平	四川省衛生管理幹部学院微生物与免疫学教研室	名古屋市立大学医学部分子遺伝学	
孫 其然	遼寧中医学院基礎医学部傷寒教研室	名古屋市立大学薬学部生薬学	
張 強	華西医科大学薬学院中心測試室	名城大学薬学部機器分析学	
王 建華	河北医学院第二医院功能内科	藤田保健衛生大学医学部内科学	
梁 苹茂	天津中医学院第一附属医院内科二部	滋賀医科大学内科学第 3	
朱 瑾波	河北省中医薬研究所免疫疾病研究室	京都大学医学部皮膚病学微生物学	
金 鉄雄	延辺医学院附属医院泌尿外科	京都大学医学部泌尿器科学	
李 建強	山西医学院第二附属医院呼吸内科	京都大学胸部疾患研究所附属病院第 2 内科	
付 陽昕	哈爾濱医科大学基礎医学院生化教研室分子生物学研究室	京都大学ウイルス研究所がんウイルス部門	
賀 玖成	衡陽医学院第一附属医院眼科	京都府立医科大学眼科学	
邱 曉彦	黒龍江中医学院附属第一医院病理科	大阪大学微生物病研究所難治疾患バイオ分析部門	
李 接	広東省衛生防疫站寄生虫病防治研究所	大阪大学微生物病研究所寄生虫病学部門	
金 徳男	延辺医学院薬理学教研室	大阪医科大学薬理学	
馬 瑩	天津第二医学院附属第一中心医院臨床一部婦産科	大阪市立大学医学部産科婦人科学	
楊 繼紅	雲南中医学院附属医院耳鼻咽喉科	近畿大学医学部耳鼻咽喉科学	
金 東虎	延辺医学院附属医院放射線科	近畿大学医学部放射線医学	
王 鋒	天津医薬科学研究所腫瘍薬理	神戸大学医学部生理学第 2	
彭 新建	広東省計劃生育科学技術研究所同位素室	神戸大学医学部産科婦人科学	
陳 新	衡陽医学院心血管病研究所病生研究室	神戸大学大学院医学研究科病態情報学	
周 応畢	衡陽医学院第一附属医院心臟内科	兵庫医科大学内科学第 1	
高 土成	黒龍江中医学院附属第二医院骨科	兵庫医科大学整形外科科学	
于 建華	天津市天津医院骨科	徳島大学医学部整形外科科学	
裴 新海	蘭州医学院第一附属医院内三科	九州大学医学部附属胸部疾患研究施設呼吸器科	
文 富強	四川成都蜀都医院呼吸内科	福岡大学医学部内科学第 2	
欧 柏青	湖南省人民医院心血管内科	大分医科大学臨床検査医学	

第 15 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
韓 英	北京軍区総医院内一科	弘前大学医学部内科学第 1	
傅 翼	山西省衛生防疫站食品衛生科	岩手大学農学部家畜微生物学	
王 瓊	同済医大衛生管理幹部培训中心衛生管理教研室	東北大学医学部病院管理学	
熊 国祥	上海第二医科大学人体解剖学教研室	筑波大学医学専門学群解剖学	
蔣 莉	中国医科大学第 1 臨床学院普通内科	獨協医科大学内科学（アレルギー）	
許 順	中国医科大学第 1 臨床学院胸部外科	獨協医科大学外科学（胸部）	
王 旭東	河南医科大学口腔医学部	東京歯科大学歯学部病理学	
王 曉蓉	華西医科大学公共衛生学院労働衛生教研室・塵肺研究室	東京大学医学部公衆衛生学	
顧 擁軍	上海医科大学基礎医学院神経生物学教研室	東京大学医学部附属脳研究施設脳病理学部門	
劉 野	健康報社科教部	日本大学医学部医療管理学	
宋 林傑	中日友好医院口腔科技工室	日本大学歯学部歯科補綴学Ⅲ	
俄 紅君	北京安貞医院人群保健科	日本医科大学小児科学	
王 少麗	長春中医学院医史学教研室臨床医学教研室	順天堂大学医学部医史学	
何 樂業	湖南医科大学附属湘雅医院泌尿外科	東京慈恵会医科大学泌尿器科学	
莊 閻生	厦門市中山医院内科	昭和大学医学部附属豊洲病院消化器科	
雷 書紅	河南医科大学第 1 附属医院檢驗科生化室	昭和大学薬学部薬品分析化学	
張 静敏	白求恩医科大学基礎医学院生物教研室	東邦大学医学部分子生物学研究室	
張 麗蓉	天津中医学院中医系	東邦大学医学部心身医学	
金 永日	白求恩医科大学基礎医学院普通化学教研室	明治薬科大学薬学部生薬学	
呂 良勇	中華人民共和国北海衛生検疫局検疫監測処	国立公衆衛生院保健統計人口学部	
王 芃	中華予防医学会対外聯絡部	国立公衆衛生院保健統計人口学部	
岳 漢軍	新郷医学院微生物教研室	国立公衆衛生院衛生微生物学部	
付 金林	黒龍江衛生防疫站学校衛生科	国立公衆衛生院母子保健学部青少年保健室	
呉 孔明	河南医科大学第 1 附属病院腫瘍科	国立がんセンター研究所薬効試験部	
馬 加宝	山東省済済医学専門学校児科教研室	国立小児病院小児医療研究センター先天異常研究部	
何 雅慧	遼寧衛生防疫站病毒病研究室	財団法人癌研究会癌研究所遺伝子研究施設部	
李 興	山西医学院第二附属医院内分泌科	（財）朝日生命成人病研究所糖尿病研究所	
元 虎	延辺医学院附属医院骨外科	昭和大学藤が丘病院整形外科	
陳 彥	中華人民共和国杭州衛生検疫局検疫監測処	横浜検疫所	
蓋 曉東	吉林医学院病理解剖教研室	金沢医科大学病理学第 1	
林 傑	中国医科大学第 1 臨床医院内科循環内科	金沢医科大学循環器内科学	
雲登卓瑪	西藏自治区人民医院医学科学研究所	信州大学医学部内科学第 1	
才旺扎西	西藏自治区人民医院外一科	信州大学医学部外科学第 2	
費 華	衛生部上海生物製品研究所臨床診断試剤室	岐阜大学医学部臨床検査医学	
俞 小忠	上海医科大学公共衛生学院労働衛生教研室	名古屋大学医学部衛生学	
祝 炳華	天津中医学院第 1 附属医院内科 1 部老年病科	京都大学胸部疾患研究所老化生物学	
張 敏	深圳市紅十字会医院内科	京都大学胸部疾患研究所環境呼吸器病学	
陳 琳峰	福建医学院生物学教研室	京都大学ウイルス研究所がんウイルス部門	
呂 玉泉	河南省衛生防疫站環境衛生科	大阪大学医学部環境医学	
畢 振強	山東省衛生防疫站防疫科	大阪大学微生物病研究所細菌血清学部門	
張 子義	中日友好医院外資康復部 K1	近畿大学東洋医学研究所第 I 研究部門	
羅 立華	北京医院婦産科	奈良県立医科大学産婦人科学	
紀 勇	天津第 2 医学院附属第 1 中心医院神経内科	鳥取大学医学部附属脳幹性疾患研究施設脳神経内科	
王 海燕	佳木斯医学院附属医院児科	岡山大学医学部小児神経学	
曹 恵芬	雲南省中医中薬研究所図書情報室	広島大学医学部内科学第 2	
李 文	吉林医学院病理生理教研室	九州大学生体防御医学研究所ウイルス学部門	
于 少軍	甘肅省腫瘤医院中西医结合（1）科	久留米大学医学部内科学第 2	
紀 鳳山	天津医院外科	久留米大学医学部救命救急センター	
崔 善愛	延辺医学院附属医院婦産科	佐賀医科大学看護学科	

第 16 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
劉 艾	北京医院医教処	東北大学医学部内科学第 3	
許 立慶	哈爾濱医科大学克山病研究所心筋病研究室	東北大学大学院医学研究科病態代謝学	
呂 曉川	中国人民解放军總医院医務部薬材処薬品檢驗室	東北大学薬学部生物薬品製造学	
張 明	南通医学院附属医院骨科	福島県立医科大学整形外科	
馬 興栄	第四軍医大学西京医院核医学科	放射線医学総合研究所物理研究部第 4 研究室	
劉 煥亮	山東省血液中心中心実験室	東京大学医科学研究所ウィル感染研究部	
金 岩	天津市腫瘍医院頭頸科	東京大学医科学研究所分子生物学研究部	
劉 霞	山東省千仏山医院保健科 7 病区	東京医科歯科大学医学部保健衛生学科	
奇 錦峰	内蒙古医学院薬学系薬理学教研室	東京医科歯科大学難治疾患研究所社会医学研究部門	
任 永	内蒙古地方病防治研究所碘缺乏病科	帝京大学医学部薬理学	
姚 建民	北京軍区総医院胸心外科	帝京大学医学部第 2 外科学	
高 広漢	河南省衛生防疫站蠕虫病科	順天堂大学医学部寄生虫学	
呉 麗麗	安徽医科大学第一附属医院放射腫瘍科	東京女子医科大学看護部	
潘 鎮平	金陵医院栄養科	東京慈恵会医科大学第 2 内科学	
劉 長青	濱州医学院婦産科教研室	東京慈恵会医科大学産婦人科学	
王 敵	衛生部北京医院内科内分泌科	昭和大学医学部第 3 内科学	
宗 瑞傑	青島市第二人民医院内科	昭和大学医学部腎臓内科	
李 培軍	寧夏医学院附属医院泌尿外科	東邦大学医学部第 1 泌尿器科学	
金 東日	延辺医学院薬学系無機教研室	東京薬科大学薬学部薬品分析化学	
池 順姫	中国医学科学院腫瘍研究所電子顕微鏡室	国立がんセンター研究所生物物理部	
崔 亜東	上海鉄道医学院基礎医学部予防医学教研室	国立がんセンター研究所疫学部	
譚 光宏	海南医学院附属医院児科	国立小児病院小児医療研究センター免疫アレルギー研究部	
李 紅艷	黒龍江省医院手術室	聖路加国際病院看護部	
李 国棟	西安医科大学外語系日語教研室	早稲田大学日本語研究教育センター	
宋 傑	湖南省中医薬研究院附属医院内二科腎内科	聖マリア医科大学難病治療研究センター DDS 部門	
葉 春峰	西安医科大学図書館	北里大学医療衛生学部医療情報学	
毛 馳	北京協和医院口腔科	鶴見大学歯学部口腔外科学第 1	
金 徹権	延辺医学院附属医院口腔科	日本歯科大学新潟歯学部歯科保存学第 2	
劉 春燕	中国医科大学法医学系血清学教研室	信州大学医学部法医学	
趙 明	河南医科大学第四附属医院口腔顎面外科	朝日大学歯学部口腔外科学第 1	
劉 恩波	哈爾濱医科大学附属第一医院産科	名古屋大学医学部産婦人科学	
丁 自強	中国人民解放军第二軍医大学基礎部病理生理教研室	名古屋大学附属病態制御研究施設分子病態研究部門	
張 建軍	西安医科大学地方性骨病研究所流行病学研究室	愛知医科大学公衆衛生学	
郭 永清	白求恩医科大学第一臨床医学院耳鼻咽喉科	三重大学医学部耳鼻咽喉科学	
張 志文	第四軍医大学第一附属医院脳神経外科	京都大学医学部脳神経外科学	
王 建忠	廈門市中山医院神経外科	京都大学医学部脳神経外科学	
劉 愉	中国医科大学第二臨床学院胸外科	京都大学胸部疾患研究所胸部外科学	
李 鐘奇	遼寧省人民医院小児内科	大阪大学医学部小児科学	
許 麗華	河北医学院口腔系口腔内科	大阪大学歯学部口腔細菌学	
薛 禾生	中国予防医学科学院統計研究室	大阪市立大学医学部医療情報部	
章 志偉	中国医科大学第 1 臨床学院心臓外科	近畿大学医学部心臓外科学	
徐 沢昌	北京軍区総医院北京軍区心血管病研究所	兵庫医科大学内科学第 1	
金 武男	延辺医学院附属医院放射線科	兵庫医科大学中央放射線部	
傅 強	西安医科大学薬学系薬物分析教研室	武庫川女子大学薬学部薬品分析学 I	
俞 索静	浙江省中医薬研究院骨傷科	和歌山県立医科大学整形外科	
呉 麗萍	白求恩医科大学附属口腔医学院口腔正畸科	岡山大学歯学部歯科矯正学	
張 衛国	大連医科大学附属第一医院骨科	広島大学医学部整形外科	
趙 慧穎	白求恩医科大学第 1 臨床医院内 2 科（心血管内科）	九州大学医学部冠動脈疾患治療部	
余 争平	第三軍医大学予防医学系毒理学教研室	産業医科大学産業生態科学研究所環境中毒学	
賽 涛	福建医学院檢驗系臨床免疫学教研室	佐賀医科大学免疫・血清学	
王 家耀	大連医科大学附属第一医院内科	長崎大学医学部内科学第 2	
湯 毅	広東省人民医院放射科 C T 室	熊本大学医学部放射線医学	

第 17 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
朴 昌華	延辺医学院附属医院眼科	岩手医科大学眼科	
鄭 善子	延辺医学院附属医院呼吸内科	東北大学医学部老人科	
侯 凱	白求恩医科大学第一臨床学院神経外科	東北大学医学部脳神経外科学	
毛 昌淳	上海医科大学附設護士学校生化教研室	東北大学遺伝子実験施設	
辛 紅	天津医学院附属医院呼吸内科	東北大学加齢医学研究所呼吸器腫瘍	
景 涛	蘭州医学院寄生虫学教研室	山形大学医学部免疫学・寄生虫学	
酈 明国	青島市人民医院外二科	筑波大学医学専門学群外科学（整形）	
宋 東脊	甘肅中医学院内科研究室	埼玉医科大学内科学第 3	
陳 武雄	同済医科大学附属同済医院康復医学科	埼玉医科大学リハビリテーション医学	
趙 豊宇	広西壮族自治区人民医院幹部科	国立身体障害者リハビリテーションセンター	
米 衛東	中国人民解放军總医院麻醉科	帝京大学医学部附属市原病院麻醉科学	
王 学慶	遼寧中医学院中医系中医診断教研室	日本大学医学部第 3 内科学	
林 利平	青島医学院栄養系	(財)東京都老人総合研究所生理老化研究系栄養学研究部	
李 綱	蘇州医学院附属第一医院泌尿外科	東京医科歯科大学医学部泌尿器科学	
傅 伝剛	第二軍医大学附属長海医院肛肠外科	東京大学医学部外科学第 1	
朱 継江	中国医科大学基礎医学院病理教研室	東京大学医学部病理学第 2	
康 文江	黒龍江省計划生育委員会科技指導処	東京大学医学部健康科学・看護学科保健管理学	
韓 士栄	上海第二医科大学衛生管理系	東京大学大学院医学系研究科・国際保健学専攻国際保健計画学	
朱 雪梅	衡陽医学院基礎系微生物学教研室	(財)東京都臨床医学総合研究所分子生物学研究系微生物研究部	
盛 迅倫	寧夏医学院附属医院眼科	慶應義塾大学医学部眼科	
王 軍	中国人民解放军軍事医学科学院基礎医学研究所第 2 研究室	東京女子医科大学第 1 生理学	
許 亜欣	広東省人民医院儿科	東京女子医科大学腎臓病総合医療センター腎臓小児科	
鐘 曉玲	遵義医学院生物化学教研室	東邦大学医学部分子生物学	
冀 平光	山西省衛生庁科教処	昭和大学医学部公衆衛生学	
陳 大義	四川省衛生管理幹部学院医学檢驗系食品檢驗教研室	国立衛生試験所食品部	
郭 亮	華西医科大学生理学教研室	(財)東京都神経科学総合研究所機能研究系神経生理学研究部	
李 立志	中国中医研究院西苑医院心血管内科	昭和大学藤が丘病院内科学	
呉 偉成	北京医科大学第三臨床医学院泌尿外科	北里大学医学部泌尿器科学	
劉 瑞霜	衛生部北京医院外賓門診部	北里大学医学部附属病院看護部	
劉 萍	大連市第二人民医院針灸科	東海大学医学部内科学 5	
王 晶	中国医科大学附属口腔医院児童牙科・口腔予防科	新潟大学歯学部予防歯科学	
韓 国宏	第四軍医大学西京医院放射線科	金沢大学医学部放射線部	
陳 美鴻	海口市人民医院内 5 科	岐阜大学医学部内科学第 1	
張 忠義	内蒙古自治区婦幼保健院遺伝優生科	岐阜大学医学部小児科学	
陳 智超	同済医科大学附属協和医院血液病研究所	浜松医科大学内科学第 3	
尹 寿玉	延辺医学院薬学系薬物分析教研室	名古屋市立大学薬学部生薬学	
湯 莉萍	湖南省寄生虫病防治研究所附属医院内科	名古屋市立大学附属病院看護部	
唐 永怡	北京安定医院二科	名古屋大学医学部精神医学	
杜 軍	白求恩医科大学基礎医学院寄生虫学教研室	名古屋大学医学部免疫学	
張 桑	甘肅中医学院眼科教研室	京都大学医学部眼科学	
陳 慶	中国人民解放军第 2 0 2 医院胸外科	京都大学胸部疾患研究所胸部外科学	
崔 雲沢	長春市中心血站血液製品研究室	国立循環器病センター研究所病因部	
郭 霊	広西医科大学解剖学教研室	大阪大学医学部解剖学第 2	
尹 林	江西医学院第一附属医院急診科	大阪府立千里救命救急センター	
劉 世霆	第一軍医大学附属南方医院薬材科	神戸大学医学部薬剤部	
傅 増洋	青島医学院附属医院心血管内科	和歌山県立医科大学内科学第 4	
陳 明久	衛生部武漢生物製品研究所実験動物室	熊本大学医学部附属遺伝発生医学研究施設	

第 18 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
金 錦華	延边医学院附属医院神経外科	東北大学医学部附属病院看護部	
伍 江紅	天津市医薬科学研究所腫瘍薬理室	東北薬科大学薬学部附属癌研究所第二部	
戎 偉芳	第二軍医大学基礎医学部生理学教研室	筑波大学医学専門学群基礎医学系生理学	
戴 海清	湖北医科大学附属第二医院内分泌内科	筑波大学医学専門学群臨床医学系内科学（内分泌）	
趙 万標	北京針灸骨傷学院針灸系・針灸治療教研室	国立身体障害者リハビリテーションセンター第一機能回復訓練部	
白 金鳳	山西医学院第二附属医院内科病房	深谷赤十字病院看護部	
王 咏梅	中国人民解放军總医院婦産科	東京大学医学部産科学婦人科学第 1	
王 金枝	天津医科大学第二医院麻醉科	東京大学医学部麻醉学	
畢 文傑	北京医院麻醉科	東京大学医学部麻醉学	
張 平平	呼和浩特市第一医院婦産科	東京大学医学部健康科学・看護学科基礎看護学	
張 静	天津市計画生育研究所生物化学研究室	東京大学大学院医学系研究科人類遺伝学	
劉 振華	第一軍医大学第二附属医院神経内科	東京大学医学部附属脳研究施設臨床研究部門	
賈 慶梅	河南省衛生防疫站計画免疫科	東京大学医科学研究所ウイル研究部	
常 明	中日友好医院薬学部	東京大学薬学部薬品作用学	
徐 玉東	哈爾濱医科大学解剖学教研室	日本大学医学部第一解剖学	
周 乙華	南京鉄道医学院伝染病学教研室	日本大学医学部第一病理学	
蔡 偉華	天津医学院附属医院神経病学研究所神経内科	日本医科大学生理学第 2	
王 春梅	中国医学科学院整形外科医院整形外科北二病房	日本医科大学形成外科学	
謝 亜雄	貴陽医学院衛生系労働衛生学与職業病学教研室	順天堂大学医学部衛生学	
王 蓓	衛生部国際交流中心国際合作処	順天堂大学医学部公衆衛生学	
孫 洪慶	瀋陽市紅十字会医院消化内科	東京医科大学内科学 4	
陳 欣	北京積水潭医院焼傷科	東京女子医科大学形成外科学	
施 敏驊	蘇州医学院附属第二医院呼吸器内科	国立予防衛生研究所免疫部免疫制御室	
黄 古城	広東省食品衛生監督檢驗所微生物檢驗室	国立予防衛生研究所食品衛生微生物部	
劉 敏	海南省薬品檢驗所薬理室	国立衛生試験所安全性生物試験研究センター薬理部	
潘 立松	上海第二医科大学附属新華医院檢驗科	国立小児病院	
胡 秀英	華西医科大学第一附属医院老年保健科（内）	財団法人東京都老人総合研究所地域保健研究部	
範 吉平	北京中医薬大学東直門医院内五科（脳病科）	国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第六部	
尹 為宏	天津市兒童医院兒科研究所遺伝室	聖マリア医科大学難病治療研究センター臨床遺伝部門	
李 玉明	黒龍江省婦幼保健院兒童保健科	聖マリア医科大学横浜市西部病院小児科学	
孫 偉	江蘇省中医院腎内科	東海大学医学部内科学 7	
趙 勝利	河南医科大学薬理教研室	富山医科薬科大学薬学部薬剤薬理学	
郭 平	成都中医学院薬学系中薬鑑定教研室	富山医科薬科大学薬学部和漢薬研究所資源開発	
関 徳玉	中国人民解放军 2 0 2 医院伝染病科	金沢医科大学学生化学第 1	
劉 沢軍	第三軍医大学西南医院核驗科生化室	浜松医科大学臨床検査医学	
胡 豫	同済医科大学附属協和医院血液病研究所	名古屋大学医学部薬理学	
丁 日高	北京薬理毒理研究所神経精神薬理学研究室	岡崎国立共同研究機構生理学研究所神経化学研究部門	
王 海昌	中国人民解放军第四軍医大学第一附属医院心臟内科	岡崎国立共同研究機構生理学研究所機能協同研究部門	
戴 朝六	中国医科大学第二臨床学院普通外科	京都大学大学院医学研究科・医学部器官外科学	
劉 栄森	中国人民解放军總医院口腔科	大阪大学歯学部口腔細菌学	
常 玲	中国医科大学附属第三臨床学院婦産科	大阪市立大学医学部産科婦人科学	
石 学	洛陽医学高等専科学校附属医院脳神経外科	奈良県立医科大学第 2 外科学	
曹 学誠	済南軍区総医院骨創科	奈良県立医科大学整形外科	
趙 和栄	延边医学院附属医院神経内科	島根医科大学内科学第 3	
劉 紹乾	湖南医科大学基礎医学院化学教研室	徳島大学薬学部薬品製造工学	
余 大敏	湖南医科大学湘雅医院泌尿外科	九州大学医学部泌尿器科学	
姜 広水	山東医科大学口腔医学系口腔内科学教研室	九州大学歯学部予防歯科学	
呉 英良	瀋陽薬学院生理教研室	久留米大学医学部薬理学	
汪 小紅	雲南中医学院附属医院痔瘻科	佐賀医科大学医学部看護学科	
王 瑞安	第四軍医大学基礎部組織学与胚胎学教研室	長崎大学医学部解剖学第 3	
陳 吉華	中国人民解放军第四軍医大学口腔医学院口腔修復科	長崎大学歯学部歯科補綴学第 1	
梁 露霞	広州第一軍医大学附属南方医院影像中心	熊本大学医学部放射線医学	
車 向明	西安医科大学第一附属医院普通外科	鹿児島大学医学部外科学第 1	

第 19 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
金 世蘭	延边医学院附属医院泌尿内科	東北大学医学部内科学第 2	
孫 立波	白求恩医科大学第三臨床学院基本外科	東北大学医学部外科学第 1	
馬 曉慧	北京医院耳鼻咽喉科	東北大学医学部耳鼻咽喉科	
盧 寧	首都医科大学附属北京同仁医院眼科	東北大学医学部眼科学	
陳 林	重慶医科大学附属第一医院伝染科	山形大学医学部免疫学・寄生虫学	
張 捷	四川成都蜀都医院神経外科	群馬大学医学部附属行動医学研究施設脳神経外科学	
李 秀紅	山西省人民医院眼科	埼玉医科大学附属病院看護部	
孫 可竹	北京医院心内科	千葉大学医学部内科学第 3	
申 東蘭	吉林市第二人民医院腫瘤研究所腫瘤内科	千葉県がんセンター呼吸器科	
穆 俊武	西安医科大学第一臨床医学院超声診断室	順天堂大学附属順天堂浦安病院産婦人科学	
席 家寧	北京胸科医院臨床内科及病理	日本大学医学部第二病理学	
丁 曄	遼寧省撫順市第二医院消化内科	東京女子医科大学附属第二病院内科 2	
張 雪寧	天津医科大学第二医院放射科	東京女子医科大学附属第二病院放射線科	
羅 元俠	西安医科大学第一臨床医学院麻醉科	日本医科大学麻醉科学	
黄 麗輝	広西中医学院耳鼻咽喉科	東京大学医学部耳鼻咽喉科	
金 春林	上海市衛生局財務処	東京大学大学院医学系研究科・国際保健学専攻国際保健計画学	
楊 巷菁	金陵医院検驗中心儀器分析室	東京大学薬学部薬品分析化学	
齊 莉莉	天津市口腔医院和整形外科医院口腔顎面整形外科	順天堂大学医学部形成外科学	
董 玉傑	吉林省人民医院口腔科	東京医科歯科大学歯学部歯科矯正学第 1	
胡 龍飛	中華人民共和国広州衛生検疫局疾病監測処	東京医科歯科大学難治疾患研究所社会医学研究部門	
徐 江淮	衛生部北京生物制品研究所肝炎室	慶應義塾大学医学部分子生物学	
李 瑛	山東中医学院附属医院康復医学科	東京医科大学老年病学	
朱 麗萍	上海市第一婦嬰保健院統計信息科	東京女子医科大学母子総合医療センター	
金 京子	延边医学院附属医院神経内科	東京女子医科大学附属脳神経センター神経内科	
明 雨	山東腫瘤生物治療研究中心生物工程研究室	国立がんセンター研究所細胞増殖因子研究部	
徐 立	南通医学院生物化学教研室	国立がんセンター研究所腫瘍遺伝子研究部	
黄 勇	山東医科大学人体寄生虫学教研室	東京慈恵会医科大学熱帯医学	
金 貞花	遼寧省薬品検驗所薬理室	星薬科大学薬理学	
汪 司右	上海市針灸経絡研究所臨床研究室	北里大学医学部泌尿器科学	
周 宇彤	天津医科大学護理系護理基礎教研室	北里大学医学部看護学科	
劉 建武	江西中医学院針灸系実験室	昭和大学藤が丘病院内科	
胡 曙光	第一軍医大学生物医学工程系影像技術教研室	金沢医科大学放射線医学	
汪 幼学	蘭州軍区総医院消化科	名古屋大学医学部内科学第 2	
梅 広林	南通医学院附属医院腹部外科	名古屋大学医学部外科学第 2	
陳 競薇	河北省医学科学院医学情報研究所	名古屋大学医学部公衆衛生学	
呉 秀賢	齐齐哈尔医学院第一附属医院泌尿外科	京都大学大学院医学研究科・医学部器官外科学	
趙 松吉	延边医学院附属医院核医学科	京都大学大学院医学研究科・医学部放射線医学	
許 揚	中国中医研究院中医雑誌社中文版編輯部	京都大学大学院医学研究科・医学部医療情報部	
孫 爾維	広州市珠江医院血液浄化腎移植中心	京都府立医科大学第 2 外科学	
曾 昭鏞	蘭州軍区総医院血液内分泌科	京都府立医科大学衛生学	
路 振莉	済南軍区総医院眼科	関西医科大学眼科	
曹 秉振	済南軍区総医院神経内科	国立循環器病センターリハビリテーション部	
陳 曉虹	遼寧省人民医院神経内科	大阪大学医学部神経内科	
苗 志林	瀋陽軍区総医院心血管内科	大阪府立成人病センター研究所収縮物質研究室	
李 柱南	延边医学院附属医院婦産科教研室	神戸大学医学部産科婦人科学	
徐 達峰	河北医学院薬学系	岡山大学薬学部薬品物理化学	
張 曉聞	天津市医薬科学研究所植物化学室	九州大学薬学部植物薬品化学	
王 鳳山	天津市医学実験動物開発中心遺伝研究室	熊本大学医学部附属遺伝発生医学研究施設発生遺伝部門	

第 20 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
黄 秋鳳	瀋陽医学院附属中心医院第一普通外科	東北大学医学部外科学第一	
趙 幼鴻	内蒙古妇幼保健医院婦産科	東北大学医学部産科学婦人科学	
郭 聯慶	金陵医院臨床薬理科	東北大学薬学部衛生化学	
紀 新強	青岛医学院附属医院婦産科	秋田大学医学部附属病院産科婦人科学	
龔 志強	江西医学院基礎医学部法医学教研室	筑波大学医学専門学群社会医学系法医学	
顧 垂平	南通医学院病理生理学教研室	東京大学医学部内科学第 3	
劉 正風	西安医科大学基礎医学院微生物学免疫学教研室	東京大学分子細胞生物学研究所生物物理研究分野	
陳 錫慰	南京医科大学寄生虫学教研室	東京大学医科学研究所寄生虫研究部	
肖 寧	四川省寄生虫病防治研究所瘧疾研究室	東京大学医科学研究所寄生虫研究部	
康熙雄	白求恩医科大学第三臨床学院実験診断教研室	東京大学医科学研究所病態薬理学研究部	
楊 宗輝	白求恩医科大学第三臨床医院薬剤科	東京大学薬学部製剤学	
曹 培林	白求恩医科大学基礎医学院日語教研室	東京大学文学部言語学研究室	
肖 飛	華西医科大学法医病理教研室	東京医科歯科大学疾患遺伝子実験センター	
吳 龍仁	延边医科大学附属医院消化内科	日本大学医学部第三内科学	
于 爾康	山西省中医薬研究院腎病研究所	帝京大学医学部第 1 内科学	
張 純	甘肅省中医学院附属医院門診部耳鼻咽喉科	帝京大学医学部耳鼻咽喉科学	
金 桂淑	瀋陽市紅十字会医院循環内科	日本医科大学内科学第 1	
余 旺節	中国人民解放军海軍総医院高圧酸素科	慶應義塾大学医学部生理学	
于 慶巍	白求恩医科大学第三臨床学院骨科	東京医科大学整形外科	
陶 惠寧	北京針灸骨傷学院国際培訓部	東京女子医科大学医学教育学	
葉 軍	広西中医学院第二附属医院骨科	東京女子医科大学整形外科	
何 華	濟寧医学院附属医院中医科	東京女子医科大学附属脳神経センター神経内科	
童 綏君	厦門市中山医院神経内科	東京女子医科大学附属脳神経センター神経内科	
肖 慧捷	北京医科大学第一医院兒科	東京女子医科大学腎臓病総合医療センター腎臓小児科	
裴 惠蘭	哈爾濱市兒童医院兒内科消化科	昭和大学医学部附属豊洲病院小児科	
劉 雲宝	佳木斯医学院第一附属医院循環内科	東邦大学医学部附属大橋病院第 3 内科学	
範 波	白求恩医科大学基礎医学院有機与天然薬物化学教研室	明治薬科大学薬学部生薬学	
黄 静	華西医科大学薬学院天然薬物化学教研室	共立薬科大学薬学部生薬学・天然物化学	
葉 為民	福建医学院流行病学教学研究室	国立がんセンター研究所がん発生情報研究室	
朱 忠良	西安医科大学基礎医学院生理学教研室	国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第六部	
周 金艷	湖南省人民医院小児科	横浜市立大学医学部附属病院看護部	
郭 強	雲南省人民医院消化科	聖マリアンナ医科大学第 1 内科学	
周 雲	蘇州医学院附属兒童医院外科	聖マリアンナ医科大学泌尿器科学	
韓 小霞	中国中医研究院針灸研究所運動系統疾病治療室	七沢リハビリテーション病院脳血管センター	
楊 益大	浙江医科大学附属第一医院伝染病科	金沢大学がん研究所分子生物部	
韓 涛	北京針灸骨傷学院基礎部中薬研究室	金沢大学薬学部医療薬剤学	
宋 昕	中国医科大学第二臨床学院内科	金沢医科大学循環器内科学	
曲 章義	哈爾濱医科大学微生物学教研室	国立遺伝学研究所分子遺伝研究系分子遺伝研究部門	
邢 万金	内蒙古医学院基礎部生物教研室	名古屋大学医学部附属病態制御研究施設分子病態研究部門	
胡 景萍	河北省職工医学院附属医院内科	滋賀医科大学看護学科	
高 賢龍	海南医学院基礎部病理生理室	京都大学大学院医学研究科基礎病態学（病態生物医学）	
錢 玉秀	暨南大学医学院附属医院手術室	京都大学医学部附属病院看護部	
黄 允寧	寧夏回族自治区医院第一外科	京都府立医科大学第一外科学	
楊 勤	江蘇省中医院内科	大阪大学医学部内科学第 2	
何 輝	成都市第七人民医院心内科	関西医科大学内科学第Ⅱ	
張 貴燦	福建医学院附属協和医院心血管病研究中心心内科	国立循環器病センター病院生理機能検査部	
王 紅心	青海医学院附属医院内科血液室	兵庫医科大学輸血部	
夏 虹	広州流花橋医院脊柱外科	徳島大学医学部整形外科	
余 福勲	河南省衛生防疫站自然疫源科	長崎大学熱帯医学研究所分子構造解析分野	
張 春妮	金陵医院検験科生化室	熊本大学医学部生化学第 2	

第 21 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
聶 秀紅	首都医科大学附属北京紅十字朝陽医院呼吸内科	東北大学医学部内科学第 1	
楊 波	長春市中心医院腫瘤科	東北大学理学部生物化学研究室	
田 軍	中国人民解放军北京軍区総医院心血管内科	山形大学医学部内科学第 1	
王 瑩	哈爾濱医科大学附属第二医院内科	筑波大学医学専門学群臨床医学系内科学（腎）	
湯 光宇	江西医学院第二附属医院放射科	筑波大学医学専門学群臨床医学系放射線医学	
馬 躍文	中国医科大学呼吸疾病研究所	自治医科大学呼吸器内科学	
姚 繼紅	大連医科大学薬理教研室	群馬大学医学部薬理学	
袁 志斌	上海市第六人民医院核医学科	群馬大学医学部核医学	
楊 宝鐘	首都医科大学附属北京安貞医院血管外科	千葉大学医学部外科学第 1	
蔡 愛露	中国医科大学第二臨床学院婦産科	順天堂大学医学部附属順天堂浦安病院産婦人科学	
張 静	白求恩医科大学第二臨床学院心血管内科	日本医科大学附属千葉北総病院内科学第 1	
王 修傑	華西医科大学腫瘤研究所	東京大学医学部病理学（分子病理学）	
王 麗萍	中国医科大学第二臨床学院耳鼻咽喉科	東京大学医学部認知・言語医学（音声・言語医学）	
王 宇慧	哈爾濱医科大学附属第二医院老年病科	東京大学医学部器官病態内科学（循環器内科学）	
李 昌平	瀘州医学院附属医院消化内科	東京大学医学部器官病態内科学（消化器内科学）	
張 業武	安徽省婦幼保健所信息資料科	東京大学医学部国際社会医学（国際保健計画学）	
李 燕	雲南省婦幼保健院婦幼保健部	東京大学医学部国際生物医科学（発達医科学）	
楊 莉玲	蘇州医学院生物教学研究室	東京大学分子細胞生物学研究所動植物培養細胞研究分野	
潘 賽貽	広東省衛生防疫站広東省寄生虫病防治研究所	東京大学医科学研究所寄生虫研究部	
賈 定武	河南医科大学衛生毒理学教研室	東京大学医科学研究所生物物理化学研究部	
王 玲	哈爾濱医科大学基礎医学学院薬理学教研室	東京医科歯科大学医学部薬理学	
姚 祖武	福建省立医院福建省心血管病研究所心血管外科	東京医科歯科大学医学部胸部外科学	
夏 広斌	中国人民解放军第二軍医大学第一附属医院泌尿外科	東京医科歯科大学医学部泌尿器科学	
張 民偉	青海省人民医院成人急救中心	日本大学医学部救急医学	
李 銀鳳	内蒙古自治区医院婦産科	帝京大学医学部第 2 産科婦人科学	
李 欣	北京医科大学外事処	日本医科大学医療管理学	
尹 明実	延辺医学院附属医院消化内科	日本医科大学内科学第 1	
申 桂華	衛生部北京医院婦産科	日本医科大学産婦人科学	
李 儒正	海南省人民医院胸心血管外科	順天堂大学医学部胸部外科学	
王 昆	青海省兒童医院急救外科	順天堂大学医学部小児外科学	
付 保進	河南医科大学病理学教研室	慶應義塾大学医学部分子生物学	
申 春	白求恩医科大学人事処師資培訓科	東京女子医科大学医学教育学	
白 燦明	大連医科大学附属第二医院脳神経外科	東京女子医科大学附属脳神経วิทยา脳神経外科学	
朱 化剛	安徽医科大学第一附属医院普通外科	東京女子医科大学内分泌疾患総合医療วิทยา内分泌外科	
張 永紅	甘肅省放射衛生防護監督監測所放射衛生監測科	国立公衆衛生院放射線衛生学部環境放射線室	
李 芸星	中国予防医学科学院計画免疫弁公室	国立感染症研究所ウイルス第 1 部呼吸器系ウイルス室	
王 哲海	山東省腫瘤防治研究院内二科	東京都立駒込病院内科化学療法科	
焉 伝祝	山東医科大学附属医院神経内科	国立精神・神経วิทยา神経研究所微細構造研究部	
李 敏	広州中医薬大学科研処	東海大学医学部内科学 1	
金 花淑	延辺大学医学院組織学与胚胎学教研室	東海大学医学部病態診断系病理学	
晋 長偉	北京医科大学口腔医学院正畸科	神奈川歯科大学歯学部歯科矯正学	
謝 春	中山医科大学第一附属医院腎臓研究所	新潟大学医学部附属腎研究施設分子病態学分野	
張 夢暉	湖南省薬品檢驗所生化薬理室	富山医科薬科大学和漢薬研究所生物試験	
石 慧文	首都医科大学附属北京兒童医院兒科血液	金沢大学医学部小児科学	
阮 岩	広州中医薬大学第一附属医院耳鼻咽喉科	山梨医科大学耳鼻咽喉科学	
謝 海棠	青海医学院附属医院護理部	長野県看護大学看護学部看護学科	
金 春香	白求恩医科大学第二臨床学院超声診断科	名古屋大学医学部内科学第 2	
朱 婉兒	浙江省望江山医院内科	名古屋大学医学部老年科学	
徐 結苟	安徽医科大学生物化学教研室	京都大学大学院医学研究科分子生体統御学（分子腫瘍学）	
徐 迅迪	湖南医科大学附属第二医院外科	京都大学大学院医学研究科器官外科学（消化器外科学）	
呉 浜帆	浙江省人民医院整形外科	京都大学大学院医学研究科感覚運動系病態学（形成外科学）	
武 新安	蘭州医学院第一附属医院薬剤部	京都大学薬学部薬剤学	

氏名	所属機関	研究機関	
王 劍鋒	天津市第一中心医院内科血液科	京都府立医科大学衛生学	
戴 国友	河南省衛生防疫站河南省地方防治研究所	京都府立医科大学衛生学	
王 会雲	天津市第一中心医院神经内科	国立療養所宇多野病院神经内科	
張 仲衍	天津市第一中心医院心内科	大阪大学医学部分子制御内科学	
王 宏生	衛生部北京医院普通外科	大阪大学医学部小児外科学	
高 平	中国人民解放軍総医院生化研究室	大阪大学医学部附属 ^h 財大 ⁱ 加教育研究 ^o 腫瘍医学部門	
張 美侠	遼寧瀋陽北方医院薬剤科	大阪大学薬学部薬剤学	
詹 育梅	上海第二医科大学薬理学教研室	大阪市立大学医学部薬理学	
章 曉鷹	上海中医薬大学附属曙光医院檢驗科（中心実験室）	大阪市立大学医学部薬理学	
寧 小軍	衛生部蘭州生物制品研究所第二研究室（病毒研究室）	大阪市立大学医学部老年医学研究部門 ^o 免疫学分野	
李 培軍	天津市胸科医院心臓外科	国立大阪病院心臓血管外科	
孫 忠華	中国医学科学院中国協和医科大学北京協和医院放射科	神戸大学医学部放射線医学	
呉 小玉	湖南省兒童医院護理部	神戸市看護大学	
龐 書勤	蚌埠医学院附属医院小児科	兵庫県立看護大学看護学部看護学科	
呉 文華	福建医科大学附属第二医院骨科	兵庫医科大学整形外科	
呉 麗華	瀋陽市第一人民醫院脳病研究所神经内科	島根医科大学内科学第 3	
朱 旭東	中国人民解放軍第三軍医学分野戦外科研究所第四研究室	広島大学医学部病理学第 1	
黄 誠	衛生部上海生物制品研究所分子生物学研究室	広島大学医学部細菌学	
程 為平	黒龍江中医薬大学附属第二医院神经内科及神経電生理研究室	広島大学医学部内科学第 3	
曹 袁寧	銀川市第一人民醫院内科	山口大学医学部内科学第 2	
李 鄭林	河南省洛陽正骨医院骨病矯形科	山口大学医学部整形外科	
熊 利沢	中国人民解放軍第四軍医大学第一附属病院麻酔科	山口大学医学部麻酔・蘇生学	
单 少傑	新疆維吾爾自治区人民醫院臨床薬学研究所	九州大学薬学部生薬学	
葛 利軍	寧夏回族自治区人民醫院心血管内科	福岡大学筑紫病院内科第 1	
齊 聡	上海中医薬大学附属曙光医院婦科	久留米大学医学部産婦人科学	
姚 暉	天津市口腔医院口腔生物医学工程研究室	鹿児島大学歯学部歯科保存学第 2	

第 22 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
曹 文華	白求恩医科大学基礎医学院生物化学与分子生物学教研室	北海道大学医学部内科学第 2	
蔣 国謙	中国人民解放軍蘭州軍区総医院信息科	北海道大学医学部医療情報部	
丁 漢昇	上海市医療保険局計画財務処	東北大学大学院医学研究科社会医学（医療管理学）	
黄 蓉	広州市第二人民医院婦産科	秋田大学医学部産科婦人科学	
梁 永宣	北京中医薬大学基礎医学院医史文献教研室	茨城大学人文学部中国科学史	
施 光普	河南医科大学第一附属医院眼科	埼玉医科大学眼科学	
李 旭	福建医科大学附属第一医院	埼玉医科大学総合医療 ^o 外科	
方 亮	延边大学医学院薬学系薬剤教研室	城西大学薬学部薬剤学	
周 虹	哈爾濱医科大学基礎医学学院薬理教研室	東京大学大学院医学系研究科薬理学（細胞分子薬理学）	
党 琦	中日友好医院計算機室	東京大学大学院医学系研究科法医学・医療情報経済学（医療情報経済学＜臨床＞）	
金 玉蓮	延边大学医学院附属医院耳鼻咽喉科	東京大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科学	
徐 紅萌	河北医科大学第四医院麻酔科	東京大学大学院医学系研究科麻酔学	
張 林生	中国人民解放軍第三軍医大学第一附属医院血液内科	東京大学医科学研究所分子細胞制御研究部	
白 玉興	首都医科大学附属北京口腔医院正畸科	東京医科歯科大学歯学部歯科矯正学第 2	
蔣 廷波	蘇州医学院附属第一人民醫院心血管内科	日本大学医学部第 2 内科学	
王 齊敏	福建医科大学附属協和医院心血管外科	順天堂大学医学部胸部外科学	
李 志新	烏魯木齊市友誼医院普外科	順天堂大学医学部小児外科学	
田 欣	白求恩医科大学第三臨床医学院眼科	順天堂大学医学部眼科学	
宋 永勝	中国医科大学第二臨床学院泌尿外科	慶應義塾大学医学部泌尿器科学	
江 紅群	江西医学院第一附属医院耳鼻咽喉科	慶應義塾大学医学部耳鼻咽喉科学	
丁 幼萍	四川省人民醫院循環器中心	東京女子医科大学病院看護部	
譚 建国	北京医科大学口腔医学院修復科	昭和大学歯学部第 1 歯科補綴学	
徐 志利	広州市薬品檢驗所生化室	国立医薬品食品衛生研究所生物薬品部	

氏名	所属機関	研究機関	
朱 旭東	中国医科大学第一臨床学院中心実験室	国立がんセンター研究所病理部	
王 文萍	遼寧中医学院附属医院腫瘍内科	国立がんセンター研究所化学療法部実験化学療法研究室	
張 明	衛生部審計局審計二処	国立医療・病院管理研究所研修部	
張 軍平	天津中医学院第一附属医院内科部心臓科	財団法人東京都老人総合研究所細胞生物学部門	
周 英尧	河南医科大学第二附属医院消化内科	財団法人癌研究会癌研究所実験病理部	
徐 雯	黒龍江省基礎医学研究所免疫研究室	国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第六部	
田 炳均	雲南省衛生防疫站計画免疫科	国立感染症研究所ウイルス第2部腸感染ウイルス第2室	
時 玲	四川省皮膚病性病防治研究所麻風病研究室	国立感染症研究所ハニ病研究センター生体防御部	
李 玉華	衛生部成都生物制品研究所乙脳疫苗室	財団法人東京都神経科学総合研究所微生物学・免疫学研究部門	
李 燕萍	山西省衛生庁国際交流中心	社団法人日本看護協会看護教育・研究センター	
羅 從風	上海市第六人民医院骨科	横浜市立大学医学部整形外科	
田 素斎	河北医科大学第二医院急診科	横浜市立大学医学部附属病院看護部	
劉 岩	広州市紅十字会医院内科腎病	昭和大学藤が丘病院内科学	
崔 泰林	延辺大学医学院附属医院呼吸内科	北里大学医学部呼吸器内科学	
崔 英姫	延辺大学医学院附属医院焼傷整形外科	北里大学病院看護部	
徐 宏斌	皖南医学院生物化学教研室	新潟大学医学部生化学第1	
周 家毅	暨南大学医学院第二附属医院神经内科	新潟大学脳研究所臨床神経科学部門神経内科学	
王 湘輝	中国人民解放軍蘭州軍区蘭州総医院普通外科	金沢大学がん研究所腫瘍制御	
藍 志傑	廈門市第一医院耳鼻咽喉科	金沢医科大学耳鼻咽喉科学	
張 建智	天津市第一中心医院普外科兼器官移植中心	信州大学医学部外科学第1	
趙 曉曦	内蒙古自治区婦幼保健院遺伝科	名古屋市立大学医学部産科婦人科学	
呉 忠	海南省人民医院心血管内科	藤田保健衛生大学医学部内科学	
施 樹良	哈爾濱医科大学基礎医学学院生物教研室	京都大学大学院医学研究科分子生体統御学（分子腫瘍学）	
徐 淑静	貴陽医学院附属医院内分泌科	京都大学大学院医学研究科臨床病態医科学	
代 政学	中国人民解放軍第四軍医大学第一附属医院心血管内科	京都大学大学院医学研究科臨床器官病態学（循環病態学）	
杜 勇	山東医科大学第一附属医院核医学科	京都大学大学院医学研究科放射線医学（核医学・画像診断学）	
趙 向東	広州市紅十字会医院普外科	京都大学大学院医学研究科移植免疫医学	
鄢 業鴻	海南省人民医院泌尿外科	京都大学大学院医学研究科移植免疫医学	
高 衛華	北京中医薬大学東直門医院薬学部	京都薬科大学薬学部薬物動態学	
李 林紅	河南省衛生防疫站自然疫原科	大阪大学大学院医学系研究科細菌学	
潘 世愷	上海医科大学附属眼耳鼻咽喉科医院耳鼻咽喉科	大阪市立大学医学部耳鼻咽喉科学	
汪 芳裕	中国人民解放軍南京軍区南京総医院消化科	大阪医科大学内科学Ⅱ	
陳 紅	中国人民解放軍第二軍医大学基礎部薬理学教研室	近畿大学医学部薬理学	
郁 琦	中国医学科学院北京協和医院婦産科	近畿大学医学部産科婦人科学	
于 靈芝	山東省立医院麻酔科	国立循環器病センター病院手術部	
徐 曉洲	寧夏医学院附属医院腫瘍外科	大阪府立成人病センター病院第3外科	
高 曉潔	西安医科大学第二臨床学院児科教研室	兵庫医科大学小児科学	
陳 堅	上海市兒童医院上海医学遺伝研究所	奈良県立医科大学小児科学	
劉 聡	中国医科大学附属第二医院	山口大学医学部内科学第3	
趙 海鷹	中国医科大学第二臨床学院普通外科	徳島大学医療技術短期大学部	
陳 明	重慶医科大学附属第一医院心血管内科	愛媛大学医学部内科学第2	
李 平	北京市和平里医院中医科	九州大学医学部内科学第3	
阮 宏瑩	天津市第一中心医院耳鼻咽喉科頭頸外科	九州大学医学部耳鼻咽喉科学	
董 頻	山東医科大学附属医院耳鼻咽喉科	久留米大学医学部耳鼻咽喉科学	
王 莉	中国医科大学呼吸疾病研究所附属第一医院内科呼吸	長崎大学医学部第2内科学	
張 輝	徐州医学院附属医院心血管内科	鹿児島大学医学部内科学	
梅 曉冬	安徽省立医院呼吸内科	鹿児島大学医学部附属腫瘍研究施設がん化学療法部門	
修 文瓊	福建省衛生防疫站流行病防治研究所病毒病防治研究室	鹿児島大学医学部附属難治性ウイルス疾患研究センター	
王 継軍	上海精神衛生中心電生理研究室	琉球大学医学部精神神経科学	

第 23 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
崔 百忠	青海省地方病防治研究所鼠疫防治研究室	北海道大学大学院獣医学研究科公衆衛生学	
張 蕾	中国医科大学第一臨床学院腫瘍研究所第一研究室	北海道大学医学部附属癌研究施設カイク部門	
黄 建華	中国人民解放军濟南军区総医院心血管外科	札幌医科大学第 2 外科学	
韓 英梅	国家医薬管理局天津薬物研究院中薬一室	北海道医療大学薬学部生薬学	
金 春玉	延边大学医学院附属医院中西医结合科	弘前大学医学部附属脳神経疾患研究施設臨床神経部門	
林 世徳	遵義医学院附属医院伝染病学教研室	岩手医科大学医学部内科学第 1	
魏 継承	瀘州医学院附属医院麻醉科	岩手医科大学医学部麻醉学	
呂 良英	中国医科大学第二臨床学院小児外科	東北大学大学院医学研究科小児医学（小児外科学）	
呉 書林	遼寧省腫瘍医院胸外科	東北大学加齢医学研究所呼吸器再建	
杜 伯涛	哈爾濱医科大学附属第二医院婦産科	山形大学医学部産科婦人科学	
孫 慧君	大連医科大学基礎医学院分子生物学教研室	筑波大学医学専門学群基礎医学系病理学	
王 宇輝	中国中医研究院基礎理論研究所生物化学研究室	筑波大学医学専門学群臨床医学系内科学（代謝内分泌）	
馬 汝海	中国医科大学基礎医学院化学教研室	埼玉県立がんセンター研究所	
李 茵	中国医科大学第一臨床学院循環内科	千葉大学医学部内科学第 2	
馬 淑梅	中国医科大学第二臨床学院心血管内科	日本医科大学附属千葉北総病院内科学第 1	
楊 建英	山西省人民医院呼吸器内科	医療法人鉄蕉会亀田総合病院看護部	
鄧 柏楊	広西中医学院第一附属医院外科	東京大学大学院医学系研究科臓器病態外科学（血管外科学）	
李 建明	黒龍江省医院耳鼻喉科	東京大学大学院医学系研究科感覚・運動機能医学（耳鼻咽喉科学）	
賈 霏	深圳市中医院兒科	東京大学医学部寄附講座生体防御機能学	
李 小烽	河南省衛生防疫站地方病防治研究所甲科	東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻身体教育学	
武 継民	天津医用設備研究所生物材料室	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系	
耿 京喜	衛生部北京医院外事処	日本医科大学医療管理学	
朴 蓮善	延边大学医学院附属医院内分泌内科	順天堂大学医学部内科学	
程 少為	首都医科大学附属北京紅十字朝陽医院皮膚科	慶應義塾大学医学部皮膚科学	
畢 建斌	中国医科大学第一臨床学院泌尿外科	慶應義塾大学医学部泌尿器科学	
寿 延寧	中日友好医院胸外科	東京医科大学外科学第 1	
楊 浜	中国医科大学第二臨床学院婦産科	東京慈恵会医科大学産婦人科学	
呉 浜陽	中国医科大学第一臨床学院麻醉科	東京慈恵会医科大学麻醉科学	
龐 辰久	河南省眼科研究所眼科	昭和大学医学部眼科学	
宋 紅	中国人民解放军第四軍医大学口腔医学院牙周粘膜病科	昭和大学歯学部第 3 歯科保存学	
趙 小瑜	蘇州医学院附属第一医院整形焼傷科	杏林大学医学部形成外科学	
李 津	衛生部北京生物制品研究所質量監督管理部	国立感染症研究所カイク第 2 部	
李 書淵	広州市薬品検驗所中薬室	国立医薬品食品衛生研究所生薬部	
方 文涛	上海市胸科医院胸外科	国立がんセンター中央病院特殊病棟部	
畢 秀瓊	雲南省衛生防疫站艾滋病防治科	国立国際医療センター病院臨床研究開発部	
呉 政宏	上海第二医科大学附属上海兒童医学中心検驗科	国立小児病院研究検査科	
萬 毅	中国中医研究院西苑医院外賓病房	東京都老人医療センター内科	
王 東	深圳市人民医院普通外科	社会保険中央総合病院大腸肛門病センター	
姜 萍	山東省衛生防疫站計画免疫科	国立感染症研究所カイク第 2 部	
蔣 雷生	上海第二医科大学附属新華医院骨科	横浜市立大学医学部整形外科学	
孫 継紅	首都医科大学附属北京紅十字朝陽医院呼吸疾病医療研究中心	聖マリアンナ医科大学病院看護部	
楊 化兵	中国人民解放军総後勤部衛生部人民軍医出版社	北里大学医療衛生学部医療情報学	
蔣 絢	北京医科大学人民医院消化内科	東海大学医学部内科学	
邱 忠民	江西中医学院附属医院呼吸内科	金沢大学医学部内科学第 3	
張 世俊	中国人民解放军第 305 医院全軍老年病中心	金沢大学がん研究所腫瘍分子科学	
齊 社寧	蘭州医学院血液病研究所	福井医科大学内科学（1）	
金 恩浩	延边大学医学院附属医院放射線科	山梨医科大学放射線医学	
劉 紅剛	首都医科大学附属北京同仁医院病理科	信州大学医学部病理学第 2	
馬 麗娜	白求恩医科大学基礎医学院分子生物学教研室	岐阜薬科大学薬学部分子生物学	
劉 正娟	大連医科大学附属第二医院兒科教研室	浜松医科大学小児科学	
張 凡非	山西省衛生防疫站衛生検驗科	静岡県環境衛生科学研究所	
李 光宇	中国医科大学附属第一医院神経外科	名古屋大学医学部脳神経外科学	

氏名	所属機関	研究機関	
鄧 一夫	首都医科大学予防医学系	名古屋市立大学医学部公衆衛生学	
王 鎮山	大連医科大学附属第二医院呼吸内科	藤田保健衛生大学医学部内科学（呼吸器・アレルギー-内科）	
曹 雪源	河北省職工医学院附属医院腫瘍外科	愛知県がんセンター研究所病理学第 1 部	
陳 爰文	福建省立医院検驗科	三重大学医学部内科学第 2	
諸葛 欣	天津市第三中心医院内科	京都大学大学院医学研究科臨床生体統御医学（成人・老年病態学）	
許 鳳鳴	安徽省医学科学研究所薬物化学研究室	京都薬科大学薬学部生薬学	
崔 黎麗	中国人民解放军第二軍医大学薬学院無機物化教研室	京都薬科大学薬学部薬物動態学	
李 国鋒	中国人民解放军第一軍医大学附属南方医院薬物研究所	京都薬科大学薬学部薬剤学	
廖 禹林	中国人民解放军蘭州軍区烏魯木齐総医院心血管内科	大阪大学大学院医学系研究科病態情報内科学（第一内科）	
黄 定明	華西医科大学口腔医学院口腔内科牙体牙髓科	大阪大学歯学部口腔細菌学	
関 素敏	中国人民解放军第四軍医大学口腔医学院口腔予防科	大阪大学歯学部予防歯科学	
姚 桂華	山東医科大学第二附属医院心血管内科	大阪市立大学医学部内科学第 1	
楊 志明	山西医科大学第二医院心内科	関西医科大学内科学第Ⅱ	
朱 建新	中国医科大学第一臨床学院内分泌科	神戸大学医学部内科学第 2	
陳 秋梅	北京婦産医院婦産科	神戸大学医学部産科婦人科学	
程 紹華	吉林医学院附属医院影像・介入放射科	奈良県立医科大学放射線医学	
范 静怡	上海市儿童医院内科	鳥取大学医学部附属脳幹性疾患研究施設脳神経小児科	
馬 迎華	北京医科大学公共衛生学院児童青少年衛生研究所	鳥取大学医学部附属脳幹性疾患研究施設脳神経小児科	
朴 成郁	延辺大学医学院附属医院中西医結合科	岡山大学医学部内科学第 1	
王 紀文	山東医科大学附属医院児内科	岡山大学医学部小児神経学	
王 豫蓉	重慶医科大学附属児童医院口腔科	広島大学歯学部小児歯科学	
鐘 曉波	瀘州医学院附属医院口腔内科	広島大学歯学部小児歯科学	
董 武	中国人民解放军第一軍医大学生物医学工程系医学図像実験室	高知医科大学第 2 解剖学	
董 茂盛	中国人民解放军総医院普通外科	九州大学医学系研究科医学部臨床・腫瘍外科学	
孫 洪涛	内蒙蒙医学院附属医院心血管内科	九州大学医学系研究科附属心臓血管研究施設内科部門	
崔 清平	新疆医科大学基礎医学部生化教研室	国立病院九州がんセンター臨床研究部	
楊 邦祥	華西医科大学附属第一医院麻醉科	佐賀医科大学麻醉蘇生学	

第 24 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
鄭 日男	延辺大学医学院附属医院消化内科	北海道大学大学院医学研究科分子病態制御学（消化器病態内科学）	
張 雷華	中国人民解放军蘭州軍区烏魯木齐総医院普通外科	北海道大学大学院医学研究科外科治療学（移植外科学）	
戦 麗彬	大連医科大学附属第二臨床学院中医科	北海道大学大学院薬学研究科医療薬学	
潘 娜	河南医科大学第三附属医院手術室	青森県立保健大学健康科学部看護学科看護管理学	
朴 紅梅	延辺大学医学院附属医院呼吸内科	岩手医科大学医学部内科学第 3	
黄 春春	広州中医薬大学国際学院弁公室	東北大学大学院医学系研究科社会医学（国際保健学）	
張 彬	中国医学科学院腫瘍研究所腫瘍医院頭頸腫瘍外科	東北大学大学院医学系研究科機能回復外科学（機能回復外科学）	
劉 順愛	北京地壇医院病毒研究室	東北大学加齢医学研究所附属医用細胞資源センター	
羅 闢強	中国医学科学院腫瘍研究所腫瘍医院影像診断科	筑波大学医学専門学群臨床医学系放射線医学	
楊 建梅	北京医科大学第一医院内分泌科	自治医科大学内分泌代謝学	
郝 麗栄	哈爾濱医科大学附属第一臨床医学院腎内科	埼玉医科大学腎臓内科学	
李 松	中国人民解放军第 4 5 8 医院骨科	千葉大学医学部整形外科	
孫 亜清	中国医科大学第二臨床学院心内科	日本医科大学付属千葉北総病院内科学第 1	
張 石川	四川省第二人民医院腫瘍医院研究所頭頸科	国立がんセンター研究所支所臨床腫瘍病理部	
梁 睿	西安医科大学第二臨床医学院婦産科	東京大学大学院医学系研究科女性診療科・産科	
肖 汀	中国医科大学第一臨床学院皮膚科	東京大学大学院医学系研究科感覚・運動機能医学（皮膚科学）	
盧 悦淳	天津医科大学第二医院麻醉科	東京大学大学院医学系研究科生体管理医学（麻酔学）	
呉 園丁	北京医科大学第一医院耳鼻咽喉科	東京大学医科学研究所先端医療研究センター	
楊 莉萍	衛生部北京医院薬検科	東京大学大学院薬学系研究科細胞生化学生体異物学	
白 立石	黒龍江衛生防疫站病毒研究所	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科ウイルス制御学	
邵 文碩	首都医科大学宣武医院血液科及血液科実験室	東京医科歯科大学難治疾患研究所成人疾患研究部門分子病態	

氏名	所属機関	研究機関	
趙 麗穎	白求恩医科大学口腔医学院口腔内科	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯髄生物学分野	
高 雪梅	北京医科大学口腔医学院正畸科	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面矯正学	
肖 凱	遼寧中医学院針灸系臨床治療教研室	日本医科大学生理学第 1	
張 岩	白求恩医科大学第一臨床学院眼科	順天堂大学医学部眼科学	
韓 昱晨	中国医科大学基礎医学院病理教研室	慶應義塾大学医学部病理学	
龔 齐南	上海市衛生局外事処	慶應義塾大学医学部医療政策・管理学	
李 曉清	河北省人民医院眼科	慶應義塾大学医学部眼科学	
李 志傑	中国医科大学第二臨床学院核医学科	慶應義塾大学医学部放射線科学	
張 軍	中国医科大学第一臨床学院胸外科	東京医科大学外科学第 1	
熊 雲	中国中医研究院望京医院神経内科	東京女子医科大学附属脳神経センター神経内科	
王 作軍	中国人民解放军第四軍医大学唐都医院物理医学与康復科	東京慈恵会医科大学 ME 研究室	
陳 輝	首都医科大学附属北京口腔医院正畸科	昭和大学歯学部歯科矯正学	
方 向群	中国人民解放军總医院呼吸科	杏林大学医学部第 1 内科学	
邢 德君	吉林省腫瘤医院治療二科	東京理科大学薬学部生化学	
李 悦璋	衛生部成都生物制品研究所血液制剂室	国立感染症研究所ウイルス第二部腫瘍ウイルス室	
李 傳友	北京市結核病胸部腫瘍研究所内科実験室	財団法人結核予防会結核研究所分子病理学科	
崔 正善	延吉市肛腸医院予防保健科兼電診科	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所研究企画・情報部	
周 劍恵	吉林省衛生防疫站計画免疫科実験室	学校法人北里学園北里大学北里生命科学研究所ウイルス感染制御学	
馬合木特 亜森	新疆医科大学附属腫瘍医院第 1 外科	NTT 東日本関東病院外科	
徐 春波	山東中医薬大学中医文献研究所	横浜市立大学医学部附属市民総合医療センターリハビリテーション科	
呉 琳	中国医科大学附属口腔医院修復科	神奈川歯科大学歯学部口腔解剖学	
韓 久卉	河北医科大学第三医院骨外科	新潟大学医学部形成外科学	
楊 興昇	山東医科大学附属医院産科	新潟大学医学部産婦人科学	
朱 燕波	北京中医薬大学衛生管理系医院管理教研室	富山医科薬科大学医学部統計・情報科学	
鍾 加勝	中日友好医院薬学部	富山医科薬科大学薬学部薬剤設計学	
葛 誼	北京医科大学人民医院耳鼻咽喉科	金沢大学医学部耳鼻咽喉科学	
許 紅日	延边大学医学院附属医院耳鼻咽喉科	山梨医科大学耳鼻咽喉科学	
宋 效鳳	黒龍江省医院老年病内科	長野県看護大学老年看護学	
張 曉春	山西省兒童医院急救中心	長野県看護大学看護教育・管理学	
程 嘉芸	遼寧市中医研究所薬理研究室	浜松医科大学薬理学	
蔡 立新	首都医科大学宣武医院神経外科	国立療養所静岡東病院	
徐 力平	寧夏回族自治区人民医院兒科	静岡県立こども病院第一診療部	
華 文	首都医科大学附属北京紅十字朝陽医院眼科	名古屋大学大学院医学研究科頭頸部・感覚器外科学（眼科学）	
熊 革	北京積水潭医院手外科	名古屋大学大学院医学研究科運動・形態外科学（手の外科学）	
陸 紹紅	浙江省医学科学院寄生虫病研究所免疫生化室	名古屋市立大学医学部医動物学	
張 震寰	重慶医科大学附属第一医院普外科	名古屋市立大学医学部外科学第 2	
孟 華	中国医学科学院北京協和医院超声診断科	名古屋市立大学医学部産科婦人科学	
楊 春霞	華西医科大学公共衛生学院流行病学教研室	愛知県がんセンター研究所疫学・予防部	
韓 龍海	延边大学医学院附属医院腫瘍科	京都府立医科大学外科学（消化器外科）	
陳 慧	広州中医薬大学第二臨床医学院消化内科	大阪大学大学院医学系研究科分子制御内科学（旧内科学第 2）	
黄 紅蘭	白求恩医科大学基礎医学院病原生物学教研室	大阪大学大学院医学系研究科微生物学（旧細菌学）	
黄 培新	河南省衛生防疫站克大研究室	大阪大学大学院医学系研究科社会環境医学（旧環境医学）	
張 永	山東中医薬大学附属医院内科	関西医科大学内科学第Ⅲ	
朱 長林	承德医学院附属医院小兒科	大阪医科大学小兒科学	
張 恵英	寧夏医学院予防医学教研室	大阪市立大学大学院医学研究科公衆衛生学	
朱 紅	黒龍江省医院門診物理診断科	大阪市立大学大学院医学研究科循環器病態内科学（内科学第 1）	
許 在華	中国人民解放军瀋陽軍区總医院神経外科	大阪市立大学大学院医学研究科脳神経外科学（脳神経外科学）	
張 宏	白求恩医科大学第一臨床学院腫瘍外科	大阪府立成人病センター第 3 外科	
翟 建軍	衛生部北京医院産科	大阪府立成人病センター婦人科	
劉 学勇	中国医科大学第二臨床学院骨科	和歌山県立医科大学整形外科科学	
白 涛	中国医科大学第二臨床学院産科	和歌山県立医科大学産科婦人科学	
岳 衛東	哈爾濱医科大学附属第二医院神経内科	島根医科大学内科学第 3	
石 軍	上海市第六人民医院血液内科	岡山大学医学部内科学第 2	
唐 家荣	同済医科大学附属同済医院循環器内科	愛媛大学医学部内科学第 2	
楊 旅軍	陝西省人民医院焼傷整形外科	愛媛大学医学部皮膚科学	
施 旺紅	中国人民解放军第四軍医大学空軍医学系心理学教研室	九州大学大学院医学研究院精神病態医学	
雲 霞	内蒙古医学院基礎部病理生理学教研室	琉球大学医学部生化学第 1	

第 25 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
張 曉青	中国人民解放军第二军医大学第一附属医院腫瘤放射治療科	北海道大学大学院医学研究科病態情報学（放射線医学）	
向 慧玲	天津市第三中心医院肝二科	旭川医科大学外科学第 2	
宗 文漪	中国人民解放军总医院老年内分泌科	東北大学大学院医学系研究科内科病態学（分子代謝病態学）	
孫 桂蓮	中国医科大学附属第一臨床学院兒科	東北大学大学院医学系研究科小児医学（小児病態学）	
楊 明	白求恩医科大学第一臨床学院腫瘤外科	東北大学大学院医学系研究科外科病態学（腫瘍外科学）	
喻 曉兵	衛生部北京医院眼科	東北大学大学院医学系研究科感覚器病態学（眼科学）	
李 軍	青島市市立医院神經内科	東北大学大学院医学系研究科神經科学（神經病態制御学）	
趙 亮	衛生部医院管理研究所医療質量管理研究部	東北大学大学院医学系研究科社会医学（医療管理学）	
張 麗荣	白求恩医科大学第三臨床学院（中日聯誼医院）基本外科	東北大学医学部附属病院看護部	
馬 晋峰	山西省腫瘤医院普外科	山形大学医学部外科学第 1	
劉 萍	岳陽市一人民医院影像中心 C T 室	筑波大学医学専門学群臨床医学系放射線医学	
張 玥	中国人民解放军白求恩軍医学院護理系臨床護理教研室	茨城県立医療大学保健医療学部看護学科	
趙 曉甦	白求恩医科大学第一臨床学院護理部	茨城県立医療大学保健医療学部看護学科	
陳 騰	山東医科大学附属医院神經外科	自治医科大学分子病態治療研究センター遺伝子治療研究部	
才 麗平	遼寧中医学院基礎部	獨協医科大学内科学（呼吸器・アレルギー）	
潘 熙慶	延边大学医学院附属医院燒傷整形科	埼玉医科大学形成外科学	
王 美華	貴州省衛生庁幹部保健処	国立保健医療科学院公衆衛生政策部	
傅 永慧	中国医科大学第二臨床学院骨外科	千葉大学大学院医学研究院整形外科学	
王 小競	中国人民解放军第四軍大学口腔医学院口腔内科学教研室兒童口腔科	東京歯科大学千葉病院小児歯科学	
邢 広群	青島大学医学院附属医院腎病内科	東京大学大学院医学系研究科生体防御腫瘍内科学（内分泌病態学）	
賀 紅	山東医科大学附属医院心内科	東京大学大学院医学系研究科加齢医学（老年病学）	
秦 建輝	中国人民解放军海軍总医院普通外科	東京大学大学院医学系研究科臓器病態外科学（血管外科学）	
唐 先南	中国人民解放军第一軍医大学附属珠江医院麻醉科	東京大学大学院医学系研究科生体管理医学（麻酔学）	
李 娜	中国人民解放军第二〇八医院婦産科	東京大学医学部附属病院女性外科	
謝 瑞夢	四川省腫瘤医院研究所婦産科	東京大学医学部附属病院女性外科	
韓 英	中国人民解放军第四軍医大学第一附属医院消化内科	東京大学大学院薬学系研究科医療薬学	
鄧 明明	哈爾濱医科大学第一臨床医学院口腔兒童牙病科	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科生体支持組織学系生体硬組織再生学歯周病学	
和 璐	北京大学口腔医学院牙周科	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科生体支持組織学系生体硬組織再生学歯周病学	
呂 琦	中国人民解放军南京軍区福州总医院骨科	帝京大学医学部救命救急センター	
羊 利敏	陝西省婦幼保健院婦女保健	順天堂大学医学部公衆衛生学	
樊 平申	中国人民解放军第四軍医大学附属西京医院皮膚病学教研室	順天堂大学医学部皮膚科学	
陳 立忠	中国医科大学第二臨床学院眼科	順天堂大学医学部眼科学	
孟 繁波	白求恩医科大学第三臨床学院（中日聯誼医院）心血管内科	慶應義塾大学医学部内科学	
魏 佳雪	広州市婦嬰医院婦産科	慶應義塾大学医学部産婦人科学	
楊 林海	山西省兒童医院山西省婦幼保健院兒内科	東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所循環器小児科学	
劉 瑞芹	黒龍江省医院特需内科	東邦大学医学部附属大橋病院第 3 内科学	
邱 劍光	中山医科大学附属第三医院泌尿外科	杏林大学医学部泌尿器科学	
桂 明玉	白求恩医科大学基礎医学院無機化学教研室	東京薬科大学薬学部生薬学	
袁 進	衛生部成都生物制品研究所基因工程室	国立医薬品食品衛生研究所生物薬品部	
詹 立	成都市衛生防疫站環境衛生科	国立医薬品食品衛生研究所安全性生物試験研究センター変異遺伝部	
戴 維	衛生部国際交流中心中衛国際旅行社	国立国際医療センター国際医療協力局	
穆 剛	天津中医学院第一附属医院骨科	国立健康・栄養研究所食品表示分析・規格研究部食品成分機能表示研究室	
張 華	中国人民解放军第四軍医大学第二附属医院神經外科	国立精神・神経センター武蔵病院脳神経外科	
劉 春玲	黒龍江省中医研究院神經内科	日本医科大学付属第二病院内科学第 2	
韓 家強	中国人民解放军第二一〇医院幹部二科（老幹部病房）	昭和大学藤が丘病院内科	
趙 艷萍	山西医科大学第二医院兒科	神奈川県立こども医療センター看護部	
胡 敏	白求恩医科大学口腔医学院正畸科	新潟大学歯学部歯科矯正学	
趙 宇峰	吉林省中医中薬研究院新薬開発研究中心	富山医科薬科大学和漢薬研究所細胞資源工学	
張 穎	中国中医研究院西苑医院基礎医学研究室	富山医科薬科大学薬学部薬品生理学	
金 明姬	延边大学医学院附属医院薬剤科	金沢大学医学部薬剤部	
張 曉春	寧夏医学院附属医院兒科	山梨医科大学小児科学	
趙 航	南京医科大学附属南京第一医院麻醉科	山梨医科大学麻酔科学	

氏名	所属機関	研究機関	
王 宇声	白求恩医科大学第一臨床学院耳鼻咽喉－頭頸外科	信州大学医学部耳鼻咽喉科学	
張 爾泉	福建省婦幼保健院新生児科	長野県立こども病院総合周産期母子医療センター	
裴 福全	広東省衛生防疫站寄生虫病防治研究所実験室	岐阜大学医学部寄生虫学	
郭 亜紅	北京中医薬大学中薬学院中薬鑑定教研室	岐阜薬科大学薬学部薬草園	
羅 景慧	中国人民解放軍第一軍医大学第一附属医院薬学部	浜松医科大学内科学第 3	
丁 群芳	華西医科大学附属第一医院老年科	名古屋大学大学院医学研究科発育・加齢医学（老年科学）	
苗 華棟	上海市華東医院放射科磁共振室	名古屋大学大学院医学研究科高次医用科学（量子医学）	
陳 俊偉	中山医科大学附属第一医院肝胆外科	名古屋大学大学院医学研究科病態外科学（器官調節外科学）	
金 松蘭	延辺大学医学院附属医院婦産科	三重県立看護大学看護学部看護学科	
胡 方斌	広州市第二人民医院心血管内科	滋賀県立成人病センター循環器科	
張 存泰	華中科技大学同济医学院附属同济医院血管内科	京都大学大学院医学研究科臨床器官病態学（循環病態学）	
馬 瞧勤	浙江省疾病預防控制中心弁公室	京都大学大学院医学研究科国際保健学	
黄 嵐峰	白求恩医科大学第二臨床学院骨科	京都大学再生医科学研究所生体システム工学（医用システム工学）	
金 昌徳	中国人民解放軍第四軍医大学実験動物研究中心	大阪大学大学院医学系研究科病態制御外科学（旧外科学第 2）	
張 斌	中国福利会国際和平婦幼保健院婦産科	大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学（旧産科学婦人科学）	
李 兆東	上海第二医科大学附属新華医院消化内科	大阪大学大学院医学系研究科組織再生医学（旧腫瘍生化学）	
潘 静	北京婦産医院病理科臨床細胞室	財団法人大阪がん予防検診センター検診第二部	
嚴 森祥	浙江大学医学院附属第一医院放射科	神戸大学大学院医学系研究科生体情報医学	
応 晨江	華中科技大学同济医学院医学信息学系	武庫川女子大学生生活環境学部食物栄養学	
左 暉	四川省腫瘤医院研究所頭頸外科	和歌山県立医科大学病理学第 2	
張 慧	昆明医学院第一附属医院眼科	山口大学医学部分子感知医科学（眼科学）	
王 鵬飛	中国人民解放軍第四軍医大学第一附属医院泌尿外科	徳島大学医学部泌尿器科学	
袁 慶国	衛生部北京医院神経外科	九州大学大学院医学研究院附属脳神経病研究施設病理部門	
劉 杉	中国医学科学院腫瘍医院腫瘍研究所病理科	産業医科大学第 2 病理学	
黄 嘯	復旦大学医学院附属腫瘍医院婦科	久留米大学医学部産婦人科学	
練 詩梅	大連医科大学附属第二医院血液内科	琉球大学医学部保健学科保健技術学	

第 26 期研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
令狐 華	重慶医科大学附属第一医院婦産科	北海道大学大学院医学研究科神経病態学（分子細胞病理学）	
馬 麗亜	徐州市婦幼保健院児科	岩手医科大学小児科学	
王 波	北京大学人民医院骨科	東北大学大学院医学系研究科外科病態学（体性外科学）	
王 小軍	烏魯木齊温泉医院康復医学科	秋田大学医学部リハビリテーション部	
董 源洪	広州市第一人民医院麻醉科	筑波大学医学専門学群臨床医学系麻酔学	
肖 永芝	中国中医研究院医史文献研究所文献一室	茨城大学人文学部人文学科日本・中国文化論講座中国文化専攻コース	
張 漢哲	青島市市立医院神経内科	自治医科大学内科学（神経内科学部門）	
林 志雄	廈門中山医院骨外科	千葉大学大学院医学研究院整形外科	
陳 沁	広州市衛生学校、広州市広播電視大学護理專業管理小組	千葉大学看護学部	
崔 念暉	北京大学口腔医学院顎面外科	東京歯科大学千葉病院口腔外科学第 1	
劉 麗娟	黒龍江省薬品検驗所中薬室	東邦大学薬学部生薬学教室	
趙 琳	大連医科大学附属第二医院婦産科	東京大学大学院医学系研究科産婦人科学（生殖腫瘍学）	
金 紅	延辺大学医学院附属医院婦産科	東京大学大学院医学系研究科加齢医学（老年病学）	
任 迎春	河北医科大学第三医院胸外科	東京大学医学部附属病院呼吸器外科	
王 軍	淮安市第二人民医院麻醉科	東京大学大学院医学系研究科生体管理医学（麻酔学）	
孫 海晨	中国人民解放軍南京軍区南京総医院急診中心	東京大学大学院医学系研究科生体管理医学（救急医学）	
李 英麗	中国人民解放軍総医院基礎医学研究所生物化学研究室	東京大学医科学研究所基礎医科学大部門染色体制御分野	
聶 瓊	北京大学口腔医学院正畸科	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科咬合機能制御学	
王 勝朝	中国人民解放軍第四軍医大学口腔医学院牙体病科	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯髓生物学	
王 健	北京大学第一医院医学影像科	日本医科大学放射線医学	
周 翔	上海第二医科大学附属瑞金医院胸心外科	順天堂大学医学部心臓血管外科学講座	
李 曉軍	金陵医院医学検驗中心	東京医科大学免疫学	

氏名	所属機関	研究機関	
張 啓国	南京市鼓楼医院血液科	東京女子医科大学医学部薬理学	
楊 朋範	中国人民解放军南京軍区福州総医院神経外科	東京女子医科大学附属脳神経センター脳神経外科学	
潘 宝華	中国人民解放军第四军医大学第一附属医院整形外科中心	昭和大学医学部形成外科学	
倪 雪岩	吉林大学口腔医学院口腔内科児童牙病教研室	昭和大学歯学部小児歯科学	
楊 朝軍	雲南省衛生防疫站艾滋病科	国立感染症研究所エイズ研究センター	
馬 艷玲	雲南省衛生防疫站艾滋病科	国立感染症研究所エイズ研究センター第一室	
王 麗娜	吉林大学第一医院婦産科	国立感染症研究所遺伝解析室	
柯 昌文	広東省疾病预防控制中心微生物檢驗所	国立感染症研究所ウイルス第二部第一室	
張 恵茅	吉林大学中日聯誼医院放射線科	国立がんセンター中央病院放射線診断部	
朴 南哲	延辺腫瘍医院内科	東京都立駒込病院	
黄 啓陽	中国人民解放军総医院消化科	昭和大学横浜市北部病院消化器センター	
許 四洋	中国人民解放军第一軍医大学訓練部医学情報教研室	北里大学医療衛生学部医療工学科臨床工学専攻医療情報学	
孔 英	河北省人民医院保健一科	北里大学病院看護部	
閔門烏力吉	内蒙古医学院附属医院急診科	国立相模原病院臨床研究センター先端技術開発研究部	
王 智鵬	山東省眼科研究所青光眼科	新潟大学大学院医歯学総合研究科感覚統合医学	
万 毅剛	南京市鼓楼医院中医科	新潟大学大学院医歯学総合研究科附属腎研究施設分子病態学分野	
牛 宝玉	上海中医薬大学中薬学院方剤教研室	富山医科薬科大学医学部和漢診療学	
万 双林	浙江大学医学院附属邵逸夫医院骨科	金沢大学大学院医学系研究科機能再生学（機能再建学）	
朴 英実	延辺大学医学院基礎部病理生理学教研室	金沢大学大学院医学系研究科血液情報学（血液情報発信学）	
孫 皎	吉林大学第一医院幹部病房	石川県立看護大学	
張 成喜	中山医科大学附属第三医院急診科	岐阜大学大学院医学研究科再生医科学専攻再生応用（循環器内科学）	
章 曉紅	四川省人民医院内科	浜松医科大学微生物学	
洪 春花	吉林大学第一医院病案室	名古屋大学大学院医学系研究科高次医用科学（医療管理情報学）	
李 衛華	上海市計画生育科学研究所薬理毒理研究室	名古屋大学大学院医学系研究科社会生命科学（環境労働衛生学）	
郭 華	山東省立医院神経科	藤田保健衛生大学医学部脳神経外科	
王 軍	中国医科大学附属第一医院神経内科	国立療養所中部病院長寿医療研究センター	
錢 俊	浙江省腫瘍医院大腸癌腹部外科部	愛知県がんセンター病院消化器外科部	
王 強	青島大学医学院附属医院神経科	藤田保健衛生大学七栗サトリウム	
江 芳	大連医科大学基礎医学院医学微生物学教研室	京都大学大学院医学研究科分子生体統御学（分子生物学）	
朱 蘇雨	湘潭市第一人民医院放療科	京都大学大学院医学研究科放射線医学（腫瘍放射線科学）	
郭 源	山東省千佛山医院普外科	京都大学大学院医学研究科移植免疫医学	
牛 志宏	山東省立医院泌尿外科	京都大学大学院医学研究科器官外科学（泌尿器病態学）	
黄 治林	唐山市工人医院美容整形外科	京都大学大学院医学研究科感覚運動系病態学（形成外科学）	
譚 愛国	衛生部北京医院檢驗科	京都大学ウイルス研究所生体応答学研究部門	
李 妍	中国人民解放军第四军医大学第一附属医院心臓内科	大阪大学大学院医学系研究科病態情報内科学（旧内科学第1）	
袁 銘	中国人民解放军第四军医大学第一附属医院心血管内科	大阪大学大学院医学系研究科加齢医学（旧老年病医学）	
高 新宇	興安盟人民医院内三科	大阪大学大学院医学系研究科加齢医学（旧老年病医学）	
楊 玉波	吉林省腫瘍医院腹部外科	大阪大学大学院医学系研究科病態制御外科学（旧外科学第2）	
楊 華	中国医学科学院北京協和医院耳鼻咽喉科	大阪大学大学院医学系研究科感覚器外科学（旧耳鼻咽喉科学）	
邱 朝暉	華東医院心内科	大阪市立大学大学院医学研究科循環器病態内科学（内科学第1）	
周 佩	中国人民解放军広州軍区武漢総医院特診科超声影像	近畿大学医学部内科学（消化器内科部門）	
宣 鳴	四川大学華西口腔医学院口腔顎面外科	大阪歯科大学歯学部口腔病理学	
梁 紅萍	山西省人民医院臨床医学実験室	神戸大学大学院医学系研究科微生物・免疫学	
劉 東春	瀋陽薬科大学中薬学院生薬学教研室	神戸学院大学薬学部薬剤学	
楊 凡	四川大学華西第二医院児科	鳥取大学医学部周産期・小児医学（旧小児科学）	
王 学廉	中国人民解放军第四军医大学第二附属医院神経外科	岡山大学大学院医歯学総合研究科脳神経制御学神経病態外科学（旧脳神経外科学）	
徐 武華	広州市紅十字会医院神経内科	岡山大学大学院医歯学総合研究科脳神経制御学神経病態内科学（旧神経内科学）	
金 海燕	延辺大学医学院附属医院消化内科	山口大学医学部先端分子応用医科学（内科学第1）	
陳 国奮	中国人民解放军第一軍医大学附属医院創傷骨科	小郡第一総合病院整形外科	
曹 建新	常州市第一人民医院消化内科	徳島大学医学部病態予防医学（臓器病態治療医学）	
潘 哲式	延辺大学医学院病理科	高知医科大学第1病理学	
張 吉天	天津市胸科医院胸外科	福岡大学医学部外科学第2	
劉 安信	青島市人民医院中医科	福岡大学薬学部臨床疾患薬理学	
朴 春花	中国康復研究中心博愛医院総合康復科	産業医科大学リハビリテーション医学	
姚 徳茂	西安交通大学第一医院普通外科	鹿児島大学医学部外科学第1	

笹川医学奨学金制度第 1 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
孫 貴範	中国医科大学	筑波大学医学専門学群疫学	
剛 勇	中日友好医院	自治医科大学附属大宮医療センター総合医学 I	
姜 奕	中国医科大学	順天堂大学医学部病理学第 2	
孟 高淵	華西医科大学	東京大学医学部検査部	
高 眉揚	広州医学院第二附属医院	東京女子医科大学母子総合医療センター	
朱 威	上海生物製品研究所	東京理科大学生物工学科免疫学	
張 珊文	北京市腫瘤防治研究所	福井医科大学放射線基礎医学	
姚 正生	西安医科大学	京都大学医学部核医学	
嚴 律南	華西医科大学附属第一医院	京都大学医学部外科学第 2	
牛 建昭	北京中医学院	長崎大学医学部解剖学第 3	

第 2 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
宋 剛	山東医科大学	札幌医科大学生理学第 2	
冉 玉平	華西医科大学附属一院	順天堂大学医学部皮膚科学	
謝 麗亜	浙江省精神衛生研究所	東京医科歯科大学難治疾患研究所社会医学研究部門	
梅 家模	江西省衛生防疫ステーション	国立公衆衛生院疫学部	
周 新華	湖北医学院	杏林大学医学部第 2 解剖学	
曹 元華	中国医学科学院皮膚病研究所	国立多摩研究所生体防御部	
康 健	中国医科大学附属第一医院	千葉大学医学部附属肺癌研究施設第 2 臨床研究部	
陳 福君	瀋陽薬学院	富山医科薬科大学薬学部薬品作用学	
李 玉雨	延辺医学院	九州大学医学部ウイルス学	
趙 栄祥	浙江中医学院附属医院	久留米大学医学部耳鼻咽喉科学	

第 3 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
丁 梅	中国医科大学	山形大学医学部法医学	
隋 星衛	山東医科大学附属病院	東京大学医科学研究所癌病態学研究部	
殷 東風	遼寧中医学院附属医院	国立がんセンター中央病院内科	
宋 友華	北京医院	星薬科大学薬学部製剤学	
欒 栄生	華西医科大学	国立公衆衛生院疫学部成人病室	
孫 莉	中国医学科学院腫瘍医院	国立小児病院麻酔科	
周 彩存	蚌埠医学院附属医院	国立療養所東京病院呼吸器病部	
邵 国光	白求恩医科大学第二臨床医学院	国立がんセンター東病院外来部呼吸器外科	
丁 莉莉	濱州医学院	金沢大学遺伝子実験施設	
韓 驊	第四軍医大学	京都大学医学部医化学第 1	

第 4 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
王 娜亜	中日友好医院	国立国際医療センター病院耳鼻咽喉科	
周 正	中日友好医院	東京女子医科大学附属消化器病センター消化器外科学	
孫 中華	白求恩医科大学附属一院	東京女子医科大学内内分泌疾患総合医療センター内科 2	
汪 玲	上海医科大学公共衛生学院	国立公衆衛生院母子保健学部母性保健室	
逢 黎毅	山東医科大学	東京慈恵会医科大学産婦人科学	
林 玲	福建医学院附属二院	山梨医科大学内科学第 3	
郭 在培	華西医科大学附属一院	京都大学医学部皮膚病学微生物学	
郝 衛東	北京医科大学公衆衛生学院	岡山大学薬学部薬品化学	
段 樹民	南通医学院	九州大学医学部生理学第 1	
程 曉曙	江西医学院第二附属医院	九州大学医学部附属心臓血管研究施設内科部門	

第 5 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
呉 恵霞	同済医科大学環境医学研究所	札幌医科大学衛生学	
王 曉里	河北医学院口腔医院	千葉大学医学部歯科口腔外科学	
李 悦欣	中国医科大学	東京大学医学部生理学第 1	
張 希龍	南京軍区総医院	東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所循環器外科学	
張 偉華	甘肅省腫瘍医院	国立がんセンター中央病院第 1 病棟部	
馬 峰	蘇州医学院附属小児病院	信州大学医学部小児科学	
李 平	中国中医研究院	新潟大学医学部附属腎研究施設免疫病態学部門	
付 守廷	瀋陽薬科大学	新潟大学医学部薬理学	
童 茂栄	南京金陵医院	藤田保健衛生大学医学部内科学	
陳 錦秀	福建中医学院附属人民医院	滋賀医科大学医学部看護学科	

第 6 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
唐 明輝	白求恩医科大学	北海道大学歯学部口腔生化学	
姚 文慶	遼寧省腫瘍研究所	東北大学医学部公衆衛生学	
尹 維民	中国人民解放軍北京部隊総医院	秋田県立脳血管研究センター神経内科学研究部	
馮依努爾尼旺孜	新疆自治区人民医院	日本医科大学産婦人科学	
趙 衛国	上海第二医科大学	東京女子医科大学附属脳神経センター脳神経外科学	
方 劍喬	浙江中医学院	昭和大学医学部第 1 生理学	
張 亨	包頭市中蒙医研究所	昭和大学医学部第 1 薬理学	
黄 志力	皖南医学院	愛媛大学医学部薬理学	
唐 小海	四川省腫瘍医院	国立がんセンター中央病院第 2 外来部婦人科	
杜 金行	中日友好医院	聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター D D S 部門	

第 7 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
周 芳堅	湖南医科大学附属湘雅医院	北海道大学医学部泌尿器科学	
汲 娟娟	吉林医学院	秋田大学医学部生理学第一	
関 洪全	遼寧中医学院	千葉大学真菌医学研究センター真菌感染分野	
金 政錫	黒龍江省医院	東京大学大学院医学系研究科腫瘍外科学	
劉 賢臣	山東精神衛生中心	東京大学大学院医学系研究科精神保健学	
王 治平	上海第 2 医科大学新華医院	東京女子医科大学小児科学	
王 広樹	白求恩医科大学基礎医学院	昭和大学薬学部生薬学・植物薬品化学	
曹 彤	浙江省人民医院	昭和大学歯学部第 1 口腔外科学	
劉 維賢	中国医科大学第 2 臨床学院	昭和大学歯学部第 1 口腔外科学	
伍 建林	中山医科大学附属第 1 医院	横浜市立大学医学部麻酔科学	
馬 剛	白求恩医科大学第 1 臨床学院	北里大学医学部皮膚科学	
高 秀華	吉林医学院	東海大学医学部生体防御機構系免疫学	
李 亜明	中国医科大学第 1 臨床学院	金沢大学医学部核医学	
陳 衛民	中国医科大学第 2 臨床学院	金沢大学医学部麻酔・蘇生学	
韓 春茂	浙江医科大学附属第 2 医院	金沢医科大学形成外科学	
潘 曉琳	新疆維吾爾石河子大学医学院	財団法人長野県成人病予防協会長野県がん検診・救急センター	
林 崇韜	白求恩医科大学口腔医学院	朝日大学歯学部歯周病学	
高 長明	江蘇省腫瘤防治研究所	愛知県がんセンター研究所疫学部	
于 向民	青島医学院	京都大学大学院医学研究科生体構造医学講座	
韋 立新	中国人民解放軍総医院	大阪市立大学医学部病理学第 2	

第 8 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
韓 英	中国人民解放軍北京軍区総医院	弘前大学医学部内科学第 1	
許 順	中国医科大学附属第一臨床学院	獨協医科大学外科学（胸部）	
孫 成均	華西医科大学公共衛生学院	国立公衆衛生院地域環境衛生学部環境健康影響室	
魏 秀峰	白求恩医科大学口腔医学院	昭和大学歯学部第 3 歯科保存学	
薛 長勇	中国人民解放軍総病院	国立健康・栄養研究所老人健康・栄養部	
葉 春峰	西安医科大学	北里大学医療衛生学部医療情報学	
劉 昭純	山東中医薬大学	横浜市立大学医学部附属病院リハビリテーション科	
謝 院生	広西壮族自治区南溪山医院	新潟大学医学部内科学第 2	
張 允嶺	北京中医薬大学第二附属医院	富山医科薬科大学医学部生化学（第 1）	
呉 平生	第一軍医大学附属南方医院	金沢大学医学部生化学第二	
袁 国祥	南通医学院	浜松医科大学医学部内科学第 3	
費 華	衛生部上海生物製品研究所	岐阜大学医学部臨床検査医学	
郭 永清	白求恩医科大学中日聯誼医院	三重大学医学部耳鼻咽喉科学	
畢 振強	山東省衛生防疫站	大阪大学微生物病研究所感染症研究部門（細菌感染分野）	
章 志偉	中国医科大学第一臨床学院	近畿大学医学部心臓外科学	
張 志文	中国人民解放軍第四軍医大学	国立循環器病センター病院脳神経外科	
趙 傑剛	洛陽医学高等専科学校附属医院	兵庫県立看護大学教育・管理看護学	
余 争平	中国人民解放軍第三軍医大学	産業医科大学産業生態科学研究所環境中毒学	
任 愛国	華北煤炭医学院	産業医科大学環境疫学	
劉 強	蘇州医学院	福岡大学医学部病理学第 1	

第 9 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
侯 凱	白求恩医科大学第一臨床学院	東北大学大学院医学研究科神経科学（神経病態制御学）	
辛 紅	天津医科大学総医院	東北大学加齢医学研究所呼吸器腫瘍	
雒 文田	西安医科大学第一附属医院	千葉大学医学部寄生虫学	
馬 興榮	中国人民解放军第四軍医大学西京医院	放射線医学総合研究所医療情報室	
蔡 靈芝	深圳市儿童医院	日本医科大学小児科学	
謝 亜雄	貴陽医学院	順天堂大学医学部衛生学	
張 錦	寧夏医学院附属医院	順天堂大学医学部呼吸器内科学	
王 軍	中国人民解放军北京軍医学院	東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所循環器内科学	
盛 迅倫	寧夏医学附属医院	国立病院東京医療センター感覚器センター	
潘 立松	上海第二医科大学附属上海兒童医学中心	国立小児病院研究検査科	
雲登卓瑪	西藏自治区人民医院	信州大学医学部内科学第 1	
関 徳玉	瀋陽軍区第 2 〇 2 医院	金沢医科大学学生化学第 1	
張 平平	呼和浩特市第一人民医院	静岡県立大学看護学部	
劉 榮森	中国人民解放军総医院	大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部	
常 玲	首都医科大学附属北京同仁医院	大阪市立大学大学院医学研究科生殖発生発達病態学（産科婦人科学）	
傅 強	西安医科大学薬学院	武庫川女子大学薬学部薬品分析学	
劉 成起	国家中医薬管理局	広島国際大学医療福祉学部医療経営学科	
李 勤	白求恩医科大学第三臨床学院	山口大学医学部眼科学	
銭 立武	山東医科大学第二附属医院	九州大学大学院医学研究院臨床・腫瘍外科学	
李 連波	山東省衛生防疫站	大分県立看護科学大学人間科学講座環境科学	

第 10 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
章 天喬	杭州市五雲山療養院	岩手医科大学医学部内科学第 2	
孫 立波	白求恩医科大学第三臨床学院	東北大学大学院医学系研究科外科病態学（消化器外科）	
劉 曉平	遼寧省腫瘍医院	国立がんセンター東病院外来部	
李 綱	蘇州大学附属第一医院	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科尿路生殖機能学	
席 家寧	北京胸科医院	日本大学医学部病理学	
陳 欣	北京積水潭医院	東京女子医科大学医学部形成外科学	
何 華	濟寧医学院附属医院	東京女子医科大学附属脳神経センター神経内科	
張 会孝	陝西出入境検閲検疫局	国立感染症研究所エイズ研究センター第二室	
胡 秀英	華西医科大学第一附属医院	財団法人東京都老人総合研究所	
周 雲	蘇州大学附属兒童医院	聖マリアンナ医科大学泌尿器科学	
陳 智超	同済医科大学附属協和医院	浜松医科大学第 3 内科	
劉 沢軍	中国人民解放军第三軍医大学	浜松医科大学臨床検査医学	
邢 万金	内蒙古医学院基礎医学部	名古屋大学医学部附属病態制御研究施設分子病態研究部門	
黄 允寧	寧夏回族自治区人民医院	京都府立医科大学外科学（消化器外科）	
韋 宏	広西壮族自治区中医薬研究所	大阪大学大学院薬学研究科天然物化学	
張 貴燦	福建医科大学附属協和医院	国立循環器病センター心臓血管内科	
王 旭東	首都医科大学附属北京同仁医院	国立循環器病センター研究所バイオサイエンス部	
金 成哲	延辺大学医学院薬学院	徳島大学工学部生物工学科	
余 福勲	河南省衛生防疫站	長崎大学熱帯医学研究所分子構造解析分野	
王 鳳山	天津市衛生防病中心	熊本大学発生医学研究センター器官形成部門臓器形成分野	

第 11 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
曹 秉振	中国人民解放军濟南軍区総医院	北海道大学大学院医学研究科神経病態学（分子細胞病理学）	
米 衛東	中国人民解放军総医院	弘前大学医学部麻醉学	
呂 曉川	中国人民解放军総医院	東北大学大学院薬学研究科生命薬学専攻細胞情報薬学分野	
袁 志斌	上海市第六人民医院	群馬大学医学部核医学	
張 静	吉林大学第二医院	日本医科大学付属千葉北総病院内科学第 1	
尹 明実	延边大学医学院附属医院	日本医科大学内科学第 1	
李 儒正	海南省人民医院	順天堂大学医学部外科学	
金 東日	延边大学理工学院	東京薬科大学薬学部薬品分析化学	
金 永日	吉林大学化学学院	明治薬科大学薬学部天然薬物学	
馬 洪波	珠海出入境檢驗檢疫局	国立感染症研究所ウイルス第一部第一室	
林 傑	中国医科大学附属第一医院	金沢医科大学循環器内科学	
曹 学誠	中国人民解放军濟南軍区総医院	名古屋大学大学院医学系研究科運動・形態外科学(手の外科学)	
武 新安	蘭州医学院第一附属医院	京都大学大学院薬学研究科薬品動態制御学	
龐 書勤	蚌埠医学院附属医院	兵庫県立看護大学看護学部看護学科小児看護学	
呉 麗華	瀋陽市第一人民医院	島根医科大学医学部内科学第 3	
朱 旭東	中国人民解放军第三軍医大学	広島大学大学院医歯薬総合研究科創生医科学専攻探索医科学(旧病理学第 1)	
程 為平	黒龍江中医薬大学附属一院	広島大学大学院医歯薬総合研究科創生医科学専攻病態探索医科学(旧内科学第 3)	
劉 紹乾	中南大学湘雅医学院	徳島大学薬学部薬品物理化学	
葛 利軍	寧夏回族自治区人民医院	福岡大学筑紫病院内科学第 1	
欧 柏青	湖南省人民医院	大分医科大学循環病態制御（臨床検査医学）	

第 12 期特別研究者・指導責任者

氏名	所属機関	研究機関	
劉 聡	中国医科大学第二臨床学院	東北大学大学院医学系研究科内科病態学（分子代謝病態学）	
丁 漢昇	上海市医療保険局	東北大学大学院医学系研究科社会医学（医療管理学）	
王 少麗	長春中医学院	茨城大学人文学部人文学科日本・中国文化論講座中国文化専攻コース	
金 玉蓮	延边大学医学院附属医院	東京大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科学・聴覚音声外科	
徐 紅萌	河北医科大学第四医院	東京大学大学院医学系研究科生体管理医学講座麻醉学	
金 春林	上海市衛生局	慶應義塾大学医学部医療政策・管理学	
寿 延寧	中日友好医院	東京医科大学外科学第 1	
焉 伝祝	山東大学齊魯医院	国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第一部	
李 国棟	西安交通大学外語部	国際基督教大学アジア文化研究所	
田 素斎	河北医科大学第二医院	横浜市立大学医学部附属病院看護部	
劉 岩	広州市紅十字会医院	昭和大学藤が丘病院内科腎臓	
元 虎	延边大学医学院附属医院	昭和大学藤が丘病院整形外科	
藍 志傑	廈門市第一医院	金沢大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科学	
陳 建光	北華大学医学院	山梨大学大学院医学工学総合研究部薬理学	
孫 繼紅	首都医科大学附属北京朝陽医院	岐阜大学医学部看護学科成人・老年看護学	
王 文萍	遼寧中医学院附属医院	静岡県立静岡がんセンター緩和医療科	
代 政学	中国人民解放军第四軍医大学第一附属医院	京都大学大学院医学研究科内科系専攻内科学講座（循環器内科学分野）	
関 素敏	中国人民解放军第四軍医大学口腔医学院	大阪大学大学院歯学研究科分子病態口腔科学専攻口腔分子免疫制御学講座予防歯科学	
阮 宏瑩	天津市第一中心医院	九州大学大学院医学研究院耳鼻咽喉科	
張 輝	徐州医学院附属医院	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科循環器・呼吸器・代謝内科学	

VII. 関係者名簿

1. 日中医学協会歴代会長、理事長

・会 長

黒 川 利 雄	1985 年 9 月 2 日～1988 年 2 月 21 日
石 館 守 三	1988 年 3 月 17 日～1992 年 5 月 27 日
懸 田 克 躬	1992 年 5 月 28 日～1996 年 3 月 1 日
岡 本 道 雄	1996 年 3 月 19 日～2002 年 3 月 31 日
杉 村 隆	2002 年 4 月 1 日～

・理事長

石 館 守 三	1985 年 9 月 2 日～1992 年 5 月 27 日
羽 田 春 兔	1992 年 5 月 28 日～1995 年 7 月 1 日
中 島 章	1995 年 7 月 25 日～2002 年 3 月 31 日
森 岡 恭 彦	2002 年 4 月 1 日～

2. 笹川記念保健協力財団歴代会長、理事長

・会 長

笹 川 良 一	1974 年 5 月 4 日～1995 年 7 月 18 日
日野原 重 明	2000 年 5 月 26 日～

・理事長

石 館 守 三	1974 年 5 月 4 日～1992 年 5 月 20 日
日野原 重 明	1992 年 5 月 20 日～2000 年 5 月 26 日
紀伊國 献 三	2000 年 5 月 26 日～

3. 中国医学研修生委員会（中国医学研究者委員会）歴代委員長、副委員長、委員

・委員長

吉 利 和	1986 年 11 月 ～1990 年 9 月
曲直部 壽 夫	1990 年 9 月 ～1996 年 7 月
塚 田 裕 三	1996 年 7 月 ～1998 年 8 月
出 月 康 夫	1998 年 8 月 ～

・副委員長

織 田 敏 次	1986 年11 月～1990 年 9 月
鳥 居 有 人	1990 年 9 月～1994 年 7 月
井 出 源四郎	1994 年 7 月～1996 年 7 月
出 月 康 夫	1996 年 7 月～1998 年 7 月
大 藤 正 雄	1998 年 8 月～2002 年 9 月
田 平 武	2002 年 9 月～

・委 員 (五十音順)

池 谷 田鶴子	齋 藤 毅	日 暮 眞
稲 葉 裕	齋 藤 洋	久 道 茂
岡 田 善 雄	柴 田 実	御子柴 克 彦
萩 原 幸 夫	杉 本 恒 明	宮 村 達 男
小野瀬 英 雄	砂 田 今 男	門 間 和 夫
加 我 君 孝	関 根 弘	矢 島 治 明
金 井 淳	津 山 直 一	山 西 弘 一
河 野 信 博	根 本 則 道	家 森 幸 男
濃 沼 信 夫	橋 本 敬太郎	吉 村 泰 典
斎 籙 昌 三	花 岡 一 雄	和 田 攻

4. 特別研究者選考委員会歴代委員長、副委員長、委員

・委員長

芳 賀 敏 彦	1992 年 9 月10 日～1998 年11 月
山 本 敏 行	1998 年11 月～

・副委員長

森 岡 恭 彦	1992 年 9 月10 日 ～1994 年 7 月
塚 田 裕 三	1994 年 7 月 ～1996 年 7 月
山 本 敏 行	1996 年 7 月 ～1998 年 11 月
武 藤 徹一郎	1998 年 11 月 ～

・委 員 (五十音順)

稲 岡 光 子	高 松 研	道 健 一
植 村 慶 一	中 澤 誠	門 間 和 夫
岡 谷 恵 子	早 田 繁 雄	渡 邊 裕 司
塩 谷 弥兵衛	平 田 温	

Ⅷ. 日中笹川医学研究者制度年表

年	月日	主 な 動 き
1985	9月	日中医学協会は、日本船舶振興会（日本財団）に対し、中国医学研修生招請について助成申請を決定
1986	6月	財団法人笹川記念保健協力財団より、奨学金制度を10年間計画で実施することについての申し出があった。日中医学協会は理事会に於いてこの申し出を受け入れることを決定
	8月14日	北京に於いて「笹川医学奨学金に関する協定書」調印 調印者 笹川良一（財）笹川記念保健協力財団 石館守三（財）日中医学協会 陳 敏章 中華人民共和国衛生部
	11月25日	北京に於いて「笹川医学奨学金制度要綱」を取り決める 調印者 中島 章（財）日中医学協会 宋 允孚 中華人民共和国衛生部
1987	6月1日	白求恩医科大学日語センターで日本語研修を実施
	9月26日	北京人民大会堂に於いて衛生部主催による第1期生結団式開催、王震氏出席。日本側は、笹川記念保健協力財団（以下笹川財団と略す）から笹川良一会長、笹川陽平理事、日中医学協会（以下協会と略す）石館守三理事長、安達勇理事が出席
	9月29日	第1期生来日
	9月30日	第1期生（49名）歓迎式典、歓迎レセプション 於：笹川記念会館
1988	3月31日	第2期生（50名）歓迎式典・歓迎レセプション開催 於：笹川記念会館
	5月26日	※外国医師又は外国歯科医師が行う臨床修練に係る医師法第十七条及び歯科医師法第十七条の特例等に関する法律が成立（これにより研修生に臨床修練の道が開ける）
	6月22日	中国衛生部外事局趙同彬副局长他3名、研修状況の視察のため来日
	7月1日	事務打合せの際、衛生部は日本語研修の継続を希望
	8月8日	第1期・第2期箱根合同セミナー開催（～10日） 於：箱根アカデミーハウス 講演：笹川財団笹川陽平理事、協会石館守三理事長、懸田克躬副会長、佐分利輝彦・三神三和常任理事、研修生委員会吉利和委員長、懇談
	9月20日	第1期生49名歡送会 於：都イン東京 笹川財団笹川良一会長、協会石館守三理事長、中国大使館張参事官挨拶
	9月27日	来日
	9月28日	第3期生（46名）歓迎式典、歓迎レセプション 於：ホテル海洋
1989	3月23日	第2期生48名修了式 於：都イン東京
	4月4日	第4期生（52名）歓迎式典、歓迎レセプション 於：笹川記念会館
	6月30日	第2回（第3・4期生）箱根合同セミナー（～7月2日） 於：箱根アカデミーハウス 講演：笹川財団笹川陽平理事「笹川会長の信念に基づく笹川財団の活動と今後の方向について」、協会石館守三理事長「アカデミーハウス設立の由来とクリスチャンアカデミーの活動について」、懇談
	8月	※日本語研修の効果を判断するため、5期生以降、終了時に協会役員による個別面接試験を実施

	9月21日	第3期生修了式 於：都イン東京
	9月28日	第5期生（53名）歓迎式典、歓迎レセプション 於：笹川記念会館
	11月24日	衛生部視察団宋允孚外事司長他3名（～12月2日）来日 高松、大阪、京都、東京の大学を訪問
1990	3月22日	第4期生48名修了式 於：都イン東京
	4月3日	第6期生（52名）歓迎式典（認定書授与）、歓迎レセプション 於：笹川記念会館
	7月14日	衛生部研修生視察団来日（趙同彬外事司副司長他4名） 箱根合同セミナー出席後、関係省庁訪問
	7月15日	第3回（第5・6期生）箱根合同セミナー（～17日） 於：箱根アカデミーハウス 講演：日本船舶振興会笹川陽平理事長、協会懸田克躬副会長、衛生部趙同彬外事司副司長、 岡哲雄東海大学教授、安達勇国立がんセンター医長、懇談
	9月25日	第5期生修了式 於：都イン東京
	10月1日	第7期生（49名）歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	10月	※10月入管法改正により研修生に対する在留許可期間が6か月に短縮、12月法務省入国 管理局へ1年間の許可申請を行う
	3月	※東京入国管理局より8期研修生に1年間の在留が許可される
1991	3月18日	衛生部趙同彬氏等5名来日（～21日）
	3月19日	三者協議（於：笹川記念館） 議題：5周年記念行事、同窓会、選考問題等 出席：衛 生 部 趙同彬、高細水、史安俐、李培、胡小濛 笹川財団 笹川陽平、紀伊國献三 協 会 懸田克躬、塚田裕三、中島章、安達勇、事務局
	3月26日	第6期生修了式 於：都イン東京
	4月4日	第8期生（50名）歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	6月20日	衛生部研修生視察団来日（趙同彬副司長他、～27日） 5周年記念事業打合せその他
	7月14日	第4回（第7・8期生）箱根合同セミナー（～16日） 於：箱根アカデミーハウス 挨拶：協会石館守三理事長、講演：日本船舶振興会笹川陽平理事長、研修生委員会鳥居有 人副委員長、懇談、石館悌二館長の解説「箱根のみどころ」
	8月16日	笹川医学奨学金協定書調印5周年記念式典 於：北京人民大会堂 笹川財団笹川良一会長、協会石館守三会長に衛生部陳部長から「中国衛生奨」を贈呈 笹川医学奨学金進修生同学会設立宣言（孫貴範理事長） 記念講演会（午後） 於：21世紀飯店 日本側：平田 温「脳卒中診療の歩みと展望」 森岡恭彦「日本の一般外科の歩みと今後の発展」 中国側：鄒世渠「予防医学実践の時代における使命」 呉咸中「中国中西医结合の発展状況とその展望」
	9月24日	第7期生48名修了式 於：都イン東京
	10月1日	第9期生（49名）歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	11月18日	※本期より英語履修者に対し中国医科大学日語センターに於いて日本語の基礎語学研修を 行うこととなった。日本語履修者に対しては92年2月より西安医科大学で英語の語学研修 を行った
1992	3月27日	第8期生修了式 於：都イン東京

	4月 2日	第 10 期生 (51 名) 歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館 協会安達勇常任理事が、スライドによる「笹川奨学金制度 5 年間の経過報告」を行う
	4月20日	特別研究者招聘制度協定書調印 調印者：笹川陽平 笹川記念保健協力財団 懸田克躬 日中医学協会 顧 英奇 中華人民共和国衛生部 三者会議 (於：北京) 議題：特別研究者制度の実施について 出席：衛 生 部 顧英奇、趙同彬、高細水、李洪山、史安俐 笹川財団 笹川陽平、紀伊國猷三 協 会 懸田克躬、中島章他
	6月21日	衛生部研修生視察団来日 (趙同彬副司長等 4 名、～ 28 日) を招請、関東地区の研究施設、 広島大学を視察
	7月12日	第 5 回 (第 9・10 期) 箱根合同セミナー (～ 14 日) 於：箱根アカデミーハウス 講演：日本船舶振興会笹川陽平理事長、協会井出源四郎研修生委員会委員「三髓五臓六腑」 懇談
	9月21日	第 9 期生 49 名修了式 於：都イン東京
	9月30日	第 11 期生 (51 名) 歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	11月 3日	※日中国交正常化 20 周年記念「日中医学大会 1992」開催 (～ 5 日) 主催：中華医学会、日本医学会 於：北京
1993	1月28日	第 1 期特別研究者 10 名来日
	3月24日	第 10 期生修了式 於：都イン東京
	4月 5日	第 12 期生 (52 名) 歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	5月30日	第 6 回 (第 11・12 期・第 1 期特別研究者) 箱根合同セミナー (～ 6 月 1 日) 於：箱根アカデミーハウス 挨拶：協会懸田克躬会長、講演：日本船舶振興会笹川陽平理事長、協会中島章常任理事 第 1 期特別研究者孫貴範 (同学会理事長) 氏より先輩としてのアドバイスがあった
	6月20日	衛生部研修生視察団 (趙同彬外事司副司長他 4 名、～ 26 日) 千葉大学、千葉県がんセンター、鹿児島大学、九州大学を訪問、視察
	9月 9日	三者会議 於：北京 議題：制度の諸問題について協議 出席：衛 生 部 顧英奇副部長、肖梓仁科技司長、趙同彬外事司副司長、史安俐、高細水、 李培他 笹川財団 紀伊國猷三常務理事、鶴崎澄則事務局長 協 会 岡本道雄副会長、中島章・安達勇常任理事、曲直部壽夫研修生委員長、 事務局 2 名
	9月10日	東北地区帰国笹川生聯誼会 於：長春市東北師範大学講堂
	9月22日	第 11 期生修了式
	9月30日	第 13 期生 (45 名) 歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	10月29日	第 2 期特別研究者 (10 名) 歓迎昼食会 於：笹川記念会館
	12月17日	第 1 期特別研究者報告会 於：笹川記念会館
1994	3月28日	第 12 期生研修修了式 於：都イン東京
	4月 6日	第14期生(51名)、第 3期特別研究者(10名)歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	5月20日	衛生部研修生視察団 (趙同彬副司長他 4 名) ～ 5 月 27 日 箱根セミナー参加後四国の研修施設を訪問

	5月22日	第7回（第13・14期生、第2・3期特別研究者）箱根合同セミナー（～24日） 於：箱根アカデミーハウス 挨拶；協会懸田克躬会長、講演；笹川財団紀伊國猷三常務理事、衛生部趙同彬外事司副司長、 胡小濛氏「同学会活動報告」、懇談
	8月27日	三者会議 於：北京 議題：10年以降の制度継続について 出席：衛生部 胡熙明副部長他4名 笹川財団 紀伊國猷三常務理事、山口和子 協会 懸田克躬会長、清水喜八郎・安達勇常任理事、事務局
	8月28日	西北地区帰国笹川生聯誼会 於：西安市建国飯店
	9月21日	第13期生研修修了式 於：都イン東京
	10月3日	第15期生（49名）歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	10月17日	第2期特別研究者報告会 於：笹川記念会館
1995	3月13日	第3期特別研究者報告会 於：笹川記念会館
	3月29日	第14期生研修修了式 於：都イン東京
	4月5日	第16期生（52名）、第4期特別研究者（10名）歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	5月6日	陳敏章部長他4名来日（～14日）、関西地区、東京を視察、日中医学協会10周年記念講演
	5月26日	第8回（第15・16期、第4期特別研究者）箱根合同セミナー開催（～28日） 於：箱根アカデミーハウス 挨拶；協会懸田克躬会長、講演；日本船舶振興会笹川陽平理事長、懇談
	6月2日	華東地区帰国笹川生聯誼会 於：杭州花港飯店
	6月3日	三者会議 於：杭州 議題：第二次10年計画について 出席：衛生部 李世緯国際合作司司長他4名 笹川財団 紀伊國猷三常務理事、鶴崎事務局長 協会 中島章理事長、森岡恭彦・安達勇常任理事、事務局
	9月4日	三者会議 於：笹川記念会館 特別研究者制度協定書に関する覚書調印 懸田克躬、日野原重明、李世緯
	9月25日	第15期生研修修了式 於：都イン東京
	10月3日	第17期生（47名）歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	11月12日	衛生部研修生視察団 趙同彬団長他7名（～18日）
1996	3月11日	第4期特別研究者報告会 於：笹川記念会館 日本財団笹川陽平理事長を囲み昼食会
	3月26日	第16期生研修修了式 於：都イン東京
	4月2日	第18期生（53名）、第5期特別研究者（10名）歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	5月8日	三者会議 於：北京 議題：第二次10年計画の協定書、要綱、細則について 出席：衛生部 高細水国際合作司副司長他4名 笹川財団 紀伊國猷三常務理事、鈴木総務部長 協会 中島章理事長、森岡恭彦常任理事、事務局
	5月31日	第9回（第17・18期、第5期特別研究者）箱根合同セミナー開催（～6月2日） 於：箱根アカデミーハウス 講演；日本財団笹川陽平理事長、協会中島章理事長、懇談

	7月20日	衛生部研修生視察団（高細水副司長他 3 名） ～ 7 月 26 日 関東・関西方面視察
	8月14日	笹川医学奨学金制度第二次 10 年計画調印 於：人民大会堂 調印者：岡本道雄、日野原重明、殷大奎 中国側：彭珮雲國務委員、陳敏章衛生部長 日本側：笹川陽平日本財団理事長、杉村隆協会副会長他日中双方の関係者、役員、指導責任者約 50 名
	8月15日	中南・西南地区帰国笹川生聯誼会 於：成都市心族賓館
	9月24日	第 17 期生研修修了式 於：都イン東京
	10月 2日	第 19 期生（48 名）歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
1997	3月19日	第 5 期特別研究者報告会・修了式 於：笹川記念会館
	3月24日	第 18 期生研修修了式
	4月 3日	第 20 期生 50 名（1 名は 4 月 7 日来日）、第 6 期特別研究者 10 名歓迎式典、レセプション 於：笹川記念会館
	5月23日	第 10 回（第 19・20 期、第 6 期特別研究者）箱根合同セミナー開催（～ 25 日） 於：富士箱根ランドスコーププラザホテル 挨拶：協会中島章理事長、講演：日本財団笹川陽平理事長、日本医科大学黒川顕教授「日本ことに東京の救急医療について」、懇談
	5月30日	三者会議 於：北京 議題：研究者・特別研究者の選考上の問題、語学研修、10 周年記念行事 出席：衛 生 部 李世緯国際合作司司長等 5 名 笹川財団 紀伊國献三、鈴木道生 協 会 中島章、安達勇、事務局 2 名
	6月 9日	衛生部研修生視察団（高細水副司長等 4 名） ～ 6 月 15 日 10 周年記念行事打ち合わせ
	7月 7日	※常任理事会は、笹川医学奨学金制度対象者を、21 期以降「研修生」と「研究者」に区分することとした
	7月17日	※文部省学術国際局企画協力官から事務局へ第二次 10 年計画実施に際し、従来の中国医学研修生に対する「通達」を廃止し、研修生については国内一般研修員規定を適用するとの意向が示される
	9月25日	第 19 期生研修修了式 於：都イン東京
	12月 4日	笹川医学奨学金制度 10 周年記念行事 於：人民大会堂、五洲大酒店 10 周年記念報告会 座長：孫貴範
	12月5日	10 周年記念講演会 座長：高細水 李世緯国際合作司司長「中国の保健衛生概況と国際協力」 祁国明科技教育司司長「外国に派遣する優秀な人材の選考に当たっては、帰国し国のための奉仕、創造することを条件とする」 井村裕夫京都大学学長「21 世紀の医学の重要課題」 眞崎知生国立循環器病センター研究所所長「血管研究の急速な展開と基礎医学のあり方」 記念式典（於：人民大会堂） 曾野綾子日本財団会長、岡本道雄協会会長の挨拶の後、中国側機関代表 10 名、日本側 10 名（蓮見克彦、高倉公朋、阿部薫、安達勇、小柴健、荻原幸夫、今井昭一、高橋陸正、谷川久一）に対し貢献賞が授与される ★陳敏章衛生部部長から日野原重明、岡本道雄、笹川陽平三氏に中国衛生奨を贈呈
1998	3月 5日	第 6 期特別研究者報告会・修了式 於：日本船舶振興ビル 式後、日本財団笹川陽平理事長と懇談

3月26日	第20期生研修修了式 於：都イン東京 笹川医学奨学金制度第一次10年計画（1000名受入事業）を完了
4月2日	第21期生（78名）、第7期特別研究者（20名）歓迎式典、レセプション 於：ホテル海洋 ※第二次10年計画事業を開始、研修生の名称を「研究者」と改める
5月4日	三者会議 於：衛生部会議室 議題：第二次10年の語学研修、選考方法、第3国出国等 出席：中国側 高細水、慕英英、于修成、胡小濛 日本側 中島章、安達勇、森岡恭彦、紀伊國献三、鈴木道生、事務局
6月3日	衛生部研修生視察団（高細水副司長等4名）～9日 東京、福岡で研究者の状況視察
6月5日	三者会議 於：品川プリンスホテル新館 議題：語学研修の内容について 出席：高細水他衛生部視察団、笹川財団紀伊國献三、協会中島章、森岡恭彦、安達勇、事務局
7月22日	笹川研究者の状況視察のため西安医大英語培训中心白永権教授、李国棟日語主任が来日（～24日）
10月2日	第11回箱根セミナー 於：ホテル箱根アカデミー（～4日） 第21期研究者、笹川財団・協会役員、事務局 挨拶：協会中島章理事長、講演：日本財団笹川陽平理事長、協会評議員横山榮二「日本における大気汚染の推移－健康影響を中心に」
1999 1月7日	三者会議 於：北京 議題：笹川医学奨学金制度に対する衛生部の対応について 語学研修に関する問題、研究者の欠員問題、日本側推薦枠 出席：衛 生 部 王隴徳副部長、周紡安、于修成、高細水、慕英英、邱元高、李燕萍、申光 笹川財団 紀伊國献三、鈴木道生 協 会 中島章、安達勇、森岡恭彦、事務局2名 日本財団 笹川陽平、于展
1月	※前年度入管法改正のため、従来東京入国管理局に協会が一括申請していた研究者の入国手続きが受け付けられなくなった。法務省在留課の紹介により、22期生以降は手続きを入管協会へ依頼することになった
1月8日	華北地区帰国笹川生学術交流会 於：北京 「腫瘍の予防、治療と研究の進展」
3月10日	第7期特別研究者報告会・修了式 於：日本船舶振興ビル 式後、日本財団笹川陽平理事長と懇談
3月24日	第21期生研究修了式 於：ホテル海洋
4月5日	第22期生（72名）、第8期特別研究者（20名）歓迎式典、レセプション 於：ホテル海洋
8月25日	三者会議 於：北京 議題：研究者の選考に関する衛生部の提案、日本側推薦枠、選抜試験から来日までの期間短縮及び語学研修の改善、欠員問題について、特別研究者制度、協定書、要綱、要綱細則 出席：衛 生 部 高細水、慕英英、于修成、邱元高、耿京喜、王蓓 笹川財団 紀伊國献三、鈴木道生 協 会 中島章、安達勇、森岡恭彦、事務局2名
8月26日	木下俊雄笹川財団理事の寄贈により笹川進修生同学会事務所開所式 同学会事務所住所：北京市西直門大街西晴公寓C座0248号室

	10月22日	第12回（第22期研究者）箱根セミナー（～24日） 於：ホテル箱根アカデミー 挨拶；協会岡本道雄会長、講演；日本財団笹川陽平理事長 「よりよい研究生生活を送るために」をテーマに懇談
	11月27日	西南地区、湖南・湖北省帰国笹川生学術交流会 於：重慶 「環境と健康」
2000	3月16日	第8期特別研究者報告会・修了式 於：日本船舶振興ビル 式後、日本財団笹川陽平理事長を交え懇談
	3月27日	第22期生研究修了式 於：ホテル海洋
	4月3日	第23期生（79名）、第9期特別研究者（20名）歓迎式典、レセプション 於：ホテル海洋
	4月24日	三者会議 於：北京 議題：欠員問題、選抜試験から来日までの期間短縮、日本側推薦枠、第三国出国問題、特別研究者制度、中国の行政改革と本制度の運営について 出席：衛生部 高細水、慕英英、于修成、邱元高、龔斉南 笹川財団 紀伊國献三、鈴木道生 協会 中島章、安達勇、森岡恭彦、事務局3名
	8月7日	衛生部研究者視察団（高細水副司長等4名）～12日 名古屋大学、愛知県がんセンター、東北大学を訪問
	10月13日	第13回（第23期研究者）箱根セミナー（～15日） 於：ホテル箱根アカデミー 挨拶；協会岡本道雄会長、笹川財団日野原重明会長 「より良い研究生生活を送るために」をテーマに懇談
	11月18日	同学会東北地区聯誼会議 於：大連市 「高齢化社会と心血管疾病の予防治療」
2001	3月16日	第9期特別研究者報告会・修了式 於：日本財団ビル 式後、日本財団笹川陽平理事長と懇談
	3月26日	第23期生研究修了式 於：ホテル海洋
	4月4日	第24期生（77名）、第10期特別研究者（18名）歓迎式典、レセプション 於：ホテル海洋
	8月6日	三者会議 於：北京 議題：欠員問題、選抜試験から来日までの期間短縮、日本側推薦枠、特別研究者制度、同学会について 出席：衛生部 高細水、于修成、邱元高、載 維 笹川財団 紀伊國献三、鈴木道生、楨治子 協会 安達勇、森岡恭彦、事務局2名
	10月25日	衛生部研究者視察団（朱慶生副部長等4名）～30日 第14回箱根セミナー参加後、名古屋を訪問
	10月26日	第14回（第24期研究者）箱根セミナー（～28日） 於：ホテル箱根アカデミー 講演；衛生部朱慶生副部長、日本財団笹川陽平理事長 「より良い研究生生活を送るために」をテーマに懇談
	11月10日	帰国進修生華東地区学術交流会議 於：紹興市 「糖尿病及びその他の内分泌疾病の予防と治療」
2002	3月20日	第10期特別研究者報告会・修了式 於：日本財団ビル 式後、日本財団笹川陽平理事長を交え懇談、劉沢軍が二胡を演奏
	3月26日	第24期生研究修了式 於：ホテル海洋
	4月4日	第25期生（78名）、第11期特別研究者（20名）歓迎式典、レセプション 於：ホテル海洋

	5月 9日	三者会議 於：北京、衛生部 議題：語学研修、特別研究者制度（28期以降の取扱い）、欠員問題、中国人民解放軍関係者の増加について 出席：衛 生 部 任明輝、高細水、李明柱、于修成、李国棟 笹川財団 紀伊國献三、鈴木道生、槇治子 協 会 森岡恭彦、酒谷薫、事務局
	10月 3日	衛生部研究者視察団馬曉偉副部長等 5 名（～ 8 日） 箱根セミナー参加後九州の研究施設を視察
	10月 4日	第 15 回（第 25 期研究者）箱根セミナー（～ 6 日） 於：ホテル箱根アカデミー 挨拶：協会森岡恭彦理事長、笹川財団紀伊國献三理事長 講演：衛生部馬曉偉副部長、日本財団笹川陽平理事長 「より良い研究生生活を送るために」をテーマに懇談
	11月 1日	※衛生部主催、日中国交正常化 30 周年記念「日中医薬衛生界新旧友人交歓会」於：北京飯店（～ 3 日） 日中医学協会森岡恭彦理事長講演「人材育成事業－笹川医学奨学金制度を中心として－」
	11月 3日	※「日中医学大会 2002」中華医学会、日本医学会主催（～ 6 日）、於：北京国際会議場
2003	1月11日	第 9 回帰国笹川医学奨学金進修生中南・西北地区聯誼會議學術交流会 於：広西壮族自治区桂林市
	3月14日	第 11 期特別研究者 20 名報告会 於：日本財団ビル 研究修了式の後、懇親会、笹川陽平理事長参加
	3月25日	第 25 期生研究修了式 於：ホテル海洋
	4月 3日	第 26 期生（77 名）、第 12 期特別研究者（20 名）歓迎式典、レセプション 於：ホテル海洋
	8月 5日	三者会議 於：北京 議題：研究者制度の欠員問題、特別研究者制度に申請できない研究者、SARS 対策、研究先とのミスマッチについて 出席：衛 生 部 高細水、李明柱、于修成、載 維 笹川財団 紀伊國献三、鈴木道生、槇治子 協 会 森岡恭彦、安達勇、酒谷薫、事務局
	10月 8日	衛生部研究者視察団来日、王隴徳副部長等 6 名（～ 12 日） 第 16 回箱根セミナー参加の他、日本医師会主催「感染症危機管理対策協議」で王副部長 SARS 問題について講演
	10月10日	第 16 回（第 26 期研究者）箱根セミナー（～ 12 日） 於：ホテル箱根アカデミー 挨拶：協会森岡恭彦理事長、笹川財団紀伊國献三理事長 講演：衛生部王隴徳副部長、日本財団笹川陽平理事長 「より良い研究生生活を送るために」について懇談
2004	1月10日	第 10 回帰国笹川生華北地区學術報告会 於：河南省鄭州市
	3月19日	第 12 期特別研究者 20 名報告会・研究修了式 於：日本財団ビル 修了式の後、日本財団笹川陽平理事長を交え懇談会
	3月25日	第 26 期生研究修了式 於：ホテル海洋

注：本事業に密接に関連する事項に関してはゴシックで示した。

あ と が き

笹川医学奨学金制度は、2008年3月、一次、二次と継続した20年にわたる人材交流事業をひとまず終える。この後、次ぎに引き継ぐべき事業をどのようなものにするか、その方向を考えることを目的として、日中医学協会は日中笹川医学研究者制度検討委員会を設置し、8名の委員にこの問題の検討を託した。

2003年7月8日に開催された第1回制度検討委員会はまず、委員長と副委員長を選出した。ここでは、「このような大事業は進行の過程で、総括を行い、改めるべきは改めて、次ぎのステップに進むべきである。どれだけの成果があったかをきちんと総括し、次期事業につなげていきたい」という委員長の発言が了承され、報告書を「日中笹川医学研究者制度の18年」として作成することとなった。また、今日までの成果を評価するに当たっては当事者の率直な声を聞くべきであるという考えから、指導責任者、研究者、中国派遣機関を対象とするアンケート調査を実施することにした。事業の開始からすでに17年を経て、関係者の役職や所属の変化は大きく、このため、作業に際しては、その労力の多くをアンケートの集約に費やした。

本報告書は基本的には人材交流事業が調整はされながらも、そのまま第三次としての次ぎのステップに引き継がれることを想定している。そこで、報告書は、18年の記録からその成果を省み、アンケートによる当事者の評価から将来への方向を汲み取るという構成とした。2004年2月、第二回検討委員会はアンケート集約作業の中間報告を了承し、報告書の骨子を定めた。さらに、2004年5月、第三回検討委員会においては報告書の原案・添付資料について協議され、2004年9月、第四回検討委員会において最終案を確定した。事業の将来計画は中国衛生部と笹川記念保健協力財団の理解を前提とするところであり、これに基づく具体的な将来計画策定は2005年末を目処として行われるものと思われる。

本報告書はもとより、日中笹川医学研究者制度の20年を総括するものではなく、その意味では不十分なものである。しかしながら、ここに提示したように、得られた成果には偉大なものがあった。また、報告書作成の作業の中で私どもはいまさらのように長い年月の重みを痛感した。この制度から巣立った研究者達が現在、中国の各地、各分野で指導的な役割を果たしている。事業は今後とも時の経過とともに、さらに大きな成果を重ねていくことになるであろう。彼らを1年、あるいはそれ以上の長きにわたって日本へ派遣した中国の所属機関の方々、これを受け入れた日本側の指導責任者と研究室・病院の仲間たち、財団あるいは協会の多くの方々、こうした実に多くの善意と友情に支えられて、この成果は得られたといえる。中間的まとめとしての本報告書が、成果を未来へ引き継ぐためにお役に立つことを心から願うものである。また、報告書には不備があることを懸念している。お気づきのことがあれば、ご指摘いただき、補ってくださるよう、切望してやまない。

2004年10月

日中笹川医学研究者制度検討委員会

日中笹川医学研究者制度検討委員会

委員長	杉本 恒明	担当常任理事	安達 勇
副委員長	出月 康夫		酒谷 薫
委員	池谷田鶴子	アドバイザー	阿部 淑子
	荻原 幸夫	事務局	比留間 聡
	高橋 美智		川口雄二郎
	平田 温		
	道 健一		
	山本 敏行		

日中笹川医学研究者制度の18年

2004年12月

発行 財団法人日中医学協会

理事長 森岡恭彦

編集 日中笹川医学研究者制度検討委員会

委員長 杉本恒明

〒101-0053 東京都千代田区神田美土代町11-2

第1東英ビル

電話 03-3291-9161 FAX 03-3291-9164